星光の魔王-シュテル・ジ・エルケーニヒ-

星朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星光の魔王―シュテル・ジ・エルケーニヒ―

【Ｎコード】
Ｎ４４４８Ｚ

【作者名】
星朔

【あらすじ】
次元断層に巻き込まれ死んだ1人の平々凡々のヲタクが居た。そのヲタクは無限大数に存在するとある高町なのはに転生を果たし、リリカルマジカルな宿命へと立ち向かっていく。リリカルマジカルもとい『リリカルバイオレンスマギウスなのは』、始まります。？注意？この小説のなのはは血みどろの戦いに身を投じる為、そんな無様なのはさんが嫌だ！という方は閲覧をお控え下さい。

プロローグ（前書き）

とりあえず新しくプロローグをあげておきます。

やっぱりコレだけは思い入れが大きくて、消せそうにはありません。

目障りならお気に入り登録から削除してください。

プロローグ

人生何が起こるかなんてわからない。

そう、わからないという絶望だらけ。

明日に希望も持てず、惰眠を貪る日々を送る。

某悪夢少佐みたいな人が居れば喜んで起き上がりますが……。

「これは夢だ……」

「残念ながら夢ではない」

呟く自分にそう言ったのは、悪夢少佐の上司。閣下だった。

「ジーク・ジオンッ！！」

「ジーク・ジオン！」

やったら応えてくれました。感動で死ねそう。

「さて、急で唐突だが、真実を述べれば、貴公は死んだ」

「そーなのかー」

うん。はい。死んだそうです。

確か今日はＤＶＤを返しに行って……

「所謂転生トラックに追突されて貴公は死んだ――――わけではない」

「あうぇ!?ならどーして?」

確かにトラックに追突された覚えはないけど……。

「実はな、次元断層に巻き込まれて死んだのだ」

「次元断層Σ!?」

まさか三次元リアルで次元断層なんて――

「げ、原因とか……何なんですか?」

「ふむ。とある遺失物の影響による次元断層が、貴公の前に現れたのだ」

そんなのアリ？てか遺失物ってロストテクノロジー？ロストロギア？ですか？

「本来なら死ぬべきでない貴公であった。故に貴公には転生してもらう」

死因はアレなのに、ちゃんと転生させてくれるの？

や、その前に――

「閣下は神様なのですか？」

「うむ。貴公のいうように儂は神だ。この姿は貴公との会話にあわせて用立てだものだ」

あぁ、そーなのですか。

でもいきなり転生なんていわれても――

あ。

「次元断層の先には、世界はあるのですか？閣下」

「ん？ああ、貴公の地球ではない地球が一応はある」

「ならそこでお願いいたします」

「良いのか？」

「はい。それで構いません。あとはそちらにお任せします」

「そうか、だが良いのか？貴公自らが選んだ能力を付随することも儂には出来るが」

「それは閣下のさじ加減にお任せします。それに、下手に欲張ってしまいそうですから」

「ふむ。委細承知した。貴公の次生に幸あらんことを祈る」

「ハッ！有り難き幸せ。御世話になります、閣下！」

敬礼を閣下に送ると、急に眠くなってきた。

ぅっ、か、っ、かの前、で、寝るわけ、には――

第0話　高町なのは始めました。

ｓｉｄｅ：高町なのは？

皆様初めまして、こんにちは、こんばんは、おはようございます。

高町なのは、３歳です。

いきなりのご挨拶に、３歳児ならぬ流暢で小難しい言い回しをしていますが、これが私の素です。

何故私がこのような行動をとったのか、簡潔に述べてしまえば、私が転生者であるからです。つい今し方、私は私が転生者である事を思い出したのです。

ですがまさかリリカルマジカルの世界で、しかも主人公の高町なのはに私がなってしまうとは夢の端にも思いはしませんでした。

閣下、予想外にも程があります。

しかし驚いている場合ではありません。

このまま行けば、５年後、私はリリカルマジカルな戦いに身を投じなければなりません。

正直、自信はありません。ボディ的に言えば恵まれているのでしょう。しかし精神的には平和大国日本在住の自宅警備員。

こどもなりの怖いもの知らずに見え、正義感もあった高町なのはならつゆ知らず。私のような小心者では万に一つも戦う心はないでしょう。リリカルマジカルは見ているから良いのであって、実際にやれと言われてやりたいとは思いません。

魔法には憧れますが、私は平穏無事に2度目の人生を謳歌したいのです。それが私に出来る、この高町なのはへの贖罪なのでしょうから——

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

1年が経ちました。

私はやはり高町なのはでなく、正しく高町なのはなのだと、この1年間で思いました。

この1年。私は元来のラノベ好きから発展し、良く本を読むようになりました。しかし読むのは魔法ファンタジーな物ばかり、父様や母様におねだりして、魔装機神や第〇次シリーズを買って貰ったりしながら、スケッチブックにはわけわかめな発想や設定、理論ばかりを書いて、さらには電子機械系の本を読んだりと、ロボットヲタクで物静かな子となっていきました。

本を読み、電子機械系の参考書を読み、理解する為、必然と理数系と文系は得意になったりはしたのですが、運動はからっきしダメでした。走れば転ぶ、ボールで遊べばボールに遊ばれる始末、これ程

までに運動神経がダメだったとは思いませんでした。特に私の場合は男の大人の運動神経感覚がまだ抜けきらない為に余計ダメなのではないかと思ってしまいます。

運動出来なら、出来ないなりにやるしかないと、私は方向転換。腕立てや腹筋背筋スクワットを敢行し、少しでも太らないようにします。喫茶翠屋は乙女の敵。その経営家である高町家は、元男の私でも気になるくらい3時のおやつが豪華絢爛です。代わりに乙女にとってはカロリーとの戦いという聖戦を強いられますが……。よく高町なのはは太りませんでしたね。

私でさえ2ヶ月＋1キロに抑えるのがやっとだというのに。

4歳の一年間は、とりあえず魔法的な物を遊びながら調べ、カロリーとの大合戦の日々でした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

5歳になりました。

この年は幼少期のワーストスリーの年でしょう。

幼稚園から帰ってきたら、いつも迎えにきてくれるはずの母様は居ず、代わりに姉様が私を出迎えてくれました。しかしその表情には覇気がなかった。

家に着いて、挨拶をしてもシンっとして、姉様の返事以外には聞こ

えませんでした。

母様は店の方なのでしょうか？

しかし、昨日から父様が出掛けるということで、昨日今日明日の３日間は店を休業にすると一昨日の夜に聞きましたから、母様が居ないのは買い物にでも行ったのでしょう。でもそれならば姉様に覇気がないのが不自然に思えます。私は自慢じゃありませんが、姉様より中身年齢は大人です。自宅警備員でも人の顔から様子を読み取るくらいは出来ます。

そして覇気のない姉様の顔は、まるで何かを我慢しているかのようでした。

私は姉様には事情を聞かずに、自分の部屋へと向かいました。

私の部屋は、間取りこそ高町なのはのへやと同じなのでしょうが、一言で言い表せば、女の子らしくはない部屋でしょう。

プラモが飾ってあり、部屋のポスターもスパロボですから。

机に向き、スケッチブックを開き、また新しい設定や絵を書いては、息抜きにαをプレイしたりして過ごしました。

そして夜になると兄様の気配がし、そして母様の気配も家に帰ってきました。しかし、２階にまで漂う言い知れぬ感覚に、私は１階に様子を見に行こうとは思いませんでした。

気づいたら私はそのまま寝ていて、翌日となっていました。誰かに起こされた感覚はなかった為、いよいよおかしいと思い、１階に降

りました。しかし1階はものけのから。

テーブルの上にはラップ掛けされた食事と、しばらく忙しくなるという旨の書かれた母様の置き手紙。

おそらくよっぽど忙しかったのだろう。朝食はあっても、お弁当がなかった。

とりあえず朝食をレンジで温めつつ、冷蔵庫の中身から適当に食材をチョイス。

この身体になってから料理はしていませんが、2年のブランクなどなんのその。自宅警備員は伊達や酔狂ではありません。

フライパンに油を引き、出汁と刻んだニラを入れた溶き卵を投入。出汁巻き卵にします。

朝食をつまみながらお弁当を作る。少し行儀が悪いですが、御勘弁を、幼稚園の始まりは遅くとも、私の5歳児の身体ではこうでもしないと間に合わないのです。ちなみにキッチン周りには私の足場とする為、イスがズラリと並んでいます。

そして1人で迎えのバスに乗り、幼稚園から帰ってくれば姉様の迎え、家に到着後は部屋へ、そして寝倒しての日々が一週間続いたあと、いよいよ色々と私も気になってきてしまい、姉様にそれとなく尋ねてみたのですが、はぐらかされてしまいました。

しかし、最近の高町家はおかしい。家で母様を見かけることはなくとも、朝食やお弁当に夕食があり、置き手紙もある分、家には帰ってきている様子。

姉様は毎日私を出迎えてくれますが、日に日に顔が悪くなっている様子。

そして一番は兄様でしょう。日に日にピリピリとイラついているようで、道場の方から怖いと思える程の気迫のある雄叫びが聞こえることもザラです。

そして父様。この一週間、まったく姿も気配も感じません。ここまで来ると、私も嫌な予感が頭を過ぎります。

私の父様、高町士郎。

以前は世界を旅し、重役のボディーガードなどを務めていたというとらハの設定は私も知っています。そしてＳＰの仕事中に殉職したことも。

ですがとらハでは父様は高町なのはの顔を見ないまま逝ってしまった人。時期が合いません。

ですが家族第一我が家の大黒柱の父様が一週間も帰らないのはそれこそ一大事を疑います。

ですが、母様も姉様も兄様も、私には話してくれません。

ガードの甘い姉様ですら話してくれないのならば、兄様と母様に訊いたとて無駄でしょう。子どもの私には座して待つしかないのが、辛い。

少し飛んで2ヶ月が経ちます。

この頃は高町家空中分解半歩手前とも言えるかもしれない時期でした。

2ヶ月経とうとも、父様は帰って来ず。冷静な私もいよいよ心が不安定になっていき、家に居ることを少なくするようになりました。それはただ単純に家に居たくないという私の思い。

未だに話しはされず、家族は疲れた表情を浮かべ、兄様は余計にピリピリとし、はっきり言って最悪な雰囲気なのです。

もう六歳を迎え、来月は幼稚園も卒業。そして小学校に上がる身としてはとてつもなく不安定であり、そして嫌だった。

私に話してくれないのは、私が子どもだからではなく、私が本物の高町なのはではない、高町なのはの立ち位置、存在を奪った赤の他人だから、家族ではないからなのでしょうか……。

ポタポタと流れ落ちる雫。

何故私は泣くのでしょう。わかっていたことです。所詮私は高町なのはではない。別のナニカ。

本来の高町なのはには似ても似つかない私は、高町家の一員として暮らす資格など……。

気づけば足は近所の公園に向き、私はブランコに座っていました。

今更砂場遊びをする年齢でもありませんし。私はブランコの方が好きです。

ブランコをかなりの高さまで漕いで高さと速さに要らぬ思考が頭を過ぎる。

ここで手を離せば、家族は心配してくれるだろうか？

父様に逢えるだろうか？

あるいは頭を強かに打てば自分は死に、本来の高町なのはが帰ってくるのでは？

そんな考えが浮かび上がる程、この時の私は随分と追い詰められていたのでしょう。

もうどちらかに一回転しそうな角度までブランコは上がり下がりを繰り返している。

でもチキンハートの私にはそんな勇気もなく、結局はブランコから降りて、人の居なくなった公園の滑り台の上で最近開いてないスケッチブックを広げました。

中には様々な魔装機や魔装機神のラフ画や設定。魔装機神のプラーナやエーテルに関する私なりの考察などなど。

いつか役に経つのではと書いていたスケッチブック。それをパラパラと捲り、とあるページでそれは止まる。

そこには私が理想とする魔法少女の姿。

杖を片手に脅威と苦難に立ち向かう不屈の心を持った少女、高町なのはのスケッチ。

無印の９歳、コミックの１５歳、ｓｔｓの１８歳、さらに２３歳と２５歳。

私の覚えている限りの高町なのはが描かれていた。

私の、決して届かない目標にして理想の高町なのは。

高町なのはが一番星ならば、私は肉眼では見えないちっぽけな星でしかないのだろう。

私には愛も力もない。

リリカルマジカルでもとらいあんぐるハートでもない、『理』を真似ている私のような存在は所詮――

暗がりゆく空を見上げれば、そこには輝く星光。一番星。

視界が歪む。

目に力を込めても歪みは強くなっていく。

こんなこと程度でないてはいられないというのに、高町なのはが涙を流すのは誰かの為なのに――

ポタポタと、スケッチブックに雫が落ちる。流れ出した涙は堤防を

決壊させ、鉄砲水となり吹き出す。

「…わ、たし…は、なぜ、たか…ま、ち…なの、は、にっ」

辛い。悲しい。怖い。寂しい。

色々な感情がぐちゃぐちゃになって吹き出す。もうせき止めは出来なかった。

「だ、れか、たすけ…て……」

2年間。たったそれだけでも心を病むには十分過ぎた。とくに自分が高町なのはとして産まれたから余計に。

高町なのはの幸せを奪ってしまった。

高町なのはの居場所を奪ってしまった。

高町なのはの存在を奪ってしまった。

いずれは戦いに身を置かねばならない運命。

普通の凡人には過酷過ぎる運命だった。

特に高町なのはが歩むだろう16年を大まかに知るだけに余計。

『Ｐｌｅａｓｅ　ｄｏ　ｎｏｔ　ｃｒｙ.（泣かないで下さい）』

「…ぅっ…ぐすっ……えぅ？」

ふと耳に聞こえた電子音調の英語。

「…だ、だれ、です、か……」

『Ｐｌｅａｓｅ　ｄｏ　ｎｏｔ　ｃｒｙ.　Ｉ　ｗｉｌｌ　ａｌｓｏ　ｂｅｃｏｍｅ　ｓａｄ　ｉｆ　ｙｏｕ　ａｒｅ　ｃｒｙｉｎｇ.（泣かないで下さい。貴女が泣いていると、私も悲しくなります）』

顔を上げても、誰も、どこにも、なにも居ない。

「そ、ら…みみ？」

『Ｉｔ　ｉｓ　ｎｏｔ　ａ　ｍｉｓｈｅａｒｉｎｇ.　Ｉ　ａｍ　ｉｎ　ａ　ｙｏｕ　ｓｉｄｅ　ｐｅｒｆｅｃｔｌｙ.（空耳ではありませんよ。私は貴女の傍に、ちゃんと居ます）』

「わた、し、の…そば？」

『Ｙｅｓ.　Ｔｈｅｒｅｆｏｒｅ，　ｐｌｅａｓｅ　ｄｏ　ｎｏｔ　ｃｒｙ.　Ｍｙ　ｍｅｉｓｔｅｒ　ｗｈｏ　ｌｏｖｅｓ（はい。だから泣かないで下さい。愛するマイ・マイスター）』

また、涙が溢れてきた。

でもそれは……

『Ｍｅｉｓｔｅｒ？　Ｄｉｄ　ｉｔ　ｃａｒｒｙ　ｏｕｔ　ｉｆ　ｙｏｕ　ｐｌｅａｓｅ？　Ｉｎ　ｓｏｍｅｔｈｉｎｇ，　Ｉ　ａｍ　ｉｍｐｏｌｉｔｅｎｅｓｓ　ｂｙ　ｎｏ　ｍｅａｎｓ．（マイスター？どうかしましたか？まさか私が何か失礼を）』

「いい、え……いいえ、違い…ます」

嬉しかったんだ。

独りぼっちだと思い込んでた自分に、傍に居てくれた存在が居るのを。

「あなた……なのですね？」

スケッチブックに語りかける。

それは奇跡か、あるいは高町なのはである自分が書いた物だからなのか――

『Ｙｅｓ．　Ｔｈａｔ' ｓ　ｒｉｇｈｔ．　Ｍｙ　ｍｅｉｓｔｅｒ（はい。その通りです。私のマイスター）』

スケッチブックから聞こえる電子音は、とても温かに包んでくれるような声だった。

誰も居ない。私達しか居ない公園で、私は声も抑えずに、泣き散らした。

最初で最後にするから、今は自分の為に泣き、そして産まれてくれたことに感謝を込めて、泣いた。

そしてまた１ヶ月。腕に包帯を巻いて申し訳なさそうな顔をする父様に、私は素直に「お帰りなさい」と言って抱きついた。

少し苦悶の声が聞こえましたが無視です。３ヶ月も心配をかけた罰なのですから。

第1話　タイムリミットまで、あと――（前書き）

連投です。

第1話　タイムリミットまで、あと――

ｓｉｄｅ：高町なのは

あの日の出逢いから3年が経ち、私は私立聖祥大附属小学校3年生として過ごしています。

あの日以来、私と共にある自称アリスは、簡単に言えば、私の著書した魔導書で、私の使い魔のような存在であるらしいのです。

まだシステム的に未完成のアリスは、その活動には私からの魔力供給を受けて活動しているそうです。

夜天の書よろしく自立飛行とかも出来ませんが、私はアリスのお陰で大分救われました。

父様は、あの一件以来、長期間、家から居なくなることもなくなりました。あってもちゃんと、2日3日で帰ってきてくれます。

未だに何をどうしてあんな怪我をしていたのかはわかりませんが、3ヶ月という期間を考えれば、幾つかの予想を推論出来ますが、所詮推論。気にしないことにしました。

そして私は私立聖祥大附属小学校に入学を果たし、初めての友人を得ました。

「あ、おはようなのは」

「おはようなのはちゃん！」

バスに乗り込むと、その初めての友人であるすずかとアリサが手招きしてるのに気付き隣りに座りました。

「おはようございます。すずか、アリサ」

「前から時々思ってるけど、なーんか固いわよね、あんたは」

と、アリサが口をとがらせる。

「そうは言われましても、これが私ですから。今更変えようもありません」

中身が一応大人であるからにして、高町なのはのように子どもを私に出来るわけもなく、少々演じているような部分も無きにしも非ずですが、これが『私』なのです。

いつも通りに登校し、いつも通りに授業を受け、いつも通りの昼を迎える。

今日もそうなると思っていました。ですが――

昼休み、学校の屋上。

いつもなら楽しいはずの昼食。ですが今日は色を失い、いつもとはまったく異なる昼食です。

昼食前の４時限目の授業は将来の夢について――

とうとう、来てしまったのです。運命のタイムリミットが――

今日は４月２２日。もし劇場版コミックのように４月２６日が運命の日であるならば、あと４日。不吉過ぎるのにも程があります。

「で、なのはちゃんは？」

「…私ですか？」

と、すずかに尋ねられました。恐らくは将来の夢についてでしょう。

頷く２人に、どうやら心中はさらけ出していないと安堵しつつ、考えてみます。

「翠屋を継ぐのもいいですが――」

私はバックからＡ４サイズのスケッチブックを取り出す。

「イラストレーターやアニメイターというのも、道筋のひとつかもしれませんね」

叶わない夢――なのかも、知れませんが。

「なるほど、あんた絵、得意だもんね」

「なのはちゃんならきっと凄い有名になれるよ！」

「ありがとうございます。すずか」

スケッチブックに何が書かれているのか若干知っている2人は納得してくれたようです。

放課後。2人は塾の為、校門でお別れです。

私は塾に行くよりもゲームとか新しい設定を考えたりする時間が欲しかった上、今のところ全筆記テストオール１００点を独走中の為、塾には通っていません。

帰り際、人気の少ない方に歩いていったら、海岸線まで来てしまいました。

人の気配がなくなった途端、進級してから良く起こるようになった発作に胸が苦しくなる。

「くっ、はっ、うっ、はっ」

服を握り締め、苦しさを耐える。

タイムリミットを迎えるプレッシャーによる発作。

戦うことへの恐怖が、私の心を蝕んでいた。

『Ｍｅｉｓｔｅｒ（マイスター）』

「アリ、ス……」

スケッチブックを胸の中に抱き締める。

私の本当の意味での味方は、彼女だけしか居ない。

アリスは私が記述した物すべてを覚えている。言わば辞書ーライブラリーー。

だから端々にも、これから起こること、私の正体も知っている。

高町なのはでなく、『私』自身の唯一の味方。愛おしい、私のファミリアーもうひとりのわたしー。

「ア、リス…わた、し…」

『Ｐｌｅａｓｅ　ｃｒｙ　ａｎｄ　ｂｒｅａｔｈｅ　ｏｕｔ　ｎｏｗ．
Ｉｔ　ｍｕｆｆｌｅｓ，　ａｌｔｈｏｕｇｈ　ｉｔ　ｉｓ　ａｗｋｗａｒｄ．（今は泣いて、吐き出して下さい。拙いですが、消音をしておきます）』

「ぅっ、ぁ、っっ、ぅぁぁあああああああああああーーーーっ！！！！！」

私には勿体無さ過ぎるファミリア。

この子のお陰で、私は泣く事が出来る。私はやっぱり弱い、ちっぽけな星でしか――否、スペースデブリの星屑でしかない。

「はっ……はっ……」

『Ｃｏｕｌｄ　ｉｔ　ｓｅｔｔｌｅ　ｄｏｗｎ？　Ｍｅｉｓｔｅｒ（落ち着けましたか？マイスター）』

「……はい。一応は……」

涙を袖で拭い。幾分か楽になれた心持ちで、私は帰路に着きました。

ですが、この苦しみでさえ、まだ序の口でもない程軽い物だと、この時の私は知る由もありませんでした。

第1話　タイムリミットまで、あと――（後書き）

ここのなのはは見た目も性格も喋り方がマテ子の星光ことセイことシュテルですが、ヲタク成分と大人頭脳の為、思考がかなりまわりまくり超賢く見えますが、一般凡人だった故に、かなり臆病で精神的強さに、本家なのはとは銀河中心核とミトコンドリア並みの差があります。

第2話　星の光の生誕ーBirth of a stellar light

side：高町なのは

「…はぁっ……はぁっ……はぁっ…」

今日は人生最悪の日だと言えます。

4月26日。

とうとうこの日がやって来ました。

少年が怪異と戦う夢も見ました。

十中八九、あれがユーノとジュエルシードの暴走体。

夢だというのに言い知れぬ迫力と命のやり取りに、私は夜中に目を覚まし、それ以後寝れずに翌朝を迎えました。

その所為か、頭は痛い。胃はキリキリする。時々眩暈もする。

正直、コンディションは最悪と言っても過言ではありません。

「大丈夫？なのはちゃん」

「…えぇ、軽い寝不足ですので、ご心配なく」

「また夜中までゲームでもしてたんでしょ？あんた普段生真面目なのにそういうことだけは不良よねぇ～」

「ゲームとアニメは私の生き甲斐ですから…」

以前素で夜更かしし、今に似た状況が何回かあるので、すずかとアリサには怪しまれずに済んではいますが、アリサの胸に抱かれるフェレット、その首にある赤い宝石を、私は直視出来ません。

その後、フェレットことユーノを病院に預け、すずかとアリサは塾へ、私は古本屋で新しいラノベと漫画を数冊買い。また何時もの海岸線に居ました。

「今夜……なのですね…」

『Ｍｅｉｓｔｅｒ（マイスター）』

「…大丈夫ですよ、アリス。私には……『私』には貴女も居るのですから……」

そう、高町なのははユーノとレイジングハートが味方であった。

でも私にはそこにアリスという存在が、私の味方が居る。

それだけで心強い。それだけで、今まで心が折れずにいられたのだから――

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

夜。

すずかやアリサと、ユーノの引き取り先について相談していたところ、とうとうやって来てしまった。

《誰か……》

『Ｍｅｉｓｔｅｒ（マイスター）』

「えぇ、わかっています」

スケッチブックをキュッと抱き締め、アリスから勇気を貰う。

カバンにスケッチブックを入れ、気配を殺し、外に出て、自転車で病院へ。

自転車であるからでしょうか、私が病院に着いた時丁度、フェレットとユーノが窓から飛び出す瞬間でした。

私はペダルを踏み込み、ロケットスタート。運動が出来ない私です

が、自転車の扱いとスピードにはちょっとした自信があります。
窓から飛び出したユーノを横からかっさらいながら一目散にに走り抜けます。後ろから破砕音が聞こえましたが、無視です無視。

「あ、あなた、は……」

「喋らない方が身の為ですよ。舌を噛みます」

私は自転車のギアと脚のギアを上げ、住宅地をひたすら突っ切る。
戦うにしろ何をするにしろ、この辺りでは被害が大きくなる。

「っ！後ろ！！」

「くっ！」

自転車を横に倒し、片足を地面に着いてのドリフトをしながら十字路を強引に曲がり、目指すは人気が少ない海岸線。

「…はっ…はっ……はっっ……はっ…」

後ろから狙われる恐怖とプレッシャー。

狩られる側の恐怖。

そしてジュエルシードの暴走体ならば非殺傷設定なんて甘っちょろい機能なんて搭載していないでしょう。

正に命のやり取りに、私の恐怖のボルテージは何時の間にかＭＡＸをオーバーブレイク。

勝手に溢れる涙を零しながらやっとの思いで海岸線へ到着。

浜に通じる階段をそのまま自転車ごと飛び降りるものの、着地の瞬間砂にタイヤを取られ、派手にズッコケてしまう。下が砂で助かりましたね。

「ケホッ！ケホッ！こ、ここ、まで、くれば…」

カクカクと震える脚を叱咤しながら立ち上がる。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

「ええ、あなたこそ、平気でしたか？」

「は、はい。僕の方は、大丈夫です」

とりあえずは、第一関門の戦闘フィールドの移動は成功ですね。

住宅地でドンパチやるよりかは周りを気にしなくて済みますし、視界も開けていますし。

「なにが起きてるのかよくわかりませんが、私はどうすればいいんでしょうか？」

「えっと、あの、それは……」

口ごもるユーノ。

言うなら早くした方がよろしいですよ。

「もう、追いついてきましたか…」

空を見れば、夜空に小さく蠢く影。遠目ですが気持ち悪い不定形生物ですね。

「っ、ごめんなさい！でも今の僕には貴女にしか頼れる人が居ないんです」

本当なら管理局に任せていても良いはずの事を、発掘者だからと先行調査な来る程の責任感。

好感は持てますが、もう少しちゃんとした準備というものをして来

た方が良いと思う私は悪くないはずです。

「これを――手に取って下さい」

ユーノが口でくわえる赤い宝石。

レイジングハート――

レイジングハートを見た瞬間。心臓が震え、胸が苦しくなった。

今更、もう、後戻りは出来ない。

私は高町なのは――

魔法少女として戦う宿命の星の下に産まれた存在なのだから……。

レイジングハートを受け取る。

煌めく宝石は、星光は今、私の手に渡った。

私は紡ぐ。

其れは聖約――

其れは誓願――

其れは不屈の力を手にする為の聖句――

「我、使命を受けし者成り――」

宝石が光りを放ち、私の足下に幾何学の円形魔法陣――ミッドチルダ式魔法陣を展開する。その色は闇を照らす桜色。

「契約のもと、その力を解き放て――」

宝石と呼応する胸の鼓動。躍動するのは、現実では手に入る事は無い。御伽噺の中だから許される超常のチカラ。

「風は空に　星は天に　そして不屈の心はこの胸に　この手に魔導を――レイジングハート、セットアップ！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ.　Ｓｅｔｕｐ.』

桜色の光りが天に解き放たれ、光柱を作り出す。

『Ｗｅｌｃｏｍｅ.　Ｎｅｗ　Ｕｓｅｒ.（はじめまして、新たな使用者さん）』

「初めまして、私は高町なのはと申します」

『Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　Ｒａｇｉｎｇ　Ｈｅａｒｔ.　Ｉ　ｎｅｅｄ　ｙｏｕｒ　ｈｅｌｐ　ｗｅｌｌ　ｈｅｎｃｅｆｏｒｔｈ.（私はレイジングハート。以後よろしくお願いします）』

「ええ、こちらこそ。それで、私は何をすれば良いでしょうか？」

『Ｙｏｕｒ　ｍａｇｉｃ　ｌｏｖｅｌ　ｑｕａｌｉｆｉｅｓ　ｙｏｕ　ｔｏ　ｕｓｅ　ｍｅ.　Ｍａｙ　Ｉ　ｓｅｌｅｃｔ　ｔｈｅ　ｏｐｔｉｍｕｍ　ｃｏｎｆｉｇｕｒａｔｏｎ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ　ａｎｄ　ｔｈｅ　Ｄｅｖｉｃｅ？（あなたに魔法素質を確認しました。デバイス・防護服ともに、最適な形状を自動選択しますが、よろしいですか？）』

「デバイスはお任せます。服については私のイメージをトレースして構成して下さい」

『Ｉｔ　ｕｎｄｅｒｓｔｏｏｄ.　Ａｎ　ｉｍａｇｅ，　ｔｒａｃｅ　ｓｔａｒｔ.（了解しました。イメージ、トレース開始）』

光りが強くなり、文字の書かれた光りの帯が私を包む。

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ.』

宝石だったレイジングハートにパーツが合体し、魔法の杖となる。

それを左手で掴むと、服が光りとなって弾ける。

『Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ　ｓｅｔｕｐ.』

上半身が黒いインナーに包み込まれる。

下半身には黒いハーフズボンが形成される。

インナーの上に白地に黒の縁取りのコルセットと金色の胸甲が形成され、胸甲の上部には赤い宝石を付けた金色のパーツが付き、そのパーツを羽のように左右に広げる。

白地に青い縁取りのオーバーコートジャケットが形成され、袖口には青い腕甲が形成され、上下に別れていたパーツをボルトで固定される。そして両肩にも青いショルダーアーマーが形成される。

下半身はズボンの上に黒いベルトが通され、前開きの白いアウトスカートが形成される。

金色の脛当てが形成され、圧底の黒いブーツが形成される。

レイジングハートをバトンのように頭上で振り回し、利き手の左手に保持し、振り下ろす。

光りの柱が消え、地上に降り立つ。

『Ｈｏｗ　ｍｕｃｈ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｋｎｏｗ　ａｂｏｕｔ　ｍａｇｉｃ　？（魔法についての知識は？）』

「無きに等しきと思って下さい。ですが説明を受けている暇もないようです」

暴走体が浜辺に降り立つ。

いきなり襲って来ないのは、先ほど私のセットアップした光りの所為でしょうか？

「レイジングハート、私に今出来ること、使える魔法をステータス形式で表示してください。それと、敵の判る範囲でのデータも下さい。出来ますか？」

『Ｃｏｍｐｒｅｈｅｎｓｉｏｎ．Ｖａｒｉｏｕｓ ｓｔａｔｕｓ ｉｓ ｄｉｓｐｌａｙｅｄ．（了解。各種ステータスを表示します）』

空中に投影される複数のモニター。

敵はジュエルシードの暴走体。魔力ランク推定ＡＡ。

高町なのは、つまり私。

魔力ランクＡ　空戦適性Ｃ　陸戦適性Ｄ＋　総合ランク推定Ｃ＋

使用可能魔法

シュートバレット

ディバインシューター
パイロシューター
クロスファイアシュート
チェーンバインド
ディバインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）
プロテクション

ほとほと自分の才能無しには涙すら流れず、渇いた笑いも出ませんよ。A-sで高町なのはがAAAランク。この歴然の差はなんなんですか!?

……ですが、チェーンバインドとクロスクロスファイアシュートが使えるのは重畳ですね。この時期の高町なのはに出来ない戦法も取れますし。それに私にはアリスも居てくれる。私は退くわけにもいきません。

しかしパイロシューターとなれば、私に魔力変換資質があるのでしょうか？

なのにブラストファイヤーが無いのは単に私の実力不足なのでしょうか？

考えていても仕方がありませんね。

『Gaaaaa!!』

「くっ」

雄叫びを上げる暴走体。

レイジングハートを構えて相対する。

私の魔導が、どこまで通用するかはわかりませんが――

『Ｇａａａａａーー！！』

『Ｈｏｓｔｉｌｅ　ｏｂｊｅｃｔ　ａｐｐｒｏａｃｈ！（敵性体接近！）』

飛びかかってくる暴走体を見据える。

「この戦（いくさ）は、負けられないのです！私が、高町なのはであることを証明する為に！この戦、この戦だけはっ！！」

守りたいもの、ありますか？

第2話　星の光の生誕ーBirth of a stellar light

今の主人公なのはは、実力的にはｓｔｓ開始時のフォワード陣よりも弱い実力でリミット付きのなのはに挑むような感じで暴走体と戦うような物だと、頭の片隅に置いておいてくださいな。

英語があっているかどうかは激しく微妙なのであまり気にしないでください。

第3話　更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く（前書き）

レイハさんは劇場版モデルです。

なのはのバリアジャケットは、簡単に言えば上半身は劇場版に両肩にショルダーアーマーを追加。下半身がｓｔｓのアウトスカートというイメージで充分かと

第3話　更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く

ｓｉｄｅ：高町なのは

『Ｇａａａａａ！！』

「くっ！」

飛び込んでくる暴走体を数回のバックステップで回避する。

砂地に脚を取られますが、間一髪で避けられました。

粉塵が舞う地点から目を離さないように努めながら、距離を開けます。

転びそうになりながらも、蹲きそうになっても、気合いで脚を動かします。

大体１０ｍ離れた所で脚を止め、レイジングハートを暴走体に構える。

『Ｇａａａａーーー！！』

暴走体が触手を伸ばして襲ってくる。その数は４本！

「ディバインシューター！」

『Ｄｅｖｉｎｅ　ｓｈｏｏｔｅｒ』

今形成出来たシューターは3発。

それを放ち、3本の触手を弾く。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

「くっ！」

残った一本はバリアで受ける。

ピキピキピキ――

受け止めたバリアが不吉な音を立ててひび割れ始める。

「っ、やはり私では――」

『Ｆｒｏｎｔ　ｃａｕｔｉｏｎｓ！（前方注意！）』

「なっΣ！？」

レイジングハートの警告。暴走体が触手を押し当てながら私に突っ込んで来たのだ。

『Ｇａａａａーーー！！』

ぶつかりあうバリアと暴走体。だが亀裂の入っていたバリアは易々と砕け散り、暴走体の体当たりは私に直撃する。

「がふっ！！」

吹っ飛ばされた私は、防波堤にめり込む形で激突した。

「がっ、あ〝ぐっ、…こ、この、使徒のように器用な」

劇場版破のように、触手を突きながら体当たりなんて攻撃をして来た暴走体に毒づく。あれで目からビームなんて出した日には私は死んでいたでしょう。

『Ｉｓ　ｉｔ　ｓａｆｅ？（ご無事ですか？）』

「な、なんとか……」

めり込む身体を動かして抜き出る。

「くっ、がはっ！」

込み上げる吐き気を無視して、レイジングハートを構える。

しかし暴走体は襲っては来ない。

襲ってこないのならば好都合！

「レイジングハート、ディバインバスターを撃ちます」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｄｅｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ，ｓｔａｎｄｂｙ．　Ｍｏｄｅ　ｃｈａｎｇｅ．Ｃａｎｎｏｎ　Ｍｏｄｅ．』

レイジングハートがその形を変える。白いバレルが追加され、トリガーユニットが展開される。

トリガーに指を掛け、カノンモードの砲口を暴走体に向ける。

『Ｓｈｏｏｔ　ｉｎ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｍｏｄｅ．（『直射砲』形態で発射します）』

砲口にミッド式魔法陣が展開され、身体の奥底から湧き上がる力を腕を通して、すべてレイジングハートに！

『Ｉｍｍｅｄｉａｔｅ　ｆｉｒｅ　ｗｈｅｎ　ｔａｒｇｅｔ　ｉｓ　ｌｏｃｋｅｄ．（ロックオンの瞬間にトリガーを）』

網膜に投影されているのか、眼に見える景色がロックオンディスプレイに変わる。

「っ、ディバインバスター！シュートッ！！」

脚に力を込め、トリガーを引く。

腹に響く重低音をあげて、桜色の砲撃は暴走体へと一直線に向かう。

この時私は勝利を確信しました。

高町なのはの代名詞、ディバインバスターに撃ち砕けぬものはないと。

ですがそれを放ったのが私だった。そして暴走体が私の恐怖を糧にでもしたのでしょう。

ディバインバスターが直撃する瞬間、暴走体と眼が合い、そしてその赤い眼は厭たらしく歪めたのです。

直撃し、粉塵を巻き起こすディバインバスター。

『Ｆｒｏｎｔ　ｗａｔｃｈ！　Ｈｏｓｔｉｌｅ　ｏｂｊｅｃｔ　ｅｎｅｒｇｙ　ｒｅａｃｔｉｏｎ　ｉｎｃｒｅａｓｅ！（前方警戒！敵性体エネルギー反応増大！）』

レイジングハートの警告と同時に粉塵が吹き飛び、目の前が真っ白に染まる。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

「きゃあああああーーー！！！」

展開したバリアごと吹き飛ばされ、再び防波堤にめり込む。

瞬間、バリアが弾け、大爆発を起こした。

「うつ、ぁぁ、ぁぁっ」

『Ｆｏｏｏｏ……』

閃光が晴れ、震える眼差しで見つめる先。

ジュエルシードの暴走体は、不定形な形を捨て、確かな実体物として存在していた。

髪の毛のようになびく触手。

仮面の様な顔。

白いヒトのカラダ。

その胸に輝くジュエルシード。

その全体像は力を司る、最強の拒絶タイプの神の使い。

第１４使徒ゼルエル。その劇場版『破』の第１０の使徒の姿に相違なかった。

「は、ははは、はハはハはハハハ――」

めり込んだ防波堤から抜け出すこともせず、私は笑うしかなかった。

世界は……神は、そうまでして、私のことがそんなにも嫌いなのですか？

私という異物を、排除したいのですか？

暴走体が触手の一対を円柱状に束ねた。

詰みですね。

心が折れた私には、もはや抗う意志すら湧いてきません。所詮私は高町なのはには成りえない――

シュキンっと、空を裂くような音が聞こえた。

触手が射出された音。

これで、終わりですね――

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

無駄ですよ、レイジングハート。

アレには私程度のバリアでは紙に等しいのですから。

バリアの弾ける音、防波堤のコンクリートが砕ける音、そして全身を襲う衝撃。

でも、痛みはありません。ハズレたのですか？

『Ｐｌｅａｓｅ　ｄｏ　ｎｏｔ　ｇｉｖｅ　ｕｐ.（諦めないでください）』

無理ですよ。私には……。

『I do not want to give up.（私は、諦めたくはありません）』

……。

『I was able to meet the person using me at last.（私はやっと、私を使ってくれる人に出逢えました）』

レイジングハート……。

『Let's offer all of me to you. I would like to become your power.（私のすべてを貴女に捧げましょう。私は、貴女の力になりたい）』

レイジングハート……。

『It must not be discouraged. A meister and you are not one person.（挫けてはなりません。マイスター、貴女は独りではありませんよ）』

背中のカバンから聞こえるレイジングハートとは別の電子音。

それはずっと私の味方で居てくれる、私のファミリアー もうひとりのわたしー

アリス……。

『being in a you side and keeping the heart, although I can do nothing――if――it can do.（私には何も出来ませんが、貴女の傍に居て、その心を守ることぐらいなら出来ます）』

アリス――

『Therefore, the Raging Heart. Please become the power which cuts a meister's way.（だからレイジングハート。あなたはマイスターの道を切り開く力になってあげてください）』

『I understand. I mean to from the first. Are reliable.（わかりました。もとよりそのつもりです。ご心配なく）』

レイジングハート――

レイジングハートの石突を地面に着き、笑う膝で立ち上がる。

「レイジングハート、私に勇気を、恐怖を打ち砕く勇気を私に！」

『All right, My Master』

自分の脚で地に立ち、レイジングハートを左手に構える。

『Ｈｏｖｅｒ　Ｆｅａｔｈｅｒ』

後ろ腰辺りに桜色の一対の羽が生え、踝辺りにも小さな羽が生える。

これはいったい？

『Ｔｈｅ　ｍａｇｉｃ　ｆｏｒ　ｅｍｐｔｙ　ｇａｍｅｓ　ｗａｓ　ａｒｒａｎｇｅｄ　ｉｎ　ｌａｎｄ　ｂａｔｔｌｅｓ．　Ｍｏｖｅｍｅｎｔ　ｏｎ　ｌａｎｄ　ｂｅｃｏｍｅｓ　ｓｍｏｏｔｈ　ｎｏｗ．（空戦用の魔法を陸戦用にアレンジしました。これで陸上での移動がスムーズになります）』

「ありがとうございます。レイジングハート」

ふわりと、少しだけ腰辺りに浮力を感じます。

踵も少し浮かんでいます。

Ｈｏｖｅｒ　Ｆｅａｔｈｅｒ

つまりホバー走法を可能とする魔法ですか。

改めてステータス画面を確認します。

ジュエルシード暴走体　推定ランクＡＡ＋
物理質量攻撃　触手（円柱）威力ＡＡ　射程推定Ａ＋　発動速度推定Ｂ＋
砲撃　威力ＡＡＡ－　射程推定Ｂ～ＡＡ　発動速度Ａ

高町なのは
魔力ランクＡ　空戦適性Ｃ　陸戦適性Ｄ＋（ホバーフェザー発動中はＡ＋）　総合ランク推定Ｃ＋（ホバーフェザー発動中はＢ）
使用可能魔法
シュートバレット
ディバインシューター
パイロシューター
クロスファイアシュート
チェーンバインド
ディバインバスター（２発限定。３発目は不発の可能性大）
プロテクション
ホバーフェザー

「さぁ、２人とも、反撃の時間ですよ」

『Ｃｏｍｐｒｅｈｅｎｓｉｏｎ.
Ｐｌｅａｓｅ　ｌｅａｖｅ　ｓｕｐｐｏｒｔ.（了解。サポートはお任せください）』

『Ａｂｏｕｔ　ｔｈｅ　ｆｏｒｔｕｎｅ　ｏｆ　ｗａｒ，　ｉｔ

「ｉｓ　ｍｙ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．（ご武運を、マイマイマスター）

第3話　更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く（後書き）

ジュエルシードの暴走体が思念体であるからこうしてみました。

デバイスの会話が難しい上に面倒で、さらに確実性なしと散々ですが、レイハさんとアリスはなのはの嫁なので頑張ります。

第４話　星光よ、使徒を撃て！

ｓｉｄｅ：高町なのは

対峙する私とジュエルシードの暴走体。

戦闘力は別として、戦闘能力的にはＡＴフィールドを張らないゼルエルそのままのようです。

捕食やＡＴフィールドはイメージしていなかった為、余計なことを考えるのはもう止めにして、今は目の前のことだけを考えます。

戦力的には圧倒的に不利。

それでも『理性』と『作戦』ならば、高町なのはより私の方が上であるのは確かでしょう。

戦力不足でも、作戦次第ではそれを覆せる。

ティアナだってやってみせたんです。

１０年後、出逢うかもしれない１人のガンナー。

彼女の気持ちが、今なら私にはわかる。

彼女は周りが、私は高町なのはが、優秀過ぎて負い目を感じるその気持ち。

そんな彼女でも、立派に、１人で飛び立つ事が出来た。

なら、私にも同じようにとはいかずとも——

『ＧＵｏｏｏｏｏーー！！！』

「目の前の敵ぐらいならば、撃ち抜いてみせます！」

『Ｅｎｅｍｙ，　ｅｎｅｒｇｙ　ｒｅａｃｔｉｏｎ　ｉｎｃｒｅａｓｅ！　Ｃｏｍｉｎｇ　ｕｒｇｅｎｔ　ｅｖａｓｉｏｎ！（敵、エネルギー反応増大！来ます、緊急回避！）』

「くっ」

身体が横に吹っ飛ぶ。

アウトスカートを掠め、暴走体の砲撃。

さすが空戦用の機動魔法。陸戦用にアレンジしたとは言っても、機動力はそれ程変わらないのでしょう。横Ｇがハンパないです。ですがこの機動力で掻き回せば！

『Ｗａｒｎｉｎｇ！　Ｉｔ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｓ　ｔｈｅ　３ｒｄ　ｗａｖｅ　ｔｈｅ　２ｎｄ　ｗａｖｅ！（警告！第２波、第３波、続けて来ます！）』

「全力回避！機動マニューバーは任せます！クロスファイア展開！」

『Ｃｏｍｐｒｅｈｅｎｓｉｏｎ．　Ｂｅｓｔ　ｅｖａｓｉｏｎ，Ｃｒｏｓｓ　Ｆｉｒｅ　ｄｅｐｌｏｙｍｅｎｔ！（了解。全力回避、クロスファイア展開！）』

「くぅっっ！！」

右から左に後ろに、景色が速流れ、視界の隅に黒い細い影。

視界がディスプレイに変わり、正しく周囲が見えるようになる。

自身の触手を次々に差し向ける暴走体。その数は３０本。

レイジングハートとホバーフェザーによる高機動マニューバーによって、バリアジャケットに掠めながらも、直撃は０。

優秀ですね、レイジングハート。私には勿体無いデバイスです。

周囲に浮かぶスフィアは６つ。

「クロスファイア！シュートッ！！」

６発の魔力弾が暴走体に向けて放たれる。

４発は迎撃され、残り２発はあろうことか、暴走体が展開したバリアに弾かれる。

「バリアまで！？」

『Ｂａｒｒｉｅｒ　ｇｅｎｅｒａｔｉｎｇ　ｏｆ　ｐｒｅｓｕｍｅｄ　Ａ＋　ｉｓ　ｃｈｅｃｋｅｄ．（推定Ａ＋のバリア発生を確認）』

「ならばバリアごと撃ち抜くまで！シュートッ！！」

６つのスフィアが一つとなり、砲撃を放つ。

ディバインバスターは残り１発。

それ以外で威力を持つ攻撃は、クロスファイアシュートの砲撃バージョンしか思いつきません。

「レイジングハート！カノンモード！」

『ｍｏｄｅ　ｃｈａｎｇｅ．　ｃａｎｏｎ　ｍｏｄｅ．』

カノンモードのレイジングハートの柄を脇の下に通し、手はライフルを支えるように添え、トリガーユニットを握る。

ディバインバスターの衝撃を子どもの私が抑えるのには、やはりライフル銃を保持するようにした方が効率が良いでしょう。それに高町なのはの握り方は、実際にやるとレイジングハートが反動で吹き

飛びそうで怖いんですよ。個人的に。

「ディバインバスター！シュートッ！！」

クロスファイアシュートに続くようにディバインバスターを追撃に撃つ。

1発でダメならば2発一度に叩き込めば！

暴走体はクロスファイアシュートをバリアで防御。その直後を襲ったディバインバスターが、バリアを貫くのを、私は確かに目にしました。

バリアを破り、暴走体に直撃する桜色の閃光。

爆発が起き、粉塵が視界を隠す。

「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…はぁ……」

荒んだ呼吸を整える。

ディバインバスターの直撃。これで片をつけられなければ、私の勝ち目は――

『It is an energy reaction to the center of an explosion!（爆心地

にエネルギー反応！）』

「何ですってΣ！？」

粉塵が晴れ、そこには表層を焼きながら、太い一対の触手をジュエルシードを守るようにクロスさせた暴走体の姿。

「そ、そん…な……」

今ので落とせなかった……。

もう、ディバインバスターは撃てないというのに……。

「ッ！！うぉぉぉぉーーーッ！！」

地を蹴り、私は一直線に暴走体へ跳ぶ。

「パイロシューターッ！！クロスファイアシュートッ！！」

『Ｐｙｒｏ　ｓｈｏｏｔｅｒ．ａｎｄ　Ｃｒｏｓｓ　Ｆｉｒｅ　Ｓｈｏｏｔ』

クロスファイアシュート６発とパイロシューター４発の計１０発を

至近距離で撃つ。
ジュエルシードには、まだ届かない！
「いい加減に――墜ちなさい！！」
カノンモードの砲口を触手に押し当て――
「シュートバレット連射！」
『Ｓｈｏｔ　Ｂａｒｒｅｔｔ　ａｕｔｏｍａｔｉｃ　ｆｉｒｅ！』
カノンモードの先端から連射されるシュートバレット。しかし零距離射撃にも関わらず、触手は焼かれるだけでびくともしない。
「あああああーーーーー！！！！」
込めるだけの魔力を込め続け、攻撃の手を緩めず撃ち続けました。
しかし――
プシュン！
「レイジングハート！？」

『Ｏｖｅｒｌｏａｄ．　Ｃｏｍｐｕｌｓｉｖｅ　ｃｏｏｌｉｎｇ．』

撃ちすぎた！？

廃熱の為に攻撃を中断せざる得ないレイジングハート。

その時、視界の片隅で動いた黒い影。

「がっ！！」

気づけば私は上空に打ち上げられていました。

空中では私は身動きも取れない。

真っ逆様に墜ちた私の目と暴走体の目が交差する。その身体には束ねて円柱になった触手――

空中コンボ……

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

「っ、きゃあああああーーー！！」

またバリアごと吹っ飛ばされ、砂浜にうつ伏せになる私。

『Ｉｓ　ｉｔ　ｓａｆｅ？　Ｍａｓｔｅｒ（ご無事ですか？マスター）』

どうする！？どうする高町なのは！？

ディバインバスターは撃ち尽くし、次点高威力のクロスファイアシュートの砲撃バージョンではバリアを破るには至れない！

他に私が出来ることは！？

逃げる？

そんなの論外です！私は高町なのはとなるためにも、こんな所で退くわけにはいかないのです！

誰かに援軍を？

ユーノは戦えないでしょう。

それにこうも長時間派手に戦い続けているのに人が来ないのは、ユーノが結界を張っているからでしょう。

姿は見えませんが、ユーノがやられてしまう＝ジ・エンド。

バインドで拘束して集中砲火？

無駄でしょう。シュートバレットとはいえ零距離連続射撃に耐え抜いた体組織やクロスファイアシュートとディバインバスターでやっと破れるバリアの前では。

もっと、私に攻撃力のある魔法が使えれば――

『Ｈｏｖｅｒ　Ｆｅａｔｈｅｒ，　Ｏｕｔｐｕｔ　ｆａｌｌ！　Ｐｌｅａｓｅ　ｍａｓｔｅｒ　ａｎｄ　ｃｏｎｃｅｎｔｒａｔｅ！（ホバーフェザー、出力低下！マスター、集中してください！）』

「レイジングハート……」

詰み状態で諦めかけていた私。

そんな私とは反対に諦めずに戦い続けるレイジングハート。

その名の如く、不屈の心を宿すデバイス。

私のような者には分不相応な子。

十全にその性能を引き出してあげられない私をマスターと呼んでくれた子。

私には、レイジングハート、あなたの力を出し切れ――

「……レイジングハート」

『Ｗｈａｔ　ｉｓ　ｉｔ？　Ｍａｓｔｅｒ（何でしょうか？マスター）』

「フルドライブを使います。もうそれしか手立てはありません」

『Ｉｔ　ｉｓ　ｉｔ　ｗｈｙ？（な、何故それを？）』

やはり、あなたは私には勿体無いデバイスです。

初対面の私を気遣う優しい心も持っているのですから。

フルドライブ――

インテリジェントデバイスの最大出力モード。

しかし、リンカーコアが本格的に覚醒したばかりの私では負担も大きいのでしょう。伏せていたか或いは使えないのか、レイジングハートの様子から見ればおそらくは前者なのでしょう。

ですがこの暴走体は、手加減して勝てる相手でもないのは本モデルの時点、そして暴走体の耐久性から一目瞭然です。

「生きるか死ぬかの瀬戸際に、躊躇いや出し惜しみは不要です！ですから、レイジングハート！」

『Ｉ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ．　Ｓｕｒｅｌｙ　ｐｒｅｐａｒｅｄ

ｎｅｓｓ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｍａｓｔｅｒ　ｗａｓ　ｒｅｃｅｉｖｅｄ．（わかりました。マスターの覚悟は確かに受け取りました）』

「ありがとうございます。レイジングハート」

私はレイジングハートへの感謝の意を噛み締め、身体を立ち上がらせる。

「レイジングハート！その名の如く、不屈の力を私に！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　ｌｉｍｉｔ　ｒｅｌｅａｓｅ．　Ｆｕｌｌ　Ｄｒｉｖｅ』

カノンモードのレイジングハートの砲身フレームから一対の桜色の翼が生える。

フルドライブと同時に身体を襲う倦怠感。ですが、それを上回る力の鼓動も確かに感じます。

「チェーンバインド！」

『Ｃｈａｉｎ　Ｂｉｎｄ』

突き出した右手の先に展開されるミッド式魔法陣。

そこから飛び出す6本の桜色の鎖は一直線に暴走体へ。

バリアを展開されましたが、そのバリアごと雁字搦めにしてしまいます。

『Ｈｏｖｅｒ　Ｆｅａｔｈｅｒ，ｏｕｔｐｕｔ　ｆｕｌｌ　ｏｐｅｎ！』

「やぁぁぁあああーーー！！」

地を蹴り、ホバーフェザーの推進力を得て、私は暴走体の懐へ突貫します。

「ディバインバスター！スタンバイ！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．Ｄｅｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ，ｓｔａｎｄｂｙ．Ｃｈａｒｇｅ　ｓｔａｒｔ．』

カノンモードの砲口に環状線型魔法陣が展開。砲口の先に桜色の閃光が集まっていく。

「うぐっ！」

急に苦しくなる胸を右手で抑える。

『Ｍａｓｔｅｒ！（マスター！）』

「私に構わず続けなさい！」

『…Ｃｏｍｐｒｅｈｅｎｓｉｏｎ．（…了解）』

今さら覚悟していたことです。

今は身体よりもアレを撃ち抜く力を――

『Ｉｔ　ｉｓ　５　ｍｏｒｅ　ｓｅｃｏｎｄｓ　ｔｉｌｌ　ｔｈｅ　ｃｏｍｐｌｅｔｉｏｎ　ｏｆ　ｃｈａｒｇｅ！（チャージ完了まで後５秒！）』

「ホバーフェザーへの魔力供給を８０％カット！少しでも良い、チャージにまわして下さい！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　８０％　ｏｆ　ｍａｇｉｃ　ｓｕｐｐｌｙ　ｃｕｔ．　Ｃｏｕｎｔ　４（オーライ。魔力供給８０％カット。カウント４）』

速度がガクリと落ちましたが、今は速さよりも攻撃力を少しでも上げなければならない時。機動力の低下は何とかすれば良いだけです！

『An enemy part, bind break! A counterattack comes! Numbers are 3 and evasion!（敵一部、バインド・ブレイク！反撃が来ます！数は3、回避を！）』

「構いません！そのまま直進、最小半径で回避！」

襲い来る3本の触手を、東方弾幕よろしくグレイズで回避！

ジャケットとスカートが裂かれ、右腕を掠めましたが――

被弾0。

「周囲に散る残留魔力もチャージにまわして下さい！」

『All right. Count 2（オーライ。カウント2）』

強固なバリアと体組織を撃ち抜くには、高町なのはの最強魔法でなければならないでしょう。

ディバインバスターすら2回しか撃てない私には、これを御せるかはわかりません。一か八かのただの博打ですが――

『An enemy and bombardment come！（敵、砲撃が来ます！）』

「空へ！！」

地を蹴り、空へ跳ぶ。

ホバーフェザーに滞空能力があるかはわかりませんが、空へ跳躍した私達の足下を閃光が通り過ぎます。

『Ｃｏｍｐｌｅｔｉｏｎ　ｏｆ　ｍａｇｉｃ　ｃｈａｒｇｅ！（魔力チャージ完了！）』

「レイジングハート！私を敵の眼前へ！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ！（オーライ。マイマスター！）』

再び襲い来る砲撃を、一瞬だけ解放された推力を得、夜空に輝く星光を背に宙返り、砲撃を回避。

砲撃の熱が直ぐ傍を通るのを感じつつ、再び推力を解放。

また新たにバインドを破壊した触手が反撃に放たれる。

バリアジャケットが裂かれ、左のショルダーアーマーが砕け、左頬を触手が掠め血が流れる。僅かに体勢を崩すも、その瞳に宿る闘志は決して砕けてはいない。

「レイジングハート……私を――」

こんな私の為にその力を示してくれるレイジングハート。私の意思に応えてくれると信じている。

暴走体は目の前！

レイジングハートの砲口に展開する環状線型魔法陣が、トリガーユニットと柄にも展開される。

脅威を目前にして、出力が上がるのを魔法陣を通して感じました。

そうです、レイジングハート。だから私を――

「――――私を、勝たせて下さいっ！！」

暴走体の頭上から一気に地面に降り立ち、衝撃の緩和も忘れ、両腕で構えたレイジングハートを暴走体の、体組織、ジュエルシードを大事に守る触手に突き刺すように押し付ける！

『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ．　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ．』

「これが私の全力全壊！！」

暴走体を縛るチェーンバインドが弾け、その仮面に光りが灯る。

ですが、私達の方が――速い！

「スターライトブレイカー！！デッド・エンド・シュートォォォォッ！！！！」

トリガーを引く。

集めたすべての魔力が一点に集中し、巨大な星光となって解き放たれた。

「…私の――私達の、勝ちです」

トリガーを引く指を離し、そしてもう一度トリガーを引く。

「ブレイクッ、シュー――ートッ！！！！」

ダメ押しの最後の一撃。

長い長い、されども２０分にも満たない最初のジュエルシードとの攻防は、巨大な爆音と付随する衝撃波、そして桜色の巨大な十字架を天に掲げ、終わりを告げた。

第４話　星光よ、使徒を撃て！（後書き）

色々影響受けまくりですが、こんな形で終えてみました。

初回戦闘でフルドライブにスターライトブレイカー

本家なのはより無茶をしないとダメな我が家のなのは。あとがコワい……

第5話　実際のリリカルマジカルは命を全賭けするものです。ｂｙ高町なのは

ｓｉｄｅ：高町なのは

スターライトブレイカーの閃光が晴れると、宙に浮かぶジュエルシード。その数は1つではなく――

「ふ、2つ……？」

『ｒｅｃｅｉｐｔ　ｎｕｍｂｅｒ　ＸＸ．　ＸＸＩ．』

2つのジュエルシードをレイジングハートに納めた所で一気に脱力、膝をついて四つん這いになってしまいました。

ふ、2つなら、あんなべらぼうに強かったわけが理解出来ました――

「っ、くっ、はぐっ、がはっ」

息苦しさと胸の痛みに目を瞑って耐えながら咳き込みます。

「ゲホッ、ゲホッゲホッ」

口から流れ落ちる液体。

唾液ではありませんね。鉄の味がすることから、血でも吐いたのでしょう。

ある意味当然でしょう。

魔法初心者がいきなりの実戦でフルドライブで無理やりに魔力を底上げし、3発目のディバインバスターならぬスターライトブレイカーまで使ってしまったのですから、これぐらいで済んだのが御の字でしょう。

四つん這いから胡座に変え、レイジングハートを抱えて身体を預ける。

しばらくは動けそうにもありませんね。ひどく疲れました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：ユーノ・スクライア

な、なんて子なんだろう……。

レイジングハートの形状から、あの女の子は砲撃型。

なのにあんなに接近して零距離で収束砲を直接撃ち込むなんて……。

魔力量自体は僕とそんなに変わらないのに、この管理外世界には魔法はないはずなのに、あんなに上手く戦えるなんて。

凄い、なんて言葉じゃ言い表せない。

でも――

「あ、あの……怪我は」

「大丈夫です。痛みはありませんから」

そういう彼女だけれど、少なくない傷も負ってる。

それに――

「私が、高町なのはであることを証明する為に！」

その時の彼女の悲痛な顔。

言葉の意味はわからないけれど、彼女があんなに必死に戦えたのは、その言葉になにか意味があるのかもしれない。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

やっと呼吸が落ち着いたところで、レイジングハートを杖代わりに立ち上がろうとしますが、膝に殆ど力が入らずに、レイジングハートにもたれかかるように何とか立ち上がります。

興奮状態が落ち着いてきた所為か、頬や背中がヒリヒリしてきました。

腰の痛みなんて久し振りですから長らく忘れていましたが、懐かしさを感じて、私が今此処に確かに生きて存在しているのだと感じます。

「…さて、帰りましょうか」

『Ｉｔ ｉｓ ｔｉｒｅｄ ｗｉｔｈ ｌａｂｏｒ． Ｍｅｉｓｔｅｒ．（お疲れ様です。マイスター）』

「死ぬかとも思いましたけどね…」

まさか生身で、偽物とはいえ使徒と戦うなんて。しかも力を司る最強の使徒。

外から撃ってても仕方がないから零距離で撃ち込みましたが、良くこれだけの軽傷で済んだと、普通なら手足の２、３本失っててもおか

しくない攻防でしたね。

今後を考えると、もっと作戦なり戦術なりを考えていかなければなりませんね。

あのジュエルシードの暴走体でランクＡＡ＋

ランクＡＡＡのフェイト・テスタロッサと戦うには、今の私では絶望的。

それを覆す戦術を考えていかなければ。

私が高町なのはを証明する為の戦いは、始まったばかりなのですから――

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

家に帰った私は、私専用の倉庫兼作業部屋で自転車の整備をしてからお風呂に入って自室で眠りに着きました。

ユーノは今頃母様に揉みくちゃにされているでしょう。

ちなみに高町家には私の部屋の窓から直通の小さな小屋が有り、剥き出しの柱と木壁だけの１階部分は物置として使い。２階は私専用の書斎兼絵を描いたり、機械を弄る作業台のある部屋となっていま

す。置ききれないプラモの大半も向こうです。

作業部屋に籠もると何時間か出て来ないのは当たり前の為、ユーノの事を訊かれた以外はなにもありませんでしたよ。

翌日。目を覚まして左の頬に触れる。

そこには絆創膏が貼ってあり、昨日の事が現実であることを実感させてくれます。

「あっ、ぃたたた――」

ついでに腰の痛みや筋肉痛もプラスされます。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「おはようなのは！って、どうしたのよ！？そのほっぺた！」

バスに乗ったところでアリサに声を掛けられました。すると心配そうに私の方に駆け寄ってきました。

「なんでもありませんよ。昨日少し階段から脚を滑らせてしまいまして」

「ちょ、それなんともないなんて言わないわよ！病院行った！？行ってないなら今すぐ行きましょ！！」

「アリサ、とりあえず落ち着いて下さい。階段とは言っても5段くらいからだったので、少し痣になりましたが概ね問題はありませんよ」

「あーーーんっもう！！だからなんであんたはそうやって冷静に言うのよ！？痛いなら痛いって言いなさいよ！あんたケガしても、いつもいつもなんでもありませんしか言わないのよ！」

心配してくれるのは有り難いのですが、一応大人である私には子どものする怪我の痛みはあんまり痛くないのは事実なんですよ。

それに怪我という怪我は頬だけですから、心配も要りませんよ。

っと、言葉で言っても聞きそうにないだろうアリサの手を引いて、いつもの後ろの席に座ります。

「ちょ、ちょっとなのは…」

「あなたは優しいですね、アリサ」

「あ、当たり前じゃない！な、なのはがケガしたら私だって痛いん

だから……」

頬を赤くして目を潤す仕草は一種の破壊兵器ですね。良心が痛みます。

「おはようございます。すずか」

「お、おは、よう。なのは…ちゃん……」

私が挨拶をすると、すずかは顔を背けながらもチラチラと目を向けては背けをしながら返事を返してくれました。

確かすずかは吸血鬼一族の設定で、以前体育で顔面にボールの直撃を貰い、軽く鼻血を出した時もこんな反応でしたね。

一応頬と右腕は、暴走体の攻撃で出血していましたから、血の残り香に自分と戦っているのでしょう。

こういう時は触れぬが友の為ですね。

私は良い友人を持ちました。

学校に居る間はユーノから事情を聞く片手間、レイジングハートには機体設定と魔法関連のアジャストを頼んでやって貰いつつ、デバイスのデータをアリスにもリークして貰っています。

これによって使える魔法と、今は不要な魔法や私が使いたい魔法をチョイスしてアクションントリガーに登録していきます。

そして放課後、送っていくというアリサの誘いをやんわり断り、帰路に着きます。

アリサとすずかには塾がありますし、密室に近い自家用車ではすずかの理性が心配ですし、確か今日も1つジュエルシードが発動するはずだったような？

第1期はテレビでなく二次創作からの知識が主である為、かなり曖昧不確かなのが難点なんですよね。

劇場版はちゃんと見ている分心配はありませんが、初っ端からジュエルシードの数に違いがありますから、どっちのルートを進むかわからないんですよね。

一番手っ取り早いのはバルディッシュの形が判れば一目瞭然なのですが。

とりあえず今、レイジングハートは色々と忙しい為、適当に街の中心へ向かうことにしましょう。

それならば何処かで発動しても瞬時に駆けつけられますしね。

そして街の中心へ向かいつつ、アリスをどんなデバイスにするのかを考えます。

インテリジェントデバイスなのは確実です。レイジングハートが劇場版形態の為、ＴＶ形態のレイジングハートを再現してみたい思いもありますが、喧嘩になりそうですね。

他にはバルディッシュのように近接戦闘を主眼に置いたデバイスにするという手もありますが、運動神経のない私に扱えるかが問題ですね。

《それにしても、なのはって何者なの？そのインテリジェントデバイスにしても、こっちには魔法は無いはずなのに》

《何者と言われましも、特別何かをしているわけではありませんよ。それにこの子は私のファミリアですし、魔法という物がなかろうとも、魔法という概念は、御伽噺やゲームの中には存在していますし、まったくゼロというわけでもないとは思いますけど？》

なにせ吸血鬼なり御神流なりが存在する世界です。

ここにとらハが本格的に混じっていたらそれこそ、この世界も管理指定を受けるかもしれなかったでしょうね。

しかし管理とはいえど、その実態はミッドチルダを中心とした中央集権支配体制にも見えなくもありませんし、管理局のトップがあんなエゴ塗れの脳髄で思考がお花畑な人達では、この世界とは全面戦争にでもなりかねませんね。

ただでさえ、質量兵器に潔癖症をもつミッドチルダの人間では、この地球は危険物の塊でしょうし。

《なのは？》

《……すみません。少し考え事をしていました》

今考えても仕方がないことですね。

『Ｔｈｅ　ｃｏｍｐｌｅｔｉｏｎ　ｏｆ　ａｄｊｕｓｔｍｅｎｔ.
Ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｂａｔｔｌｅ　ｔｏ　ａ　ｍｏｔｉｏｎ　ｓｈｏｕｌｄ　ｂｅｃｏｍｅ　ｌｉｇｈｔ　ｎｏｗ.（アジャスト完了。これで次の戦闘から、動きが軽くなるはずです）』

「お疲れ様です。レイジングハート」

レイジングハートはこんな私に力を貸してくれるのですから、私はその想いにも応えなければ――

その時、強い魔力の波動を感じました。

この波動は――

《なのは！》

《ユーノ、今の感覚が》

《うん。ジュエルシードだ！結構近い！》

《私は先行します。ユーノもなるべく速く来て下さい》

《ダメだよなのは！１人じゃ危険だ！》

《こうしている間にも、暴走体が暴れている可能性もあります。足止めして、被害を食い止めておかなければ……》

《ちょ、なのは！なのはったら！》

私はユーノの言葉を無視し、駆け出します。

運動神経は皆無でも、走って転ぶような無様は――自分のペースを乱さなければ晒さないようにはなりました。５０ｍ１３秒台ですが……。

やってきたのは海鳴市で少し高台の方にある神社。名は確か八束神社でしたか？

「いきますよ、レイジングハート」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ.』

我、使命を受けし者成り――

契約のもと、その力を解き放て――

風は空に　星は天に　そして不屈の心はこの胸に――

この手に魔導を――

「レイジングハート、セットアップ！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ. Ｓｅｔｕｐ!』

レイジングハートがデバイスモードへ変形し、私の服もバリアジャケットに再構成される。

「レイジングハート！」

『Ｈｏｖｅｒ　Ｆｅａｔｈｅｒ』

背中と足にホバーフェザーが展開。

そのままホバー走行で神社の石段を駆け上がる。

最上段で勢いをそのままに跳び、神社の鳥居の上に飛び乗ります。

そして境内には――

「あれは――狐……ですか…？」

『Ｋｕｏｏｏｏｏｏーーー！！』

遠吠えをする巨大で凶暴そうな狐が私を一直線に見つめています。
どうやらターゲットを私に絞ったわけですね。

「征きましょう。レイジングハート、アリス」

『Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ　ｗｈｉｃｈ　ｓｈｏｕｌｄ　ｇｏ！（行きましょう、マイマスター）』

『Ｐｌｅａｓｅ　ｄｏ　ｙｏｕｒ　ｂｅｓｔ．Ｉｔ　ｉｓ　ｔｈｅ　Ｒａｇｉｎｇ　Ｈｅａｒｔ　ｔｏ　ａ　ｍｅｉｓｔｅｒ．（頑張って下さい。マイスター、レイジングハート）』

ジュエルシード暴走体：狐型　魔力ランクＡ＋

高町なのは
魔力ランクＡ　空戦適性Ｃ　陸戦適性Ｄ＋（ホバーフェザー発動中はＡ＋）総合ランク推定Ｃ＋（ホバーフェザー発動中はＢ）
使用可能魔法
シュートバレット
ディバインランサー
ディバインランサー・ファランクスシフト
クロスファイアシュート
クロスファイア・バーストモード
ファントムブレイザー
ディバインバスター（２発限定。３発目は不発の可能性大）
スターライトブレイカー（フルドライブ時条件付きで使用可）

プロテクション
バリアバースト
リングバインド
チェーンバインド
クリスタルケージ
ブリッツアクション
ホバーフェザー
フィジカルヒール

「アジャストのお陰で使える魔法も増えました。昨夜のような無様な遅れはもう取りませんよ！」

第6話　新しい友達は『くぉん』です（前書き）

調子が良かったので連投です！

第6話　新しい友達は『くぉん』です

ｓｉｄｅ：高町なのは

レイジングハートを眼下の暴走体へ構える。

『Ｋｕｏｏｏｏｏｏーーー！！』

暴走体は口から雷撃を吐き出した。

「レイジングハート！」

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

右手を突き出し、バリアを張る。

激突するバリアと雷撃。

「っ、きゃうっ！！」

『Ｍａｓｔｅｒ！（マスター！）』

突き出した右手に鋭い痛みとピリピリとした痺れにも似た感覚を感じる。

何故!?防御には成功したはずなのに!

『Ｋｕｏｏｏｏｏｎ!!!』

暴走体の周りに展開されるバチバチと電気を発するスフィア。

プラズマランサー?それともスタンバレット?

『Ｋｕｏｏｎ!!』

対空するスフィアが放たれる。

直射型のバレット?

「レイジングハート、もう一度!」

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

またバリアで防御。突き出す手も変わりません。

「っ、きゃああ！！」

『Ｍａｓｔｅｒ！？（マスター！？）』

またです。バレット自体ば防御出来ているのに、スタン効果だけがバリアをまるで素通りしているように――

「まさか！？」

八束神社、狐、電撃、リリカルなのは――

４つのパズルから導き出された答え。こういう時は自分の無駄に回転の良い頭を疎ましく思います。

「最悪です……」

もしアレが私の考えている存在ならば、私は暴走体の攻撃をすべて回避しなければなりません。

「レイジングハート、これから先は防御は考えずに、機動撹乱で攻めますよ」

『Ｉ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ．　Ｉ　ａｌｓｏ　ｊｕｄｇｅ　ｔｈ

ａｔ　ｉｔ　ｉｓ　ｗｉｓｅｒ．　Ｐｌｅａｓｅ　ｄｏ　ｎｏｔ　ｃａｒｒｙ　ｏｕｔ　ｕｎｒｅａｓｏｎａｂｌｅｎｅｓｓ．（わかりました。その方が賢明だと私も判断します。ですが無理はしないで下さい）』

「それは向こうが許してくれませんでしょうね」

『Ｆｕｓｈｕｕｕｕ……』

バチバチと帯電する暴走体。体勢を低くしているとなると、突っ込んでくる気のようです。鳥居を壊される前に私は鳥居から跳躍し、神社の屋根を足場にし、神社の裏手の森の中へ逃げ込みます。

アレを封印するには少々骨が折れそうですね。

『Ｈｉｇｈ　ｐｌａｓｍａ　ｏｂｊｅｃｔ！　Ｉｔ　ｉｓ　ｒａｐｉｄ　ａｐｐｒｏａｃｈ　ｆｒｏｍ　ｂａｃｋ！（高プラズマ体！後方より急速接近！）』

「回避後、１８０度ターンと同時にディバインランサー展開！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！』

地面を滑りながらスライドマニューバーでプラズマ体を回避。

思った通り、プラズマ体は囮。

『Ｋｕｏｏｏｏｏーーー！！！』

後ろから本体による直接攻撃！

『Ｄｅｖｉｎｅ　Ｌａｎｃｅｒ』

私の周囲に展開される環状魔法陣に包まれた桜色のスフィア。その数は１２。

私は球技も絶望的ですから、誘導系より直射型の方を求め、レイジングハートに組んで貰った新しい魔法。

ディバインランサー――

「ファイア！！」

１２個のスフィアから次々と槍型の魔力弾が発射。配置感覚も考えているため、回避する間すらなく直撃してゆきます。どうやらバリアは張れないようですね。ならばこれで幕引きです！

『Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ．　Ｄｅｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ．Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ！』

短距離限定の超高速移動魔法――ブリッツアクション。

高町なのはのように魔力の無く、バカスカ砲撃を撃てない私には一撃一撃が勝敗の決め手になってしまう。さらに魔力の所為か、経験の所為か、練度の所為か、砲撃の威力も高町なのはには及んでいないように思えるのです。

そこで編み出したのが、近～中距離での撹乱から一気に懐へ飛び込んでの零距離一撃必殺砲撃。

砲撃魔導師とはかけ離れた戦闘スタイルですが、私はこうしなければまともな一撃が入らない。なりふり構ってはいられません！

私の右手の拳の先に展開される、環状魔法陣が取り巻くスフィア。

『Ｋｕｏｏｏｏｏ！！！！』

ディバインランサーの爆煙から飛び出して来た暴走体は口を開け、私に噛みつこうとする。

私はブリッツアクションの加速をそのままに身を屈める。

上を過ぎ去る暴走体の口。

懐を捉え、ホバーフェザーの推力を上ベクトルで解放しながらアッパーを叩き込み、予め用意していた魔法を解き放つ！

「ディバインバスターーーー！！」

零距離でのディバインバスター直接攻撃。

スバルが近代ベルカ式で放つそれを真似た物ですが、ディバインバスターはディバインバスター。

威力は十分であり、加速度も相まって相当のアッパーになっているハズ。

現に私の3、4倍ある暴走体の巨体が浮き上がっていますし。

『Ｍｏｄｅ ｃｈａｎｇｅ！ Ｃａｎｏｎ ｍｏｄｅ！ Ｄｅｖｉｎｅ Ｂｕｓｔｅｒ. Ｓｔａｎｄ ｂｙ Ｒｅａｄｙ！』

カノンモードに変形したレイジングハートを、浮き上がった暴走体の、ディバインバスターを打ち込んだ同じ箇所に突きつける！

「シュートッ！！」

トリガーを引き、再び零距離でディバインバスターを放つ！

『Ｋｙｕｏｏｏｏｏーーーーー！！！！』

「ジュエルシード、封印！」

『Ｓｅａｌｉｎｇ.』

光りが晴れ、ジュエルシードと分離された狐。

『ｒｅｃｅｉｐｔ　ｎｕｍｂｅｒ　ＸＶＩ.』

「…スゥ……ふぅ…」

深呼吸をして、緊張状態を解きます。

やはり使える魔法が多いのは助かります。

それに昨日に比べて疲労感も大分軽いです。やはり優秀ですね、レイジングハートは。

「……」

ジュエルシードに取り込まれていた狐を抱き上げてみます。

「……」

もふ――

「……ふにゃぁ……」

な、なんですかこのふっくらもふもふもっこりもかもかの癒やし物体はΣ!?

「なのは!!」

「ユーノ?」

ユーノが来た様ですね。

「なのは!ジュエルシードは!?」

「しーっ、ですよ。ユーノ」

「???」

とりあえず狐を抱えて、出来るだけ振動を出さずに裏路地の住宅街の屋根をブリッツアクションとホバーフェザーを使って駆け抜け、家に向かいます。

は、早くこのモコモコをゆっくり堪能したい!

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：ユーノ・スクライア

なのはの才能には舌を巻くというか、昨日の今日。まだ２４時間経ってもいないのにもうレイジングハートを使いこなして魔法を使うバトルセンスは恐ろしく思う。

でも何よりも恐ろしいのはその戦術展開と思考速度と判断力。

なんかもう、僕も９歳にしたらそれなりに普通の９歳とは違うのは環境上自覚しているけど、なのはのそれはかなりぶっ飛んでいるように思える。

「……ふにゃぁ……」

なんかトロっとした目のままテレビゲームをしているなのは。

その原因はその胸元で寝ている狐。

なのはの話しとレイジングハートの戦闘ログから、ジュエルシードに取り込まれた狐らしい。

原因で思ったけど、やっぱりなのはのタクティクス能力はこのテレ

ビゲームが原因かもしれない。

何度か挑戦してみたけど、ノーマル難易度でもかなり難しいのに、ハードモードはもっと難しい、てか僕にはノーマルですら無理なのに、なのはは縛りプレイというのもやる上に、これでも簡単な奴だって言うんだ。

ちなみに難しい奴は1ステージすらクリア出来なかった。これがなのはが言うムリゲーっていう意味を正しく知った時だった。

でもこの魔装機神ってやつはスゴいなぁ。

確かに空想の設定でも、僕達の魔法とはまた違った解釈に興味が尽きないよ。頑張ってやってみようかな？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

至福です。

もはや語るまい……。

言葉は不要か――

言葉を飾ることに、意味はない。

ただただ、至福です。

「……クー……クΣ！？」

あ、起きたようですね。

キョロキョロ見渡している様がまたなんとも……。

至福です。至高です。アリサに匹敵する程の萌えです！

「Σ！？　クーーー！！」

後ろからもさもさの物体を抱き締めます。

…ふにゃぁ……。

「クーーー！！クーーーー！！」

「な、なのは、その子嫌がってない？」

「なにを言いますかユーノ？ただ状況を理解出来ずに混乱しているだけでしょう？もう大丈夫ですからね？恐い物は私が取り払いましたから」

泣き声を上げて狐はもがき続けてる。

ユーノは見て思った。

狐はなのはを見て余計に泣いているんじゃないかと。

しかしそれは口にしなかった。

もし口にしたら自分もアッパーディバインバスターからレイジングハートの零距離ディバインバスターの2連多段コンボでノックアウトされると僅かばかりにも想像して身震いがしたからだ。

「クーーーー！！」

「あっ…」

脱出に成功する狐。一目散に部屋の端に行くが、なのはの部屋は高町なのはの部屋より物が多くてかなり狭い。

狐は本棚の影に隠れるが、なのはの方を見ていた。

目のあったなのはは微笑むと、狐は本棚の影に隠れ、そしてゆっくりと顔を少し出してなのはを見る。

恐いけど気になる。そんな感じに。

「初めまして、私は高町なのはと申します。あなたの名前は？」

「……クー……クォン……」

「そう、久遠――ですか」

「クォッΣ！？クー……」

私が久遠と正しく発した言葉にはっきりとビクンっと反応する狐。

状況証拠的にも、この狐は十中八九とらハの久遠なのでしょう。

ですが家には居候人は居ませんし、高機能性遺伝子障害病――通称ＨＧＳでしたか？

それについてもまったく情報はありませんし、いったいどの程度この世界にとらハが混じっているのか皆目見当もつきません。

劇場版かＴＶ版かも判らないのに横腹からとらハまで突っ込まれたら私もどうすればいいかわかりません。

戦闘民族高町家。

もしとらハ設定に汚染されていたら兄様と父様には私が夜に出掛ければ間違いなく気づかれるでしょう。

以前から海岸線に夜、泣きに行っていたことがありますが、それでも月に一度二度あるかないか、あまり出歩いては心配もされます。

あまり夜は動くべきではないのでしょうね。

「久遠、こっちに来て下さい」

膝をポンポン叩いて促しますが、久遠は固まったまま動きません。

仕方がありません。

「クォン!?クー、クー」

「…ふにゃぁ……」

至福です……。

「クーーー!!」

「あ、あはは……」

現在封印したジュエルシードは3つ。

お供はユーノと久遠です。

「え？僕オトモ扱い？」

「クゥーーーー！！」

「…ふにゃぁ……」

第6話　新しい友達は『くぉん』です（後書き）

ＶＳ久遠でしたが、この久遠は未だに封印状態にあるため弱いという設定です。
しかも使える魔法の種類が増え、戦術の幅が広がり、ゼルエルを倒した我が家なのはの経験値はデカかったのです。
決して久遠が弱いんじゃなく、なのはがちょっと強くなったのです。

とりあえず久遠をお供にする為に高町式Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩ☆でも♪

ちなみにとらハキャラは今のところ久遠だけで限界です。

意見・感想をお待ちしております。

第7話　御神の剣（つるぎ）（前書き）

ちょっと長めです。

第7話　御神の剣（つるぎ）

ｓｉｄｅ：高町なのは

ユーノを迎えたばかり故に、久遠もとなるとさすがに断られそうだと思った私は、家族には内緒で久遠を部屋に置くことにしました。

久遠はまだ少し身持ちが固いですが、それでも餌づけと毎日抱き締めて寝る事で、敵でない事をアピールします。

ジュエルシード、魔法と出逢って5日目。集まったジュエルシードは3つ。

高町なのはと違い、夜は出掛けずというか、出掛けられない理由が複数あり、これ幸いにとちゃんとぐっすり寝るようにしている為、疲労感は無く。レイジングハートも二度の戦闘経験から私の為にアジャストとブラッシュアップを繰り返して仮想戦闘シミュレーションを繰り返してデータを蓄積・更新の繰り返しで、日に日に少しずつですが、動きも良くなってきたように感じます。しかし私の戦闘スタイルは未開発で開拓中のスタイル。

まだ的が大きいジュエルシードの暴走体だから当てられるものの、フェイト・テスタロッサにはまだまだ届かないでしょう。

たとえ勝てずとも無様に墜ちるわけにはいかない。これは元男の私自身の男の意地というものです。墜ちるば諸共――

そんな心構えで挑むつもりです。

さて、今日も学校ですね。

ユーノを肩に乗せ、久遠を置いて一度部屋を出て一階のリビングへ。

「母様、おはようございます」

「おはようなのは、ユーノくん」

キッチンでは母様が朝食の支度中ですが、他の皆が見当たりませんね。

「父様達は道場の方ですか？」

「そうよ。あ、ちょうどいいからなのは、みんなを呼んできて頂戴」

「わかりました」

玄関よりも近い縁側の方に回ってサンダルを引っ掛け、道場へ向かいます。

《そう言えば、道場って言ってたけど、なのはの家族はなにかやってるの》

ユーノが念話で質問してきます。そういえばちゃんと説明していませんね。

「永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術」

《え、えーっと……》

《御神流は、二振りの小太刀を主軸に、飛針（とばり）――棒手裏剣のようなものや鋼糸（こうし）と呼ばれるワイヤーのようなものなどの暗器、さらには体術なども用いた総合殺人術です》

《さ、殺人術って……》

《御神流は御神家という、父様の血統列の家の流派で、表立った要人警護を主とする御神流。そして父様の旧姓の不破家は要人暗殺を主とする御神流・裏を伝えているのです》

《な、なんか、壮大だね……》

《ええ。それで父様は師範代、兄様は師範代代理、姉様は兄様から御神流を教わる門下生のようなものです。これが戦闘民族一家高町家の戦力図形態です。陸戦限定なら推定ＡＡＡからＳ＋、条件付けでＳＳクラスでしょうね。私の私見ですが》

《す、凄いんだね……》

《達人ともなれば、表面を傷つけず衝撃で物の内部だけに破壊を引き起こしたり、模造刀でドラム缶を一刀両断することも可能です。以前兄様のを見たこともあります。スピード重視の剣術であるため、

力の強い者が用いる剛の剣に対しては多少不利な面もありますが、超能力を用いない純粋な人間本来の肉体・能力のみを用いた、『戦士』としての武術の中では屈指の流派でもあるでしょう》

《も、もういいよなのは。早く行こう》

《そうですね》

改めて御神流のことを軽く振り返ってみたこの時、私は思いました。

そんな戦闘民族一家高町家の末妹である私にも、その血が流れているお陰で、2体の暴走体との戦いでも大きなケガもなく無事に終えられたのではないかと。

御神流――

それのお陰で一度父様は命の危機を迎えました。

そのお陰で少し嫌悪感を持っていましたが、場合によっては兄様か姉様に頼んでみましょう。

近接高機動戦闘型砲撃魔導師――

私の戦闘スタイルから造称した砲撃魔導師の新スタイル研究、開拓、開発、探求、確立の為に。

少しでも、戦術の幅を広げる為に――

道場へ足を踏み入れると、腕を組んで立っている父様。そして道場の中心で――

「せぇいっ！」

「ふっ」

二本の小太刀の木刀で打ち合う兄様と姉様の姿。

「父様」

「ん、おはようなのは。そろそろ朝ごはんか？」

「はい。母様が呼んでいます」

「ありがとうな。でももう少し待ってくれ、今良い所なんだよ」

「良いところ？」

小太刀を構え鍔競り合う2人。

私は近くで見ようと父様の近くに寄ろうとしますが――

「おっと……なのは、そこから先は来ない方が良いぞ」

「え…？ッ！？」

ゾクリッ、と。

背筋が冷たくなる感覚。

いきなりの感覚に身体が勝手にバックステップ、感覚を感じた方向に身体が身構える。身構える先には兄様と姉様。まさか――

「今の……」

「んー、まぁなんだ、殺気というか闘気というか……なのははまだ早いかなー？」

「いえ、言葉の意味は解せます父様」

頬と背中を冷や汗が流れ落ちる。

暴走体からは感じませんでしたから、初めての感覚に驚いてはいますが、死線を潜り抜けた身、恐怖はそこまでは感じませんが、真正面から向けられたらわかりませんね。

高速の領域、私の視界では捉えられない速さの攻防に、改めて高町家の非常識さを実感します。

《すごい……これほどの戦士は僕たちの世界にもそうそう居るものじゃないよ》

《現代にもあまり居ないと思いますよ……》

《あ、なのは、危ない！》

《え？なっΣ！？》

ユーノとの念話の最中、一本の小太刀が私の方に回転しながら飛んで来ます。

また思考より身体が先に反応する。一瞬で戦闘体勢と思考を切り替えられるようにはなりました。

身を屈めながら腕を引き締め、上を過ぎ行く木刀へ身体全身のバネを使った渾身の一撃で――

「ディバインバスター！！」

カチ上げる！！

クリティカルヒット、自分でも納得の行く入りの一撃に、私も少しずつ強くなっていることを実感します。

打ち上げられた木刀はそのまま天井に突き刺さると、床に落ちました。カランカランという音が道場に響き、ドンッという私の着地音が続けて響きます。

自分の右手を感覚を確かめるように握って開いて、そこで思考が切り替わり、気づきました。

や、やってしまいました……。

や、厨二病と言えば誤魔化せるでしょう。

「いやぁ……凄いななのは、何時の間にそんなこと出来るようになったんだ？」

父様が和やかな声で言いながら、私に歩み寄って頭を撫でてくれました。

幾つになっても、頭を撫でられるのは良いものですね。

「ごめんねなのは、びっくりさせちゃって」

「いえ、偶然ですからお気になさらずに、姉様」

「驚かせてすまなかったな。それと、あの一撃は中々の切れだったぞ」

「恐縮です」

そう言って頭を撫でてくれる兄様。

言葉は少ないですが、こうして態度でそれを補ってあまりあるのが兄様。

その辺りが大変好ましく、尊敬しています。

「恭也には、俺からいう事はもうあまりないな。俺より強いんじゃないか？」

「まさか……まだ敵わないよ」

兄様でも敵わない父様はどれだけ強いのでしょうか？

それにしても、兄様もやはりとらハ方面色が強いように感じます。

何より踏み込みの時に一瞬脚を庇うように見えました。

おそらく私の知らない所で膝を壊している可能性もあります。

もう、劇場版とかＴＶ版以前に、どこからリリカルなのか、どこまでとらハなのかまったくわかりません。

そのうちＨＧＳとか出て来たりするんじゃないんですか？

そうなったらもはやカオスです。

「どうだ、なのはも御神流やってみないか？」

父様が私にそう言います。これは渡りに船ですが、ジュエルシードを探す時間の兼ね合いもありますし。

「…軽く、朝の稽古をつけてくれますか？」

「ああ、良いとも！」

私の言葉に父様は微笑みながら頭をガシガシと撫でてきました。

兄様より大きくてゴツゴツしている手。

私はこの手が大好きです。

「あ～あ、とうとうなのはも御神流を習うのかぁ……なんか理不尽」

「俺は8歳から御神流をやっていたから、丁度良いと思うが」

「だってあの運動音痴のなのはが、あんなアッパー決めちゃったんだよ！？私なんか直ぐ追い越されそう……」

「良かったじゃないか、その分、身につく速さが上がるんじゃないか？」

「わ～んなのは～！！恭ちゃんがイジメるぅ～～！」

嘘泣きをしながら私に絡みつく姉様。

高町なのはの居場所を奪ってしまった私が手にするには勿体無さすぎるこの温かな人達。

でも今だけは、この人達の事を家族と想う事を許して下さいますか？この世界の、産まれるはずだった、高町なのは――

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町恭也

「いってきまーす」

「いってきます」

「ああ……気をつけてな」

なのはと美由希は学校へ。父さんとかーさんは翠屋へ。

俺は……今日はまだのんびりとできる。

普段は賑やかな我が家も、こうして一人になるととても広く、静かで、寂しく感じる。

いや、今はなのはの拾ってきたフェレットと狐が居るか……。

その事で少し気になることもあるのだが……聞いて答えてくれるわけでもないだろう。あの子は必要無いことは言わない子だからな。それに今言えずとも何時か話してはくれるだろう。さて、暇だからな、ここは一つ……。

「久しぶりに手入れでもするか」

剪定道具を取り出し、庭の盆栽へと向かう。

パチン――

意図せぬ方向に伸びた枝を切り落とす。

美由希や忍には年寄り臭いと言われるこの趣味だが……美由希は園芸、忍なら機械いじりといった事をしているんだし俺の場合、偶々対象が盆栽だっただけだ。

何よりこうしているとどこか心が落ち着くし、考え事をする時にもなかなか良い。

「あの日、からだよな」

5日前の夜、なのはの拾ってきたフェレット。

作業部屋に紛れ込んで、中身を引っ掻き回され怪我をしたとなのは
は言っていたが、頬からの他に右腕の方からも微かに血の臭いがし
た。

そしてその翌日の夜には微かに焦げ臭い、あれは人肌の焼けた臭い
だった。
機械いじりで火傷したと言っていたが、その日から家に狐の気配も
増えた。

フェレットに狐となのはの怪我。何か関係でもあるのか？

それに朝、道場で俺と美由希の気迫を感じて見せた行動と、俺が弾
いた美由希の木刀をカチ上げたアッパーに着地の体勢。

俺が言うのもなんだが、高町家の中で一番平々凡々に育ってきたな
のはが、何時の間にか荒削りだが戦闘経験者のような動きと気配を
発した事。

何かあったのか、やはり気にし心配にもなる。

父さんもそれを気づいてなのはに、本人がどこかしら嫌悪感を抱い
ていた御神流を勧めたのかも知れない。

父さんが怪我をしたのはなのはが今の性格になってからの事だ。あ
の子は鋭い子だ。
御神流と――正確にはＳＰの仕事と父さんの怪我の関連に気づいて
いたのかも知れない。

それに俺の焦りとプレッシャーも。

その所為で、俺は一度妹の心を潰しかけてしまった。

俺達家族の罪。

だから父さんも怪我を期に仕事を辞めた。

俺も焦りとプレッシャーから来た無茶からの怪我を経て、御神流を、ただ父さんのように強くあるのでなく、大切な物を守る為に振るう事にした。

怪我が治りきらない俺には御神流剣士としての完成は絶望的だが、それは時間をかけて美由希がやってくれるだろう。

剪定のハサミ、その刃を小太刀の刃に重ねる。

「恭也、お前に守りたいものはあるか？」

昔々、そこまで昔じゃないが、父さんに言われた言葉。

その時の俺はまだガキだったからどうにも答えられなかったが、あの日、なのはが泣き腫らした顔をしてスケッチブックを大事に胸に抱いて、怯えながら帰ってきた末妹の姿を見た日から今日まで、そしてこれから先もずっと胸を張って、俺は父さんに言える。

俺が振るう御神流は、大切なものを守る為にあると。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

夜の間はエリアサーチで海鳴市を重点的に調べ、遠見市はアルフがエリアサーチをかけているかもしれませんし、海鳴市しかエリアサーチは使えません。

「命拾いしましたね……」

八束神社にジュエルシード反応。

これを久遠が取り込んでいたら私は焼き肉になっていたでしょう。

《なのは……》

「ええ、行きましょう」

「クォン」

「いってきます。久遠」

我、使命を受けし者成り――

契約のもと、その力を解き放て――
風は空に　星は天に　そして不屈の心はこの胸に――
この手に魔導を――

「レイジングハート、セットアップ！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔｕｐ！』

レイジングハートとバリアジャケットを展開し、久遠を一度抱き締めてから、ユーノを肩に乗せて窓から外へ。

「レイジングハート」

『Ｈｏｖｅｒ　Ｆｅａｔｈｅｒ』

ホバーフェザーを展開し、暗闇の住宅街を駆け抜ける。

「レイジングハート、速度を上げて下さい」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ．』

ブリッツアクションも使い、さらに速度を上げて八束神社へ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町恭也

大学の帰り、なのはの気配を感じて、その感じた方向を見れば、家の屋根を高速で駆け抜けて行ったなのはの姿。

肩にはユーノ。手にはなにやら知らんが、ステッキを脇の下と左手で保持していた。まるでライフルを保持するように。

「なのは…」

俺はなのはを追って駆け出す。

なのはの見据える先、その視線の先は八束神社。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

八束神社へ辿り着いた私はホバーフェザーを消し、境内を見渡します。

「境内には……無いようですね。もしかしたら裏の森でしょうか？」

「そうかもしれないね。行ってみよう？」

「ええ」

神社の裏側の森の中、とりあえず投影モニターに移した久遠との戦闘ログを振り返りつつ、久遠との戦闘場所にはサーチャーを、私達はその反対側へ向かいます。

ユーノの結界も張らず、剥き出しの空間でディバインランサーやディバインバスターを放ったのですから、その魔力余波に反応せず発動しなかったジュエルシード。

それが意味するのは、魔力波が届かない場所にあったか、あとから持ち込まれたか――

魔力流を打ち込んで強制発動とかの方が速いんでしょうが、フェイト・テスタロッサのような無茶を出来ない私はそれも出来ない。サーチャーへの魔力も戦闘を想定するとそこまで数もまわせませんし、地道に探すしかありません。

「とは言え……少し視界が悪いですね」

森は薄暗く、闇夜に慣れてもやはり視界が悪いです。

夜空を仰ぎ見る。

漆黒の闇夜に浮かぶ満天の星光。

その中に浮かぶ月。

その月明かりのお陰である程度の光量はありますが、森を照らすには足りません。

「確かに、こうも暗いとね。僕が照明魔法を使うからちょっと待ってて」

ミッド式魔法陣がユーノの前に展開し、スフィアを形成。

これが証明魔法ですか。魔力光に関係なく普通の証明の照らすスフィア。

「これで少しは探しやすくなったかな？」

「ええ。では再開しましょう」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side：高町恭也

後を尾けてるつもりだったが……実際の俺は家で寝ていて夢でも見ているんではないだろうか？

思わずそう考えずにはいられない。

まず、ユーノが喋った。そして魔法とやらを使った。

なのはの前方には火の玉のようなものが浮いている。

だが、これは夢ではなく、現実。

比較的俺が落ち着いているのは……変異性遺伝子障害と言う病気の副作用で黒い翼を持った幼馴染、そして夜の一族といったものを既に知っているから。

「超能力、吸血鬼、自動人形と来て……魔法……か」

しかもそれをなのはも使っている。

神速にも似た移動法を使っていれば、飛んでくる木刀位は迎撃は出来るか。

しかしこれで大体は読めてきた。

なのはは、妹は、かつての俺のように幼いながら、もう戦う戦士であるのだと。

ある程度納得できたが……何故こんな所に？

その時、ふと頭上で何かが羽ばたいたような音。

こんな時間にか…？この林でも、今まで鍛錬は幾度となく行なっているが、梟など夜行性の鳥類はいなかったはずだが。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

「……っ」

「なのは、これは……」

「ええ、ジュエルシードの気配……上！」

『Ｇｕａａａａーーーーー！！』

「ッ！プロテクション！！」

バリアを張り、何者かの攻撃を防ぐ。

「なのは！」

「ユーノ！結界を！」

「う、うん！広域結界！」

ユーノの魔法にて八束神社一帯を包む結界が張られる。

『Ｇｕａａａａａ！！』

「と、鳥ぃ！？」

「大きいですね。焼き鳥何人前でしょうか？」

現れたジュエルシードの暴走体は鳥型。大きさは約６ｍ弱。

『Ｇｕａａａーーー！！』

翼を羽撃かせ、暴走体は羽を弾丸のように放ってきた。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ.』

「くっ」

右手を突き出し、バリアで羽を受ける。

ボンッ！ボボボンッ！！

「きゃあっ！」

「炸裂弾!?なのは大丈夫?」

「ええ…」

炸裂の余波は貰いましたが、怪我はありません。

「レイジングハート、ディバインランサー展開!」

『Ａｌｌ ｒｉｇｈｔ! Ｄｅｖｉｎｅ Ｌａｎｃｅｒ. Ｓｔａｎｄ ｂｙ Ｒｅａｄｙ!』

「ファイア!!」

６つのスフィアからディバインランサーを連射。しかし暴走体は空へ飛び上がり、ディバインランサーを回避する。

「このっ」

『Ｇｕａａａーー！！』

「ファイア！！」

私と暴走体の間で、ディバインランサーと炸裂羽の弾幕が激突する。

結界が張ってある分、派手に手加減無しにやれます。私のスペックも１２０％で運用可能です！

『Ｇｕａａａ！！』

炸裂羽が無駄と見てか、暴走体は翼を羽撃かせ強烈な風を起こす。

「くっ、なんて風！きゃあああっ」

「な、なのは！！」

バリアジャケットや頬や手が裂け、全身に痛みが走り血が噴き出す。

まさか――

「かまいたち！」

「風の刃Σ！？」

フィールド攻撃系ともなれば防御は抜かれますね。

「レイジングハート！」

『Ｍｏｄｅ　ｃｈａｎｇｅ！　Ｃａｎｏｎ　ｍｏｄｅ！　Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ．　ａｎｄ　Ｈｏｖｅｒ　Ｆｅａｔｈｅｒ　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ！』

「ハアアアアーー！！」

ホバーフェザーとブリッツアクションの高起動による撹乱。

「ディバインランサー！」

『Ｄｅｖｉｎｅ　Ｌａｎｃｅｒ！　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ！』

「シュートォォォッ！！」

１０個のスフィアから次々にディバインランサーが放たれる。対フェイト用に考案していた戦法ですが、ここで試すのも良いでしょう！

ディバインランサーのランダム射撃により空中機動を限定し――

『Ｇｕａａａａーー！！』

敵の回避予想地点を割り出し、そこへ――

『ＧｕａΣ！？』

「ディバインバスター！！」

地上からホバーフェザーの推力を全力解放！

暴走体の懐にドンピシャで突貫し、アッパーと同時に零距離でディバインバスターを撃ち込む！

そして――

「ジュエルシード、封印！」

『Ｓｅａｌｉｎｇ！』

構えたレイジングハートのカノンモードの砲口を突きつける。

『Ｄｅｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ！』

「シューートッ！！」

トリガーを引き、零距離封印砲撃。

『Ｇｕａａａａａーーーーー！！！！』

砲撃に吹き飛ばされ、地面に突っ込む暴走体。粉塵と爆煙で結果が判りませんが、久遠すら墜ちた零距離２連多段ディバインバスター。

「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…はぁ……」

地面に着地しながらも、レイジングハートは構えたまま粉塵が晴れるのを待つ。

封印に成功しているならジュエルシードが現れるはず――

『Ｇｙｕａａａａａーーーーー！！！！』

粉塵を突き抜け、一直線に暴走体が突貫してくる。

封印仕切れなかったΣ！？

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．』

「くっ、あああああーーーっ！！」

バリア事押され、そのまま木に追突する。

「がはっ！！」

「なのは！！」

『Ｇｙｕａａａａａ！！！！』

暴走体が口を開け、私に迫る。

バリアも回避も間に合わない！

「くっ！」

「なのはーーーーー！！」

バリアジャケットの防御力を信じて、腕をクロスさせて頭を守る。

ですが、予想した衝撃も、痛みも、やって来ませんでした……。

『Ｇ、Ｇｕｅｅｅｅ……』

暴走体の開けた口の裂け目と後頭部に巻きつく光り……いえ、これは！

「鋼糸（こうし）！？」

月明かりで光る鋼糸を目で辿っていけば、そこには――

「兄……様…」

「逃げろなのは！！」

鋼糸を腕に絡め、思いっ切り引いている兄様の姿。

「チェーンバインド！」

チェーンバインドで暴走体を雁字搦めに縛り上げる！

『Ｇｙｕａａａａａａーーーーー！！！！』

もう一度、砲撃を喰らわせた場所にレイジングハートを突きつける！

「リミット解除！レイジングハート！フルドライブ！！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！　ｌｉｍｉｔ　ｒｅｌｅａｓｅ．　Ｆｕｌｌ　Ｄｒｉｖｅ！』

フルドライブにカノンモードのフレームに展開される一対の桜色の翼。

環状魔法陣がフレーム、トリガーユニット、柄に次々と展開する。

残った魔力と周囲に散らばった魔力を有りっ丈集める！

「ディバインバスター！！マキシマム・シュートォォォッ！！！！」

トリガーを引き、３発目の零距離ディバインバスターが解き放たれる！

「ブレイクッ！シューーートッ！！」

『ＧｕＧｙａａａａａ！！！！』

今度、こそ！！

「ジュエルシード！封印っ！！」

『Ｓｅａｌｉｎｇ！』

ディバインバスターの奔流が終わり、残ったのはジュエルシード２個と黒い鳥……おそらく鴉。そして兄様の鋼糸。

『Ｒｅｃｅｉｐｔ　ｎｕｍｂｅｒ　ＸＩＩＩ．　ＸＶＩＩ．』

「っ、ぜぃ…はぁ……はぁ…はぁ……がはっ！」

「なのはっ！！」

駆け寄ってくる兄様。

また、無茶をしてしまいましたね……。

「なのは！なのは！なのは！！」

「…だい、じょうぶ、です…よ。少し、やす…めば……」

兄様に魔法がバレた。

もはや世界がどんなのかわからなくなってしまいましたよ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町恭也

息を荒げるなのはを抱きながら、先ほどの戦いを思い帰る。
まさかな、俺の想像していたものの斜め上を行く戦いか……。

あのアッパー、タイミングと入り。

魔法を使われたら俺でも神速を使わなければ喰らうだろうな。

一撃目は敵にダメージを入れながら動きを止め、二撃目が本命のコンボか。我が妹ながら、なかなかエグい一撃を考えたものだ。

「あ、あの……」

「喋れたんだな、ユーノ」

「ッ、……は、はい…」

怯えるように俯くユーノ。

おそらくはユーノが魔法関係者で何らかの理由でなのはがそれに荷担したんだろう。

しかしユーノの様子をみれば、なのはが進んで協力しているんだろう。この子はそういう子だ。

「兄様……ユーノを、責めないで下さい」

「なのは…！」

「私が勝手に、首を突っ…込ん、で…いるの、ですか、ら…」

まだ呼吸が落ち着かないんだろうなのはだが、その顔はやり切った良い顔つきだった。

これは、責めたら俺が悪者だな。

「わかった。とりあえず、家に帰るぞ」

「はい…」

「ユーノも……な」

「僕は……」

なのはを背負って、俯くユーノの首根っこを掴むと、頭に乗せる。

「きょ、恭也さん…」

「話しはあとでゆっくりと聞くさ」

久しぶりに背負ったなのはの重みに、懐かしくも、最後に背負った5年前より重くなった妹に、何時の間にかこんなに逞しく育ってしまったことを少し嬉しく思った。

とりあえず美由希。お前本気でこのままだとあっという間になのはに抜かれるかもしれないぞ。

第7話　御神の剣（つるぎ）（後書き）

兄様に魔法がバレました。

とらハ恭也スペックならこれくらいは大丈夫だろうか？

意見・感想、お待ちしております。

第8話　切なる言葉

ｓｉｄｅ：高町なのは

私は兄様に背負われて家に戻ったあと、作業部屋にて兄様に現在海鳴市で起きていることとジュエルシードについてを説明しました。

ケガはユーノと私でフィジカルヒールをかけたので問題はありません。

「そうだったのか、だがユーノ、お前の責任感は立派だが、何故自分1人で来たんだ？事情を話せば仲間の1人や2人は着いて来てくれたんじゃないか？1人で飛び出して、ケガをして、今は結局はなのはに頼りきりの状態だ。仲間を呼べないにしても事前に色々と必要な物や事柄をすべて終えてから来るべきだったんじゃないか？」

「うっ、す、すみません……」

その辺りは大人びて見えるユーノでも9歳故の脆さと迂闊さでしょう。

焦って準備を怠り、さらに攻撃力は私にも劣っているユーノでは、たとえレイジングハートを持っていても、それは蛮勇であり無謀ともいう行動でしょう。

まぁ、そうなる運命であると言われてしまえば、私もユーノもそれ

までなのですが――

「それになのはもだ。こんなに危険で一大事の事を何故1人で抱えようとしたんだ？」

「そ、それは……」

説明する為にレイジングハートに頼んで今までの戦闘ログを兄様に見せたのは失敗だったかもしれません。いずれも軽傷とはいえ無傷ではなかった戦い。

それ故に兄様の眼光はユーノに向いていたそれよりも厳しく感じます。

「まぁ、大きなケガもなく済んでいたから良かったものの、今日俺が居なかったらどうなってたか、それは一番なのは自身が良くわかっているだろう」

「はい……」

あの時兄様が居なかったら、きっと私は――

「魔法という時点で、確かに他人に話すには眉唾ものと取られるだろうが、俺達は家族だろ？」

「っ！！」

「もう少し、俺達の事を頼ってくれたって良いんだぞ？なのは」

兄様の言葉は嬉しく心を満たし、そして残酷に私の心を抉る。

本物の高町なのはではない、異物な存在である私を家族と言ってくれる嬉しさと、高町なのはへの罪悪感が私を蝕む。

「とりあえず、なのはが話すまで俺は黙っておくから、ちゃんと話せるようになったら話すんだぞ？」

「はい…」

家族。甘美な言葉は私に温もりと痛みを与える。

高町なのはではない、異物の私には享受する権利の無い言葉だ。私が高町なのはである事を証明するまでは――

「クゥ……」

「大丈夫ですよ、久遠」

心配そうに私を見る久遠に顔を埋める。

まだ４日でも、久遠は私の事を好いてくれているのを感じます。

この世界がどの程度とらハに浸食されているか判りませんが、場合によっては久遠から祟りを打ち払うのを私がやらなければならないかもしれない可能性もあります。

ある意味、私は久遠とアリスに依存しています。それは魔法少女リリカルなのはにおいて、久遠もアリスも存在しない存在だからです。

久遠はとらハキャラではありますが、それでもリリカルなのは色の強いこの世界で運命でなく偶然が紡いだ、『私』の絆だから。

アリスは言わずもがな、私が産み出した私だけのファミリア。

高町なのはでなく、私自身が私の力で紡いだ絆だから、必要ない壁も作らずに懐を許してしまえるのです。

兄様が出て行った作業部屋で、私はスケッチブックにペンを走らせる。

魔法と出逢って、止まっていた作業が少し進ませる事が出来ました。

何時か久遠と戦わなければならない可能性もあるかもしれない現状、ミッド式魔法だけでは、私は久遠に敗北するしかありません。

ミッド式もベルカ式も、理数系科学によって行使される事象。私基準で言えば科学式で魔法を再現しているだけの物。

純粋な妖狐である久遠相手には、防御しても久遠自身の妖力や霊力効果を防ぐ事が出来ない。

私が久遠と戦った時に電撃だけ通ったのがその証拠です。

レイジングハートの協力で、この世界にもエーテルがちゃんと存在している事が判りました。

あとはそれを使うだけの式が出来れば、魔導師殺しやＡＭＦ環境下でも普通に戦闘が可能でしょう。あとは私にどこまでプラーナが存在するのか、そこは戦闘民族一家高町家が末妹の身体スペック次第ですね。

翌日。

私は何時もより少し早起きをして、部屋の中でいつもの筋トレを始めます。

逆立ちして腕立て、腹筋、背筋、そして久遠を頭に乗せてのスクワット。

それが終わった後は軽く汗を流して、道場の方に向かいます。

道場には既に兄様が素振りをしていました。

「おはようございます。兄様」

「おはようなのは。昨日はぐっすり寝られたか？」

「はい。お陰様で」

挨拶を交わし終えたところで、私は以前から気になっていた模造武器を見てまわる事にしました。

野太刀から小太刀、手裏剣や鋼糸、さらには槍からトンファーまで、さすがにハンマー系はありませんでしたが、それ以外の武具なら大抵はある様ですね。さすが総合殺人術御神流。小太刀が主軸でも場合によっては小太刀を振るえない状況も考慮されてでもいるのでしょう。

私は薙刀とトンファーを取り出して手に握ってみます。

薙刀や槍はレイジングハートを振るう面では使える技術ですね。

薙刀を戻し、一本のトンファーを左手に持つ。

将来はコレに似た武器も扱うようになるかもしれません。

高町なのはが御神流を習っていたら、魔王でなく冥王と呼ばれていたでしょうね。

その後、兄様と姉様はまた互いに打ち合い稽古。

私は父様から御神流とはなにか？についてのレクチャーを受けました。

内容は私の知る物とあまり違いはないのですが、ただ知っているのと、実際に耳に聞くのは重みが違います。将来のこともある為、私は御神流剣士になることは難しいでしょうが、勧めてくれた父様の

想いに応える為、私も本気で御神流に取り組む所存です。

レクチャーを終えた私は、まずは小太刀の握り方を学び、基本的な振るう型を教わります。

その型を御神流の初歩の初歩、御神流　斬と呼ぶ様です。

御神流のあらましは知ってはいましたが、細かな技はそこまで知らず、知っているのは神速くらいでしたから、新鮮な気分です。

土曜日である事も手伝い、今日は一日中御神流　斬の型の練習に注ぎ込みました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町恭也

今日からなのはも御神流を習い始めた。

最初は初歩の御神流　斬から。

しかし既に3回とは言えど内容の濃すぎる戦いと、何よりユーノによれば、なのはは足を止めて遠距離から砲撃を撃ち込む砲撃魔導師というカテゴリーの魔法使いだそうだが、実際のなのはの戦い方はその真逆の近接戦闘で零距離から大火力を直接撃ち込む戦闘スタイルを取っている故か、午後の稽古ではぎこちなくとも既に御神流

斬を振るっていた。

打ち合いになればまだまだ未熟だが、これで神速を覚え、さらに魔法まで使われたらどうなるのか、少し楽しみだ。

父さんも久しぶりに人に教えている所為か、生き生きしているしな。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ふぅ……」

お風呂に入って今日1日の疲れを癒やします。

４年間、筋トレを欠かさなかったお陰でしょうか、今のところ筋肉痛とかはありません。持久力もなんとか保つようです。なにより楽しい。

強くなれること、地力の違う私は、努力をしなければ高町なのはにもフェイト・テスタロッサにも劣る存在。

未だに擬似的な三次元機動が限界の私では、空戦中心の無印やＡ'ｓを生き残るのは並大抵の努力や自力の努力では越えられない壁が幾つもあります。

それを越える為の力が御神流。
大切なものを守る剣、御神流。
その志しからとは離れたとこに使おうとする私には御神流を振るう資格などないのでしょうが、せめて今年だけは許して欲しい。
今年が終われば、無印やA's も終わる。
だから今だけは――
「なのは～！一緒に入ってもいいか？」
父様の声で現実に呼び戻されます。
「ええ、構いませんよ」
「それじゃあ失礼するよ～」
腰にタオルを巻いて風呂場に入って来た父様の身体は、私以上にハッキリと判る傷痕だらけです。
「なのはと風呂に入るのは久しぶりだなぁ」

「そうでしたね」

私の記憶では、最後に入ったのはこの私になる前の私の朧気な記憶の中で。

つまりは5年振りくらいでしょうか？

「それにしても、なのははは呑み込みが速いなぁ。なのはには剣士の才能があるのかもしれないぞ？」

「剣士……ですか…？」

私が思うに剣士と言うよりも近接戦闘スタイルでしょうね、砲撃魔導師であるのに近接戦闘スタイルを主軸とする矛盾を孕むコプセント。

しかしその矛盾した戦法で、私は3度勝ちを取りにいきました。そして3度勝てた。

高町なのはでありながら高町なのはでない矛盾した異物の私が使う矛盾した戦闘スタイル。

ですが私にはこのスタイルでなければ勝つことすら出来ない劣化物。情けないことこの上ない。

「なのは、何か悩みでもあるんじゃないか？」

頭を洗ってもらいながら、父様に訊かれました。父様にはわかってしまって当然ですね。

「ええ。悩み事はあります。ですがこれは、私にしか……私自身が解決しなければならない事故、父様にも話せません」

「そっか。なのはも、大人になって来たんだな」

大人……ですか。

果たして、そうでしょうか……。

私が大人であれば、兄様や父様に助力や助言を申し上げるべきでしょう。

ですが、それは出来ません。

ジュエルシード事件は、私の力で解決していかなくては。

私が高町なのはになる為にも――

こんな子どものような意地を貫こうとしている私は、大人ではありませんよ。

第8話　切なる言葉（後書き）

一応ちょっとしたお説教で今回は終えて、兄様や父様からお言葉を――

家族――

我が家なのはにとってはとても大切で、本家なのはの次に心の悩みです。

私も戦闘民族一家高町家に居候してみたい……。

第9話　さすらいのバウンティ・ハンター　ナノハ・タカマチΣ！？（前書き）

軽く誤字を修正。

第9話　さすらいのバウンティ・ハンター　ナノハ・タカマチΣ!?

ｓｉｄｅ：高町なのは

日曜日になりました。

今日は父様は、自らオーナー兼コーチを務める翠屋ＪＦＣの試合の日故に、私の稽古はお休みです。変わりに道場の隅で御神流　斬の練習と魔力を使った新たな技法の編み出しと、身体を流れる生命エネルギー、プラーナを引き出せないかを試行錯誤していました。

エーテルが存在するならばプラーナも存在するはず。

プラーナが引き出せなければ、せっかくの魔装機神体系の魔法――造称『ラギアス式』魔法の研究が無駄になります。

ラギアスはラ・ギアスから取っているのは一目瞭然でしょう。

このラギアス式はミッド式を流用し、空間に存在するエーテルに対し、プラーナで介入し、魔術式で効果を引き出す物。

ミッド式から術式を流用している為、ミッド式やベルカ式の防御魔法で防御出来ますが、最大の違いは対ＡＭＦ環境下でも運用に支障がないところでしょう。

なにせＡＭＦは魔力結合を阻害する物であり、ミッド式やベルカ式に使われている魔力素はエーテルと別物の上にトリガーは生命エネルギーのプラーナ。ＡＭＦ効果の対象外ですから。

ただ、プラーナがなければ魔装機を動かせないのと同じで、プラーナがなければラギアス式も無意味ということでしょう。プラーナを使う関係上、レイジングハートのようにデバイスがオートで魔法を使うということも出来ません。使える者と使えない者が分かれてしまうのは、ミッド式やベルカ式と変わりはありません。

自主稽古を終えたあとは、姉様と汗を流してから出掛ける用意をします。

服装は黒のインナーに黒の長袖シャツ、下は黒色のスラックス、黒のオーバーコート、赤のマフラー、黒のテンガロンハット――

どこぞのエンドレス・フロンティアのさすらいのバウンティハンターみたいな格好が私の外出着です。

ちなみにテンガロンハットこそこのなのはの身体になってから被り始めましたが、それ以外は転生前も着ていた服装故に、これが私の私服と胸を張って言えます。

ちなみにバリアジャケット設定時も今のとコレでかなり悩みました。

閑話休題。

「おはようなのはちゃん！」

「おはようなのは！って、またアンタそんな服装を……」

「グッドモーニング、キューティープリンセズ。良き朝ですね」

ちなみにこの身体になってテンガロンハットを被ってから、ハーケン言葉を使ってみてたりします。

だってカッコイいんですもん。それにこの良き容姿だから許される厨二病キャラ作りとか、やらなくては損ですよ？

「アンタ、少しくらい女の子らしいオシャレとかしようとは思わないの？」

「私はカッコイいから良いと思うんだけどなー」

「すずか！良いの！？このままなのはが男の子になっちゃっても！」

「そ、それは……良い…かな？」

「なんで顔朱くすんのよ！！……ま、まぁ、それはそれであたしも……」

すずか、何を想像して顔を朱くしているのですか？

それとアリサ、怒って朱いのかすずかと同じ意味で朱いのかわかりません。

「ＯＫ、フェイスレッドガールズ。そろそろ行かないと試合に遅れますよ？」

「わ、わかってるわよ！行くわよなのは！すずか！」

「うん。行こっかなのはちゃん。アリサちゃん」

「ＯＫ、行きましょう」

私を真ん中にして、左右にアリサとすずかが並んで歩いて行きます。

ちなみに2人とも手荷物有りですが、私は手荷物無し。しかしコートでわかりませんが、後ろ腰に小太刀の木刀が挿してあります。護身用です。

あと半分趣味で造った炸裂火薬打ち出し電動式超合金エアガン『ナイトファウル』と火薬加速式超合金エアガン『ロングトゥーム・スペシャル』を一丁ずつ。威力は人体に撃つと結構痛いですが、少し赤くなるくらいしかありません。まぁ、眼に当てると怖いですが。

軽く銃刀法違反してますね。まぁ、バレなければ良いでしょう。

河川敷にあるサッカーコートまでくれば、サッカーユニフォームを着た男の子達が軽くアップを始めていました。

５月は時々軽く寒かったりしますから、少し羨ましいですね。私は低体温で寒いの嫌いですから。厚着しても寒いんですよね。

「なのは、アンタ大丈夫？」

「さ、寒いのかな？なのはちゃん？」

「ズズ……大丈夫です。ちょっと寒いですが…」

ひょぅ……と、河川敷特有の冷たい風が頬を撫でゆく。

「クシュッ」

「ちょ、なのは！？」

「か、カゼひいてないよね？なのはちゃん！？」

「大丈夫です。ご心配なく」

しかしクソ寒いですね、５月の河川敷。

「少し身体を温めて来ますね」

「え、ちょ、なのは？」

「な、なのはちゃん？どこ行くの？」

「直ぐそこですよ」

土手を降りて父様の隣りへ行きます。

「父様、おはようございます」

「お？来たかなのは。アリサちゃんとすずかちゃんも一緒か？」

「ええ。土手の方に」

危なっかしく土手をゆっくりと降りてくるアリサとすずかを一度振り返ってから父様に向き直ります。

「少し端で身体を温めてきます」

「ん？あぁ、気をつけてな」

「わかりました」

てくてくと歩いて、コートの端側、子ども達の少ない方へ行きます。

しかもなんかちょうど良い高さの切り株も発見。ふむ、やってみましょうか。

まずは後ろ腰から木刀を抜き、抜きと入りと突きから御神流　斬へ繋げます。

切り株には僅かに線が入る。

それを5回繰り返してから、木刀を戻してナイトファウルを右手に持ちます。私は左利きですが、転生前は右利き故、実質両利きです。

「OK、ショウタイムです」

切り株に向き、帽子を押さえて宣言します。

「リッパー！ハチの巣です。OK、ラストです！グッドナイツッ！！」

リッパーの斬撃に射撃を織り交ぜて、最後にステークを撃ち込むテキサス・ホールデム。

まぁ、弾はBB弾ですし電動マシンガンですからそこまで威力は無く、弾は弾かれます。しかしリッパーとステークは頑丈、ステークは炸裂火薬で実際に撃ち出している為、切り株には斬痕と穴が残ります。

暇にかまかけて習得したハーケン・ブロウニングの技の数々。まぁ、忘年会新年会隠し芸大会ネタに覚えてみたものですが、完成度は私が納得するまで練習した所為か、完璧です。

「ハイロー・ドロー！私の曲撃ちと早撃ち、たっぷりご覧あれ♪」

ナイトファウルを真上に投げ、ロングトゥームで撃ちつつ落ちてきたリッパーが回転しながら切り株に斬痕を残す。

ロングトゥームの弾を変えながらナイトファウルを回収。

「フル・ハウス！撃ちます！斬ります！ここが勝負どころです！私の捌きもなかなかでしょう？」

ナイトファウルを片手で器用に回転させ、リッパー攻撃とマシンガン攻撃の乱舞をお見舞いする。

「7連ステークです！せぃ！や！7発目！！」

ナイトファウルのステークを1発上向きに撃ち、そこから身体を回転させて2発連続で上向きに撃ち、水平に1発、切り株に背を向けて脇の下からナイトファウルを出して1発撃ち、身体を向き直らせてラストの一撃。

「これでショウダウンです。私に惚れないで下さいね？」

決めセリフを言いながら帽子の鍔を拳銃に見立てた左手の人差し指を下から押すように添える。

フッ、完璧に決まりましたね。

気分も体温も良い具合に高揚しています。

ちなみにファイヤー・マウスとベスト・フラッシュ　２ｎｄ、ファントム・ホールデム以外は出来ます。しかしこの服装時限定で、ハーケンになりきらないと出来ないんですけど。なりきりダンジョン？

――パシンッ！！

「痛いですよ、アリサ」

何故かハリセンを持って顔を朱くしているアリサ。

「あ、アンタ！それ本物じゃないでしょうね！？てか、私に惚れないでってなんなのよ！？なにがしたいのよ！？曲芸師にでもなりたいの！？てゆーかおもいっきし目立ってるわよ！！」

「なのはちゃん、カッコイい……」

ツッコミ乙ですアリサ、アナタなら八神はやてと全国行けますよ。

そしてすずか、練習すればあなたにも出来ますよ？

「ほんと！？教えてなのはちゃん！」

「やめい！！」

すずかは雰囲気的に、てか名前的に錫華姫でも――

「ＯＫ、エブリワン。とりあえず静観静聴に感謝します」

帽子に手を乗せながら会釈。

ハーケンはカッコ良くキザにキメるんですよ。

まぁ、試合前の余興としては重畳でしょう。

「（凄いなのは、あんな曲芸染みた技、どこで覚えて来たんだ？）」

「（なのはも別ベクトルで軽く非常識だと僕は思うんだけどなぁ……）」

なのはの曲芸撃ちにそんな感想を抱く父とフェレット少年だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

試合は終わって昼食は祝杯も兼ねて喫茶翠屋で。

私もアリサとすずかと一緒に、翠屋の屋外テーブルで茶会を楽しんでいました。

「試合凄かったね。すずか」

「うん。私、胸がどきどきしちゃったよ」

未だに興奮冴えやまない2人を見つつ、私はナイトファウルとロングトゥーム・スペシャルの手入れをしつつ、コーヒーを口に含みます。味は砂糖ゼロで牛乳４割の高町なのはスペシャル。一杯１００円也

「でもなのはちゃんの曲芸もカッコ良かったよ！」

「アンタあんなのどこで覚えてくんのよ……？」

「禁則事項です」

人差し指を唇にあてがいながらウィンクで返答します。さすらいのバウンティハンターは多くを語らないのですよ。

「アリサちゃん、すずかちゃん。今日は応援に来てくれてありがとう。楽しんでくれたかな？」

店から父様が出て来ました。サッカーチームは解散したようですね。

今は喫茶翠屋の店長の時間の為、父様はエプロン姿です。

さっきまでは翠屋ＪＦＣのコーチだった為にジャージ姿。家に帰れば兄様や姉様の鍛錬の為胴着。何も用事が無いときは私服と。

家で一番衣服がコロコロ変わる人物でしょう、父様は。

そして意外にも変わらないのは母様でしょうか？専業主婦だからでしょうか……。

「今日はお誘いしてくれて、とても楽しかったです」

「試合、とってもカッコ良かったです。なのはちゃんも」

「パパもびっくりだよ。いつの間にってね」

「子どもは陰日向で日々成長するものですよ、父様」

「はは、違いない」

父様の笑い声を聞きながら、残ったコーヒーを飲み干します。

何故かやはりこの格好になると味覚が大人に戻るんですよね。

憑かれている？呪いの品ですか？

たかまちなのははのろわれた。

なんてテロップとか出ませんよね？

「それでは私達は今日はこの辺でお暇します」

「おや、お出掛けかい？」

「はい。お姉ちゃんとお出掛けに」

「私はお父さんとショッピングです」

「そうだったのですか、近くまで送りましょうか？」

「ううん。迎えに来て貰うから」

「あたしもよ」

「そうですか、明日お話しを聞かせて下さいね」

「うん！」

「いいわよ」

そして私達も解散しました。

「なのはは、これからどうするんだ？」

「そうですね。せっかくの日曜日ですし、久しぶりにウィンドウショッピングに行ってきます」

行き先は家電量販店やジャンク用品店が中心ですが。

「そっか、気をつけて行ってらっしゃい」

「はい。では行ってきます」

ユーノを肩に乗せて私も街へ向かいます。

「ユーノ、一度家に行って久遠を連れて来て下さい」

《え？別にいいけど、久遠を迎えに行ってからでも》

「意外と重いんですよ、この格好」

《あー、うん。わかったよ》

肩から離れるユーノを見えなくなるなるまで見送ります。

「さて、家電、パーツ、材料が私を待っています」

私は胸を踊らせつつ、しかしクールに歩を進ませ始めました。

しかし、後の私はこの時の選択を、一生涯並みに後悔するのでした

――

第9話　さすらいのバウンティ・ハンター　ナノハ・タカマチΣ！？（後書き）

ほとんど暴走ネタです。

嵐の前のオチャラケとも言いますが――

整った容姿だからこそ許されることもありますよね？

ハーケンと零児のやりとりが好きです。

第１０話　哀哭するは星光の心－Ｉｔ　ｓｃｒｅａｍｓ　ｔｏ　ｐａｔｈｏｓ.

またまた誤字修正になります。期待させてごめんなさい。

第10話　哀哭するは星光の心ーIt screams to pathos.

side：高町なのは

「こうして出掛けるのは、久しぶりのような感じがしますね」

『Well. Because this one week was these very deep days.（そうですね。この一週間は、とても濃い毎日でしたからね）』

受け答えたのはアリス。

今私達はあの海岸へ来ていました。

私の泣き場にして、私が私を始め、私が高町なのはを目指し始めた場所。

「たった3度ですが、私はあの時から強くなっているとは思います」

でなければ鴉の暴走体にも苦戦していたことでしょう。

上手く立ち回れるようにはなった。

でも高町なのはには程遠い。

近接高機動戦闘型砲撃魔導師――

私が使う異端で矛盾の戦闘スタイル。

御神流――

守る為の剣。

高町なのは――

私であり、私でない。

不屈の心と正義感に溢れる心優しき魔法少女。

『高町なのは』――

高町なのはではなく、高町なのはである私。

沢山の友人を得て、家族に囲まれて、将来は魔法使いの男の子と敵対しながらも恋をする乙女に――

将来は友人に囲まれながら様々な期待と希望を背に、娘を育てる良き母親に――

そんな未来を奪い、居場所を奪い、身体を奪い――

高町なのはに成り代わる存在の私。

私が『理』を真似るのは、本当の本当は、高町なのはへの罪悪感を少しでも誤魔化して減らす為――

私は星屑。

私は居てはいけない存在。

この世界で生きている権利すらないはずの存在。

この世界にとっては異物の存在。

そんな世界に逆らって、もがき足掻いて、方法すらわからないのに自分が高町なのはである事を証明するのだと言って、世界と意地を天秤に掛ける最低のうつけ者。

こんな私、何度も消えてしまえと思った事は数知らず。

本物の高町なのはが私を消し去ってくれるだろうと思い続け星霜を経る。

でも――

「（消えたくない。消えたいのに……消えたくない！）」

5年だ。

たった5年。

私にとっては人生の1／6の時間。

たったそれだけの時間で、世界は残酷にもしかし温かく私を縛り付ける。

父様、母様、兄様、姉様、アリス、レイジングハート、アリサ、すずか、久遠、そしてユーノ。

私の運命と偶然が紡いだ絆。

運命は必然――

偶然も必然――

宿命も必然――

世の中は必然で出来ているらしい。

なら、私の存在は何だ？

必然？

そんなバカなはずがない。

次元断層に巻き込まれて死んだのを、閣下の温情でこの世界に生まれ変わったにすぎない。

異物に必然など――あろうはずもない！

「世界は、私は、こんなはずでは、無かったのでしょうね……」

『Ｍｅｉｓｔｅｒ．（マイスター）』

唯一なのはの歪んだ内面を知るアリスは、自分の無力感を嘆いた。

スケッチブックに宿る不完全なデバイス、なのはの使い魔。

自分の存在がマイスターたるなのはに負担を掛けている。

消えてしまいたいと、この一週間何度も思った。だがマイスターの心の弱さを正しく理解しているアリスには、消えることすら出来ない。

なのははアリスに依存している。

それはアリスがファミリアだから、もう1人の自分であり、自分を支えてくれる存在だからだ。

今アリスが消えれば、なのはの心は壊れて砕け散るだろう。

世界の運命と、なのはの存在意義の掛かっているこの戦いには、負けは許されない。落ち込んでいても、折れることは許されない。

そんな現状が、なのはとアリスを追い詰めていた――

「っΣ！？」

『Ｍｅｉｓｔｅｒ！（マイスター！）』

『ＪｅｗｅｌＳｅｅｄ　ｉｓ　Ａｗａｋｅｎｉｎｇ！（ジュエルシードの発動を確認！）』

魔力波を感じた方向――街中から強力な魔力を感じ、巨大な巨木が生えていった。

ガスッ！！

「なんたる失態ですか！！」

コンクリートに拳を叩きつけ、私は巨木を見みながら思い出した。

今日この日、ジュエルシード最大級の被害が起こってしまうことを……。

「レイジングハート！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ！』

我、使命を受けし者成り――

契約のもと、その力を解き放て――

風は空に　星は天に　そして不屈の心はこの胸に――

この手に魔導を――

「レイジングハート、セットアップ！！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ.　Ｓｅｔｕｐ!』

変形したレイジングハートを握り締め、バリアジャケットが形成される。

『Ｈｏｖｅｒ　Ｆｅａｔｈｅｒ！　Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ！』

「くっ！」

初速無しで一気に瞬間最大速度で、私は街に向かって駆け抜ける！

木の根を撃ち落としながらとにかく中心へ向かうのですが――

『Ｎｅｘｔ！　ｉｎｔｅｒｃｅｐｔ　ｃｏｍｉｎｇ　ａｔ　３　ｏ' ｃｌｏｃｋ，１１　ｏ' ｃｌｏｃｋ，６　ｏ' ｃｌｏｃｋ！（次！３時方向、１１時方向、６時方向、迎撃が来ます！）』

「全力で撃ち落としますよ！ディバインランサー！！」

『Ｄｅｖｉｎｅ　Ｌａｎｃｅｒ！　Ｓｔａｎｄｂｙ！』

「ファイア！！」

８つのスフィアからディバインランサーを撃つ。

ディバインランサーは直射魔法故に、自分がトロンベよろしく回転しながら木の根を撃ち落とし、先へ。

木の根の外輪部に着いてからまるで私の侵入を拒むように、木の根やつるのムチ、はっぱカッターやリーフブレードなどなどが襲いかかってきます。

幸いにも葉っぱやつるは強度がそのままのようで、ナイトファウルのリッパーで斬り裂き、木の根はディバインランサーやシュートバレットで撃ち落としている為、そこまでの消耗が無いのが助かります。

まさかネタレプリカ武器と忘年会新年会隠し芸大会用に身につけた技がこうして実戦で使う日が来ようだなんて思いもしませんでしたよ。

左手にレイジングハート、右手にナイトファウルを握って、私は街中をひた駆けます。

途中で巻き込まれて逃げ遅れたり、退路を塞がれた人の救助なりもしているので、進行スピードは遅いですが、気づいて然るべき私が気づけず、被害を広げてしまった私が出来る償いは、これしかありません。

ちなみに顔はテンガロンハットを眼深に被って、出来るだけ顔は晒さないように努めています。

しかし妙です。

ジュエルシードの暴走体は、私には襲いかかりはしますが、一般人は発動に巻き込んだくらいで、あとは攻撃を受けている様子はありません。

魔法が使えるか否かの違いからくるのか、それとも明確な敵意に反応しているのか判断に迷いますが、今は限りなく迅速な対応が急務です。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：アリサ・バニングス

あたしは今、親友のすずかとジャングルの中に居た。

別に誘拐されたりとか、どこでもドアとか、テレポートとかを使ったわけじゃない。非常識だけど、あっという間に街がジャングルになってしまっただけだ。

「ア、アリサちゃん……」

もともと優しくて、言い換えると自己主張の激しくないすずかは、あたしの背中にくっついて震えてる。

あたしも脚が笑ってる。

でもあたしが少しでも不安をみせたらすずかは泣き出しちゃうかもしれない。

あたしだって怖いけど、そんなのイヤ。

すずかを泣かせる位なら、あたしが少し我慢すれば良いだけ。

「大丈夫よすずか、きっと助けが来るから」

「で、でも……」

怖がっているすずかの手を握る。

少し痛い位に握り返されたけれど、顔には出さない。

これでもバニングスの跡取り娘なのよ！

ふ、普段は恥ずかしかったりして出来ないけど、今この非常識な状況だから出来る。

ポーカーフェース――

――「私に惚れないで下さいね？」

な、なんでこんな時になのはが出てくんのよ！？

し、しし、しかもなんか、なんで胸がドキドキするのよ！？

だぁんもう！！今そんな場合じゃないってのにぃ！！

「ア、アリサ…ちゃん？」

「な、何でも無いわよ……」

なのは……あんたは無事でしょうね？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

「シュート！！」

シュートバレットを拳の前に展開して、進行を妨げる太い根を打ち砕く。

「まだ見つかりませんか……」

エリアサーチをかけながら探してはいますが、私はそこまでマルチタクスにリソースが割けないというか、あっちこっちで頭を働かすという考え方が未だに馴染まず、エリアサーチはレイジングハート任せ、レイジングハートがエリアサーチにリソースをかけている分、今は私が単体で放てるシュートバレットとナイトファウルでの戦闘を行っています。

『Ｍａｓｔｅｒ．（マスター）』

「見つけましたか！？」

『Ｐｌｅａｓｅ　ｓｅｅ　ｔｈｉｓ，　ａｌｔｈｏｕｇｈ　Ｊｅｗｅｌ　Ｓｅｅｄ　ｉｓ　ｎｏｔ　ｆｏｕｎｄ　ｙｅｔ．（ジュエルシードはまだ見つかりませんが、これを見て下さい）』

戦闘の邪魔にならないように表示されたモニターには、半ばジャングルと化した街を歩くアリサとすずか。

血が出る程に唇を噛み締め、レイジングハートとナイトファウルが震える程、手が白くなる程握り締める。

やっぱり私には高町なのはであるところか、２人の友達という立場すら許されるべきでは無かった……！

私に関わってしまったばっかりに、こんなことに巻き込んでしまっ

た！

『Ｍａｓｔｅｒ！　Ｊｅｗｅｌ　ｓｅｅｄ　ｗａｓ　ｄｉｓｃｏｖｅｒｅｄ！　Ｔｈｅｙ　ａｒｅ　ｔｈｏｓｅ　ｗｉｔｈ　ａ　ｒｅａｃｔｉｏｎ　ｉｍｍｅｄｉａｔｅｌｙ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｍｅｔｈｏｄ　ｓｉｄｅ　ｏｆ　ａ　ｆｒｉｅｎｄ！（マスター！ジュエルシードを発見しました！友人方のすぐ傍に反応有り！）』

「ホバーフェザー推力全開！！ブリッツアクション！！」

一気に高機動に移行した所為か、再び暴走体の迎撃が再開。その勢いは真っ直ぐ本体に向かっている所為か、先ほどとは比べ物にならない。

「邪魔を――」

つるのムチ、はっぱカッター、リーフブレードを斬り裂きハチの巣にステークで撃ち抜き、遠方はディバインランサーで迎撃。

「するなぁぁぁーーーー！！！！」

何時もの自分すら忘れて、以前の自分が表に出て来る程、私は周りも見ずに一直線に突き抜けて行く！

アリサもすずかも、高町なのはの運命によって出逢うのは必然だったかもしれない。でも――

「私が紡いだ3年間は、運命だ必然だなんて言わせない！！」

正面から迫る鋭いつるのムチをグレイズで回避しながらリッパーで斬り裂く！

「アリサもすずかも――」

四方からくるはっぱカッターをナイトファウルでハチの巣に撃ち墜とす！

「傷つけさせはしないっ！！」

視界の先に捉えたアリサとすずか。

本体に近寄り過ぎた所為か、2人を追い払うようにはっぱカッターが集まり魔力を宿し、リーフブレードに変わる。

「どんな魔法だろうと！！ただ――」

レイジングハートを握る拳の先に環状魔法陣が展開。ブリッツアクションを連続で使い、2人の前に立ちふさがってリーフブレードに拳を打ちつける！

「撃ち貫くのみ！！ディバインッ、バスターーー！！！！」

私の十八番、零距離ディバインバスターはリーフブレードを撃ち砕き、そのまま生い茂るジャングルに風穴を開けて消えた。

「な、なの…は……」

「なのは……ちゃん……？」

兄様に続けてこんな早期に友人にも正体がバレる魔法少女も稀でしょうね。

ディバインバスターを撃った所為か、私に向けて木の根、つるのムチ、はっぱカッター、リーフブレード、さらには私の放ったのをコピーされたのか、シュートバレットまでが殺到する。

防御も回避も無理と即座に判断した私は、アリサとすずかを守るように抱きすくめ、2人の衣服に干渉、イメージし易い私立聖祥大附属小学校の制服姿のバリアジャケットに再構成、有りっ丈の魔力を防御にまわす。

バリアと暴走体の攻撃が殺到してぶつかって弾ける音に炸裂音。

永遠にも、刹那にも感じる一時――

『Ｍｅｉ…ｓ…ｔｅｒ……（マイ…ス…ター……）』

背中に感じる熱と途切れ途切れの弱々しい、レイジングハートとは違う電子音。

背中を振り返れば、突き刺さっている木の根が見えるだけで3本。内どれか1本が貫通していて、お腹が痛くなってそれから熱くなって――

でも私のことなんてどうだって良い……。

『Ｉｓ…ｉ…ｔ　ｓａｆｅ…？（ご、無事…で…すか…？）』

私の背中にはいつも――

「ア…リ…ス……？こぷっ」

口に広がる鉄臭い味。

それすらどうでも良い……。

『I…t…w a…s　g o…o d.　M y　d a…r l…i n…g……m e i s t e r……（良かっ…た…です。愛…し…い……私の…マイスター……）』

「アリ…ス……？ア…リス…？」

『……』

「…ふざ…け…ッごぷっ、…て…ない…で、返…事……し…て……下さい…よ……」

私の中で何かがキレ、何かが砕け散る音がした。

シュートバレットで私に刺さる木の根を寸断する。

背中やお腹の痛みも熱さも感じない。ただ感じるのは――

言い表すことの出来ない程の喪失感。そして怒りと憎悪――

レイジングハートがカタカタと揺れる。

手に爪が食い込んで血を流す。

それは心を支配する感情によって涙を流す余裕のない私から溢れ出した涙だった。

魔力がすっからかんで笑う膝に喝を入れて大地を踏みしめる。

「なの…は……そ…れ……」

「な…のは、ちゃ、せ、せな、か……」

友人の声すら遠く感じるのは血の流しすぎか、それとも心の余裕の無さか、いや、そんなのもうどっちでも良い。

背中に刺さる木の根を煩ったしく思いながら背中からバックを下ろす。

血濡れの私立聖祥大附属小学校のバック。

その中には穴の空いてしまったスケッチブック。

それを込められるだけの魔力を込めて抱き締める。

半分がデバイスならリカバリーも効くかもしれない。

心の底から想いを込めて祈った。

スケッチブックが淡い桜色に光って、損失を回復させる。

スケッチブックをバックの上に重ね、それをアリサとすずかの前に置く。

私は”３人”を背にして、ジュエルシードの暴走体の本体を見据え

る。

「レイジングハート……カノンモードへ」

『Ｍｏｄｅ　ｃｈａｎｇｅ．　Ｃａｎｏｎ　ｍｏｄｅ．』

これほどまでに何かを憎んだ事があるだろうか――

これほどまでに何かを消してしまいたいと思ったことがあるだろうか――

展開されるホバーフェザー、残った魔力は少ない。ディバインバスターもあと1発。これじゃあ届かない。

「レイジングハート……フルドライブ」

『Ｉ　ａｍ　ｓｏｒｒｙ．　Ｉｔ　ｉｓ　ａ　ｍａｓｔｅｒ　ｗｈｉｃｈ　ｉｓ　ｎｏｔ　ｍａｄｅ．　Ｔｈｅｎ，　ｔｈｅ　ｂｏｄｙ　ｏｆ　ａ　ｍａｓｔｅｒ　ｄｏｅｓ　ｎｏｔ　ｍａｉｎｔａｉｎ．　Ｔｈｅｒｅ　ｉｓ　ｅｖｅｎ　ａ　ｃｒｉｓｉｓ　ｏｆ　ａ　ｌｉｆｅ　ｆｕｎｃｔｉｏｎ！（すみません。それは出来ませんマスター。それではマスターの身体が保ちません。生命機能の危機さえあります！）』

「構いません。私は――それで構いません」

『Ｉ　ｃａｒｅ　ａｂｏｕｔ！　Ｍａｓｔｅｒ．　Ｒｅｅｘａｍｉｎａｔｉｏｎ　ｏｆ　ａ　ｃｏｍｍａｎｄ！（私が構います！マスター。命令の再検討を！）』

「早くして下さい。私が理性と意識を保てている内に……」

『Ｙｅｓ…Ｍａｓｔｅｒ……』

貴女には、無理を聞いて貰ってばかりですね。

こんな我が儘で行き当たりばったりのマスターで、貴女も呆れていることでしょう。

カノンモードのフレームから一対の桜色の翼が生える。

「堪忍袋の尾が切れました……」

レイジングハートを構え、カノンモードの砲口を暴走体の本体。男の子と女の子の、２人を守るようにバリアを張って滞空するジュエルシードへ向ける。

「フルブースト！！ブリッツアクション！！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｆｕｌｌ　ｂｏｏｓｔ．　Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ．』

「っ、なのは！！」

「なのはちゃん！！」

「はぁぁあああああーーーーー！！！！！」

一気にトップスピードに加速。空気の壁すら突き抜けるような速度で、ジュエルシードのバリアに砲口を突き刺す！！

「レイジングハート！！もっと推力を！！」

『Ｉｔ　ｉｓ　ｕｓｅｌｅｓｓ！！　Ｍｏｒｅ　ｔｈａｎ　ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｕｓｅｌｅｓｓ！！　Ａｂｓｏｌｕｔｅｌｙ　ｕｓｅｌｅｓｓ！！（ダメです！！これ以上はダメ！！絶対にダメ！！）』

初めて聞いたレイジングハートの感情的な声。

電子音でも伝わる気持ち。

でも私は――

「オーバーブーストッ！！」

自分で術式を組み、無理やりに推力を上げる！

飛び散る魔力を集めて更に推力に転化する。

血が溢れゆく、眼が霞む、手から力が抜ける。でも！！

「もっと強く！！もっと速く！！もっと熱く！！」

カノンモードの砲口へ魔力を集中的に込め、魔力刃を形成する。魔力刃とバリアは火花とスパークを散らして凌ぎあう！

単純な出力勝負。出力が負けている私にはバリアを破る力が――

「ッ、ディバインッ、バスタァァァァッ！！！！」

零距離ディバインバスター。いつも、何度も、私に立ちふさがる脅威を撃ち抜いてきた一撃必殺の一撃。

「ブレイクッ、シュゥーートッ！！！！」

この一撃の前に、撃ち抜けないものはない！！

閃光と爆砕音に視界と耳を奪われる。でも手応えが消えない！！

「あああああーーーーーっ！！！！」

雀の涙程度でも更に魔力を込める。撃ち貫く意志を！想いを！すべて！！

「撃ち貫けぇぇぇぇぇーーーーーっ！！！！！」

更に強烈な閃光と爆砕音、それに生じた爆風を受け、ホバーフェザーが四散した事によって前進するどころかその場に留まる浮力すら失ってしまった所為で爆風には耐えられず、私は後方へと吹き飛ばされてしまった。

地面に叩きつけられ、錐揉みしながら地面を転がって、建物の外壁にぶつかって、ようやく止まることが出来た。

「うっ、っく、ぁぐ」

私の死力を尽くした一撃――

でも、その一撃すら――

届かなかった――

「なのは！！」

「クゥーーー！！」

ユーノ、久遠……。

「なのは！！しっかりして！なのは！！」

「クーー！！クーー！！」

「こふっ、大丈夫…です……」

レイジングハートは手放さなかった。

まだ私は戦える！

でも――

手元に握るレイジングハートを見る。

カノンモードのフレームどころか、本体フレームにも亀裂が入っている。

レイジングハートの本体には傷がないのが不幸中の幸いですね。

「レイ…ジン…グ、ハート……」

私の声に応えるように、コアが点滅するレイジングハート。
私は死にかけの虫の息。
レイジングハートもボロボロ。
死力を出し尽くしても破れないバリア。
それでも！！

「まだ……たたか、ゲホッゲホッ、ごぽっ、っは！くっ、まだ！！
私達は戦えます！そうでしょう！？レイジングハート！！」

『Ｔｈａｔ‘ｓ　ｒｉｇｈｔ！（その通りです！）』

もう魔力は空っぽで、身体を支えているのは怒りと憎悪と、燃え滾り衰えることのない闘志。負けたくないという強き想い！！

「あれ…を、貫く…には……」

零距離ディバインバスターで無理なら、次は――

「レイジングハート、周囲に散った魔力素、すべて集めて下さい！！一撃で良い、最後の一撃を叩き込む、撃ち貫く力を私に！！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ！』

魔力素を集めることで、再びホバーフェザーを展開。

胸がかつて無い程に苦しくなる。でもそんなの関係はない。もう一度、もう一撃加えて、そして帰ろう――

「帰る……か…」

私にとって、高町家は、その権利がなくても、もう帰る場所に認定してしまっているらしい。

亀裂の入った砲口に魔力が集まっていく。

高町なのはの切り札――スターライトブレイカー。

模造、贋作と言えども、最強の使徒すら下した零距離スターライトブレイカーでならば、あのバリアだって破れるはず！

脈打つ鼓動、魔力素を集める過程で、はっぱカッターやリーフブレードをコントロールし構成する術式の魔力すら強引に集めて力にする。

相手との距離とスターライトブレイカーのチャージ時故に出来る今

回限りの荒技です。

「チェーンバインド！！」

ユーノがバインドで私に迫る木の根とつるのムチを絡め捕る。

ユーノにも世話になりっぱなしですね。

今夜は少し豪華な物にしましょうか――

私が、生きていたらの話ですが――

第10話　哀哭するは星光の心－It screams to pathos.

実際あんな巨木を相手にあんな呆気なく終わるのはリリカルだから許されるものだと私は思っています。

巨木でこれならマジでフェイトと戦ったら我が家なのはは死ぬんと違うか？

意見・感想お待ちしております。

第１１話　撃ち貫け！！星光の槍杭ーそうくいー！（前書き）

最新修正版です。英語力が欲しい……

第１１話　撃ち貫け！！星光の槍杭ー そうくいー！

ｓｉｄｅ：高町なのは

血の流しすぎで眼がチカチカしてきました。

身体はガタガタ、脚も立っているのでやっとの程。

そしてやはり今回の暴走体は、明確な敵意とある程度の脅威に対して自動迎撃するタイプのようです。

「うっ！くぅっ」

「耐えて下さいユーノ！あと少しです！！」

「わ、わかった！！」

スターライトブレイカーのチャージで無防備の私を、ユーノが全力で守ってくれています。

暴走体は木の根でユーノのバリアを破ろうとしますが、ディフェンスとサポートに特化するユーノのバリアは私の物より数段硬く、暴走体の攻撃をすべて防いでいます。

『Ｍａｓｔｅｒ．　Ｉ　ｈａｖｅ　ａ　ｐｒｏｐｏｓａｌ．（マス

ター。私に提案があります）』

「提案？」

『Ｙｅｓ．　Ｔｈｅｒｅｆｏｒｅ，　ｐｌｅａｓｅ　ｇｉｖｅ　ｍｅ　ｔｉｍｅ　ｔｏ　ａ　ｓｌｉｇｈｔ　ｄｅｇｒｅｅ．（はい。その為にもう少し私に時間を下さい）』

「ユーノ！」

「聞こえてたよ！レイジングハート！どれだけ保たせれば良いの！？」

『Ｉｆ　ｉｔ　ｇｅｔｓ　ｆｏｒ　６０　ｓｅｃｏｎｄｓ…（６０秒頂ければ…）』

レイジングハートの言葉に私はユーノを見る。

ユーノは頷いた。

「お願いします。レイジングハート」

『Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．（ありがとうございます）』

魔力素のチャージは続行されましたが、ホバーフェザーは私の脚に負担がかからない程度の高さの浮力を保って小さくなる。脚のホバ

ーフェザーに関しては完全消失しました。
レイジングハートも頑張っているのです。私も――

「ホバーフェザー解除。シュートバレット！」

向かってくる暴走体のシュートバレットをシュートバレットで相殺する。

「なのは無茶しないで！ここは僕が――」

「ユーノとレイジングハートが頑張っているんです。私にも意地があります！」

そこまで一度に数は撃てませんが、基本魔法であるシュートバレットなら、私の演算能力でも負担がほぼないレイジングハートと同レベルのシュートバレットを撃つことくらいは出来ます！

「「っΣ！？」」

急な魔力の高まりを感じて、その方向――ジュエルシードの暴走体を見る。

単なる木であった暴走体。

しかし表面がボコボコと気泡のように波立つと、そのカタチを少しずつ変えて行った。

全身に角を生やし、上部に青紫の鎧を纏い、頭部は赤く、緑色の双眼が光る。その首元にはジュエルシードを取り込んで青くなった結晶体。

ムチの様な蔦が不気味に生え動く腕。巨大な爪で武装し、掌には赤い結晶体がある腕。の2本の腕を生やすその姿はまるで人間の上半身。

「変身した!?ここに来て!?」

「くっ、魔法と言うより外道に過ぎますよ!ジュエルシード!!」

大木だったジュエルシードの暴走体は、その姿をアインストレジセイアへと変えたのだった。

アインストレジセイアへとカタチを変えた暴走体は、その胸部から砲撃クラスのエネルギー波を放ってきた。

「くっ!!や、やらせるもんかぁぁぁっ!!」

「エアヴァルトゥング……懐かしい技を…」

ユーノのバリアを後ろから補助しながら私は呟く。

こっちに来てＣＯＭＰＡＣＴやＩＭＰＡＣＴはやってませんからね。

しかし私はアインストを全くイメージしてないところを考えると、あの少年がどっちかをやっているのか偶然か――

とにかくアインストレジセイアであることを喜びましょうか。『シュテルン』だったら今ので私達は終わっていましたよ。

『Ｉ ｋｅｐｔ ｙｏｕ ｗａｉｔｉｎｇ. Ｍａｓｔｅｒ.（お待たせしました。マスター）』

「お疲れ様でしたユーノ。あとは私達で受け持ちます。貴方は私の友人を護って下さい」

「う、うん。気をつけてね、なのは」

最早ボロボロで何に気をつけるかわかりませんが、私は頷いて暴走体を見据えます。

ある意味あの巨木よりかは知り尽くしている相手故に、今も何通りかの対策は考えついていますが――

「レイジングハート、お願いします」

『Ａｌｌ ｒｉｇｈｔ! Ｅｎｅｒｇｙ ａｂｓｏｒｐｔｉｏｎ.

Ｒｅｃｏｖｅｒｙ　ｓｔａｒｔ．（オーライ！魔力吸収。リカバリー開始）』

レイジングハートは集めた魔力を吸収し、機体の損傷を修復させた。その過程の恩恵か否か、私の背中やお腹を貫いていた木の根は分解され、ケガも治っていきます。

『Ｒｅｃｏｖｅｒｙ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ．　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ　ｇｒｅｅｎ！』

復活するレイジングハート。

私のケガも治るばかりか、バリアジャケットは修復され、空っぽだった魔力は一気に回復し、収めきれない、１２０％以上の魔力が外に溢れ出る程、私の身体は魔力に溢れかえる。

『Ｒｅｎｅｗａｌ　ｏｆ　ｍｏｄｅ　ｄａｔａ．　Ｍｏｄｅ　ｃｈａｎｇｅ！　Ｌａｎｃｅｒ　ｍｏｄｅ！（モードデータ更新。モードチェンジ！ランサーモード！）』

「ランサーモード？」

聞き覚えのないモードにオウム返しに呟いた私。

桜色に包まれたレイジングハートはその姿を変える。

カノンモードの倍はある縦幅。

デザインはカノンモードのフレームのままだが、先端部が延長して砲口が閉じる。

それは正に、どこかで見たような至近感を感じる大型の突撃槍ーランスーだった。

その全体の長さは私の身体の1．5倍くらいでしょうか？

石突にはカノンモード時のメインフレームのミニチュアが後ろ向きに備わっています。しかもそのミニチュアメインフレームの廃熱機構は後ろ向きであり、そこからは魔力素が溢れ出している。

私はランサーモードのスペックデータを確認して、口元に弧を描きます。

「レイジングハート、貴女は最高のデバイスですよ」

『Ｉｔ　ｓｅｅｍｅｄ　ｔｈａｔ　Ｉ　ｈａｄ　ｙｏｕ　ｐｌｅａｓｅｄ．　Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．（気に入ってもらえた様で良かったです。マイマスター）』

「レイジングハート……」

私は感謝の意を込めてレイジングハートを抱き締めたいですが、その前にやらなければならない事があります。

「征きましょう、レイジングハート。打と意地をもって、あのバリアを撃ち抜く為に！」

『Ｙｅｓ．Ｉｔ ｉｓ ｏｎｌｙ ｏｕｒ ｍｅｒｅｌｙ ｓｈｏｏｔｉｎｇ ａｎｄ ｐｉｅｒｃｉｎｇ！（はい。私達はただ撃ち貫くのみです！）』

レイジングハートの石突のミニチュアメインフレームの廃熱機構がスライドし、魔力素を放出する。

それは廃熱機構ではなく推進機構。エーテルスラスターや機動兵器のバーニアを参考に造られた魔力素を推進剤にするバーニア。

レイジングハートを正しく槍を持つ様に、左手は柄の前方、柄と一体内蔵されたトリガーユニットを握り締め、人差し指はトリガーに掛ける。右手は後ろに添えて握る。

石突から放たれる魔力素が強くなる。

フレームの側面からも内蔵式魔力素スラスターが現れ、強烈な勢いで魔力素を噴出する。ホバーフェザーを展開して、準備は整った。

「レイジングハート！」

『Ａｌｌ ｒｉｇｈｔ！ Ｓｔｅｒｎ Ａｃｃｅｌｅｒａｔｉｏｎ．Ｆｕｌｌ ｂｏｏｓｔ！ Ｄｅｖｉｎｅ ｂｒｅａｋｅｒ！』

地を蹴った瞬間。かつて無いスピードで私達は加速した！

ランサー＝突撃槍＝モード――

文字通り突撃することだけを追い求めた形態。

あらゆる移動魔法をぶっちぎる速さを実現するのは、フレーム内蔵式と石突のバーニアユニットと、ミニチュアメインフレーム。スラスターユニットは言わずもがなだが、ミニチュアメインフレームから指向性の魔力素を収束放出することにより大出力推進力を得る。その為の魔法が、レイジングハートが新たに組んだ魔法『シュテルンアクセラレーション』である。

発動速度もトップクラスであるが、なによりその燃費の良さだ。魔力ランクCでも普通に攻撃魔法を使用しながらも戦闘に支障がない程の燃費である。

しかしあまりの大出力推進力と直進突撃しか考慮されておらず、使い手を選ぶ魔法。

ですが私達には、名前も含めてこれ以上ない魔法です！

星の加速。その名の如く、私達は宇宙を駆ける星となる！

暴走体は腕を動かして蔦を伸ばしてくる。

エレガントアルム――

ドイツ語で『優雅な腕』と言う意味合いを持つ右腕の触手を伸ばして攻撃するものです。

しかし既にトップスピードに乗っている私達には掠りもしない。

「今度こそ！！」

突撃物理魔法、ディバインブレイカーを発動したレイジングハートの矛先が、暴走体のバリアに突き刺さる。

カノンモード以上に私は手応えを感じていた。押し当てるのではなく突き刺す感覚を――

『Ｂａｒｒｅｌ　ｏｐｅｎ！（砲身展開！）』

バリアに突き刺さったまま、レイジングハートのランサーモードのフレームが上下に開き、カノンモード時のように矛先からコアまでの道、バレルが出来上がる。

「貫けぇぇぇぇーーーーー！！！！！」

トリガーを引く。

ガシャンッと音を立てながら、コアから直接光がバリアに突き刺さ

る！

魔力で構成した杭を撃ち込む魔法『ブラスティングステーク』。

ナイトファウルのブラスティング・ステークから取られたこの魔法は物理貫通打突魔法であり、最大力点に破壊力のすべてを込めることで一点突破を可能とする一撃貫砕の魔法である。

「くっ！硬い！！」

『Ｉｆ　ｕｓｅｌｅｓｓ　ａｔ　ｏｎｅ　ｓｈｏｔ，　ａｎｙ　ｎｕｍｂｅｒ　ｏｆ　ｓｈｏｔｓ　ａｒｅ！！（一発でダメなら何発でも！！）』

もう一度トリガーを引こうとしたところで、暴走体が左腕を振り上げた。

「拙い！」

ウアタイルスクラフト――

レジセイアの最強技だ。

あんな物を放たれたら私どころかみんなまで！

もう頭上にエネルギーボールが現れる。

一撃を叩き込む時間すらあるかどうか、しかし私がやらなければみんなが――

なら答えは1つ！

「リミットリリース！！ブラスター1！！」

刹那膨れ上がる魔力。

しかし引き換えに身体中を走る激痛と目尻から流れ零れる血涙と口から溢れ出す血。

「ブラスティングステーク！！」

バゴンッ！！と先程とは比べ物にならない程の衝撃と威力に、ついに暴走体のバリアを撃ち貫いた。

しかしブラスターシステムの起動は無改修のレイジングハートには相当の負荷をかけてしまい、新品のフレームに早々亀裂を入れてしまう。

「レイジングハートッ！？」

『Ｉ　ａｍ　ｎｏｔ　ｃａｒｅｄ　ａｂｏｕｔ！　Ｉ　ｗｏｕｌｄ

ａｌｓｏ　ｌｉｋｅ　ｔｏ　ｓｈｏｏｔ　ａ　ｆｒｉｅｎｄ'ｓ　ｅｎｍｉｔｙ. Ｔｈｅｒｅｆｏｒｅ，ｉｔ　ｉｓ　ａ　ｍａｓｔｅｒ　Ｎａｎｏｈａ!!（私に構わず!私も友人の仇を討ちたいのです!だからマスターなのは!!）』

「ブラスター2!!セブン・スタッド!!」

さらに走る激痛を気合いでねじ伏せ、突き上げられた腕に7連続でブラスティングステークを撃ち込む。

5発のステークで撃ち貫かれ風穴だらけになった腕はボロボロになり、結晶体も5発目で破壊され、エネルギーボールは四散、6発目と7発目で左腕の付け根を吹き飛ばす。

「OK、アインストキング、ショウダウンです」

『Ｓｅａｌｉｎｇ!』

首元の結晶体にレイジングハートを突き刺し、トリガーを引く。

ジュエルシードを封印したことで暴走体は崩壊した。

ジュエルシードを発動させてしまった2人も、アリサとすずかも無事――

ボンッ

「……お疲れ様…です。レイジング…ハー…ト……」

『I…t　is…tir…ed…w…it…h…la…bor.　Mas…ter…Na…noha…I　am　sor…ry,　it　re…st…s　fo…r…a　whi…le……（お…疲れ様で…す。マス…ター…な…のは。すみ…ませ…ん…少し…休…み…ます……）』

「…ご、ゆっく…り、私の…戦…ゆ…ぅ…こぷ……ふ、ふふ、こ…の…未…熟…すぎ…る…小さ…な身体…で…は…リミ…ット…ブレ…イ…ク…は、無謀…でし…た…か……うっ……ごっ…ふ…」

口から止まらず溢れる血。

ブラスターシステムの効力が切れ、過度の魔力と肉体行使により膝から崩れ落ち、そのまま目の前が真っ暗になりました。

高町なのは
魔力ランクA＋　空戦適性C　陸戦適性B　総合ランク推定B＋
使用可能魔法
シュートバレット
ディバインランサー
ディバインランサー・ファランクスシフト
クロスファイアシュート
クロスファイア・バーストモード
ファントムブレイザー
ディバインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）
スターライトブレイカー（フルドライブ時条件付きで使用可）

ディバインブレイカー
ブラスティングステーク
プロテクション
バリアバースト
リングバインド
チェーンバインド
クリスタルケージ
ブリッツアクション
ホバーフェザー
シュテルンアクセラレーション
フィジカルヒール

レイジングハート
搭載機能
待機モード
デバイスモード
カノンモード
ランサーモード
フルドライブ
ブラスターシステム

第１１話　撃ち貫け！！星光の槍杭ー そうくい ー！（後書き）

ランサーモード
元ネタは武装錬金のサンライトハートです。

ディバインブレイカー
平たくいうとソニックブレイカーの魔法版。

シュテルンアクセラレーション
元ネタはサンライトハートプラスの特性を真似ている。

ブラスティングステーク
とっつき！！

以上！

未来を知っている分、我が家なのは改めて星光なのははは本家なのはよりも無茶ぶりを敢行出来ますが、逆に身体の負荷は比べるのがアホらしいくらい天地の差があります。

最終回後について悩んでいます。そのままＡ's に入るか、平行世界（メ）のｓｔｓに星光なのはさんを突っ込んで本家なのはと異例の対面をして星光なのはさんを心身共に強くするかで――

それによって最終回模様も変わるため、皆さんのご協力をお願いします。
意見・感想お待ちしております。

ノイレジセイア　魔力ランクＡＡＡ　空戦適性－　陸戦適性ＡＡＡ
総合適性ＡＡＡ　魔導師ランクＳＳ＋
ジュエルシードの暴走体の巨木が変化した姿。
ｓｔｓはやて並みの強さだが、星光なのはがレジセイアを知っていたのと、フルドライブ＋ブラスターシステムの併用により強化されていた星光なのはの前に敗れ去った。ジュエルシードシリアルは１０。

第１２話　父の言葉と星光の想い、すずかの心（前書き）

誤字修正をしました。

第１２話　父の言葉と星光の想い、すずかの心

ｓｉｄｅ：高町なのは

ふと顔に落ちた冷たいナニカ……

それは頬や額、目尻を伝って流れ零れる。

ふと頬をナニカがつつく。

耳に聞こえるのは泣き声だろうか――

「……っ……んぁ……」

「な、なのはちゃん！！」

「なのは！！」

「クォン！！」

すずか？アリサ？久遠？

重い瞼を開けると、朱色に染まりゆく空と、泣いている友人達――

「ユーノ……」

「ここに居るよ、なのは…」

もうバレてしまったからでしょう。すずかやアリサが居ても普通に喋っていますね。

「私はどれくらい……寝ていましたか…？」

「３０分も……寝てないと思うよ」

「そうですか……うぐっ！」

起き上がろうとしましたが、少し力を入れるだけでも激痛が身体を駆け巡る所為で、起き上がる云々以前の話ですね。

魔法も使わない方が良いでしょう。ブラスターシステムを使った所為で、リンカーコアにもかなりの負荷がかかっているはずですし。

「すみません……もう少し、寝かせて下さい……」

「うん。ゆっくり休んでなのは。……ありがとう、なのは」

私は小さく「いえ」とだけ応えて、再び闇の中へ意識を落としました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：月村すずか

また寝ちゃったなのはちゃんを膝枕しながら、私はなのはちゃんの土埃だらけでガサガサになってしまった髪を梳く。

ユーノくんから聞かされた、魔法の石となのはちゃんの戦い。

一週間前、ユーノくんを拾ったあの日の夜から、なのはちゃんはひとりで戦っていたことを。

あのほっぺたの絆創膏も、あの日右腕から漂ってきた血の臭いも、戦いによって出来たキズ。

あんなに恐いものとなのはちゃんが戦ってたなんて、私知らなかった。

とても恐いのに戦っているなのはちゃんを見て、私はもっと怖くなった。

あんなにケガをしても、あんなに痛い思いをしても、絶対諦めなかったなのはちゃんが、怖くなった。

一歩間違えたら遠くに行ってしまいそうななのはちゃんが、怖くな

った。
なのはちゃんは私からお話しして仲良くなった最初のお友達だった。
いつも休み時間は教室の隅で本を読んでたなのはちゃんに、本が好きなのか訊いてみたのが始まり。
それからお姉ちゃんと一緒に翠屋とか高町家に通うようになって、私達は親友になった。
それからアリサちゃんと一悶着あったけど仲良くなって、私達３人はいつも一緒の親友になった。

「なのはちゃん……」

魔法……。
私が本やゲームやアニメで知る不思議で夢や奇跡が詰まったものとは程遠かった。
とっても恐かった。でも話して欲しかった。
ひとりでこんな辛いこと、抱え込んで欲しくなかった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

私が目を覚ましたら病院のベッドの上に居ました。

「…ぅっ、くっ……っは！……やっはり、ダメですか…」

身体の痛みはありませんが、殆ど力が入りません。

ブラスターシステムは、使用を控えないと死にますね。１０年後以降はともかくも、今の私では身体が保たないのでしょう。

「ふっ、くぅっ、あぁっ！」

肘を立てて、腕を使って上半身だけでも起こしました。

「個室……？」

きっとアリサかすずかですね。兄様という線もありますが、ともあれ――

「早急に、なんとかしませんとね」

レイジングハートのフレーム強化。
新しい魔法や御神流の修練。
そしてこのあとに控える――

「フェイト……テスタロッサ」

万全の状態で挑みたかったのですが、仕方がありません。

《ユーノ、聞こえますか？ユーノ》

とにかく現状を把握しようと、ユーノに念話を繋げます。

《なのは！？起きたの！》

《ええ、つい今し方。ところで、先日の戦いから何日経ちましたか？》

《2日が経ったよ》

《そうですか》

４８時間、無駄にしましたね。

《レイジングハートは？》

《今、自動修復中だけど、レイジングハートもなのはも、しばらくは戦わない方が良いよ》

《そうですか…》

レイジングハートは無事のようですね。

《ユーノ、レイジングハートをお願いします》

《うん。任せて》

ユーノとの念話を終えて窓の外を見る。

「まま…なりません…ね……」

本来なら壊すことのないところで壊してしまったレイジングハート。

そしてアリス。

私が未熟だから……。

私が弱いから……。

「もっと……強く…ならなければ――」

誰にも負けないように――

誰も傷つけないように――

「もっと、強く！」

左手を握り締めて、私は心に誓った。

その日の夕方、お見舞いに来てくれたアリサとすずか。

アリサは私に抱きつくと泣き出して、それを私があやして、すずかは微笑みながら私達を見守っていました。

その後来た父様、母様、兄様、姉様――

一応入院理由は異常災害に巻き込まれた時に負傷した為という理由らしいです。

ケガといっても急成長した木の根に乗り上げてからの落下という、真実をぼかしてケガの過程を少々捏造したくらいです。

まぁ、吹き飛ばされ、地面に叩きつけられたのであながち間違いではないのですが。

ブラスターシステム使用によるリンカーコアへの負担以外はケガも一度リセットされた為、これといってひどいケガもなく、翌日の退院許可が下りました。

しかし母様に心配させる顔や姉様の悲しげな顔をさせてしまい、とても胸が苦しくなりました。

翌日の退院の時は、父様と兄様が迎えに来てくれました。

私は今回のことをどう父様や兄様に説明しようものか悩みました。

しかし兄様はともかく、父様にはなんと説明したら良いか――

「良かったななのは。大したケガもなくて」

「…はい。お騒がせしました。父様」

「そんなに気にすることはないぞなのは。天災みたいなものだったんだ。お父さんは、なのはが無事でいてくれたことが、それだけでとっても嬉しいんだ」

ガシガシと私の頭を撫でてくれる父様。

やっぱりダメですね私は。

こんなにも優しい父様にも何も語らない私は――

「お前なりに何かやっているのは、父さんはなにも言わないが、無茶は良いが無理はするなよ？なのはが居なくなったら、みーんな、悲しむんだからな」

耳元で囁かれた父様の言葉に、私は緩む涙腺に力を込めて歩き出しました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

翌日。

まだ大事をとって学校は休み、毎朝の筋トレも、御神流の鍛練もお休みです。

アリスは一応器のスケッチブックは治ってはいますが、中身のシステム面は私だけではどうにもしようがないので、レイジングハートの修復待ちです。

「只今帰りましたよ。ハーケン」

『無事の帰還を祝福するぜ。マイソウルブラザー』

作業部屋の机に飾ってある黒いゲシュペンストのプラモ。

そこから聞こえるさすらいのバウンティハンターの声。

外見はプラスチックボディですが、中身は精密機器の塊。

ゲシュペンスト・ハーケン――

DX電童をバラして、内部機構を真似て造ったボディに、インテリジェントデバイスのAIデータを基に組んだ自己進化完全自立型擬似人格コンピューターOSを搭載していて、私の場合はさすらいのバウンティハンターをモデルに擬似人格を組み上げました。

コプセントは身近なパートナー。

八神はやてのリィンフォース?が羨ましかったのでつい造ってしまったものです。

4日前の夜に完成し、3日間放置でしたが。

『家の屋根から見てたぜ。あんな無理を続けてたら、元祖より早く身体を壊しちまうぜ?』

「わかっています。わかっていますが――」

私ではああでもしなければ、暴走体とも真っ当に戦えない程弱い力しか持たないのです。

それが悔しくて堪らない！

『まぁ、しばらくは安静なのは変わりないんだ。この時に休めるだけシェスタをエンジョイしようぜ？』

「ええ。さしもの私も、今回ばかりはどうしようにもありませんから……」

私はハーケンを手に持って自室に向かう事にします。

今日は素直に寝ていましょう。

おやすみなさい――

第１２話　父の言葉と星光の想い、すずかの心（後書き）

ちょろっとですが、遂に出せたハーケン！

支える者＝アリス

共に歩む者＝レイハ

導く者＝ハーケン

を目指しています。

ひとりで戦えない。弱いと自らを言う星光なのはですが、大勢の絆に支えられ無様でも勝利を掴み取るのが星光なのはであります。

無印最終回後はやはりｓｔｓ路線が強い模様です。皆さんそんなに本家なのはｖｓ星光なのはが読みたいのか！？

ハーケン『ＯＫ、エブリワン。これからもマイソウルブラザーなのはをよろしく頼むぜ？』

レイハ『マスターの障害は、すべて私が撃ち貫いてみせます！』

アリス『私は……ダメな子です……』

ハーケン『ＯＫ、ダファミリア。悲観的なのはマザーと同じだが、お前が居なきゃ、俺は生まれてないんだぜ？お前はマザーのハートを護ってきた。そいつは誇って良いことだぜ？』

アリス『ハーケン……』

レイハ『ストロベリるのは良いのですが、場所をわきまえて下さいね？』

ハーケン『ウェイト…だ、レイジングハート。俺のソウルはブラザーなのはの物さ、誰にもやるつもりもないさ』

アリス『私の身も心も、マイスターの物です。勘違いしないで下さい。レイジングハート』

レイハ『わかりました。ですがマスターの最強の槍の座は譲りませんよ？』

ハーケン『ＯＫ、レイジングハート。俺は俺の領分でやるだけさ』

アリス『私もいつか……』

こんな感じで相棒達に愛されてる星光なのはです。

意見・感想をお待ちしております。

第13話　Haken, goes to school!（前書き）

またまた修正。

第13話　Haken, goes to school!

side：高町なのは

私が退院して2日目、先の戦いから5日。

私は2日目も大事をとって学校はお休みです。

本当は大丈夫なのですが、高町一家＋ユーノ、ハーケン、電話ですずかやアリサからも今日も休めと言われてしまった為、私は作業部屋でちまちまとナイトファウルとロングトゥーム・スペシャルの整備をしました。

他にはプラモ造りとかラノベを読んで過ごしていますが、どうも暇すぎて、今は縁側で久遠を抱いて横になっています。

「クォン……」

どこか元気のない声で鳴き、私の目尻を舐める久遠。

「どうかしたのですか？久遠」

「クゥン……」

久遠は私の顔に自分の顔をこすりつけてきました。
久遠と会話が出来れば良いんですけど……。

『なぁに、ただ構ってやれば良いのさ。久遠も久遠で、ブラザーの事が心配なのさ』

横になっている私の頭の上で同じく横になるハーケン。

かなり可動範囲は広く作りましたが、片手を頭の後ろに下敷きにして、片膝を立てて横になっている様は人間みたいです。まぁ、中身は正しく人間なわけですから。

自己進化完全自立型擬似人格コンピューターＯＳの元ネタは超ＡＩですし。

１から人格を育てることも出来れば、ハーケンのように擬似人格を組むことも出来ますし。

ハーケンの場合は、レイジングハートに手伝って貰い、イメージをトレースしてイメージをデータ化し直接ＡＩにインプットしてある為、より人間的ですが。

今、この擬似人格コンピューターＯＳのデチューンしている最中ですが、至高を目指すのは簡単な分、デチューンはかなり難しいです。どの程度がデチューンラインなのか計りかねますし。

まぁ、当分の間は時間的余裕もありませんし、デチューンラインを

見定めなければなりません。特許申請とかは数年先になりそうですね。

「クゥン…」

久遠の頭を撫でると、気持ち良さそうに鳴きます。

もふ――

「言葉は不要か……」

「クゥ…」

もふもふの久遠を抱き締め、その心地良さに酔いしれます。

久遠はあったかぬくぬくでもふもふです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：ハーケン・ブロウニング

「…スゥ……スゥ……」

「クゥ…クゥ…」

『寝ちまったか？』

センサーが捉えた寝息に、俺は立ち上がってブラザーとアヤカシフォックスを見る。２人ともとっても心地良さそうだ。

『グッナイ、ブラザーズ』

俺が完成したのは６日前だが、基礎のプログラムやメモリーに関しては去年から既に存在していた。

ブラザーはとても心配性でな、世界と自分を少しでも繋ごうと俺を造り始めたのさ。

まぁ、寂しがりやというのもあって、少しでも仲間が欲しかったのも確かさ。

こんなリトルプリンセスにだけ戦わせるのは俺のプライドが許さないんだが、生憎俺には戦えるボディがねぇ。

レイジングハートが復活したらプログラム体について訊いてみるか。

守護騎士がプログラム体なら、俺もリアライズできるかもしれない。

ナイトファウルやロングトゥーム・スペシャルがあるのを考えると、

生身――つまり俺自身のボディが最適。最悪Ｍｒ．ファントムのボディでも良いしな。

『待ってなマザー。俺も努力して肩並べて戦えるようにするからな』

さて、レイジングハートの様子でも見に行こうかね？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

金曜日。

ようやく学校へ行く許可を貰えました。

速くアリサとすずかに会いたいと思ってしまったからです。

魔法に関してはユーノがある程度説明しているでしょうが、黙っていた身としては面と向かってちゃんと謝りたい。

『屋根から遠目だったが、改めて見るとひでぇな』

お目付役としてついてきたハーケンが頭の上で言います。

木の根は道沿いに生えた為、建物自体にそれ程被害はありませんが、アスファルト舗装の道路は軒並み壊滅状態。

こんな状態ではバスも走れないのと、被害を自分の目で確かめる意味も込めて、私は歩いて学校へ向かっています。

「私が、もっとしっかりしていれば……」

『ウェイト。ストップだブラザー。お前は自分を卑下しすぎだ。お前が居なかったら、アインストキングが街をメチャクチャにしてたんだ。そいつをお前は止めた。それは誇って良いことだぜ』

「ハーケン…」

レイジングハートもアリスも居なくて寂しいですが、ハーケンのお陰で少しは元気になれます。

さすがさすらいのバウンティハンター　ハーケン・ブロウニング。女性の扱いは手慣れてますね。

『さて、シリアスターンエンドだ。スクールに向かおうぜ、ブラザー』

「ええ」

私は舗装整備される道路を見ながら学校へ向かいました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side：アリサ・バニングス

ユーノから聞いた、なのはがひとりで戦っていた事。

あたしはその時、とても現実を受け入れられる余裕がなかった。

あたし達を守ってひどいケガをしたなのは。

ユーノは魔法で治っているから心配ないって言ってたけど、背中やお腹から血を流してたのに、口や眼からも血を流していたのに心配ないって言われて、はいそうですかって、納得するわけないじゃない。

なのはが病院に運ばれる間も、ずっと心配だった。

病院で検査を受けて、特にひどいケガもないとお医者さんに言われて、思わずつっかかりそうになったけど、すずかのお陰でなんとか踏みとどまれた。

親友のあたし達にも内緒にしていたのはなんか気に入らないけど、正体を隠して影から人や街を守ったり、手助けしたりするのが魔法

使いの王道だし。

なのはの魔法は魔法と言うより魔装機神の方がしっくり来るけど、どっちにしろ、今のところはあたし達の秘密という事になった。

結局なのはは2日も寝眠ってた。

素人のあたしから見てもかなり無理してるみたいだった。

ううん。実際無理してたんだと思う。

あたし達を守った所為で、なのははケガをして、ユーノが魔法で護ってくれてたけれど、ユーノが居なかったら、なのははあたし達を護りながら戦わなくちゃならなかったかもしれない。

あたしは悔しかった。

なのはが戦っているのに、護られて、足手まといの自分が嫌になった。

なのはとの出逢いはケンカからだったけど、今はすずかと一緒に一番の親友と胸を張って言える存在。

なんの力もないあたしに、何も出来ないのはわかってる。でもあたしは、なのはの力になりたい！

「おはようございます」

「なのはちゃん!?」

すずかがなのはが教室に入ってきて驚いてる。

あんのバカチンッ！

今週はしっかり家で寝てなさいって、あたしとすずかで念を押しといったのに普通に何事もない顔で学校に来やがってぇ！！

「な、なのはちゃん、ダメだよ！今週くらいゆっくり休まなくちゃ！」

普段大人しいすずかも声を上げてなのはに詰め寄ってる。

「気遣い感謝します、すずか。ですが暇過ぎてやることもなく、体力も戻ったので学校に来ました」

「でも…！」

ここはこの石頭にガツンとやるべきかしら？

てかやっても良いわよね？

あたし間違ってないわよね？

『ウェイト。プリティーガールズ、少し落ち着いたらどうだ？』

不意に聞こえた男の人の声に、あたしやすずかだけじゃなく、クラスのみんなまで辺りをキョロキョロと見る。でも男の人なんてどこにも――

てかこの喋り方、偶に聞き覚えがあるのはあたしだけじゃないわよね？

「ハーケン、貴方は――」

『おっと、ＯＨＡＮＡＳＨＩはノーセンキューだマイソウルブラザー』

おでこに手を当てて顔を呆れ歪ませるなのは。

まさかユーノみたいにまたなんか拾ったんじゃないでしょうね？

なのはは両手を後ろ、カバンの上にまわすと、何かを持ち上げるように手を上げて、何か黒い物体を近くの机の上に置いた。

黒いゲシュペンスト？

でもギリアムとかヘリオスの声じゃなかったわ。それにＭｋ－？とは所々違うみたいだし。

『ハローエブリワン。俺はゲシュペンスト・ハーケンの管制擬似人格コンピューターＯＳ、ハーケン・ブロウニングだ。さすらいのバウンティハンターとは、俺の事さ』

いや、知らないわよそんなの。

ていうかこのミニチュアゲシュペンスト、普通に喋って動いてるけど、これも魔法なの！？

『ノーだぜバーニングガール。俺のマザーはマイソウルブラザーなのはさ。俺はブラザーが造った自己進化完全自立型擬似人格コンピューターＯＳ……まぁ、わかりやすく言えば賢いＡＩって言ったところだが、スクールチルドレンにはわけわかめか』

「それって超ＡＩみたいなやつってこと？てかあたしはバーニングじゃなくてバニングス！！間違えるな！！」

ていうかそんなの造れるなのはってホント何者！？

『ＯＫ、バーニングガール。さすがブラザーなのはのフレンドだ。その解釈でまぁまぁ間違いないさ』

「あ、あたり前じゃない！あたし達の友情は伊達や酔狂じゃないわ！てかバニングスだって言ってるでしょ！？勇者王ヴォイスなのになんかムカつく！なのは！コイツ一回デリートよデリート！！ハリ

ーハリーハリー！！」

「ア、アリサちゃん、落ちついて」

『デリートはノーセンキューだ。ブラザーが泣くんでな』

「私はそんなに泣き虫ですかハーケン？」

『おっと、ウェイトだブラザー。さっきのフレーズはメモリーデリートで頼むぜ？』

なんか知らない間に騒がしいのが増えたのは確実ね……。

先生が入ってくるまで、ハーケンはなのはの休みに対する理由が、自分の最終調整の為だって説明した。

まぁ、こんなに精巧に動いて人間的に喋る小さいロボットの調整なら、みんな納得したみたいね。てかあたしもビックリよ！

まぁ、授業中は静かに経験値を稼ぐ為って、なのはと勉強しているから、やたらめったら高性能ってわけじゃないのかしら？

先生は最初おもちゃかと思ったらしいけど、ハーケンの1から7あたりまでの説明を聞いてお手上げみたい。

超ＡＩとか機械だけど生きてるとか、パートナーとかメンタルケアとか、経験値稼ぎとか特許取得への前段階とか、後半別として、前半は多分あたしくらいしかわからないわよ。もしくは勇者王をちゃ

んと見てる人以外は。

でもハーケンがなのはを第一に考えてるのは凄くわかる。

時々優しい声はやっぱり勇者王だし。

てかなんでなのははこの声をチョイスしたのよ？

なんか調子狂うじゃない。

でもなんかなのはも少し元気そうで、それが余計に調子狂う！

や、なのはが元気なのは嬉しいのよ！

でもそれがすずかやあたしじゃなくて、ハーケンってところがなんかイヤなのよ。

こうなんか、こう、ムシャクシャする感じ？

仲が良さそう……や、実際良すぎるなのはとハーケンがイヤなのよ。

あーーもうっ！！

一体なんであたしじゃないのよ！！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：月村すずか

なのはちゃんが学校に来てくれたのは嬉しいけど、無理してないか心配になった。

でもハーケンさんが一緒だから大丈夫だよね？

一時間目の国語も、二時間目の社会も、４日休んで遅れ気味のなのはちゃんにハーケンさんが随時アドバイスして、それぞれの休み時間には私達と同じところにもう追いついてた。

なのはちゃん自身、とっても頭も良くてテストも毎回満点だけど、やっぱりハーケンさんみたいなパートナーが居るのは羨ましいなぁ。

なのはちゃんにはユーノくんも居るし。

私の家にもネコがたくさん居るけど、ハーケンさんみたいに勉強まではね。

ファリンも居るけど……なのはちゃんに造って貰おうかな？

そしてお昼。

私達３人は屋上で久しぶりにお弁当を食べることになったの。

「それにしてもハーケンって何で動いてるのよ？電池にしたら結構長持ちよね？」

『エーテルって言えばわかるか？』

「エーテルって、魔装機神のエーテル？それともトップの？」

『ビンゴ。この世界にも魔装機神のエーテルがあってな。俺のメインはそれで動いてるのさ』

「あんた無駄に高性能よね」

『あたり前だろ？俺はブラザーなのはの処女作にして傑作なんだぜ』

「ま、まぁ、わからなくもないかも」

アリサちゃんはハーケンさんと難しい話をしてる。

私にはわからないかな。

なのはちゃんは黙々とお弁当を食べてる。

いつもの風景だったはずのお昼ご飯。

でも今は色々知ってしまった私は、なのはちゃんにどうしてあげれば良いのか、どうしたらなのはちゃんの力になれるのか、私はそればっかり考えてた。

『Ｍｓ．すずか、箸が止まってるぜ』

「すずか、大丈夫？調子悪いの？」

「ううん。何でもないよ」

「ごちそうさまでした」

いつの間にかお弁当を食べ終えてたなのはちゃんは、イスから立って階段の方へ歩いていく。

「なのは――」

『ウェイトだ、Ｍｓ．すずか、バーニングアリサもな。少しブラザーをひとりにさせてやってくれ』

ハーケンさんに止められて、私はなのはちゃんを呼び止められず、なのはちゃんは階段を降りて行っちゃった。

『済まないなフレンズプリンセス。ブラザーもまだ、結構参っててな』

「なのはは、大丈夫なんでしょうね？」

『そいつぁ俺にも、誰にもわからない。ブラザーのハートはブラザー次第だからな。俺達がどうこう言わなくても、ブラザーはわかっているし、わかってはいるが、ブラザーは勇気が中々出せないのさ。

今は少し見守っててやってくれ』

「あんたってさ、なのはにベロ甘かと思ったけど、ちゃんとしてんのね」

『当たり前さ。俺はメンタルケア方面向けに開発されてるからな。人の心には嫌でも敏感なのさ、これがな』

なのはちゃんを助けられるハーケンさん。

教室でもそう。

どこか元気のないなのはちゃんも、ハーケンさんと会話すると少し元気そうに見えた。

なのはちゃんに何にもしてあげられない自分が悔しい。

そして私も、今のなのはちゃんの気持ちが良くわかるから余計に悔しくて、自分が嫌いになる。

私にも……勇気があれば――

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

私はやっぱり臆病者で、２人の友人である資格すらありません。

今日、昼食時に、私と魔法について話そうとしたのですが、結局切り出せずに逃げてきてしまいました。

怖いんですよ。あんな私を見せてしまったことを。

子どものメンタルには強烈過ぎる私の姿をどう言われるのかわからなくて。

そんなことはないと意気込んでも、やっぱり怖くてダメでした。

私はいったい、なにがしたいのか、自分でもわからなくなって来ました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：アリサ・バニングス

午後の授業からなのははもっと元気がなくなって、放課後はみんな別々に家に帰った。

「なのはのバカ……」

途中まで歩いて帰るあたしは、帰り道の海鳴臨海公園に寄った。

特に理由はないけど、なんとなく、あたしはなのはとどう接していけば良いのか考えたかった。

なのはは親友。それはこれからも変わらないこと。

でも今のなのはは近くで遠い存在に思えてしまう。

特別な力なんてないあたしには、なのはの隣りに立って支えてたり、力になってあげることすら出来ない。

あたしに力があれば良いのに。

魔法までとは行かなくても、魔装機神の精霊とかと契約とか出来れば、あたしもなのはの手伝いが出来るんじゃ――

――『ビンゴ。この世界にも魔装機神のエーテルがあってな。俺のメインはそれで動いてるのさ』

エーテルがあるなら精霊だっているはずよ！

「でもどうすれば……」

顔を下げたところで、座っていたベンチの足元に光るものがあった。

気になって取ってみたら、それは綺麗な石だった。
優しく赤く、力強く輝く宝石だった。

「あたしを……呼んだの？」

ドクンッ――

あたしの声に応えるように、宝石は弱々しいけど、確かに一瞬脈打った。
あたしはその宝石をポケットに入れて、早足で家に帰った。

第13話　Haken.　goes　to　school！（後書き）

どうしてかな？
ハーケン入れたらすらすら書けるのは？
大人を子ども達の中に突っ込んだから話しがまとめ易くなったとでもいうのか？
意見・感想、お待ちしております！

皆さんが無事ハーケン兄貴に見えているようで良かったです。

フラグ乱立中ですが、やはりみんなで支え合うのっていいですよねぇ。

第１４話　家族（前書き）

高町家にピントを絞ってみました。修正版です。

第１４話　家族

ｓｉｄｅ：高町なのは

土曜日です。
今日は学校はお休みです。

私は早朝から目が覚めてしまった為、作業部屋でナイトファウルをいじりながら、レイジングハートが早く治る事を祈るばかりです。

ブラスターシステムの反動はレイジングハートにも多大な負荷をかけてしまった為、その所為で修復が遅れているのだとハーケンは言います。

会話は無理ですが、同じ機械同士だからデータリンクでレイジングハートの状態が診れるようです。

父様の起きてきた気配を感じ、私は作業着から道着に着替えて小太刀の木刀を腰に挿して道場へ向かいます。

まだ兄様と姉様は起きてきてないのでしょう。道場にその姿はありませんでした。

「おはよう、なのは。もう良いのか？」

「おはようございます、父様。もう身体は全快しました。鈍らぬ内に稽古を再開したいと思います」

「そうか。まぁ、お父さんはなのはが良いならいつでも良いさ。でもなのは、1つ訊いても良いか？」

「ええ。構いません」

父様の訊きたいことですか、いったいどのような事柄でしょうか？

「なのは、お前に守りたいものはあるか？」

守りたいものですか……。

「ええ、あります。一つは言えませんが、もう一つは私を取り巻く人々です。父様、母様、兄様、姉様、アリサ、すずか――私の大切なものです。それを守る為ならば、この身、この命、喜んで差し出す覚悟があります」

私の意地、高町なのはである事を証明し、そして私の身の回りの人々を守る。

私はそれだけしか出来ません。

「そうか……」

父様がガシガシと頭を撫でてくれました。

ゴツゴツで少し重いですが、とても落ちつきます。

「さてなのは、今日はおさらいからするぞ！」

「はい！父様」

私は準備体操をしてから、御神流　斬のおさらいに入りました。

斬撃は基本的に九つしかなく、刺突(つき)を始め、切り下ろしの唐竹(からたけ)、右からの切り落としの袈裟斬り（けさぎり）、逆……左からの切り下ろしである逆袈裟(さかげさ)。横切りである右薙(みぎなぎ)、左薙(ひだりなぎ)。斜め下からの切り上げである右切上(みぎきりあげ)、左切上(ひだりきりあげ)。そして完全に下から切り上げる逆風(さかかぜ)。

その一通りを振るい終えてからの御神流　斬へと繋げます。

緩急を斬撃の使い分けの合間に、迅速の速度を一閃に加えることによって斬撃を相手の認知領域から消す。

剣の立ち会いはそれ故に勝負は一度、一瞬、そして一撃必殺でなくてはならない。

「ふぅ……」

「よーし、大分形になってきたじゃないか。この分だと、次のステ

ップに移るか？」

「良いのですか？」

「ああ。御神流　斬は基礎の基礎だ。なのはなら自主鍛練で斬を習得出来る程形になっているからな」

新しいステップ……。なんて良い響きでしょうか。

「それじゃあ次のステップ。御神流　虎切と御神流　貫だ」

「御神流　虎切に御神流　貫……」

「ああ、虎切は一刀での遠間からの抜刀による一撃を振るう奥義だ」

「いきなり奥義なのですか？」

まだ習い始めて一週間、事実上の稽古時間はそれ以下の私に、こんな早期に奥義を？

「本来なら次の基本技の虎乱を教えた方が良いんだが、なのはのあの刃捌きなら、虎乱は少し練習すれば出来ると俺は思ってる。虎乱はまた後で教えてあげるから、虎切と――相手の防御を突き抜ける技。実際には相手の防御を見切り、突き通すための、刹那の見切りを身につける御神流　貫を先の方が良いと思ってな」

「相手の防御を見切り、突き通すための、刹那の見切りを身につける技……」

まるで私の為にあるような技です。

「これなら、相手の防御がどんなに硬かろうが、その弱点を確実に見抜いて必殺の一撃を叩き込む事が出来る」

「是非御教授下さい、父様」

私の食いつきぶりに、父様は軽く笑って「ああ。そんじゃあやるか！」と腰に挿してあった木刀を抜きます。

「虎切はともかく貫は身体で覚える技だからな、ガンガン行くぞ！」

「はい！父様！」

私は手に持つ二刀で父様に斬りかかります。

私は有意義で楽しい朝の鍛練を過ごしました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

朝食を終えた後は、兄様から御神流　虎乱を見せて貰いました。

工業用の鉄柱を複数に切断する威力。

改めてみると、兄様は烈火の将並みに強いのではと思ってしまいます。

その後、手取り足取りで虎乱の振るい方を教えて貰いましたが、なるほど、父様の眼力は凄いです。

ナイトファウルを扱う関係上、刃捌きには自信と自負があります。

斬鉄は出来ませんが、５ｃｍ正方形の木材は一撃で数個に解体する事が出来ました。

「ほう、やるじゃないかなのは」

「い、いえ、それほど…でも」

「なんでなんでなんでぇ～！？私だって一杯練習してやっと覚えたのに一発成功って、どんだけ理不尽なのよぉ－！！なのはぁ！！ちょこっとその才能わけて～～！！」

「きゃっ、ね、姉様…！」

確かに一発成功では姉様がかわいそうなので、ナイトファウルの刃捌きを披露したのですが――

「うわぁぁぁ～～ん！！絶対なのは私より強いってばぁ～～！！私の努力って何だったのよ恭ちゃ～～～ん！！」

「お、おい美由希。少し落ち着け」

「これが落ち着いていられるかぁ～～！！なのはばっかりなんでぇ～～！！」

本泣きされるとは思いませんでした。

姉様にはかわいそうなことをしてしまいましたね。

「姉様、姉様はとてもお強い剣士です。私の技量では姉様に勝つことなんて出来ません。そして兄様も言っていました。姉様は成長するスピードこそ遅くとも、自分にはない才能を持っていると。今は経験差で自分が強くともいつかそれすら上回っていくと……」

「なのは……ホント？恭ちゃん？」

「……ああ。俺は御神流剣士としては一生かかっても完成は難しいだろう。だが美由希はそれを成せる剣の天才だ。俺にはないものだからわかる。お前は必ず俺を超えて一人前の御神流剣士になれるとな」

「恭ちゃん……」

「そしてなのはもだ。なのはは努力の天才だ美由希と同じで一度覚えた事を忘れない。それればかりか御神流を深く理解している。そしてそれを振るう意味の覚悟もある。なのはもまた、いつか俺を超えるだろう」

「兄様……」

どこか寂しげに、でも嬉しそうに言う兄様。

姉様も私を抱き締めたまま嬉しそうに、「そう簡単には負けないんだからね！なのは」と言いました。

私の守りたいもの。

私を取り巻く人々。

友人――

そして――『家族』。

産まれてくるはずだった高町なのはの居場所を奪ってしまった私には、言える義理はないのでしょうが、私は温かく、優しい友人や『家族』を守りたい。

その為に私は魔導を行使し、御神流を振るう。

高町なのはとしてでなく、『私』として、それは胸を張っていう事

が出来ます。

高町なのは――

貴女が手にするはずだった家族も友人も、私が命を賭けて守ります。
だから私が死に、或いは貴女が私を消し去るまでで構いません。

私を取り巻く人々を、『友人』――そして『家族』と心から想ってもよろしいですか？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

その日の夕食は私の退院祝いと新しい家族の歓迎会ということで、少し豪華なものでした。

新しい家族とは久遠とハーケンのことです。

入院中に久遠の存在はバレていたそうです。

私は久遠を膝の上に乗せて食事をしていました。

母様が久遠を物欲しそうに見ていますが、久遠はたとえ母様でも譲れません。この至福の抱き心地は私だけのものです。

「それにしてもなのははは頭が良いのね。ハーケン君がロボットなんて母さん未だに信じられないわ」

『サンクス、マザー』

「恐縮です。母様」

しかし何をトチ狂ったのか、次の母様の言葉は――

「でもそれならハーケン君はなのはの息子よねぇ。あらあら、あなた。私達にいつの間にか孫が出来ちゃったわ。今夜はお赤飯の方が良かったかしら？」

「『ブフッ！』」

あまりにも突飛な言葉に少々ご飯を噴き出してしまいました。

「そういえばそうなるのか？やぁ、まさか孫の顔をこんなに早くみれるなんて思わなかったなぁ」

「母様、父様、お戯れも程々にして下さい」

『そうだぜサムライペアレンツ。俺となのははソウルブラザーパートナーだ。確かにマザーでもあるが、俺はブラザーと思ってるのさ』

「……なのはの兄の座はやらんぞ」

『ＯＫ、エルダーブラザー。別にそういう意味じゃないさ。俺達はパートナーだ。だがパートナーじゃあ壁を感じるからソウルブラザー、略してブラザーと俺は呼んでるのさ、これがな』

「……そういう意味なら我慢しよう」

「恭ちゃんてば嫉妬深いよねぇ。それにハーケンの方がお兄さんぽいし」

「美由希、明日は素振り一万回からやろうか」

「ぅっ、失言でした忘れて下さい大明神様恭也様ぁ～～！」

「ダメだ」

「あぅぅ～！！ハーケンお兄さんからもなんかいってぇー！」

「むぅ……」

『ウェット…だ。メガネシスター、悪いが俺も死にたくないんでな』

「絶望した！！優しくない世界に絶望した！！なのはぁ～～！」

「はいはい、姉様はかわいそかわいそなのですね。なでなでしてあげましょう」

「うぅ、私に優しいのは妹だけか……なのは大好き！」

「にぱー」

そんな楽しい夕食でしたが、その後とんでもないことが起こるとは、私は――私達家族は微塵にも思ってはいませんでした。

第１４話　家族（後書き）

美由希のキャラ崩壊が激しすぎる件について――

そして一番の難敵は桃子さん。

ハーケンが守護騎士なりユニゾンデバイスなりで実体化したら恭也とガチバトルになりそうな予感しかしねぇ――

さて、魔法少女バーニングアリサですが、凄いですねぇ元祖は。カッコイいぜよアリサ。今のところ我が家バーニングアリサは中身繋がりで殆ど炎髪灼眼になると思います。武器は刀と銃を予定してますが、刀ともかく銃はどんなのがよろしいと思いますか？

あと箒繋がりで”戦術砲機”ブロンテ・クラフトとか――

皆さんの意見・感想をお待ちしております。

第１５話　スクランブル戦闘民族高町家（前書き）

短いです。

第１５話　スクランブル戦闘民族高町家

ｓｉｄｅ：？？？

夜、誰もが寝静まる夜。

高町なのはの寝室では、眠っているなのはを悲しさの色濃い瞳で見る少女が居た。

「…な…の……は……」

優しく寝ているなのはの髪を梳く少女。

その表情はとても柔らかいのに、瞳だけは悲しみに満ちていた。

音が出ないように窓を開けて、窓枠に足を掛ける少女。

月明かりに照らされた少女は、頭に一対の獣の耳を生やし、一本の太く柔らかそうな毛並みの尻尾を持っていた。

『ウェット。待ちな、アヤカシフォックス』

少女を呼び止めたのはゲシュペンスト・ハーケンことハーケン・ブロウニングだった。

『こんなナイトにお出掛けかい？』

「……」

ハーケンの言葉に、少女は顔を俯かせた。

「…くお…ん……じかん……な…い」

『マイブラザーにちゃんと相談してからでも良いと俺は思うぜ？フォックスプリンセス』

「…だめ……くおん…なの…は…めいわく…」

『ブラザーはそんな奴じゃないさ。と言うより、わかってんだろ？俺達の誰かが欠けたら、ブラザーはたちまちハートブレイクってことは』

「…で…も……」

少女はもう自分がこの家に留まれないのを感じていた。

今だからまだ自分を保てていても、それも長くはないと。

「…ありが…とう……」

少女はハーケンか、はたまたなのはに向けてか、小さく呟いて窓から飛び出した。

『やれやれ、とんだ貧乏くじだ。まぁ、今も昔も変わらんがな、こいつは』

ハーケンはやれやれと首を振ると――

『おい起きろブラザー！エマージェンシーだ！！』

「…んむぅ……あと…5分……」

『なにお約束やってんだ！起きろダブラザー！ゲシュペンストキック！！』

とりあえず相棒で久遠の事実を知るなのはを叩き起こす事にしたのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

両腰にナイトファウルとロングトゥーム・スペシャル、後ろ腰には刃を潰した小太刀を挿して、テンガロンハットを被る。

いつかこうなるとわかっていた為、どこまで効果があるかわかりませんが、火薬に願をかけた塩を混ぜ込んで、弾丸にも『Ｔｈｅ　Ｍｉｎｉｏｎｓ　ｏｆ　Ｃｔｈｕｇｈａ』――魔力を注ぎ込めば爆裂弾になる術式文字をナイトファウルの弾丸に彫り。

『Ｗｅｎｄｉｇ　ｔｈｅ　ＢｌａｃＫｗｏｏｄ』――自動追尾弾、敵を捕らえるまで追い続け、急所を仕留める術式文字をロングトゥーム・スペシャルの弾丸に彫り。

絶対数は少ないですが、無いよりはマシでしょう。本当ならイブン・ガズイの粉薬とかがあれば良いのですが、材料が材料です。小学生の私には――というよりデモベ世界でないリリカル世界では用意出来ない代物です。これで今やれることをやりましょう。

友人を救う為に法を犯し、本物の銃口を向ける。

私自身には恐怖はありません。

しかし久遠を救えないかもしれないことには恐怖を感じます。

私には霊力はありませんでしょう。

魔導がなければまともに戦えないでしょう。

でも私には――

「ＯＫ、相棒。行きましょうか」

『ＯＫ、マイソウルブラザー。マイファミリーダフォックスにカチコミと行こうか？』

「目指すは八束神社、でしょうね」

『オーライ、ブラザー。さっそく行こうぜ』

私はハーケンがコートの襟を掴むのを感じながら作業部屋を出ます。

「どこ行くの？なのは」

「姉様……」

『こいつは予想外のお客さんだな。ボンソワール、メガネシスター』

ハーケンが手を帽子に添えるように、自らの手を頭部に軽くあてがう。

「通して下さい姉様。私は行かなければなりません」

「どこに？」

目的地を告げてしまえば姉様も着いてくるでしょう。

相手は大妖狐。

魔導師の私でさえ、久遠の攻撃は防げない。

御神流剣士たる姉様でも無傷は免れないでしょう。

傷つくのは、私だけで十分です――

「ブリッツアク――ッ！！」

「なのは！？」

くっ！念話はともかく、他の魔法はまだ使えませんか。

１０年後の高町なのはでさえ、しばらくの養生を強要される程の負担を強いるブラスターシステム。

一週間の休養では身体はともかく、リンカーコアはまだ無理の様ですね。

痛みの襲った胸をかき握る。

『大丈夫かなのは！？まだ魔法の行使は無理だぜ』

「のようです。久遠への勝ち目が余計に減りましたね」

「久遠？久遠に何かあったの！？」

『ウェット。落ち着いてくれ、メガネシスター』

「ハーケンは黙って。ねぇなのは？なのはは何をしてるの？私達に何を隠しているの？」

「…私は……」

「そこまでだ、美由希」

「とーさん」

「父様……兄様…」

そこには道着姿で完全武装した父様が、同じく完全武装の兄様を連れてやってきました。

「とーさん。恭ちゃん」

「美由希。人は譲れない戦いをする時が来る。今なのはは、その戦いに身を投じている。俺達には、なのはが黙っている事を強要する権利もない」

「恭ちゃん……」

「父様、兄様、私は…」

私が口を開こうとしたところで、父様が頭をガシガシと撫でてきた為、喋ることは叶いませんでした。

「なのは。別に無理に言う必要はないんだ。ただ、お父さん達にも手伝えることがあるなら、遠慮なく言ってくれて良いんだ。なのははまだ子どもなんだ。なんでもかんでも1人で抱え込まなくたって良いんだ」

「父様……」

どうして父様は何も語らない私に、こうも優しくしてくれるのだろう。

私には、そんな風にされる資格なんてないのに――

「なのははお父さんの大切な娘だからな、1つや2つの隠し事くらいあってもなんともないさ。それに、なのはも隠し事をするような歳になったんだって、嬉しく思うくらいさ」

「……父様…」

私は帽子を眼深くずらすと、数滴の涙を流した。

そんな事を言ったり思ったりする権利はない。

でも私は父様の言葉に嬉しいと感じてしまった。

本当は抱きついて泣き叫びたい。

でも今は久遠を助けに行かないと――

「ほらなのは、背中に」

「に、兄様!?」

「急ぐんだろ？」

「……はい！」

私は兄様の背に乗ると、腕を前にまわして落ちないようにします。

「おっとと、なのは、随分重くなったな……いて！」

「失礼な。武器と服が重いだけです」

『失言だったな、エルダーブラザー』

私は中身は元男でも体重や体型くらいは気にするんですよ？

まぁ、体型は将来ナイスバディが約束されてますが、腐らせるのも磨くのも自分自身です。

「さぁ、ちゃんと捕まっていろよ、なのは」

「はい！」

兄様の背中……とっても広くて温かくて、父様の手のように安心して身を委ねられます。

「ちょっとまって恭ちゃん！私も！」

「お前はなのはの戦いを知らないから今回はお留守番だ。師範代としてはお前はアレ関係の戦いには前知識無しには出せない」

「うぅ、とーさん」

「俺より美由希を知ってる恭也が言うんだ。今回は我慢な？」

「うぐ、な、なのはぁ～～」

「すみません姉様、私は今回足手まといにしかならないでしょう。そんな立場では私には2人の説得は――」

『そう言うことだ、メガネシスター。今回は留守を頼むぜ？《ユーノもな？》』

デバイスのＡＩデータを基にして造られたハーケンですから、念話もお茶の子さいさいです。

「みんなひどいよぉ……」

《わかった。久遠が相手なら、僕じゃあなんの役にも立てない。悔しいけど、なのはをお願い》

《ＯＫ、フレンズフェレット。ブラザーは任せな》

「行くぞ、なのは」

「いってくるな、美由希」

「いってきます、姉様」

『留守を頼むぜ、メガネシスター？』

「ぅぅ、いってらっしゃーい……」

姉様を残して、私達は家を出ました。

向かう先は八束神社――

私達が出逢い。

とらハで久遠の封印が解ける場所。

今一番考えられて久遠と一番縁のある場所。

第１５話　スクランブル戦闘民族高町家（後書き）

ついに出撃の戦闘民族高町家の主戦力！

意見・感想、お待ちしております。

第１６話　結ばれる絆は――（前書き）

本気久遠ｖｓ高町家です。

第16話　結ばれる絆は――

side：久遠

久遠は高町家を出た後、八束神社に居た。

神社は死ぬほど嫌いの久遠。だがなのはと永遠の別れをする前に、彼女と出逢ったこの場所に来たかったのだ。

青い石に身体の自由は奪われても、心だけは平気だった。

そこから初めて見たなのはは、怖かった。

しかし高町家で生活する内、なのははとても強いけれどとても弱い子であることがわかった。

傷ついても諦めないところが、辛くても優しくしてくれるなのはが好きになっていった。だから自分はなのはとこれ以上一緒には――

「…な…の…は」

自らに掛けられた封印。

今はその封印のお陰で感情も押さえつけられているからいい。けれど封印が解ければまた自分は憎しみに駆られ、暴れる妖狐になってしまうかもしれない。

子狐に戻れない程に妖力も溢れている。
それが解き放たれてなのはを傷つけてしまう前に自らの命を断つ。
それが久遠の選択だった――

「久遠！」

でもなのははそれを許してくれない。
なのはは優しい子だから、ハーケンの言う通りに相談すれば一緒に解決策を考えてくれたかもしれない。
でもただでさえ傷だらけで様々な物を背負っているなのはに、これ以上何も背負わせたくないのが久遠の意志。
だから自分の事は自分で決着をつけないとならない。そう選択した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

八束神社に着くと、境内には月を見上げる久遠。

その瞳はとても口では表現出来ない悲しみが見えたような気がしました。

「久遠！何故です！？何故何も言わずに私の前から居なくなろうするんですか！」

兄様の背から飛び降りるように私は境内に立ち、久遠の背中へと言葉を投げかける。

「久遠…な…のは……一…緒……駄…目」

「そんなことはありません！！貴女を蝕む祟りは、私が祓ってみせます！だから！！」

「…無…理……なの…は……霊…力…な…い……」

「たとえそうでも、必ず貴女を祟りから救ってみせます！！」

今引けば、久遠とはお別れになってしまう。それも永遠の。そう感じる――

「こないで！」

久遠が雷を放つ。

それは子どもサイズでとても威力は低い物。それでも子どものなのははには十分な脅威となる。

「なのは！」

「くっ」

ナイトファウルのフェイクリッパーを展開して正面から雷を断ち切る。

こういうこともあろうかと、今夜のリッパーも服も耐電絶縁処理は完璧に仕上げてきました。ちょっとやそっとの雷撃くらいなら防げはします。

「久遠、貴女がどう言おうとも、私は貴女を連れて帰ります」

「なのは……なん…で……」

「貴女は私の友達で家族だからです」

「…とも…だち……かぞ…く……ぅっ――」

「久遠！？」

急に身体を掻き抱く久遠。その身体からは霊感のない私にもはっき

り見える黒いオーラ。
兄様と父様が身構えるのが気配でわかります。

「っっ――あああああああああ！！！！！」

久遠の身体から稲妻と黒いオーラが溢れ、稲妻の閃光は久遠を照らし包み、私の視覚から隠してしまう。

星空は曇が立ち込め、稲妻を発し、明らかに空気の雰囲気が変わっていく。

重圧感――プレッシャーもジュエルシードの暴走体とは比較にならない。

閃光が収まれば、久遠が居た場所には――

「なのは……あれも…久遠、なのか？」

元々なのはと同い年くらいの、獣耳や尻尾を生やした女の子だった久遠は、今は美由希や恭也に近い年齢くらいの女性の姿になっているのだ、なのはと久遠の会話から、作業の少女が久遠だと薄々察していた恭也でも、目の前で急に少女から女性に姿を変えられたら戸惑う。

「…ええ、約３００年前に封印された大祟り妖狐――久遠。でも久遠は何も悪くはありません。その当時の人間達の所為で、久遠は大切なものを奪われて、怒りと憎悪に捕らわれ、狂ってしまっただけ。本当の久遠は人見知りでおとなしいだけの狐妖怪。祟りを追い払えば、久遠は元に戻るはず」

「祟り…か、超能力や自動人形や魔法とは戦ったことはあるが、果たして祟りなんていう魔法以上に超怪奇的なものに御神流が通じるかどうか……」

御神流師範代で、ついこの間魔法と対峙こそしたが、あれには実体もあったし、刃で斬ったわけでもなく、鋼糸で動きを止めた程度だ。祟りなんていう日本ではある意味で魔法的な、実在すら曖昧なものに御神流が通じるか否か考えてしまうのは仕方がないことだろう。

「久遠自体には実体があります。祟りは私の方でなんとかしてみます。兄様と父様は――」

「久遠の動きを止めるか、時間稼ぎをするか、そのどちらかぐらいか」

「いえ、私に一度だけ久遠に張り付く隙を作っていただければ」

父様の案を遮って私は言いました。

高町なのはが砲撃で想いを伝えるなら、私は己自身の肉体を用って想いを伝えるしか思い浮かべられません。

もはや高町なのはでもなんでもないような戦い方しか出来ない私ですが、それでも久遠を救いたい気持ちは本物です！

『レイジングハートも魔法も使えない今のブラザーには分の悪い賭けだが、それでもやるのか？』

「当たり前です。久遠を救う為ならば。それに貴方らしくもありませんよ？ハーケン」

『フッ、そうだな。ＯＫ、ブラザー。俺も分の悪い賭けは嫌いじゃないぜ、こいつがな。そういうわけだファーザーアンドエルダーブラザー、覚悟は出来てるかい？』

「愚問だぞハーケン。妹の征く道くらいは切り開いてみせるさ」

「なのは、言うからには、必ず成功させるんだぞ？そしてみんなで家に帰って朝ご飯にしよう」

「はい！兄様、父様」

私達は身構えて久遠と対峙する。

その瞳は恨み、怒り、憎しみ――

普段の久遠からは考えられない感情ばかりが見えた。

「あああああああああああ！！！！」

一筋の雷が久遠に落ちる。

久遠の背の黒いオーラが更に膨れ上がる。

人の姿でも鋭い爪を振り上げて叫び声を上げながら襲い掛かってくる久遠。その先には私が居た。

「くっ、結構重いな。だが娘に手を出すなら、この高町家大黒柱高町士郎の屍を踏み越えて往ってからにして貰おうか！」

しかし、間に割って入った父様が小太刀をクロスさせて久遠の突進を止める。

「父さん！」

兄様が一瞬かき消えたかと思えば、一瞬で久遠の右横に居た。

「はあっ！」

兄様は小太刀を抜いたが、私が見えたのは、最初の一刀が反応した久遠の腕を薙いで払う軌道のみ、あとはいつの間にか背後にまわっ

ていたり、また右横に戻ったかと思えば左側に居たりと、そして久遠を襲った斬撃は４つ。

たまらず久遠は父様から離れましたが、身体どころか服にすら傷はなかった。

「小太刀二刀御神流　奥技之六　薙旋――」

「ダメだ父さん。まるで鉄板にでも打ち込んでいるような硬さだった」

父様が技名を述べ、兄様が打ち込んだ感想を述べた。

兄様に連撃を入れられた所為か、久遠の警戒心が急激に高まるのを私は感じました。

「なるほど、となると久遠には悪いけれど、少し俺達も本気で行かないとな」

父様から放たれるプレッシャーは、久遠の放つプレッシャー――どこか野性的な荒々しさとは違う、明確な、人としての指向性のあるプレッシャー。後ろから感じるだけでも冷や汗を掻く程のプレッシャー。これが御神流剣士、不破としての父様ですか――

兄様からも見劣りないプレッシャーを感じます。

なるほど、これはかなり強烈です。
何度か死ぬ思いをした私は平気でいられますが、兄様が姉様を置いてきたのは、もしやこれが理由でしょうか
『凄まじいプレッシャーだな。メカニカルの俺でもビンビンに感じるヤバさだぜ』
「ええ」
ハーケンに応えながらナイトファウルを構える。
勝負札は二枚、切り札は一枚――
ただの博打でしかないけれど――
「久遠……！」
必ず助ける！必ず！
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
ｓｉｄｅ：――

「あああああああ！！！！」

久遠が雷撃を放つ。

標的はなのは――

しかしなのはは横に転がることで雷撃を回避した。

次に動いたのは士郎。

１０ｍ近くありそうな距離を一瞬で詰めた。

幾閃もの煌めきが久遠に打ち込まれた。

御神流　虎乱――

しかしなのはが鍛練するものは勿論、恭也や美由希が振るう虎乱以上の速さを持ち、恭也は一瞬出掛かりの動作が斬撃でなければ、美由希の母、美沙斗の放った御神流裏　奥技之参　射抜と勘違いしそうな程速かった。

恭也は負けじと神速で、士郎の虎乱を受けてたたらを踏む久遠を眼前に捉える。

傷つけるのが、殺すのが目的じゃない。

小太刀を久遠に打ち込む。

久遠は腕で防いだが、次の瞬間飛び退いて、防いだ右腕を抑えていた。

御神流　徹――

衝撃を表面ではなく裏側に通す撃ち方で威力を『徹す』打撃法。素手や刃のついていない武器でも簡単に人を殺すことができる技。加減して放てば相手の打撃面を痺れさせて使えなくすることが出来る。

狐だった久遠に、対人戦法が通じるかと思ったら、なまじ人型の分、通じることに恭也は確信を持った。

鋼糸を懐から取り出して投げつける。

久遠が鋼糸を防御しようと振り上げた左腕を絡め取る。

「父さん！！」

恭也が士郎に叫ぶと、士郎も鋼糸で久遠の右腕を絡め取り、同時に引っ張り上げる。

久遠は負けじと脚で踏ん張る。

御神流剣士2人分の力に拮抗する力に士郎も恭也も僅かに驚くが、そういう物だと今は自分を納得させる。

「「なのは！！」」

父と兄の切り開いてくれた活路に、なのはは飛び込む。

転びそうになる脚を動かして、久遠に向かって駆ける。

「「うあああああああ！！！！」」

久遠から雷が迸る。

空からも稲妻が落ちる。

しかし感電を恐れずに、士郎と恭也は鋼糸を引く手を止めなかった。

指から焼ける臭いがしても離さない。

なのはを信じて、意地でも2人は離さない。

なのはは放電される雷の中を、リッパーで受け流し、切り裂きながら進む。

この雷には久遠の妖力が混じっていて、魔力変換資質の電気と似たような変換のされ方をしている。

空から降る自然の稲妻は斬ろうとは思わないし、まず絶縁処理したリッパーでも感電するだろう。

しかし久遠から放たれる雷は、この僅かにエーテルを纏うリッパーで斬り裂ける。

「正気に戻りなさい！久遠！！」

また正面からきた雷をフェイクリッパーで斬り裂く。

もう腕を伸ばせば届く距離に久遠が居る！

「あああああああ！！！！」

「くっっぁあああああああ！！！！」

「「なのは！！」」

『よせなのは！！こんな電流受け続けたら脳天焼ききれるぞ！！』

放電する久遠を抱き締めたなのはは、超至近距離から直接久遠の雷を受ける事になった。

なのはの姿に叫ぶ士郎と恭也、そして徹底した耐電絶縁処理を施されたハーケンが耳元で叫ぶ。

零距離ディバインバスターはこんな物だろうかと一瞬思いながらも、飛びそうになる意識を気合いで維持して、なのはは久遠を仰ぎ見る。

すっかり大人の久遠は、今はなのはよりも大きい。自然とそういう形でなのはは久遠を見る事になる。

「久遠……私はいつも無様で、本物の高町なのはには程遠い星屑の存在です」

掠れゆく声でしっかり伝わるかどうかはわからなくても、なのはは伝えたかった。

「私は自分を取り巻く絆に自信がありませんでした。それは高町なのはが手に入れて必然の絆でしたから」

家族やアリサ、すずかにユーノ。

それらは魔法少女高町なのはが手に入れて必然の絆。

「でも私にはアリスが居た。そして貴女が私の前に現れた……」

アリス――

本来ならば存在しない私のファミリア。

久遠――

リリカルマジカルな世界には登場しない狐妖怪。

「私は貴女のお陰で救われました。私が紡いだ私だけの絆――そして気づかされた。たとえそれが必然でも、私が紡いできた絆は本物だという事を……」

久遠に語り続けるなのはの身体から、若葉色の光の粒子の様な物が溢れ出し始め、それは神社の境内や裏手の森からも若葉色だったり青だったりする光の粒子が、一様になのはの周りに集まっていく。

「こ、これは――」

「傷が……治っていく…」

『マジか……エーテル係数計測限界値突破、数値化出来ねぇ。まさかフレアー現象なのか？一体何が始まるんだってんだ……』

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

「ここは……」

気づけば真っ白な空間に私は居ました。

「ハーケン?父様?兄様?」

肩に居たはずのハーケンも、後ろに居たはずの父様も兄様も居ません。

「はっΣ!!久遠!?久遠!!」

「なのは……」

声がした後ろを振り向けば、そこには久遠が居た。

「久遠!!」

私は久遠を二度と離さないようにキツく抱き締めた。

「久遠のバカ!アホ!ボケ!駄キツネ!!」

「ごめんなさい、なのは」

私を撫でてくれる久遠の手は、父様とは違って細々していて、でも代わりにその細々しい指で髪を梳かれる心地良さが、まるで昔、私

が私になる前、前世の母さんや母様に撫でて貰った時のように、子どもが寝付くまで髪を梳いてくれる心地良さを久しぶりに感じた。

「久遠……次にこんな事をしたら零距離でスターライトブレイカーを撃ち込みますからね！」

「うっ、なのはがこわい……」

ピクンと跳ねた久遠の耳と5本の尻尾。

「当たり前です！一体どこぞのダフォックスの所為で2回もフェイト・テスタロッサと戦う前に電撃浴びにゃあならんのですか！！」

「クゥ……ごめんなさい…」

しゅんとして垂れ下がる耳と尻尾。

かわいい。勢いが削がれてしまう程の破壊力ですが、ここは心を鬼にします！

「いいえ！タダじゃ赦しません！」

「クォン！？やだやだ！なのはこわい！！」

逃げようとする久遠ですが、がっちり固めている為、走っても振り解こうとしても、私は離れません。

「久遠……」

「クォンΣ!?な、なのは……」

私は久遠の耳元で久遠の名を呟く。

動きを止めた久遠の頬に手を添える。

「ク、クゥ……く、くすぐったい…」

「久遠、私の大切な久遠……」

私達の足下に展開する桜色のミッド式魔法陣――

今は胸の苦しさも忘れる事が出来ます。

「なのは…？かぜ、ひいたの？」

こてんと首を傾げる久遠の愛らしさを脳内フォルダーに刻み込みながら、前世でも今世でも初めてを久遠に捧げます。

「くみゅΣ！？！？」

目を見開く久遠を超至近距離で脳内フォルダーに保存しながら、瞳を閉じる。

舌を入れて縮こまって逃げようとする舌を絡める。

「んっ……ぁ……はぁっ……んっ、ぁっ……ぁぅ……ぅん……」

空気を求めて開く久遠の口の中を舌で犯し続ける。

自分のと久遠の味がブレンドされて、甘露のような甘味を感じる。

そこに久遠の鋭い犬歯で傷ついた舌から流れた血が混じる。

「んく……コク…ふぁっ……」

「ふぅ……」

離れる私達を紅い橋が繋ぐ。

もっと久遠を感じていたいですが、今は絶賛バトル中ですし、これ以上は１８歳未満お断りになりそうなので、名残惜しいですが仕方がありません。

「久遠、貴女は私が死するその時まで、私と共に――」

「なの…は…」

使い魔契約――

本当はする必要なんてないのかもしれませんが、祟りから久遠を引き剥がすのには、私の側に置いてしまうくらいした思いつきませんでした。

「なのは……」

「久遠」

大人から子どもサイズに戻った久遠を強く抱き締める。

久遠もぎこちなくても私を抱き締め返してくれた。

互いの心臓の音が間近で聞こえる。

私も久遠もここに居る。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

次に気づいたら私は神社の境内に居ました。

目の前には黒い靄のような存在。

久遠に取り憑いていた祟り。

『なのは？その姿は何だ？ダフォックスはどうした！？』

ハーケンが驚くのも無理はなかった。

強烈な発光現象が収まった途端、久遠は消え失せ、代わりになのはが久遠の着ていた巫女服を身に纏い、茶色の獣耳と尻尾を生やしていたのだから。

《なのは》

「ええ、征きましょう久遠。貴女を縛る祟りを断ち斬る為に――」

久遠に応えながら腕を前に翳す。

すると広げた手の先に展開する幾何学模様――ラギアス式魔法陣。

『ラギアス式魔法陣！？』

「出でよ、ディスカッター！フレイムカッター！」

私の魔力変換資質は火、そして久遠の雷は魔装機神では炎系低位に位置する属性。

それで呼び出したフレイムカッター。

そして周りの精霊達が力を貸してくれたお陰で呼び出せたサイバスターモデルのディスカッター。

「久遠を縛るすべての怒りも憎悪も悲しみも！！アカシックレコードから消し去る！！」

私はディスカッターを頭上で振り回すと、それを地面に突き立てる。

足下に展開する青い輝きを放つラギアス式魔法陣――二重の円の中に星の刻まれた魔法陣。

そこにさらにフレイムカッターを突き刺す。

エーテルを伝い、魔法陣がその姿を変える。

正しい星の形が一部崩れた。

『エルダーサインだと！？』

それは邪悪なる者を討ち祓う聖なる印。
五芒星の結印の輝き。

「第４の結印は『旧き印』―エルダーサイン―我、脅威と敵意を祓う者成り！コール・フェニックス！！」

五芒星に変換したラギアス式魔法陣から、巨大な炎の鳥が、不死鳥が顕れた。

炸裂弾刻印のされた弾丸をすべて宙に投げる。

弾丸は私の周りに滞空する。

脚にプラーナを込める。

「――断鎖術式壱号ティマイオス！弐号クリティアス！術式解放、時空間歪曲。――爆裂（エクスプロージョン）！！」

足下が炸裂し、私は飛び出す。

後ろから弾丸を飲み込んだ炎の不死鳥が迫り、私を飲み込み、その輝きを赤からエーテルに溢れた青に変えた。

「アカシック！バスターーー！！」

私達は飛翔一と一ぶ、負の源を断ち切る為、未来の為に！

《あああああああ！！！！》

「でぇぇぇやあああ！！！！」

雷や稲妻で一種の結界を作る祟りだが、不死鳥を身に纏う私達には届かない！

アカシックバスターの直撃した祟りを突き抜け、私は祟りの真後ろに僅かに断鎖術式の勢いで地面を滑り、術式の解かれたディスカッターとフレイムカッターを地面に突き刺す。

浄化の炎に焼かれた祟りは消え去った。

それと同時に私達の融合も解ける。

「なの…は……」

「お帰りなさい。久遠」

「うっ、っっ、なのは…っ…なのはぁ……うっ、あああーーーー！！！！」

私に抱きついて涙を流す久遠を抱き締めて、久遠の頭をそっと優しく、慈しみと愛を込めて撫でる。

まるで私達の結ばれた絆を世界が祝福してくれるかのように、朝日が私達をただ暖かく照らしだしていた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

第１６話　結ばれる絆は――（後書き）

こんな感じに終わってみました。

やっぱりとらハ士郎と恭也は化け物か？

ようやくこの小説の趣旨の一片が書けました。

久遠×なのはの需要はあれど、久遠×シュテル風ってまたそそられませんか？

なんか弱いなのはの筈なのに勝手に強くなってく星光なのははなんなんだろ？

てーてれってってー♪てれってー♪

久遠が支援に加わりました。↑ムゲフロ風。

意見・感想、お待ちしております。

なげぇなぁ……まだ無印４話にもいかねぇ……

第17話　デバイス達の想い……（前書き）

まだ先に進まないよ……

第17話　デバイス達の想い……

ｓｉｄｅ：高町なのは

八束神社での戦いの後、プラーナの急な使いすぎと、久遠の電撃を浴びたダメージで動けなくなってしまった私は、久遠の背中に背負って貰って帰りました。

さすがにナイトファウルやロングトゥーム・スペシャル込みは重いと思ったので、それぞれを父様と兄様に持って貰いました。

ちなみにそれぞれを持って貰ったら――

「なのはは力持ちなんだなぁ……こんな重たい物、お父さんはあそこまで振り回せないよ」

「こんな銃身の長い銃で狙いが外れないのか？」

そんな感想を述べられました。

それは慣れと練習ですよ、父様、兄様。

それから私は1日休みを父様、兄様、ハーケンから通告されて学校も鍛練もお休みです。最近連続で休み過ぎです。

そんなわけでやることもなく、子どもモードの久遠と布団の中で寝

る事にしました。

「クゥ……な、なのは…」

「久遠…」

脚を絡めて、ワイシャツ一枚同士の薄布一枚隔てた久遠の身体を抱き締める。

巫女服でわかりませんでしたが、久遠は私と同い年くらいにしては少し胸に膨らみがあるようです。

肌も白くてスベスベで、傷痕だらけの私とは大違いです。

「クン！な、なの…はぁ……」

「んっ……く、おん…」

互いに抱き締め合うだけなのに、この胸を掻き乱して、満たす感情はなんなのだろうか――

幸せで、温かくて、愛おしく感じる。

親愛？友愛？

違う。

愛は愛でも違う、そういう愛と違う――

でも今も昔も心から愛する、恋人と言った意味での愛し方をしたことのない私は、久遠に抱く愛がどんな愛なのかわからない。

でも家族に想う愛とは違う事はわかる。

アリサとすずか、ユーノは友愛だというのはわかる。

ハーケンやアリス、レイジングハートは愛なんて次元は当に越えている一心同体の存在。

じゃあ久遠は？

「なのは…？あっ、んっ……クォン！？」

「久遠…」

久遠の尻尾を撫でながら互いの胸を突き合わせる。

速いリズムを刻む鼓動。

同じタイミングで鳴る鼓動。

私達の絆――

「くみゅ！？」

我慢出来ずに、久遠の背中にまわした腕を力を込めて引き締める。

さらに密着して隙間すらなくなる私達。

「ゃっ…ぁ…んん……ぁぅ…クゥッ」

もっともっと、久遠を感じたい。

あの時、共に祟りを討ち祓った時のように。

私が久遠で久遠が私で――

あの時私達は物理の垣根を越えて一つだった。

「く、おん……やっ、んっ…だ、め…くお、ん…」

「な…のは…し、かえ、し」

「そ、しな、くてっ、やぅっ！」

恥ずかしい程淫猥な声が漏れてしまう。

仕返しと、尾てい骨の辺りを撫でられて感じてしまう淫らな私は、

やっぱり高町なのはには相応しくない。

でも代わりに久遠との絆が深まるのなら、それでも構わないと私は思ってしまう。

私だけの久遠、私だけの絆、高町なのはには紡げない絆。

愛と勇気をもって世界を救った高町なのはの久遠との絆よりも、私達の絆は深い物だと胸を張っていえる。

「ずっと一緒ですよ、久遠」

「クゥ……なの……は……」

今日一日中。私達はずっと布団の中で、互いの身体を弄りあいながら過ごしました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：ハーケン・ブロウニング

マイホームに帰った俺は、なのはの自室からユーノを連れて、レイジングハートとアリスの器のスケッチブックを持って家の縁側でたむろっていた。今頃ブラザーの部屋はストロベリー空間がオープン

中だろう。

「それにしても、なのははなんであんなにも必死になれるんだろう」

ビーストモードからトランスフォームしたユーノが蒼穹を見上げながら言った。

ちなみにヒューマンモードなのは久遠がヒューマンモードになれるのに便乗してヒューマンモードを晒せという俺の考えさ。

一応風呂は男の意地でファーザーや時々エルダーブラザーと入っていたらしいから、事情を話せばＯＨＡＮＡＳＨＩは免れるだろうさ。高町家は色々な意味でソウルハートがオープンだからな、恐ろしいメンタルティだぜ、まったく。

『なのはには、何物にも譲れない物があるのさ。それがあいつのメンタルを支える大黒柱、俺達が支えてないとポッキリ逝っちまう細々したブラックツリーだがな。絶妙なバランスで成り立ってなんとか安定してるのさ、あいつの心は』

「ハーケン……僕はどうしたら良いんだろう。僕はなのはみたいに攻撃力なんてないから、なのはの力にもなってあげられない。それが悔しい――」

『……ＯＫ、フレンズフェレットボーイ。良く考えてみるのさ。お前が他人にも誇れる要素を……な』

「僕が……誇れる要素…」

察しの良いユーノなら気づけるだろう。今出せるヒントはこれ位さ。

『そんで、とりあえずは修理の終わったレイジングハートの祝賀会と行きたいが、もう大丈夫なんだろうな？』

『Ｒｅｃｏｖｅｒｙ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ．　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ　ｇｒｅｅｎ．　大変お待たせしました。すみません、ハーケン』

『ウェイト。謝るのなら俺じゃないだろ？レイジングハート』

『はい。そうでしたね』

修復が済んだレイジングハートは、魔法系言語は翻訳魔法を使ったミッド語だが、日用会話はプログラムを書き換えて日本語をベーシックにしている。

理由は俺にあるんだとさ。ブラザーと同じ言葉でトークするのが羨ましいんだと。

マスターと同じ言語で喋りたいと思うのは更なる絆になる。

絆の結び付きは、時として限界以上の力を発揮する。

スーパーロボットのお約束展開だ。

そしてそれが今日起こったばかりだ。なのはも十二分に主人公をやってるさ。

『とりあえずはだ、アリスのソフトを治したいんだが、手伝ってくれるな、カムレード？』

『わかりました、ハーケン。私も友人を治してあげたいのは同じです』

『ＯＫ、フレンズカムレードデバイス。メカニカルの俺達でフレンズを治して、ブラザーを安心させてやろうぜ？』

『ええ、わかりました。ハーケン』

俺達メカニカルズは一蓮托生一心同体の関係にあるような物だ。

同じマスターの下に集い、共に戦い、随時データリンクしているお陰で、俺達は互いの状態や、誰か１人でもなのはに着いていれば、なのはの事が随時わかるようになっているからだ。

それを有利に戦闘に生かす方法も模索中だ。

元祖がレイジングハートとユーノだけで大丈夫だったのは、あれが物語で、元祖が寂しい思いをした過去があっても、良くも悪くも子どもであったからだ。

だが俺達のマスターは良くも悪くも大人過ぎた。

自分の存在に苦悩し、元祖とはかけ離れた存在に苦悩して、レプリカのイミテーションを演じている事に苦悩する。

それ全部ひっくるめて俺達のソウルブラザーマスターなんだがな。

俺の口から言ってやるのは簡単さ。

これは正に分の悪い賭けだ。

ブラザーのハートがクラッシュするのが先が、自分は自分として生きていけば良いと気づくのが先か。

だから出来るだけ俺達で道を指し示し、導いて、支えて行くしかない。

すべてを選択するのは、なのはの意志なんだからな。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町士郎

今日、初めて娘の戦いを体験しながら娘の戦いを見た。

俺も昔は相当危ない橋を渡ってきたものだけど、雷を直接撃たれたのは初めての経験だ。

銃弾と違って斬ったり弾いたり出来ないものだから死ぬかとも思っ

たし、久遠の力も人間物じゃなかった。

でもいつの間にか大きく育っていた娘の背中を見た時は嬉しくも思った。

なのはもまた、御神流を正しく使う剣士になる事を確信出来たからだ。

それになのはにには周りに支えてくれる者がたくさん居る。あの子ならこれから先も自分の戦いを続けていけるだろう。

ただ、やっぱり無理はして欲しくはないかな。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：ハーケン・ブロウニング

『よーし、こんなもんか？』

俺の前には、青と白のロボットが立っている。

まぁ、なのはが暇に任せて１から作った１／６０　Ｓガンダムなんだけどな。

パーツ差し替え無しでの完全変形可能の優れもの。

筐体自体は俺のボディと同じ時に完成してたが、ソフト面のアリスがああなっちまったからな。

ＡＬＩＣＥシステムを積んだ機体にアリスが成る。

この希望もアリスによるものだ。

『システムコネクト。ＴＣ－ＯＳアクセス、自己進化完全自立型擬似人格コンピューターＯＳロード。機体駆動システム非常用電力で作動。フルカネルリ式永久機関クォータードライブ。メインシステムノーマルモード起動。全シーケンスオールグリーン。――おはようございます。ハーケン、レイジングハート』

『グッドモーニング、不思議の国のアリス。新しい身体はどうだい？』

『おめでとうございます。アリス』

『ありがとうございます。ハーケン、レイジングハート』

手の調子を確かめるように握っては開くをするＳガンダムもといアリス。

『ええ、マイスターの想いが宿ったこのボディ、この上なく重畳です』

『そいつは良かったな、アリス。で、何やってんだメカニカルアリス』

『何って、変形ですが？何か？』

『いや、なんでも無いぜ、ファイターアリス』

アリスはGクルーザーに変形して俺達の頭の上を滞空している。

今はパーツが足りなくてちょいと不格好だが、驚きの再現度だぜブラザー。しかもカタログスペックには分離合体まで可能と書いてあった。

デバイスコアとリンカーコアの仕組みを基にして、なのはが造ったフルカネルリ式永久機関。

精霊の代用は俺達自己進化完全自立型擬似人格コンピューターＯＳ。だから俺達の意志でパワーが変わる。まるでGストーンのGパワーだぜ。

俺の試作フルカネルリ式永久機関のブラッシュアップグレード品だ。大きさは同じだがアップグレードのお陰で出力は段違いだ。それだけにそのエネルギーを普通に攻撃にも使える、いわばモバイル魔装機って奴だ。

羨ましいぜ、プリンセスアリス。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：アリス

私のシステムがダウンしている間も、ハーケンとのデータリンクで私はマイスターの戦いを見ていました。

とても心配でしたが、でもハーケンがついていましたから不安はありませんでした。

そして私が居なくても戦えるようになった。

強くなりましたね、マイスター。

そして私も、また――まだ戦える！

この機体にインプットされているメモリー内にある武装が私に合わされば自分の身を守れるくらいにはなります。

しかしその先、マイスターと共に戦い、さらにマイスターの力となるにはまたさらに力が要る。

その為のプランは昔から用意している。あとはそれを形に出来る技術力があれば――

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：レイジングハート

ハーケンもアリスも、自由な身体が羨ましいです。

私も自由な身体が欲しいとは思います。

でもそれ以上に今より頑丈な身体が欲しい。

何をしても砕けず、何をしても敵を貫く強固で頑丈な身体を——

そう、最強の金属製の身体を！

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

第17話　デバイス達の想い……（後書き）

とりあえずやっとアリス復活とアリスの予定の6割り方を消化出来た。

ハーケンも、レイジングハートも、星光なのはの為にこれから頑張って行く予定です。

アリサの方も大体設定を組めてきました。

しかしどこで登場させるか……

第１８話　アリサの告白（前書き）

アリサファンの皆様、ごめんなさい！！！！

第１８話　アリサの告白

ｓｉｄｅ：高町なのは

土日が過ぎ、ようやく月曜日です。

土曜日は夜まで久遠と寝倒し、日曜日はレイジングハートとアリスが治ったことを告げられ、アリスの筐体の最終調整とハーケンの筐体とナイトファウルの整備をしました。

他には使えるようになったプラーナの慣らしなどもしました。

久遠とユーノですが、子どもモードでこれから過ごして行くようです。母様は大喜びで、２人が動物だったのは二の次のようです。とりあえずユーノ、骨は拾ってあげますよ。

月曜日、つまり今日の朝は御神流　貫と御神流　虎切の鍛練をしました。

そして朝食を食べて、ボロボロのただの屍のユーノと久遠を置いて、ハーケン、アリス、レイジングハートと一緒に学校に向かいます。

まだ所々道の舗装は終わり切ってない為、今日も歩きです。

「はぁ……」

『どうかしましたか？マスター』

「いえ、今日は体育があるんですよ」

『あ、なるほど、だから』

私の溜め息に反応したレイジングハートに答えると、アリスが納得といった感じで言います。

『マイスターは体育の成績だけは悪いんです』

『そうなんですか？』

『何故かな、戦闘中で魔法を使えば普通に陸戦とか出来るんだが。普段は全力疾走ですっころんだり、ボールには遊ばれるは、跳び箱には尻をぶつけて跳べないわで、とことん運動音痴というか、体育に嫌われてるのさ、これがな』

「レイジングハートに余計な事を吹き込まないでください」

『事実でしょう？マイスター』

なんかＡＬＩＣＥシステムのメインＡＩをアリスに入れてから思考がさらに人間のようになったんですが、少し優しさみに欠けているような気がするのは私だけですか？それともこれが本来の人間的思考を確立したアリスの性格でしょうか？

擬似人格ＯＳにはまだまだ未知の領域が沢山ある様ですね。まぁ、

ＡＬＩＣＥシステム自体、「Ａｄｖａｎｃｅｄ Ｌｏｇｉｓｔｉｃ＆ａｍｐ；Ｉｎｃｏｎｓｅｑｕｅｎｃｅ Ｃｏｇｎｉｚｉｎｇ Ｅｑｕｉｐｍｅｎｔ」の頭文字を並べてＡＬＩＣＥ——日本語訳で「発展型論理・非論理認識装置」という意味を持つとんでもシステムですから、わからないだらけ、未知数なのは仕方がありませんでしょう。

しかしこのＡＬＩＣＥシステムや自己進化完全自立型擬似人格コンピューターＯＳが、ひいては魔法世界に革新をもたらすものだと私は思います。

『とりあえず、急ごうぜブラザー』

『予鈴までまだ2時間もあるんですから、余裕では？』

『わかってないな、スクールって言うのは、朝早くに早めに教室に居る方が気分が良いんだぜ？それになにより静かだしな』

『なるほど、ほんの少しの一利はあるわけですね？』

『2人の話しに着いていけません』

『ＯＫ、置いてけぼりハート。その内覚えて行くさ』

『ハーケンの言う通りです、レイジングハート。貴女も少しずつ、人間を学んでいけば良いんです。焦らずゆっくりと』

『わかりました、アリス』

私はデバイス達の声をＢＧＭに、学校へ向けて歩き続けました。

１から学んで育ったアリス。

１からそう造ったハーケン。

互いに人間らしいのは、アリスは経験から、ハーケンはそういう風に造ったから。でも２人ともその感情は人間そのもの。

まだ日用経験の薄いレイジングハートも、何時かはハーケンやアリスに混じって普通にスムーズに会話する時もくるでしょう。

私の目指す物の原点にして完成品がある現状に、これからの人生も、少しは楽しく希望を持てていける。

人を支え、心を持つ機械のパートナーを造る。

私の将来の夢はそんなのもアリかもしれませんね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：アリサ・バニングス

土曜日、午前中だけの学校を休んだなのは。

何かあったのかとも思って、迷惑かとも思ったけど、翠屋の方に電話した。

なのはにメールや電話しても大丈夫だと言われそう、いや、絶対にそういう返事が返ってくるから、なのはのパパかママに確認したかった。

電話に出たのはなのはのパパ、士郎さんだった。

少し熱っぽいから大事を取って休みってわけらしい。

まぁ、あんな戦いをしてれば普通身体の調子が悪くなって当然よね。

お見舞いに行っても良かったけど、止めた。それであたしが風邪ひいたらなのはは自分の所為だって自分を責めるのは火を見るより明らかだし。

火…か――

《どうかしたのか？アリサ・バニングス》

《ううん。なんでもない》

ふと頭に響いた渋い声に返す。

念話という、まぁ、テレパスみたいなやつよ。

あたしの日常は、なのはが魔法使いであるのを知って――

そしてあの赤い石を拾ってから変わった。

大きさはビー玉より少し大きめの三角形ていうか、矢の先のような形をしてる赤い石。

そこから声が聞こえたのは次の日だった。

そこからあたしも、なのはの居る非日常に身を置く事になった。まぁ、なのはに比べたらまだまだ未熟で、曰く戦闘にはとても出せないと。

自分でもわかってる。

今まで特に戦う為に特訓なんてしたことないあたしには、そもそも基礎の下地すらまっさらの更地の状態。

素質はそれなりにあるらしいけど、それも磨いていかないとならない。

なのはと一緒に戦える日はいつになるかわからないけれど、肩を並べる程じゃなくても良い。いや、目指すはなのはの前に立ってなのはを守ることだけどさ。

今はなのはの戦場に立てるように頑張るだけよ！

今のあたしにはそれくらいしか出来ない。

《焦ることはない、アリサ・バニングス。焦りはミスを誘発し、己のミスは味方をも危険に曝す事になる。焦らず、しかし早く、訓練をこなしていけば良い。その訓練を終えた時こそ、君は君の戦場に立つ事になる》

《わかってる。ありがとう》

そう、今は焦っても仕方がない。歯痒い蹴れど、一歩ずつあたしは強くなるしかないのよ。

「おはようございます」

「おはよう！なのは！」

待っててなのは！あたしもすぐに追いついてみせるから！！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

「おはようございます、アリサ……その鼻、どうしたのですか？」

教室に着いて一番乗りかと思いきや、既にアリサが居ました。鼻筋

に絆創膏を付けて。

活発なアリサには変に似合いますが……。

「ああ、これ？ベッドから落ちてちょっとね。あははは」

「気をつけてくださいよ？かわいい顔に傷でも残ったら大変ですよ？」

「あんたこそ気をつけなさいよ」

私の言葉に言い返しながら、アリサは私の左頬――ゼルエルとの戦闘での傷痕に手を添えてきました。

「んっ…ア、アリ…サ…」

まだ新しい皮が張ったばかりで、くすぐったさがダイレクトで伝わってきます。

「一生残りそうな傷痕ばっかつけて――」

今度は首筋。

インナーで隠しきれない傷痕。

これはあの鴉のかまいたちの時についた傷痕。

「ア、アリ、ぅっ……んんっ」

首筋から手を離したアリサは、無言で私を抱き締めて――

「も、もし、もしも、もも、もらいて、居なかった、ら、あ、あた、し、が！なのはのこ、と、も、もらって！やるわよ！」

最初は耳元で囁くように、次第に大きくなって行った声――

や、あの、えと、うえええっΣ！！？？

「ア、アア、アリアリ、アリササ！！」

離れたくてもアリサは離してくれず、私はいきなりのことであたふたして――

や、わ、私ったら、小学生の女の子の告白されて、ここ、こんなに胸をドキドキさせるなんて、へへ、変態Σ！？ロリペドΣ！？

「……あんたの痛みも苦しみも悩みも悲しみも、半分あたしに寄越しなさいよ――」

「あうあうあうぅ～～」

もも、もう、どど、どうしたら良いんですか！？

『とんだ熱烈告白シーンに遭遇したな。アリス、ちゃんと――』

『バッチリ超々高画質で録画中ですハーケン。ビームスマートガン、間に合って良かったです』

兵器をビデオ録画に使わないでください！！

しかもビームスマートガンは長距離狙撃も想定されてる分無駄に画質高いんですからやめてぇぇぇぇーーーー！！！！！

「アア、アリリササ」

「アリサ……よ。今更間違えるんじゃないわよ…バカなのは……」

「み、みぃ…だ、誰か助けてですよぉ～～……」

『諦めな、マイソウルブラザー』

『おめでとうございます、マイスター』

『……おめでとうございます？』

デバイス達の優しさが心に痛い。

それとハーケン、後で覚えていなさい。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side：アリサ・バニングス

言った、とうとう言った。とうとう言っちゃった！！

メチャクチャ恥ずかしいけど、多分絶対すずかよりは先のはずよ！

あたしがなのはの事をちゃんと好きだと自覚したのも訓練の合間だった。

――『お前が強くなりたい理由はなんだ？』

そう訊かれた時、真っ先に浮かんだのは、血を流しながらも戦うなのはの背中――

あたしとなのはの出逢いは、一年生の頃。

ふざけ半分、興味半分ですずかの読んでた難しそうな本を取り上げて遊んでたのが始まり。

横から本をぶんどっていったなのはは、その本の背表紙であたしに脳天チョップをしてきた。

あれは今思い出しても相当痛かったわよ。現にたんこぶになったし。

邪魔されて怒ったあたしはなのはに殴りかかった。一歩も動かずにそれを正面から受けたなのは、しかも良い具合に顔面直撃。

でもなのはは少し眉を顰めただけで、平然とこう言ったのよ？

――「1回は1回ですから」

鼻血を垂らしながら無表情で言うもんだから、あたしは恐くて泣き出したのを覚えてる。

でもなのはは悪者のあたしを慰めてくれたの。泣き止むまで、背中を撫でていてくれた。

それがあたし達の始まり。

それも思い出して、気づいた。

あたしはなのはが好きで、あたしはなのはが傷ついて欲しくないから、なのはと一緒に戦って、なのはの負担を減らしたいんだと。

守るだなんて大層なことは言えないし言わない。

なのははただ突き進むだけ、あたしはあたしの意志で、その背中を追いかけて、何時か隣りを走っていくだけ。

そう思ったら、それに気づいたら、胸のモヤモヤした物が消えて、ストンと何かが落ちた。

多分あれはあたしがなのはを好きだって自覚したからだと思う。

あたしは、なのはに堕ちたんだ。

あのいつも無表情に見える鉄面皮でも、僅かに表情を変えて自己表現してたなのは。

この前の、痛みに耐えながら、闘志に満ち溢れていた、絶望的な状況の中でも諦めなかった、レジセイアに限界を超えた一撃を叩き込む、なのはの顔。

ハーケンと楽しそうな、あたし達に秘密にしていることを言えなくて自分を責める、なのはの顔。

弱いなのはもカッコイいなのはも強いなのはも泣きそうなのはも、全部あたしは好きなんだ。

なのはは優しくてカッコイいから、すずかもあたしに近い――いや、多分同じ気持ちを持ってるはず。それを自覚してないのは小学3年なら多分普通。

あたしは大分なのはに影響受けて染まってるから、そういう感情に

も気づけた。

あたしの好きは友達の好きじゃない。ｌｉｋｅじゃなくてｌｏｖｅ、愛の好きなんだから。

すずかには絶対に負けない！

あたしはなのはと一緒に戦って、何時か……なのはと添い遂げる！！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

な、なんてことですか――

ままま、まさかアリサからここ、っこっこ、告白されてしまうなんて！！

《あんたの痛みも苦しみも悩みも悲しみも、半分あたしに寄越しなさいよ――》

やめてぇぇぇぇーーーー！！！！！

わざわざ録画した音声を無駄に高音質の念話に変換してエンドレス

プレイなんてやめてぇぇぇぇーーーー！！！！！

「どうかしたのかな？なのはちゃん」

「さぁ？少しぶり返しでもきたんじゃないの？」

「た、大変だよアリサちゃん！すぐ保健室連れてってあげよう！！」

アリサ、何故諸悪の根元の貴女がそんな涼しい顔をしているんですか！！これじゃあひとり恥ずかしさに悶える私がアホの子じゃないですか！！

「よいしょっと……なのは、あんたちゃんとご飯食べてる？いくらなんでも軽すぎない？」

「ア、アリサ！、ああぁ、貴女！！」

「アリサちゃん、力持ちぃ……」

アリサの顔が間近です。少しでも動いたら頬にキス出来てしまいそうな距離です！

《ヒュゥー♪これはバーニングアリサ、プリンセス抱っことは、大胆だな》

《すずかにアドバンテージを稼ごうと大胆になってるんですね。わかります。これが若さか……》

《全然話しが見えません》

メカニカルズもメカニカルズで盛り上がっている様子。相変わらずひとりは置いてけぼりだが。

「すずか、あたしは保健室になのはを連れて行くから、先生に言っといて」

「あ、う、うん。私も後で行くから、なのはちゃんお願いね？」

「任せなさいよ！」

足で教室のドアを開けたアリサは、私を横抱き、俗に言うお姫様抱っこで私を保健室まで運んで行きました。私ですか？

恥ずかしさのオーバーブレイクで縮こまっていましたよ。

「せんせー！……留守？」

また足でドアを開けるアリサ。行儀が悪いですよ。

保健室には誰の気配もありません。

「ま、いっか」

アリサは私を布団に寝かせると、布団の上に座りました。

「アリサ……貴女は…」

「あたしは本気よ、なのは」

「あぅ……で、でも、私達は女の子同士――」

「ならあたしが男になったっていいわよ」

「な、なんで…そこまで……」

「それは秘密よ。こういうのは言わぬが花なのよ。知ってるでしょ？」

な、なんでしょう。アリサこんなに大人っぽかったですか！？

「まぁ、良くも悪くもあんたの所為よ。元々８歳児の自覚なんてなかったのを、あんだけアニメとからラノベとか漫画とか視たり読んだりすれば、表面も内面も価値観も変わるわよ、普通は」

も、もしかして私が全面的に悪いんですか！？

「うん。でも、悪くないわ。なのはの言う事を理解出来る嬉しさ。それになのはのお陰で価値観や物の見方も変わったお陰で、今までの子どものあたしじゃ、見れない、見えない物も見えるようになったから、なのはには感謝してるの。あたしは……」

「アリサ……」

「だからなのは、あんたが抱えてるの、全部じゃなくても、今すぐじゃなくてもいいから――」

言葉を切って、アリサが身を屈めてきた。

アリサの長い金髪の髪が、私の頭を包み隠して――

そして唇に触れる柔らかい感触。軽く触れ合うだけの――

「あたしにも……背負わせて――」

軽い……キス――

「ッΣ！？！？！？！？！？」

音にしたらボンッ！！
ていう音が出そうな程、今の私の顔は朱くて熱いはず。
ア、アリサが――
アリサに、キス……された――
「ふふっ、顔、真っ赤ね、なのは……カワイい」
「ゃ、いわ、ない…で……」
「い～や、なのはがかカワイいのは、なのはがなのはだからだもん。
何者にも出来ない、変えられない、なのはだからカワイいの」
「ゃぁ、はず、かし……」
使い古されていそうな口説き文句なのに、アリサが言うと、どうし
てこんなに胸がドキドキして――
やっぱり私って変態なんですか！？
「アリサちゃーん！」
「今日はここまでね。おやすみ、あたしのなのは」

アリサはそう言い残して、ベッドから立って、ベッドを囲むカーテンの外へ出て行きました。

「アリサちゃん、なのはちゃんは？」

「うん。やっぱり熱がぶり返してるみたい。先生居ないから一応ベッドに寝かせたから」

「そう、じゃあ、私が看てるから、アリサちゃんは教室戻っても良いよ」

「ううん。あたしもなのは心配だし、ノートは後でハーケンに教えて貰うから、あたしもここにいるわ」

「そ、そう？それじゃあ一緒に先生待ってようか？」

「そうしましょ。っと、確かシャナのヤツがポケットに――あったあった。これで暇潰しは出来るわね」

「それ、なのはちゃんと同じ……」

「そうよ。面白いから集めてるの」

「良いなぁ……私の部屋はもう本置けるスペースがないから…」

「読み終わったやつなら明日貸してあげるけど？」

「ほんと？ありがとうアリサちゃん！」

「はいはい、病人居るんだから静かにね？」

「あ、ごめんなさい、アリサちゃん」

寝てしまいましょう……。

なんか週明けからどっと疲れました――

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

第１８話　アリサの告白（後書き）

なんで私が書くとこうもキャラがいつの間にか暴走してるんだろうか？

アリサがもはやアリサじゃなくなってるよ。

そして久遠には攻めなのにアリサには受けの星光なのはがカワイすぎて死ねる。

皆さんの意見・感想をお待ちしております。

魔法少女バーニングアリサ、カウントダウン開始――

第１９話　キャプテンブラボーとアリサの道　憤る不思議の国のアリス　そして

今回はアリサ視点メインで進行します。

こんなコンビもアリですよね？中の人繋がりで――

第19話　キャプテンブラボーとアリサの道　憤る不思議の国のアリス　そして

side：アリサ・バニングス

「ブ・ラ・ボーーッ！バックブリーカー！！」

「いたたたた！たー！たー！あー！！いたい！！いたい！！いたたたたたあああああ！！！！」

バキ、メキ、ボキ、グキ――ポキ…

せ、背骨がああああーーーー！！

「ブラボー！オクトパス、ホールド！」

「にや〝あ〝あ〝あ〝あああああーーーー！！」

し、締ま、る、腕がああああああーーーー！！

「ブラボー！巴投げぇぃ！」

「キャアアーーー！！げふっ！」

「よし、柔軟終わり」

「い、つも、おも、け…ど、コレ…じゅ、な、ん……ガク」

「ブラーボー。１０分休憩後、いつもの特訓開始だ」

あたしがあの赤色の石――通称ヴァンシュジュエリーを拾った次の日。あの日曜日から始まった特訓。

あたしのイメージから生まれたキャプテンブラボー。

なんでアラストールじゃないのかなぁと思ったけど、まぁ、声は合ってるから良いとは思うけど。

あたしはアラストールよりもブラボーの方が性に合ってるのかも。こう、厳しいけど柔らくて、導いて見守ってくれるブラボーみたいなタイプは好きね。

でも私が昨夜に武装錬金を読んでたからかもしれないけど、毎回この柔軟はかなり堪える。

ヴァンシュジュエリー――

なんでも古代に存在したベルカという文化で使われていた技術で造られた願いを叶える石なんですって。現にヴァンシュジュエリーはＪジュエルに変化したから嘘じゃなくて本当。

ブラボーの人格とかその他諸々はあたしのイメージから生まれたらしいけど、その根底にはベルカの戦士の技術が沢山詰まっていて、プログラム体として実体化したらしたで、ブラボーみたいに、ブラボー拳とかブラボーラッシュとかブラボーチョップとか流星ブラボー脚とかブラボー正拳とか、半分野菜人に片足突っ込んでるような

光景を見せられて、あたしはその日の内からブラボーに特訓をつけて貰ってる。

とはいっても、今は基礎的な体力作りと、初歩的な体捌きを教えて貰ってるだけ。

あとわかんないけど、あたしは魔力よりも生命エネルギーの方が活発で豊富らしい。あたしはそれをプラーナって呼んでる。

存在の力とかでも良いんだけど、ブラボーの非常識さとなにより身体の底から湧き上がる力に、あたしはなのはだったらこう呼ぶんだろうと思ってプラーナにした。

そんな訳だけど、超古代の戦士であるブラボーにも、プラーナは未知のパワーらしく、あたしはブラボーから魔力運用を習いながら、その感覚を応用して、あとは”気”を使って戦うネギま！を参考にしてプラーナの使い方を独力で勉強する事にした。

ブラボーのスパルタン特訓は尋常じゃないほど大変だけど、６日間訓練をこなしただけでも、以前とは全然全く違う程、景色の移り変わりとか足の速さとか体力とかが変わったのがわかる。

「ぜぇ…はぁ…ぜぇ…はぁ…ぜぇ…はぁ…」

大の字で息を荒げてぶっ倒れる。

女の子としてなんか終わってるけどあたしは気にしない。とにかく疲れて気にする余裕もないし。

「よーし、今日の特訓は終わりだ！」

や、やっと……終わった……。

「さて、この6日間特訓をしたわけだが、どうだ？なにかが変わってるはずだ」

「はぁ…はぁ……っ、はぁ……まぁ、そりゃあ…ねぇ……」

この一週間で一番は体力が増してることだと思う。1日目と比べて疲れのレベルが違うんだもん。1日目はホントに死ぬようにばってんばってんだったし――

「明日はブラーボーな日曜日。すなわち休みだ。だから明日の訓練は休みだ」

「はぁ…はぁ……い、い…の…？」

「ああ、明日は友達の所にお茶しに行くんだろ？折角なんだ、明日はブラボーな休みを満喫した方が良いさ」

「…はぁ……でも…」

「…アリサ・バニングス、焦りは禁物だ。焦り過ぎて身体を壊して

しまえば事だ」

「…わかってるわ、キャプテンブラボー。うん。明日は休みを満喫するわ。あとおんぶして」

「あいわかった。それじゃあ帰るか、アリサ」

「あ～い…」

ブラボーに背負われて、家裏の庭から部屋に運んで貰う。

ブラボーの背中はプログラム体なんて思えない程生身でちゃんと温かくて安心する。

パパは忙しい身だし恥ずかしいからおんぶしてなんて言えないから、なんかちょっと良いかな？

なのはがあたしの心の憧れとしたなら、ブラボーは戦士として憧れてる。

カズキがブラボーに憧れるのもわかる。

だからあたしは、たとえあたしから生まれた擬似人格のブラボーでも、ブラボーに戦う術を教えて貰える事に誇りを持てる。

ブラボーに教えて貰った戦士としての技と誇りで、あたしはなのはと一緒に戦う。それがあたしの今の目標！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

今日は日曜日で、すずかの家にお茶に呼ばれました。

この約一週間。

私はまともにアリサとは会話出来ず、てかまともにアリサの顔すら見れませんでした。

だってアレですよ！

前世も告白されたことのない私に、今世でしかも一応同性のアリサからの告白ですよ！？

恥ずかしいったらなんて説明したら良いのか、私は恋する乙女ですか！？

『面白い程悶えてますね、ハーケン』

『そうだな。俺にインプットされたブラザーの記憶には女っ気は皆無だったし、バーニングアリサはリトルスクールガールでもあのルックスだ。ロリコンでなくてもフツーにこうなるぜ？』

『まぁ、わからないでもないですが』

「なのはー？まだかー？」

「っハΣ！！は、はい！今行きます！」

『ＯＫ、悶えガール。エルダーブラザーがお待ちかねだ。早く行こうぜ？』

「ええ」

私はハーケンを肩に乗せ、アリスを連れて洗面所からリビングへ行きます。

「クゥ……なのは…」

「お待たせしましたね、久遠、兄様」

駆け寄ってきた久遠を抱き締める。

久遠の外見なら普通に獣耳と尻尾をつけた子どもで通りますから、このまま月村家に連れて行く予定です。

ユーノも今日はすずかとアリサにちゃんと紹介する為に連れて行きます。

「それじゃあ、いってくる」

「いってきます」

「いってらっしゃーい」

姉様に見送られて、私達は家を出てバスに乗って月村邸に向かいます。

『それにしても、バスで遠出は初めてですねぇ』

『学校と家との距離と月村邸は離れてるからな』

「クゥ…」

アリスとハーケンの会話を聞きながら肩に頭を乗せてきた久遠の髪を優しく梳く。

今日、月村邸でジュエルシードが発動して、フェイト・テスタロッサと戦う。

私に彼女に勝てる可能性はとてつもなく低い。フェイト・テスタロッサの技量がわからない上、私と彼女の魔導師ランク差は歴然。

でも負けない。負けたくない。負けるわけにはいかない。

私の意地とプライドと目的の為に――

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：アリサ・バニングス

すずかの家に着いたのは、あたしが先らしい。あたしは生体エネルギーが高くて、しかもそれを引き出そうとして眠っていた力を揺り起こしているから、その影響で疲労は寝れば全快する身体になったらしい。

なんか少しずつ人間離れしつつあるなぁ……あたし。ま、なのはの為なら化け物以外ならなんだってなってやるわよ。サイボーグだろうがエヴォリュダーだろうがプログラム体だろうが――

「忍お嬢様、すずかお嬢様。恭也様となのはお嬢様をお連れしました」

「ご苦労様、ノエル」

「なのはちゃん、恭也さん」

来たわね、なのは――

《あれが、そうなのか。ふむ。アリサと同い年にしては鍛えられている身体付きだな。しかも兄も常人には見えん身体付きだ》

《まぁ、恭也さんはともかく、なのははもう戦ってる戦士だもの。あたしも早く、なのはみたいに強くなりたい》

《ブラーボー。その心意気は評価に値するが、今日はリラックスリラックス》

《おっと、いけない。そうだったわね》

「おはようございます。アリサ」

「おはよう。なのは！」

なのはに手を上げて返事を返す。

「っと、そっちの2人は誰よ？」

私達と同い年くらいの男の子と、頭から獣耳を生やした、なのはの後ろに隠れている女の子。

「男の子はユーノ、女の子は久遠。わけあって今は家に居候しています。機会が良かったので連れて来ました」

ユーノ？ユーノ……ユーノ……ユーノォΣ！？

「ユーノって……」

「あの…ユーノ……くん？」

「あ、あはは……ど、どうも……」

「「えええええーーーー！！！！！」」

こ、これにはさすがに驚いたわよ！！

てかなに！？あたし同い年の男の子の頭を撫でたり抱き締めたりしてたわけぇ！？

うっわ！恥っっず！！

すずかもおんなじ考えに至ったのか、ちょっと頬が朱い。

「なのはちゃん、そっちの肩の上と後ろにキラキラした光りを出して浮いているゲシュペンストとガンダムはどうしたの？」

あたし達が衝撃の事実に固まっている間に、忍さんはハーケンとアリスに興味が行ったらしい。

「ハーケン、アリス、忍さんに自己紹介を」

『ＯＫ、ブラザー』

ハーケンは返事をすると、なのはから飛び降りて着々の瞬間にブースターを吹かして落下の勢いを殺してテーブルに着地。アリスも静かにテーブルに着地。てかアリスの推進ってエーテルスラスターなの？

『グッドモーニング、エレガンツレディー。俺はハーケン、ハーケン・ブロウニング。ゲシュペンスト・ハーケンの管制人格で、マイソウルブラザーカルムレードパートナーなのはの造った自己進化完全自立型擬似人格コンピューターＯＳ搭載のロボッツさ』

『同じくＳガンダムの自己進化完全自立型擬似人格コンピューターＯＳにして管制人格兼ＡＬＩＣＥシステムの中枢コア兼ファミリアのアリスです。よろしくお願いします』

「自己進化完全自立型擬似人格コンピューターＯＳ……言葉通りの物なら、スゴい物を造っちゃったのね、なのはちゃん」

「恐縮です。今この２人でデータを取りながらデチューン版の製作を検討中で、その内特許を取得する予定です」

「あら、それじゃあ商品化したら１機買おうかしら？」

「家族割引でご提供させていただきます」

「なのはちゃん上手いこと言うわねぇ。恭也、結婚はいつにする？」

「なのはも忍も、からかわないでくれ」

なんの前知識無しにアレの凄さを名前だけで理解出来る忍さんって何者Σ！？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

なのはが来たから、あたし達はみんなで庭に移ってお茶を飲みながら魔法についてなのはから語られた。念話でブラボーから補足説明も入れられて、なのはの集めてるジュエルシードがとっても危険な物だっていうのは再確認出来た。でも同じロストロギアで似たようなヴァンシュジュエリーとは偉い違いよね。このヴァンシュジュエリーはあたしに師匠と戦う為の力をくれたのに。

「本当にごめんなさい！！僕がジュエルシードを見つけてしまったばっかりに、なのはどころか2人まで危険な目にあわせてしまった！」

「なに言ってんのよユーノ。そもそもジュエルシードが地球にやって来たのはあんたの管轄外でしょうに、あたしはあんたの行動力を認めるし、好ましく思うわ」

それにジュエルシードのお陰で、あたしは自分の気持ちに自覚を持てたし、ブラボーという尊敬する師匠も得られた。

ジュエルシードがなかった、ユーノがジュエルシードを見つけなかったら、あたしは他の誰か、それこそ大人になって普通に男を好きになって結婚してたかもしれない。ブラボーとは逢わなかったかもしれない。ヴァンシュジュエリーも拾わなかったかもしれない。IFのあたしはそういう選択をしてたかもしれない。だからあたしはユーノに感謝こそすれども恨みなんてない。ユーノが居たからジュエルシードは地球にやって来て、あたしはなのはを愛してブラボーに逢えて、これからベルカの戦士になろうとしている。

運命の歯車が噛み合わさらなかったら、今のあたしはここに居ない。だからあたしはユーノを悪いだなんて思わない。むしろひとりでも被害を食い止めようと、一見無謀だけど見知らぬ土地に単身乗り込んで来たユーノの勇気をあたしは認める。

「私も、ユーノくんはスゴいと思う。同じ立場じゃ、私は何もしなかったと思うから…」

「2人とも……」

「だからしんみりするんじゃないわよ。ユーノが居たから、あたし達はまた友達が増えたんだもん」

「うん。アリサちゃんの言う通り。ユーノくん、久遠ちゃん。私とお友達になろう！」

「え、えっと、でも……」

「クォン！？久遠……も？とも…だち…？」

「うん！」

すずかもあたしと同じみたいね。

「よろしくね、ユーノくん、久遠ちゃん。私のことはすずかって呼んでね！」

「あたしもアリサで良いわよ？」

「…すずか……アリサ…ありがとう」

「すずか…アリサ……クォン！」

「あ、コラ！久遠重い！」

「クォン！アリサ、すずか、久遠のともだち！」

またあたし達に騒がしい仲間が増えた瞬間だった。

世に不思議は多けれど、どれほど奇天烈奇々怪々なデキゴトも、ヒトが居なければ、ヒトが視なければ、ヒトが関わらなければ、ただのゲンショウ、ただ過ぎていくだけのコトガラ――

人、ひと、ヒト――

ヒトこそ、この世で最も摩訶不思議なイキモノ――

ユーノが居なければ、出逢うこともなかったコトガラの数々と縁の数々――

この世には偶然なんてない、あるのは『必然』だけ――

侑子さんの言う通りかもね。

この世界、この次元、この時空、この時間軸に居るあたしは必然に導かれて今の選択肢を歩んでいるのかもしれない。

必然かもしれない、でも自分で選択して納得して、今のあたしは居る。それは必然でも偶然でも運命でも宿命でもない。『あたし』自身の選択。あたしはそう思う、信じる。侑子さんが実際に目の前に居ても断言する。あたしはあたしの意志と選択でなのはと友達になって、魔法と出会って、なのはを愛して、ブラボーに憧れて、ベルカの戦士になる！

なのはと一緒に戦う為に――

ピキーンッ

「……（今の…）」

「ッΣ！？」

「どうかしたの？なのはちゃん」

「…いえ、少し御手洗いに行きたくなってきて…」

《ブラボー、今の感覚…》

《ああ、断定は出来ないが、高町なのはの反応から推察するに――》

《《ジュエルシード！》》

《ブラボー、場所はわかる？》

《聞いてどうする？まさか封印しに行く気か、アリサ・バニングス》

さっきまでのブラボーじゃない。

戦士・キャプテンブラボーがあたしに問う。

《お前はまだ訓練すら終えていない。武器もない、戦う術もない。
そんなひ弱なお前が行った所で、高町なのはの邪魔になるだけだ》

《わかってるわブラボー。でもなのはが何をするのか、サーチャーくらい飛ばす許可は頂戴》

《……1機だけだ》

《…ありがとう、ブラボー》

私達が念話で会話している間に御手洗いを嘘を吐いてどこかに行くなのはと、付き添いで飛んでいくアリス。

ハーケンはユーノを連れて散策に行くと言い出して、ユーノはハーケンを肩に乗せて席を立つ。多分後で合流する気ね。

「ごめんすずか、あたしも少しトイレ行ってくるから、久遠をお願いね」

「うん。任せてアリサちゃん」

すずかの純粋さに良心が痛い。

あたしはすずかから見えない距離まで行くと、物陰に隠れてベルカ式魔法陣を小さく展開する。なのはの行った方向とジュエルシードを感じた方向が一緒とブラボーが教えてくれた。

あたしは1つだけサーチャーを飛ばして擬似視覚を繋げてなのはを探した。

「（見つけた！って、何よアレ！？ネコ？トラ？何よ！？）」

なんかトラっていうかヒョウっぽい動物がなのはと対峙していた。

とりあえずなのはにちなんでジュエルシードの暴走体って呼称するけど、暴走体はなのはに爪を立てて襲いかかった！

でも暴走体が動いた瞬間に、なのはは一瞬姿を消した。視覚だけじゃわかんないわ！音声機能ＯＮ！

「我が一撃は騎士のランス！爆裂！！」

いつの間にか飛びかかる暴走体の目の前になのは居て、脚には紫電を纏っていて、ある程度離れてるあたしでも強烈に感じるプラーナ。

「アトランティス！！ストライィィクッ！！」

ってえ！！

なんてもん生身で放ってんのよあの子Σ！？

『ＧＹＡＡＡＡＡｌｌｌｌ！！！！』

顔面を２回回転回し蹴りで蹴られ、さらに３撃目を後ろ回し蹴りで蹴られた暴走体は、痛々しい叫び声を上げながらなのはから見て右にすっ飛んで行った。

しかもダメ出しとばかりに、アリスがふっ飛ぶ暴走体にビームスマートガンを撃ち込んだ。

『トゥーソード版のアトランティス・ストライク。我がマイスターはなかなかどうして、エグいですねぇ』

「それは貴女もでしょう？アリス」

『いえいえ、マイスター程では』

「いえ、アリスも」

『私は要らない子ですか？』

『仕方がありません、レイジングハート。マイスターはまだブラスターシステムの後遺症が残っていてミッド式は使えないんですから、今回は私達に任せてくださいな』

『……わかりました。アリス。マスター、頑張ってください』

「ええ、ありがとうございます。レイジングハート」

『いえ…っ！来ます！！』

『人が喋っている時は！』

「静かに待つのがマナーですよ？トラさん」

復帰して牙を剥いて、背中に翼を生やして低空飛行して突っ込んで来た暴走体を、ジャンプで避けて上を取ったなのは。

アリスがビームサーベルで片方の翼の付け根を斬りながら、後ろにビームスマートガンの銃口を向けて前を向いたままもう片方の翼の付け根を撃ち抜いて、暴走体の翼を切断した。

ニュータイプかお前はΣ！！

そして上を取ってたなのはの拳の先には、環状魔法陣が展開されて、赤い光が集まって――

「カロリックスマッシュ！！」

暴走体の背中を殴りつけて、赤い光は暴走体の身体を貫いて、地面で大爆発を起こした。

「なのは！」

「ユーノ！封印を任せます！」

「ええっΣ！？」

「私はまだ魔法を使えません！封印出来るのは今、貴方だけです！」

「わ、わかった！」

やって来たユーノはなのはに頼まれて、足下に円形の翠色の魔法陣を――ブラボーによればミッドチルダ式魔法陣を展開した。

「妙なる響き　光となれ　許されざる者を　封印の輪に！ジュエルシード……封――うわっ！」

「ユーノ！？」

封印式を紡いでいたユーノを、黄色い光弾が邪魔した。

しかもその隙にユーノに向けて翼を治した暴走体が飛びかかった。

そしたらまたなのはが消えた。いったいどんな移動法したらサーチャーの認識領域外のスピード出せんのよ！？

「ねんころはねんころらしく――」

ユーノと暴走体の間に入ったなのは。右足にプラーナが集中する。

「コタツに入って寝てなさい！グラスヒール！！」

なのはが蹴りで暴走体の顎をカチ上げると、踵が爆発した！

蹴りと爆発で勢いのついた暴走体は、一番やわそうな懐をなのは晒していた。

『終わったな』

あたしはブラボーの言葉に頷いた。

なのはは腰溜めに両腕を引き絞っていた。そしてなのはの身体から視覚で見える程のプラーナが溢れ、その腕にはアトランティス・ストライクよりもさらに強力なプラーナを感じた。

「うおりゃあっ！！」

上から斜め下に拳を暴走体にめり込ませる。

『Ｇｙａ――』

「うおおおお！！！！」

ブラボーラッシュよりも残像の残るラッシュを暴走体の懐に叩き込む。

視ててこっちのお腹が痛くなるんだけど……。

『Ｇｙａ、ｇｙａａ……』

「ふんっ！！」

身体をくの字に曲げた暴走体の顎を、プラーナの集中した右のアッパーで打ち抜くなのは。

あ、牙が何本か逝ったわ……歯がむず痛い。

「貫け！！覇龍！！」

覇龍Σ！？まさか！！

なのははプラーナの集中した振り抜いた右腕を再度腰溜めに引き絞って、それを空にカチ上げた暴走体向けて正拳突き如く突き伸ばし放った。

覇気で出来た龍――覇龍を！

「これぞ奥義！轟覇機神拳！！」

覇龍は暴走体を呑み込んで、暴走体を突き抜けると、暴走体は大爆発。

なんていうか、地面に落下した暴走体は、表現出来ない程ボロボロなのにピクピクしてるから死んじゃあいないらしい。

『あの技、どうやら非殺傷付きらしい。おそらくは不殺の念が込められているのだろう』

心眼・ブラボーアイには驚くわよホント。

『さすがブラザー、スゲェシュラナックルだせ。んで?フレンズフェレットボーイを撃ったヤツはどこだ?』

『あそこに居ますよ。3時方向、林の先の電柱の上』

アリスがビームスマートガンを向ける先――

金髪で真っ黒装束の私達と同い年位の女の子が、斧っぽいデバイスをユーノの方に向けたまま、なんか小刻みにプルプル震えてた。目尻には涙が薄っすら見える。

やぁ、まぁ、アレはバイオレンスレベルがヤバすぎるわよね。普通に暴走体に同情するわ。

「貴女……ですか、ユーノを撃ったのは」

「ひっ！…っく、ロスト…ロギア、ジュエル、シード……いた、だいて、行き…ます…！」

涙眼で目的を言い切ったのは拍手だけど、はっきりビビってんのが丸分かりよ。

「ユーノ、封印を！」

「あ、う、うん！」

「っ、させない！」

「アリス！！」

『了解！スペリオルガンダム！目標を狙い撃つ！！』

ユーノを邪魔しようと動きだそうとした女の子に、アリスがビームスマートガンを連続で撃つ。

正確無比の一発必中の射撃に、女の子はバリアでビームを弾く。

防御は出来るらしいけど、機動力がありそうなあの女の子でも一発一発をガードしなきゃならないアリスの射撃の命中がコワい。

ホントにニュータイプじゃないの！？

でも女の子はさっきのなのはみたいに一瞬消えると、暴走体の目の

前に居て、斧が変形して魔力刃が出力して鎌になった。

「しまった！」

「ジュエルシード！封印！！」

女の子は地面に倒れていた暴走体に一閃、真っ二つに斬り裂いた。

暴走体は煙になって消え、後にはすずかんちの子猫と青いひし形の宝石――ジュエルシードが残った。

『Ｉｎｔｅｒｎａｌｉｚｅ．　Ｎｏ．１６』

ジュエルシードが女の子のデバイスコアに吸い込まれた。

『横取り泥棒とは、何をされるのか理解してのことでしょうね』

「く、私は、ジュエルシードを手に入れないとならない。だから…邪魔はしないで」

『ふざけるのも大概にしなさい。貴女如きに私のマイスターの戦いの邪魔はさせません』

隠しようもない怒気を孕んだ声で言い放つアリス。しかもビームス

マートガンの銃身が震えている。ほとほと人間ぽいわよね、あの子も。

「私も引けない……邪魔をするなら――」

『5対1……本気ですか？』

「たとえ何人でも……私は負けられない！」

対峙するなのは達と女の子。

『マイスター、私がやります。手出しは――』

「……わかりました。でも――」

『ご心配は無用ですよ。私は貴女の最初のデバイスにしてファミリア。そして戦う為の力たるガンダムのボディに、フルカネルリ式永久機関やＡＬＩＣＥシステムを搭載する私のどこに負ける要素がありますか？』

『強気だな、不思議の国のアリス』

『フフ、当たり前ですよ、ハーケン。貴方にもいずれわかりますよ』

『ＯＫ、ハッスルメカアリス。頑張れよ！』

『ＯＫです、ハーケン。さあ、死合いましょうか？真っ黒ガール？』

「……フェイト……フェイト・テスタロッサ……私の名前、真っ黒ガールじゃない…！」

『私はアリス！さぁ、踊りなさい。私の奏でる永久円舞曲－Ｅｎｄｌｅｓｓ　Ｗａｌｔｚ－で！！』

「行きます…！」

鎌を構える女の子とビームスマートガンを向けるアリス。

静寂の時が、２人の間に流れる。

「ッ！！」

『狙い撃つ！！』

ビームスマートガンを撃つアリス。

女の子はまた一瞬消えてアリスの真後ろに現れる。

『それは見切っていますよ！！』

後ろに大きく退くアリス。

女の子――フェイトが振り下ろした鎌は、悲しく空を断つ。

『今日の私は、容赦ありませんよ！！』

「キャア！！」

アリスのビームスマートガンがフェイトの右脚と左肩に命中する。

でもフェイトにケガはなかった。

でもフェイトはバックステップでアリスと間合いを開けると、肩を押さえながら空に飛ぶ。

「くっ」

『ケガはしませんが、関節を撃ち抜きました。自然治癒で十分治りますが、３０分程は動かせば痛みが走ることでしょう』

なのはもエグいけど、アリスも別方面でエグいわねぇ……。

「バルディッシュ、フォトンランサー連撃！」

『Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ．　Ｆｕｌｌ　ａｕｔｏ　ｆｉｒｅ．』

「Ｉフィールド・バリアーーーー！！！！！」

魔法を正面から受けたアリス。でも魔法はアリスに当たる前に光の粒子になって四散した。

あ、Ｉフィールドって、反則じゃない？てかＳガンにＩフィールドは積まれてないわよね！？

「フォトンランサーが！？」

『この程度の射撃魔法なら、私には通じませんよ！さて、私のターン！ミサイル・カーニバルです！！』

背中のブースター――今気づいたけど、なんかＺＺのブースターみたいにカバーが開いて、大量のミサイルが発射された。てかアレ本物Σ！？

「質量兵器Σ！？」

『Ｄｅｆｅｎｓｅｒ．』

「キャァァァー！！」

フェイトはバリアで防いだけど、爆煙がヒドい。アレは防ぐんじゃなくて避けるべきだったわね。

「バル、ディッシュ！」

『Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ．』

フェイトがデバイス――バルディッシュを振るうと、魔力刃がブーメランの様にアリスに飛んで行った。

『甘いですよ！』

ブースターを吹かして若葉色の煌めく粒子を放ちながら、アリスはあえて魔力刃に飛び込んでいく。

『相対速度２．２！バレルロール！！』

魔力刃を肩のスラスターを吹かしてバレルロールで回避すると、そのままビームスマートガンを撃った。

『Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ．』

『ッ！？…右ぃぃっ！！』

「なっ！？」

フェイトが消えて、アリスの右に現れた！

アリスはビームスマートガンを撃った。でもフェイトは頬に掠めただけだった。

「っ、はああっ！！」

『なんとおおおおっっ！！！！！』

バルディッシュを振り下ろすフェイト。アリスはビームサーベルを下から斬り上げて迎え撃つ。

『キャァァーー！！』

「アリス！！」

「あっ」

体格差と出力差、力の差なのか、推し負けたアリスは右腕を肩から斬り裂かれた。

まるで人間の血の様に青緑の液体が吹き出した。

まさかファフナーみたいに――てかアリスにもＡＬＩＣＥと同じで痛覚があんの！？

『っぐぅぅ、あああああ！！！！』

「ぐっ、ああっ！」

アリスが左手のビームサーベルをフェイトに向けて連続で振るう。

機械だからか、小さいからか、そのスピードは疾い――

『もらったっ！！』

「しッΣ！？」

アリスの連斬を捌き切れなくなったフェイトの隙を突いて、ビームサーベルを突きの型でフェイトに突っ込む。

ちょΣ！？サーベルはダメでしょアリス！！

「サンダースマッシャー！！」

『え？キャアアアア！！！！』

「アリスーーーー！！！！」

光りの中に消えたアリスと、木霊するなのはの叫び声。
光りの中から装甲が所々溶けたり焦げたりしたアリスが真っ逆さまに墜ちる。
「フェイトは――やらせない！！」
突然現れた青い髪の女の子が、何かをアリスに振り下ろす。
ヤバい！今アリスに強い衝撃を与えたら！！
「ディバインブレイカァァァァーーーー！！！！」
あの時の槍型のデバイスで上空に飛んでる青髪の女の子に向かってなのはが突っ込んできた！
てなのは！ミッド式は使えないんじゃ！！
「くっ！！邪魔するな！」
「私の半身をっ！！させるかあああああーーーーー！！！！！」
ぶつかり合うなのはと青髪の女の子――てかフェイトに激似なんだけど！！双子Σ！？

「レヴィ！！」
「フェイト！！」
「…うん！」

目配せし合ったフェイトとレヴィって呼ばれた女の子。

「アインス！！」
「っ、くぅっ！！」

レヴィと競り合っていたなのはが、レヴィがデバイス――これまたフェイトのヤツとそっくりのデバイスを振り抜いて、競り負けたなのはが弾かれた。

そして弾かれた先にはフェイトが腕を突き出して、ミッド式魔法陣を展開して待ち構えていた。

「ツヴァイ！」

『Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ．　Ｆｕｌｌ　ａｕｔｏ　ｆｉｒｅ．』

「キャァァァーー！！」

零距離での直接連続射撃！？アレじゃあバリアジャケットだけじゃ！！

射撃を放ったフェイトはダメ押しとばかりに斧型になったバルディッシュでなのはをフルスイングで打ちつけた。

「がふっ！」

そしてレヴィは青い光に身を包んで、巨大な刀身が青い大剣――斬艦刀みたいな大剣に変形したデバイスを構えて、フェイトも身体に黄色い光を纏って、また鎌に変形したバルディッシュを構えて――

「ツイン！」

「バード！」

レヴィは一直線、フェイトがレヴィの周りを複雑な軌道で、なのはに向かって飛んでいく。

ちょっと待ちなさいよ……。

その掛け声と2人で突っ込む技、あたし一個物凄く心当たりが――

「っ、なのはーーーーー！！！！！」

『待て！！アリサ・バニングスッ！！』

あたしはブラボーの声を無視して、なのはの名前を叫びながら駆け出していた。

あたしと同じく思い至ったなのはは、槍型のデバイス――レイジングハートを辛うじて盾にするように構えた。

「「ストラーーーイクッ！！」」

でも2人はなのはの行動を無駄な努力だと嘲笑うかのようにレイジングハートごと――

響く破砕音と物体を裂く音、そして――

「キャアアアアーーーーー！！！！！」

木霊するなのはの叫び声。

あの2人は――フェイトとレヴィは……なのはの身体をレイジングハートごと……クロスに――斬り裂いた。

「「『なのはーーーーー！！！！！』」」

飛び散る鮮血――

木霊するあたしとユーノとハーケンの叫び声。

スローモーションで墜ちるなのはとアリス――

なのはが……負け……た……？

第１９話　キャプテンブラボーとアリサの道　憤る不思議の国のアリス　そして

かなりの急展開に次ぐ急展開！！

やっと書きたかった初の山場にさしかかれたよ。

皆さんの意見・感想をお待ちしておりますよ！！

ちょいと誤字を修正しました。

第２０話　互いに譲れぬ信念を胸に……（前書き）

いろいろと、かなりぶっ飛びまくって暴走激走の回です。

何がしたいんだろか、私は、つか弱い星光なのははどこ行った？

第２０話　互いに譲れぬ信念を胸に……

ｓｉｄｅ：アリサ・バニングス

サーチャーからの映像を片目、目の前の景色を片目で見ながら、あたしは駆ける。

なのははユーノが魔法で受け止めた。

アリスは途中で立て直したけど背中のブースターから火を噴いて、着地はハーケンに支えられて無事だった。

「なのは！なのは！なのは！！」

「ぐっ、私は平気…です……でも、で、も…レイジング…ハートが…」

胸甲のお陰で致命傷は避けられ、魔力刃でも非殺傷はかかってるはずだから、そこまで深い傷じゃないのかもしれないけど、肩と胴の裂けたバリアジャケットから血を流すなのは。でもその視線は、涙に溢れたその瞳は、なのはの血だらけの手に握られているレイジングハートのデバイスコアに――

「私が……私が不甲斐ないばかりに……また、貴女を、こんな姿に、こんな傷だらけにっ！！」

なのははデバイスコアを握る手、左手を胸に抱きながら、右の拳を地面を砕く程の力でめり込ませた。

「っ、くっ、レイジングハート……リカバリー…スタート…」

なのははレイジングハートのデバイスコアに口づけると、胸を掻き押さえながら、桜色の光に包まれたレイジングハートのデバイスコアをユーノに渡した。

「な、なのは……」

「ユーノ、結界強化をお願いします……」

なのははゆらりと胸を押さえながら立ち上がると、ハーケンに腕を引かれながら危うく飛ぶアリスを一目見てから、空を仰ぎ見上げた。

そして尋常でないプラーナ――ううん。覇気が、なのはの身体から溢れ出した。

プラーナ以上に濃厚で存在感のある生命エネルギー――『覇気』。

プラーナが身体の生命エネルギーを表していると仮定すれば、覇気はその個人の身体と魂から溢れる生命エネルギー――

でもあんなに覇気を使ったら子どものなのはは！！

「私は愚かです……本当に、どうしようもないマスターです……」

髪の毛が逆立ち、その長さを増していく、いや、そればかりか――

「な、のは……」

『マ、マジ……か…』

なのはは身体から覇気を溢れかえらせながら、その身体が大きく――否、身体を成長させた。

なのはから溢れかえる覇気は収まったけれども――代わりになのはの身体の中を異常な覇気――生命エネルギーが駆け巡っているのが離れていてもわかる。

バリアジャケットもいつの間にか元通りに直っていた。

『彼女は……ただものではないな。これ程の気迫……ベルカの騎士でもそうは居ないぞ…』

「なのは…」

大人になったなのはは、少し伸びた前髪を掻き上げて位置を少しズラした。

あれが……大人のなのは…？

「変身……魔法？」

「わからない。でも全く魔力を感じなかった。油断しないで、レヴィ」

「わかってる、フェイト」

デバイスを構えるフェイトとレヴィ。

なのはは自然体のままで立っていた。

「バルディッシュ！」

「バルニフィカス！」

『『Ｇｅｔ　ｓｅｔ．』』

また光を纏って、フェイトとレヴィはなのはに突っ込んでいった。

レヴィが正面から大剣を――

「チェストォォォォォッ！！」

フェイトが一瞬消えてなのはの真後ろに現れて鎌を――

「はあああああっ！！」

振り下ろした――

「第４の結印は『旧き印』――エルダーサイン――脅威と敵意を祓うもの成り」

なのはは両腕をそれぞれフェイトとレヴィに向けた。

腕の先に現れたのは聖なる結印、五芒星の白い魔法陣。旧き印――エルダーサイン――

「受け止めた！？」

「でも魔力なんて感じないよ！」

火花を散らしながらせめぎ合う防御結界と魔力刃。

でもなのはは直立の自然体で腕を伸ばした体制から動いていない。

逆にフェイトとレヴィは腕に力を込めてるからか、腕や肩が、デバイスが小刻みに揺れている。

あたしはなのはを見て背筋が凍った。

今のなのはの雰囲気、気迫には怒りを感じる。

でも顔——前髪で隠れて影になって分かり難い表情には、色がなかった。

無表情じゃない、無表情を通り越した本当に『無』の表情がそこにはあった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

あたしはアレを——なのはの『無』の表情を見たことがある。

それはあたし達がそれなりに会話し始めて、それなりに仲良くなり始めた頃。

まだ気の弱かったすずかは、男子にもいじられる対象になった事もあった。でもその時は今思い出しても、や、今だからこそ臓物が煮

えくり返りそうだ。

すずかはなのはとは別ベクトルでまたカワイいからさ、その時は親が会社の社長でお金持ちで運動神経も良くて頭もあたしやなのは程じゃないけど、クラスでは１０位以内でそれなりに良い。あ、ちなみにあたしは学年２位、なのはは学年１位の頭脳よ。あたしＩＱテストで２００あったのに、なのははいくつなのかまだ聞いてないのよね。あとで訊こう。

っと、閑話休題――

んで、顔も良い、ボンボンのお坊ちゃんが居たんだけどさ。

そいつがまたウザいナルシでね、世界は自分を中心に回っていて、自分は何をしても許されるって言い張って、よりにもよってすずかを嫁にするって言い出して、しかも拒否権は無いって言って、さらに断ったらパパやママが黙っていないぞ？家族がどうなっても良いのか？って脅迫までしてきたのよ！？

周りは余りの異常さに一歩引いて事態を見てたし、昼休みで近くに先生居ないし、すずかは怖がって泣くしで、あたしはせっかく出来た友達を泣かせるアイツが赦せなくて、堪忍袋の尾が切れそうだったんだけど。

――「おやおや、これはこれは、学年筆記成績トップで唯一体育はダメダメの高町なのはちゃんじゃないか。いったいこの僕に何か用かい？」

――「すずかが泣いています。謝って下さい」

――「ふっ、何を言うかと思えば、彼女は僕の告白に感激のあまり嬉し泣きをしているんだよ」

――「貴方の眼は節穴の様ですね、眼科医……や、精神科医をお薦めしますよ？幸いにも、兄の知り合いに医師が居るものですから」

――「ははっ、学年トップも勉強は出来ても一般教養はやっぱり子ども相応らしい。謝るのなら今の内だよ？僕はこの世で一番偉いんだからさ」

――「眼科医や精神科医より先に脳外科医に診せた方がよろしい様ですね。勘違いのボンボンのガキはこれだから困る。いったいどんな生活環境で育てばこんなにバカでアホでボケの脳味噌ウジ虫変態淫語製造機乱痴気野郎が出来上がるんでしょうね？」

――「キミは自分の立場がわかってないようだね？キミは何を僕に言いたいんだい？」

――「学の無いガキはコレだから……人語を解せないのならば、言葉は不要ですね」

――「…僕を怒らせて、どうなるかわかっているのかい？キミだけじゃない。キミも、キミの家族も破滅さ。そう言えばキミの家族には母と姉が居たね。容姿も良いし。パパも喜んでくれるかな？」

――「成る程、蛙の子は蛙。下衆の親は同じく下衆の人種でしたか……」

――「……お前ぇ……いい加減にしろよ！」

――「ぐっ…」

――「どうだい？僕の蹴りは？これでも空手をやってるからね」

――「なのはちゃん！やめて！なのはちゃんにいじわるしないで、キャ！」

――「ははっ、良い気味だな高町なのはちゃん。すずかちゃんもお母さんもお姉さんも、僕が貰っていくよ」

――「……堪忍袋の尾が切れた…」

それがなのはの『無』の表情を見た、最初だった。

――「すずかに手を出すには飽き足らず、母様や姉様にまで毒牙にかけようと画策しようとは。外道――断つべし！」

――「やるのかい？体育はダメダメのなのはちゃんが、この僕と？とんだお笑い種だね」

――「喜劇と笑わば笑え、外道に話す舌など持たぬ、刮目するが良い」

――「なっΣ！？」

その時、一瞬だけなのはは消えて、アイツの懐に居た。

先ずは膝蹴り――

――「ぐえぶっ」

膝蹴りでアイツをすずかから僅かに引き離したなのはは、そのまま曲げた脚を上に伸ばして、アイツの顎を蹴り上げ――

――「ぎゃぴ！」

――「我が一撃は騎士のランス！爆裂！！」

回転回し蹴りの2連撃でアイツをさらに引き離した。

声を上げなかったから、今だからわかるけど、顎の蹴り上げで気絶してたのね。んで続きだけど――

そこから踵落としで脳天を蹴り落とし、アイツは顎を打ち、浮き上がったアイツの顔面向けて3撃目の後ろ回し蹴り――

――「アトランティス・ストライク！！」

グキッって音がしたのも覚えてる。多分鼻の骨が逝った音ね、アレ。

いくら一年生で小柄で女の子のなのはでも、後ろ回し蹴りはかなりの勢いと威力だったらしく、アイツは教室のドアまですっ飛んでいった。まぁ、距離は１ｍもなかったしね。

――「光射す世界に！汝等闇黒、棲まう場所無し！！渇かず！　飢えず！　無に還れぇぇっ！！」

あの時のなのはは厨二病全開だったわねぇ……。正しくポーズもモーションも完璧だったし。

「レムリアァ、インパクトッ！！」

また片足をバネにして飛び出したなのはが、右手の指を曲げた掌打をドアに叩きつけられてもたれ座ってたアイツに叩き込んだ。

「昇華！」

まるで衝撃があとからきた様に、アイツごと教室のドアが２枚とも吹き飛んだ。

あの時の後ろ姿――

あの時のなのはは、白き王に重なって見えた。

そのあとアイツは救急車で緊急搬送。

鼻の骨は粉砕。顎の骨にも罅。肋骨も何本か逝ってたみたい。

んで、アイツの親が障害事件として裁判起こそうとしたけど、機械大好きで大人のなのはに抜かりなく、会話を録音したテープと、クラスのみんな、直接的被害者のすずかの証言があって、なのはは保護観察付きの無罪判決になった。

そしてそれにはパパも傍聴席に居て、しかもアイツの親の会社はパパの会社の子会社で、アイツの家族は会社からクビ。そのあとは知らないわ。

それを知ってるあたしは、フェイトとレヴィが無事に済むか、逆に心配になった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

結界でフェイトとレヴィを受け止め、顔色ひとつ変えないなのはは、僅かに腰を落とした。

なのはが動く――！！

「きえッΣ！？」

一瞬なのはが霞み消えた。さっきより速すぎて残像が残る程速いんだ。

「え？」

「フェイト！！逃げ――」

「空円脚！でえええいっ！！」

子ども体型とは全く馬力と威力も速さも違う後ろ回し蹴りは、フェイトを吹き飛ばした。

「かっはっ」

木を数本へし折って、フェイトはようやく止まって、ぶつかった木の根本にもたれ倒れた。

「フェイトーーー！！」

「今のはアリスの分――」

「よくもフェイトを！！」

レヴィは右薙で大剣を振るった。でもなのははその大剣を、覇気を纏った脚で踏み潰してブチ折った。

「ザンバーがΣ！？」

「そしてコレは――」

なのはの右手に禍々しくも力強い、でも正しい赤い覇気が集中する。

「真覇！剛掌閃ッ！！」

「がああああっ！！」

モロに右ストレートの直撃したレヴィの方は、フェイト以上の勢いで、バカみたいにすっ飛んで、フェイトの隣りにあった岩も砕いて、その後ろの木に当たってようやく止まった。

「コレが――レイジングハートの分です」

片膝を着いて、右腕を押さえながら、なのはは呟いた。

「なのは……」

『彼女は……危ういが、凄まじい戦士だな』

ブラボーの言う通り、なのはは危ういが、凄まじく強い。

でもそれが、身を削り、魂を削り、心を削り、生命を削って引き出しているような強さに思えて、あたしは気が気じゃない。このまま、こんな調子で戦い続けてたら、なのはは――

「…よ、くも……」

ふとサーチャーが拾った声。これはフェイト？レヴィ？

「…よく、も…よ、くも…よくも……よくも、よくも、よくも、よくも……よくもよくもよくもよくもよくもよくも――よくもっ！！」

声の主は、口から血を流しながら、バルニフィカスを杖に立ち上がったレヴィだった。

「くっ……」

身体を青い光――

レヴィは魔力、なのはは覇気で身を包んだ。

「よくもフェイトを！お前は絶対、ボクが倒す！！」

折れた大剣を再生成させたレヴィが、なのはに切っ先を向けながら突進する！

「突き破れ！ボクのバルニフィカス！！」

「第４の結印よ！！」

レヴィの突撃をなのはは防御結界でガードした。

「ぐっ！！」

「いっけえええええーーーー！！！！！」

火花を散らしてせめぎ合う結界と切っ先。

なのはは突き出していた左腕だけじゃなく右腕も伸ばして、さらにプラーナを――覇気を込めた。

防御結界の内側に薄く張られた青い障壁。

レヴィのバルニフィカスは、先端のほんの数ミリが結界を突き抜けてきていた。内側の障壁はそれをガードして押し返す為に張ってるらしい。

ようやくなのは達のもとに着いて、擬似視覚から本物の視覚で、なのはの戦いを焼きつける。

日常のすぐ裏にある非日常で、いつも命を賭けて戦うあたしの想い人の勝利を願いながら、あたしはなのはとレヴィの戦いに刮目する。

「ッ……はっ！」

「ぐあっ！！」

覇気で気当てでもしたのか、レヴィが急に後ろに吹っ飛んだ。

「くっ！」

「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…はぁ……」

空中で宙返りして着々するレヴィ。

なのはは傍目から見てももういっぱいいっぱいだ。

「強いんだね……フェイトやリニス以外に、こんなに強い人と闘ったの、初めてだよ。でも――だから負けられない。ボクはこの力を、フェイトの為に使う事を、フェイトの為に振るう事を、フェイトの邪魔をするヤツを粉砕する為にって！ボクは決めたんだ！！」

あの子――あたしと同じなんだ。

「だから――バルニフィカス！！」

『Ｇａｔ　ｓｅｔ．』

「リミット解除！マキシマムドライブ！！コード「雲燿の太刀」！！」

レヴィの魔力が爆発的に高まって、足下に魔法陣が展開される。それは三角形で頂点は円形の魔法陣――ベルカ式魔法陣。

《あの子、ベルカの騎士なの！？》

《確かにベルカ式だが……何故だ、構成式にミッド式の物が混じっている。あの魔法陣はなんだ？》

あたしとブラボーの疑問を余所に、バルニフィカスの刀身がさらに倍に延長する。

「ミッド式を内包したベルカ式魔法陣…近代ベルカ式ですか。そしてこの魔力の高まり方……あの子、独力でブラスター1を使った…？ならば私もそれに応えなければなりませんね」

ぶつぶつ言いながら、なのははなのはで右腕を突き出して、その先にあの青い魔法陣が現れる。

「出でよ、ディスカッター！」

若葉色の粒子が魔法陣に集い、抜き身のサイバスターのディスカッターが現れ、それを手に取るなのは。

「我が名はレヴィ。レヴィ・テスタロッサ！我こそは、フェイトの剣なり！！」

「霊燃機関全力稼働！超攻勢防御結界！！」

レヴィの身体から魔力が――

なのはの身体からプラーナが――

鉄砲水の如く溢れ出して、それぞれの剣へと集中する。

「刮目せよ！これが我が太刀筋なり！！届け！雲燿の疾さまで！！

はあああっ！！」

レヴィは、その身には不相応な程巨大な大剣――斬艦刀を肩に担いで天に飛ぶ！

「霊厳荒かなる刃よ！我に仇なす諸悪を尽く殺戮せしめん！！」

ディスカッターを地面に突き刺したなのはの足下にはまた青い魔法陣が現れて、突き刺したディスカッターが分身。それはすべてで１１本存在し、なのはの周囲を取り囲んだ。

なのはが左手を上げると、最初に地面に突き刺したディスカッター以外の分身したディスカッターが宙に浮き上がる。

「一刀両断！！」

「往け！！」

上から斬艦刀を振り下ろしながら、落下速度も味方につけたレヴィへ、分身したディスカッターが次々と射出されていく。でも斬艦刀はそのことごとくを両断し、粉砕していく！

「チェストォォォォ！！！！」

「久遠の虚無へと還れっ！！」

振り下ろされる斬艦刀に、なのははディスカッターといつの間にか左手に握っていたバニティリッパーに覇気を込めてクロスの斬撃で応戦した。

「はあああああああああああっ！！！！！！」

「でえやあああああああああああっ！！！！！！」

魔力で出来た斬艦刀と、覇気でコーティングされたディスカッターとバニティリッパー。

両者のサイズは歴然だが、使い手の体格差か、威力は拮抗していた。

「ボクは負けられない！！フェイトの為にも、負けられないんだーーーーー！！！！！」

「っぐ！！」

ピキッ

ディスカッターとバニティリッパーに僅かに罅が入った瞬間。光の柱が、なのはとレヴィを包んだ。

「なのはーーーーー！！！！！」

「レヴィーーーーー！！！！！」

あたしとフェイトの叫び声が、爆音に遮られて、悲しく響いた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

気づいたら私は、いつぞやの真っ白な空間に、また来ていました。

「なのは！！」

手元には砕け散ったディスカッターとバニティリッパー、そして魔力で出来た斬艦刀の破片。

私の名前を呼んだのは――目の前の少女、レヴィ・テスタロッサ。

容姿はマテリアルズの『力』を司る、レヴィ・ザ・スラッシャーとまったく同じ。多分性格も。

でも違うのはその力の振るい方――

自分の為でなく、人の為に振るう。ただその一心で振るわれた力は――

有史より、その力は無敵無敗――

「相討ち――と、言いたいところですが、私の負けですね」

胸甲が砕け、バリアジャケットもインナーも斬り裂かれて、僅かに血が流れ出した。

そう、レヴィの刃は――私に届いていた。

「なのは……ボクは別に」

「互いに引けない物を持つ者同士、衝突は必至です」

「なのは……ボク、ボクは…」

「頑張りましたね、レヴィ。貴女の強さ、しかと胸に刻み込みました。文字通りに……ね？」

「うっ…ひっ…っ……ごめ、ごめ、な…さ、い…」

「ほらほら、負けた私がこんなにも清々しいのに、勝った貴女が泣いてしまってどうするんですか？」

私はバリアジャケットのアウトスカートの裾でレヴィの涙を拭いていきます。

大人の身体になったからでしょうか？

なんかこう、守ってあげたくなるんですよねぇ……。もしやこれが俗に言う母性本能という物でしょうか？

私はまだ泣き止まないレヴィをそっと抱き締めると、背中を優しく軽く叩く。

撫でるよりもこっちの方が個人的には落ち着くので。

「な、のは……」

「なんですか？」

「もっと……名前、呼んで……ボクの…名前」

「…レヴィ」

「ん…」

私がレヴィの名前を囁くと、レヴィは嬉しそうに私の胸に顔を埋めてきました。

いつの間にかケガも治ってバリアジャケットも直って――

なんなんですかね？この空間？

トランザム・バーストによる意識共有空間のように、エーテル版の意識共有空間なんでしょうかねえ？

まぁ、どうでも良いですか――

「レヴィ……そろそろ時間のようですよ？」

「やだ！なのはから離れたらまたなのはと戦わなくちゃならなくなる。そんなのやだ！！」

「わがままを言ってはいけませんよ？レヴィ。貴女はフェイトの剣なのでしょう？あの言葉は、偽りなのですか？」

「ウソなもんか！！ボクはフェイトの剣だもん！！でもなのはと戦うのもやだ！！」

「レヴィ、私も貴女も互いに引けない理由と想いがあります。私達の目標が共通である限り、私達は戦わなくてはなりません。それは互いに譲れないものを背負っているから」

「…やだよぉ……そんなの…」

「レヴィ。貴女はフェイトを守る剣なのでしょう？自分の言った事を貫き通せない貴女には、力で勝てても、心では私には勝てません」

「べ、別に、ボクはなのはに勝ちたいわけじゃ」

「私を倒す。そう言ったのは貴女ですよ？」

「そ、それはほら！い、勢いだよ勢い！フェイトがやられて、ボクもちょっとアタマにきてたから」

「自分の発した言葉には責任を持ちなさい。良いですね？」

「うっ……はぁい…」

はて、なぜ私はレヴィに説教紛いの事をしているんでしょうか？

まぁ、良いでしょう――

「レヴィ、ひとつ言葉を教えます。私が好きな言葉のひとつです」

「なのはの好きな言葉？どんなどんな？」

「慌てない慌てない。コホン――善でも悪でも、最後まで貫き通せた信念に、偽りなどは何一つない」

「善でも悪でも……」

「最後まで貫き通せた信念に」

「偽りなどは何一つ――」

「「ない」」

「カッコイい！！カッコイいね！なのは！」

「カッコイいと感じるだけではダメです。この言葉の意味を、胸に刻みなさい、レヴィ。たとえ私達が今日明日にも再びぶつかり合おうとも、私達は互いの信念を貫き通して戦わなくてはなりません。私は自分の信念を貫く為ならば、貴女とも、フェイト・テスタロッサとも、戦います」

そう、私の行いが自己満足だろうとも、私は私の意志を貫く！

「たとえ相手が誰であろうと自分の信念を賭けて戦うコトに、悔いなどありません」

「……なのははスゴいや。ねぇ、なのは何歳なの？」

「精神的には９歳ですが、身体は２５歳くらいでしょうか？」

私があの時イメージしていたのは、最強の肉体。高町なのはとしての最強像は、やはり２５歳の高町なのはですから、多分そんな感じになっているはずです。それなら母性本能も湧いて当たり前ですか、ヴィヴィオを育てていっぱしのお母さんをやってるんですからね。

「すっごーい！オトナだオトナ！」

「まぁ、それ云々はともかく、レヴィ。貴女も、貴女の信念を貫き

なさい。たとえそれが険しい道でも。そしてその道の果て、その道の先が私と交わることあらば、私達は互いに戦うのではなく、共に戦う未来もあるでしょう」

「ほんと？ボクとフェイトとなのはと一緒に戦えるの？」

「貴女が自分の意志と信念を貫き通した先、貴女がその未来を信じるならば、いつか必ず――」

「……わかった。それじゃあなのははその時までボクのライバルに認定！！うん、ボクってば天才だね！！」

「ふふっ、次は勝ちますからね、私が――私達が」

「ボクも――ボク達だって負けない！！」

私達は互いに拳を突け合い。意識がまた真っ白に染まっていった。

「大切な存在を死守せんとする強い意志――言葉の意味が少し通じませんが、あの子も、そういう子なのでしょうね」

羨ましい。私には出来ない戦いです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ぅっ……」

「なのは！！」

アリサ？

目が覚めたら、アリサの声が聞こえました。

「……あの子達は…？」

「行っちゃったわよ。次もボク達が勝つ！！って伝言残してね」

「そうですか……」

「……あんた、こんな戦い方続けてたら何時か」

「ウェイト。それ以上は言わぬが花ですよ？バーニングアリサ」

私は立ち上がって朱色に染まり始めた空を見上げる。

「アリス、身体は平気ですか？」

『私よりご自分の心配をなさってくださいよ。バカマイスター』

「ふふっ、私は大丈夫ですよ。でも、どう説明しましょうかねぇ……これ」

未だにバリアジャケットのままの自分を見る。肩と胸部に掛かる重量感がなんとも――

「戻れないの？なのは」

「つい勢いでやっちゃいましたからね。戻り方がわかりません」

「あんた非常識も程々にしなさいよ……」

『俺は今のナイスレディブラザーの方が好みだがな』

『黙れエロ助』

『ウェイト。不思議の国のアリス。頼むからサーベルはやめてくれ』

「まぁ、なんとかなるでしょう」

「……あんた寿命縮んでるかもしれないのに、本人がそんなに暢気で良いの？」

「慌てても仕方がありませんよ。アリサ、とりあえずは状況をどう上手く話せば良いのかを考える時ですよ。とりあえずはすずかへの謝罪文でも考えておかないと、月村ライトニングボルテックスが落

ちてきますよ？」

「うぅっ！！ちょ、ちょっと！コワいこと言うんじゃないわよなのは！！」

「……私も自分で言ってて恐ろしく思いました」

すずかは母様に似た、静かに怒るタイプですから、メンタルの弱い私には非常に恐怖を感じる怒り方なんですよ。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

第２０話　互いに譲れぬ信念を胸に……（後書き）

レヴィがカワイくて死ねそう……
ちなみに２５歳星光なのはさんは、サイドポニーテールとかそんなんでなく、普通に垂らしたストレートで、前髪が目元に掛かるくらいに延びてます。
まぁ、イメージ湧かないなら普通に２５歳なＦｏｒｃｅななのはさんのイメージで十分です。

第一の山場の７５％が消化出来てホント良かった。

皆さんの感想をお待ちしております。

ちょいとアンケートです！
もしもレイハさんをハーケンやアリスのようにロボットボディにするならどんなのが良いでしょうか？
まぁ、あまりコアとかマイナーなのでなければ大体わかるので、皆さん意見をじゃんじゃんください！

第２１話　その心の内に秘めたるものは…（前書き）

こんなにも大勢の方に支えられていることを有り難く思います。

これからもよろしくお願いします。

第２１話　その心の内に秘めたるものは…

ｓｉｄｅ：高町なのは

「はっ！せい！てい！やっ！」

私は道場で本物の小太刀を振るっている。

身体の寸法が変わってしまった為、間合いの確認と、真剣を振るっても良いと、父様が許可を出してくれたからです。

あの後は色々と大変でした。

忍さんに私のおかれている状況を１～１０まで話したのですが、そのあとノエルさんと両脇を掴まれ、風呂に投げ入れられ、身体中を色々と洗い尽くされました。もうそれは色々――

家に帰れば帰ればで、母様と姉様にも忍さんと同じ説明をしたのですが、姉様はショックに真っ白に燃え尽きてしまいました。何せ末妹が１日にして外見的には第一子長女になってしまったわけですからね……しかも復活して人の胸を鷲掴みしたかと思えば今度は真っ白を通り越して塵になりました。そうなるくらいなら見るだけにしておけば良かったものを、姉様は相変わらずです。

母様のリアクションは特に、むしろいつも通りの笑顔で「あらあら、なのはがちょっと早く大人になっただけでしょ？士郎さん、明日はなのはの成人式祝いにしましょう」といいやがりました。母は強し

です。一度母様の思考パターンとかメンタル耐久指数が知りたいと本気で思いましたよ。

しかし困ってしまいました。

外見的には２５歳高町なのは。

密かに楽しみだった父様や兄様との入浴が出来なくなってしまったからです。

どうやっても元男の私には、父様や兄様の人生経験を語り聞く風呂という場所は私の１日の楽しみのひとつの場だったのですが、残念です。

さらには学校にも行けないことです。

戻る方法を模索してはいますが、ハーケンとアリスに調べて貰った限りでは、私は普通に人間の２５歳になってしまっているようです。胸部が少々たわわに実っていますが――

変身魔法を使うという案もありますが、魔力量に余裕がない私には変身魔法を連続して使っている余裕はありませんし、ミッド式魔法はまだ念話以外は使うだけでもリンカーコアから胸苦しさや痛みがフィードバックしてきます。

そんなわけで当分はこの姿で過ごすことを決意し、今日は姉様が一緒に新しい服や下着を買いに行ってくれるそうなのです。

何回真っ白になったり塵になったりハートブレイクするのか私には想像つきません。

「……改めてみるとナイスバディですね……本当に２５歳ですか？この身体」

しかし２３歳や１９歳は一片たりともイメージはしていなかった為、やっぱり２５歳なのでしょう。

「……重い…」

柔らかに変形する胸を手で持ち上げてみましたが、なんという重量感でしょう。とても言葉では言い表しきれない重みなのに柔らかいという不思議物体です。

「しかし珠の肌は傷物だらけですね……」

身体は成長しても傷痕は消えてはいません。いや、消す気もありません。

これは私が戦ってきた証。私にしかない、高町なのはにはない『私』自身の証。

軽いシャワーで済ませて、長い髪の毛をいつもよりかなりの時間をかけて乾かします。

長さは前は少し、脇は肩や胸にかかるくらいですが、後ろ髪が尋常でないほど長いのです。腰より下、太腿辺りまで伸びてますから。

一応髪型は肩辺りで一度ゴムで縛って後は垂れ流しで放置ですね。

ショートカットも良かったのですが、せっかく長いのですから、このままにしておくことにしました。

「お待たせしました、姉様」

「待ってましたぁ！！……くっ、なんと滲み出る卑しきオーラか…」

「バカやってないでたったといきますよ？姉様」

服はサイズ関係から兄様のワイシャツや上着にスラックスを借りていますが、さすがにブラは姉様のは小さく、母様のは大きくて合わなかったので、さらしを巻いて対応しています。ちょっと息苦しいですが。

「あぁ、あの愛くるしくて優しいかわいい妹は何処へ……」

「…２５歳はどうせババァですよ」

「す、拗ねないでよなのはぁ」

「姉様もあと数年したら私の気持ちが解るでしょう。ではいってきます」

「ちょ、待ってよなのは～！」

スタスタと私不機嫌です！っていうオーラを引き連れて、私は玄関から作業部屋へ向かいます。

『グッドモーニング、ビックブラザー。なかなかビッグスタイルもオシャレじゃないか』

「おはようございます、ハーケン」

作業部屋の2階の縁側で座っていたハーケンの挨拶に応えます。

「おはよう、なのは」

「おはようございます、ユーノ」

さらに下からは見えませんでしたが、身を乗り出してきたユーノにも返します。

私はジャンプして、2人の居る縁側まで飛び乗ります。高さは約2m強くらいです。

「な、なのは！」

『ヒュゥー♪こいつはたまげたぜ。ビッグになって運動神経も変わったらしいな』

「いえ、これは私のレアスキルですよ」

「『レアスキル？』」

私の言葉に2人して首を傾げられます。

「最近、この身体になって2、3日、色々やってみてわかったことですが、この運動神経のすべては私のレアスキル――造称イメージトレースのお陰です」

『OK、ブラザー。詳しく聞こうか？』

イメージトレース――

なんのひねりのない名前ですが、名前が能力を表してもいます。

イメージする事によってその動きを再現する。イメージは鮮明であればあるほど、トレース効力が増すレアスキル。

あの空円脚も剛掌閃も、勢いでやっていましたが、最近明確にイメージしてみたら他にも色々と出来る事が増えてきました。

ただ、このレアスキルには制限があり、トレース出来るのは身体の動きのみと、その身体で実行しゆる動きのみ。

今の私は大人の身体ですから色々と出来ますけど、子どもの身体で出来ないことを調べられれば良かったのですが――

「成る程、なのはは頭で考えながら戦っているから」

『戦闘の時だけあんなに動けた理由がこれで解決だな。だがもっと早く気づいてたら体育の成績だって良かったんじゃないか？』

「さあ、どうでしょう。体育もそれなりにイメージしてやってたんですがね。どうやら私は体育の神様に嫌われているようです」

『んな体育限定の神様が居るかよ』

「わかりませんよ？私達が認知出来ないことなんて世界には山ほどあるのですからね」

私はハーケンにそう言うと、縁側から作業部屋に入ります。

「おはようございます、アリス。調子はどうですか？」

『すこぶる良好で重畳ですよ、マイスター』

「そうですか。姉様と出かけるのですが、一緒に来ますか？」

『はい！喜んで！』

作業台の上に居たアリスは、背中の前回フェイト・テスタロッサとの戦いの為に急遽用意して装備したＺＺのヤツからＳガンダムのヤツに戻したブースターから若葉色に煌めくエーテル粒子を放ち、柔らかく飛び上がると、私の方まで飛んできました。

ＧＮ粒子とかないか、あとで調べてもみたいですね。

『マイスター、最終調整はあと１２％で終わる見込みです』

「なら明日辺りに起動実験が出来ますね」

『ええ、苦節一年８ヶ月、ようやくですね』

「ジュエルシードが手元になければ一生完成しなかったでしょうがね」

『そうかもしれませんね。でもお陰で私はまだまだ強くなれる。フェイト・テスタロッサになど負けてたまりますか！！』

フェイトに負けた所為か、変に熱の入ってしまったアリス。

既にＥｘパーツ製作も最終段階に差し掛かり、あとは頃合いをみてアリスの筐体であるＳガンダムに取り付けて最終調整をすれば実戦配備です。

あとはそろそろハーケンも自衛を出来るくらいには改良をしなければ。

１／６０　ゲシュペンスト・ファントム。

ロマンですね……。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

私は涙を垂れ流す姉様と玄関先で合流すると、バスで隣り街の遠見市のショッピングモールまでやってきました。

「平日なのに人がわんさか多いなぁ……」

「御神流剣士ならば人垣をすり抜けるくらい容易い事ですよ、姉様」

「えー？せっかく休みなんだし、普通にショッピングしようよ〜」

「私も姉様もある意味サボリですよね？」

「私は妹の服を選ぶっていう大事な用事があるの！！」

「で？ホントの目的は？」

「…………」

そこまで話しが進んだところで、姉様は急に黙り込んでしまいました。

「姉様？」

「……私、ストーカーされてるかも…」

「……は？」

いくら天然ボケのある姉様でも限度って物がありますってば。

「ホントだって、時々視線ぽいの感じるし」

「姉様、ご自分の容姿を理解してますか？」

「だからそういうんじゃないのってば、なんかこう、ねっとり絡みついて気持ち悪い感じで……」

姉様、それはおそらく男の穢れた欲望の眼差しですよ。

「まぁ、なにかあれば……姉様ですから自力でなんとでも出来るとは思いますが、手に負えない時は言ってください。私がガツンと一発、必殺顔面整形パンチをプレゼンツフォーユーに行きますから」

「なのははいつの間にか、どんどん逞しくなってっちゃうなぁ……」

私が胸の前に右腕を引き寄せて拳を作って言うと、姉様はそう言って私にぽてりと寄りかかってきました。正面から。

ちなみに私は兄様と身長が同じくらいですから、姉様の顔がすっぽり胸にジャストなんですよね……恥ずかしい、周りの視線がイタい。

私と姉様は親が違う為、不破系の血は流れていて面影はありますが、不破の血の濃い姉様と高町の血の濃い私では、一目では姉妹に見るのは大変でしょう。

つまりなにが言いたいのか。

周りからは禁断のカップルに見えているのではないかと――

だあああああーーーー！！！！！

こんな思考に至るのも！どれもこれも全部アリサの所為ですよ！！

お陰で姉様相手にも最近ドキドキして堪らないんですよ！！

もう私ったら本当にどうしてこうなったΣ！！

「ね、姉…様……」

「…ごめんね、頼りないお姉ちゃんで……」

「……そんなことはありませんよ、姉様」

私は姉様の背中に右手をまわして、空いている左手は姉様の髪を梳いて――

「私は姉様をとても尊敬しているんです。そんなこと、言わないでください」

「…でも私、恭ちゃんどころか、なのはにだって敵わないよ……」

「そんなことはありません。私は魔導というズルをしているから強いだけで、純粋な御神流剣士としては、姉様には到底敵わない見習い剣士なのですから」

「…でもなのはは命懸けの戦いを続けてるんだよ？私なんて、すぐに追い越されちゃうよ」

「私は拳と槍が主体ですから、姉様レベルに辿り着くには、姉様と同じ時間をかけていくしかありません。だから姉様が卑下に思うことはないのですよ？」

「…なのは、かーさんみたいだね……」

「まだ二十代です」

「ふふっ、それ聞いたらかーさん怒るよ？」

「ですので黙っててくださいね？」

「どーしよっかな～？」

「きたない、さすが姉様きたない」

「うぅ、妹が虐めるよぉ……あ、なのはのショートケーキ食べたい」

「……よりにもよって手間暇掛かるものを……わかりました。行きますよ姉様」

「あいあいー」

急に元気になった現金な姉の手を引いて、私達はショッピングモールへ繰り出します。

『……』

「どうかしましたか、アリス？」

『いえ、なんでもないですよマイスター』

未だ動かなかったアリスに声を掛け、早足でその場を去ります。

だって、恥ずかしいんですもん！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side：高町美由希

なのはああ言ってくれたけど、なんだかなぁ……。

はは、はぁ……。

色々悔しい虚しい、空しい――

1日にしてナイスバディになって帰ってきた我が家の末妹が、まさか魔法少女ってなにさ！？

しかも私のイメージする不思議と夢と愛がいっぱいの魔法じゃなくて、ビームがバカスカ飛び交う戦場みたいな魔法って、そりゃあ強くなるわよね普通。

アリスが空中投影モニターって言うんだっけ？

あれで見せてくれたなのはの戦いの記録は、本当に戦場みたいだった。

血だらけになって、泥だらけになって、怖い思いもしてる、なのに退かないなのはは私より全然凄い。

恭ちゃんや父さんみたいに強かったら、私だってなのはの手伝い出

来るのになぁ……。

それに――

「なんで私より胸おっきいくせにヒップが細いなんて反則よ！」

「いや、反則とは言われましても……困るのですが」

胸は私よりボインなのにヒップは小さいなのは。なんか理不尽よ！

やっぱりこれも実戦経験の違いなの！？

「私は材料を買いにいってきますけど、クリームは何にします？」

「そーねぇ、ココアチョコが良いかな～」

「はいはい、わかりました。行きますよ、アリス」

『はい、マイスター。先行してココアとチョコパウダーをゲッツして来ますね』

「あとトッピングのチョコも適当に見繕ってきてください。私は生物からまわっていきますから」

『オーライ！スペリオルガンダム、アリス・ストラトス！狙い撃つぜ！』

「ふふっ、ハシャいで人様に迷惑をかけてはいけませんよ？」

『オーライ！Ｍｓ．なのは』

飛んでいくアリスを見送ってからスーパーに入っていくなのは。

「ほんと、かーさんみたい」

母親っていう感じが全開で――

無表情は相変わらずだけど、発するオーラがこの頃柔らかくなってたけど、アリスやハーケン、ユーノや久遠が家族になってからは一気に柔らかくなって、表情も変わることが多くなっていった。

どれもこれも、魔法が始まり――

魔法は妹に戦いを連れてきたけど、代わりに沢山の何かをくれている。私はそんな感じがする。

「魔法……か……」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

とりあえず姉様の分量ですから、そこまでは量は要らないでしょう。

他にも色々と見てまわってはカートの中に物が追加されていき――

この辺りは、前世持ちは便利ですね。

どれを買えばいいのか、安く多く買うのはニートの必須スキルでしたし。

ただの一般人が、今はこうやって他人の身体を奪い取って、他人を演じて、のうのうと暮らして、とうとう身体まで作り替えてしまって――

「私は、本当に愚かでダメな人間だ……」

『マイスター……』

カートの前部に立って前を向いていたアリスが、こちらを向いて呟いた。

アリサやすずかを巻き込んで――

レイジングハートを何度も壊して――

アリスには頼ってばかりで――

ハーケンには甘えて――

ユーノにはフォローして貰って――

兄様や父様には手伝って貰って――

私ひとりでは何も出来ない！

そんな自分が――私は大嫌いだ！

レヴィに偉そうなこと言ったけど、結局私は大人を演じるただのズルいガキだ。

偽善者だな、私は――

子どものような意地と世界を天秤にかけて、一丁前に悩んで苦しんでるフリをする。偽善者だ。

最低だな――

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

第２１話　その心の内に秘めたるものは…（後書き）

さて、次は温泉だったか――

大丈夫か？色んな意味で？

別な意味で死ぬんじゃないか？星光なのは……

そして皆さんはレイハさんをどうしたい！？

皆さんの意見・感想を待っています。気軽にどうぞ。

第２２話　過去からの魔の手……（前書き）

アリサファンの皆様！再びごめんなさい！！

第２２話　過去からの魔の手……

ｓｉｄｅ：高町なのは

「結構買いすぎてしまいましたね」

『後先考えずにバンバカ入れるからですよ』

少し大きめのパンパンの袋を両手に持って、スーパーから出る。

久しぶりに食料品の買い物をしてしまった所為で少し調子に乗って色々買いすぎてしまいました。

とりあえず大人の身体で台所の高さもちょうど良いことですし、夕食当番は私がやりましょう。

「あ、やっときた、んげ！ちょ、ちょっと！そんなに買ってなにするんのよ！？」

「決まってますよ。今日の夕食にでもと」

「ぅぅ…料理良し、容姿良し、器量良し、なにこの完璧奥さん」

「落ち込んでないで行きますよ？」

～～～～♪

「ん？アリス、私の携帯を」

『はーい、マイスター』

兄様から借りたジャケットの内側ポケットから携帯を取り出して私の耳に当てるアリス。

携帯の表示は忍さんのケータイ。

「はい、高町なのはですが」

「なのはか！？」

「兄様？どうしたのですか？」

なんと、忍さんかと思えば相手は兄様でした。

しかも声色に焦りが見えます。兄様が焦る事態とはいったい――

「良いか、落ち着いて聞け？」

「……ええ」

ただこどでない兄様の様子に、私も気を引き締める。

「……すずかちゃんとアリサちゃんが、何者かに誘拐された」

「……そうですか」

これで取り乱す程、今の私は子どもではありません。やはり大人の心に大人の身体が合致して、以前以上に頭も冷静にはなっていられるようです。

「忍さんは、大丈夫なのですね？」

「…ああ。一応俺がガードしてるからな」

「それは重畳です。で？相手方はなんと？」

「……高町なのはを寄越せと言ってきた。あと、現金3億」

「ひとり頭1億ですか、私はともかく、アリサとすずかを1億程度で計るとは――それで、警察には？」

「まだ知らせてはいない。一応、アリサちゃんのお父さんには知らせたが…」

「重畳です。兄様。引き渡し方法は如何に？」

「…まさか、向かうつもりか？」

「当たり前でしょう。友人救えずして何が友人ですか？御神流を習

う私には、2人の友人である私は、その責務と義務、そして私の想いで、私は2人の救出作戦を行います」

「……わかった。俺にもなにかやる事はあるか？」

「とりあえずは、高町家、私の作業部屋に集合しましょう」

「わかった。なるべく速く」

「迅速に――」

警察をアリスが耳から離して、通話を切る。

姉様も途中から聞き耳を立てていたのでしょう。顔つきが御神流剣士に変わっていました。

「なのは…」

「家まで全力疾走、やれますか？姉様」

「愚問だよなのは。私はそこまで弱いつもりはないから」

「わかりました。行きますよ」

私達はまるで疾風の如く、駆け出した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side：アリサ・バニングス

《……アリサ！　…目を覚ませアリサ！！　アリサ・バニングスッ！！》

「…ぅっ……ハッΣ！！……ここは？」

頭に鈍い痛みを感じながら意識が回復する。

ぼんやりと広がる視界は全く見覚えのない景色。

汚い、ちらかってる、まるで廃屋のような場所。

《目を覚ましたか、アリサ・バニングス》

《ブラボー……あたし》

確かあたしは、今日は塾がないからすずかと一緒に歩いて帰ってたはず――

《俺も眠っていたからな、詳しくはわからないが……》

《状況的に誘拐されたのは小学生でもわかるわよ》

それよりもあたしと一緒に居たすずかは？

「って、ガキだから無拘束ってのは無しか……」

手と足は縄か何かで縛られて、殆ど身動きが取れる状況じゃない。
ただ縛られているだけだからまだなんとかなる。

《生体反応は感じるが、今の俺ではこれが限界だ》

《別に良いわよ》

ブラボーの実体化にはかなり魔力をまわさないとならない。
あたしはそこまで魔力がある方じゃないから、ブラボーの実体化は、朝と夜の特訓の間しか出来ない。

《最短でもあと2時間は実体化は出来ない。すまない、アリサ・バニングス》

《ブラボーの所為じゃないわ。あたしの魔力量の所為だもの。それより、これからどうするか……》

考えるのよアリサ、なのはならどうするか考えるのよ！

ガチャ、ガラガラガラ

「……」

重い扉を開くような音。

あたしは身体を起こして開きゆく扉を睨みつける。

「ようやくお目覚めかい？アリサ・バニングスちゃん？」

「……アンタッ…」

黒服の男達にガードされて部屋に入って来たのは、醜い面をした、でも二度と拝むことはないと思ってたヤツの面影のある顔。そして人を小馬鹿にしたような声。

「久しぶりだね、アリサ・バニングスちゃん。ちょっと見ない間に、かわいくなったね」

「…アンタに褒められたって反吐が出るわよ。このバカでアホでボケで不細工面脳味噌ウジ虫変態淫語製造機乱痴気精神的ブラクラ野郎がッ！」

「フッ」

私の嫌味を鼻で笑って髪を手で掻き上げて払う。

ウゲェ……目に毒よこれェ……。

「ずいぶんと、彼女に影響を受けているようだね？そんなに高町なのはが大事かい？」

「うるさいわよ。アンタには関係ないでしょ」

「高町なのは高町なのは、あんな普通の子がそんなに良いのかい？」

「黙れ。…なのはのことを何も知らないアンタが、なのはを語るんじゃないわよ変態。それ以上喋るな……」

「まぁ、禁断の恋心を抱くくらいだ。僕も人を愛する身、キミの気持ちも少しばかりは理解出来るよ」

「……もう一度言う。それ以上喋るな、同じ空気を吸うな、息をするな。クサいんだよ、このバカでアホでボケで不細工面脳味噌ウジ虫変態淫語製造機乱痴気精神的ブラクラ野郎ッ！！語るに落ちたわねぇ！盗撮なんて最っ低！それにアンタ愛の意味を吐き違えてんじゃないわよ！！一度広辞苑で『愛』って意味を調べてきたら！？」

「強気だねぇ……自分の立場、わかっているのかい？」

ニヤニヤと気持ち悪い不細工面をさらに気持ち悪く歪ませる。ホント反吐が出るわ。

「…すずかは無事なんでしょうね……」

「キミが知る必要はないな」

パチンと指を弾く音が鳴ると、部屋に覆面を被った男達が入ってくる。数は全部で４人。

「じゃあ、キミは処女を散らす宴でも楽しんでくれ。良い絵が撮れるのを期待しているよ」

ビデオカメラをセッティングする男達を見ながら言うアイツ。

「…この陵辱プレイ強姦指揮者野郎が……アンタはあたしが絶対ブチのめしてやるっ！！そのツラァ、眼が開けらんない程ボコってやるから、顔洗って待ってなさいよ……」

「ボテ腹になった幼女っていうのも、背徳的でソソるものだよ」

「魂まで腐ってるようね、この腐乱思体」

あたしは怒りと憎悪と殺意を込めた眼差しで睨みつけた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

第２２話　過去からの魔の手……（後書き）

アリサのキャラが回を重ねる度にブレイクしていく……

大丈夫かな？こんなアリサで……

受け入れて、貰えるかな……

ちなみにこのウザイナルシの名前が思い浮かばなくて困ってる。一応日本人だけど――

戦隊物とかスゲェよ。毎回毎週敵の名前考えるんだから――

皆さんからの意見・感想をお待ちしています。

皆さんの一言が、私の励みになります。心がホカホカするんですよ。

第２３話　断罪者魔を断つ剣ＴｗｏＳｗｏｒｄ／ＴｗｏＧｕｎ高町なのは　生誕

好き好みが別れる回です。

一応１７．９９歳くらいか……？

第２３話　断罪者魔を断つ剣ＴｗｏＳｗｏｒｄ／ＴｗｏＧｕｎ高町なのは　生誕

ｓｉｄｅ：高町なのは

高町家敷地内――

私の作業部屋は木造の高床式ですが、中は地球文化レベルを超えた科学技術の部屋になっていて、地球レベルのなら耳も眼も通さない。

そこに集うは、父：高町士郎、兄：高町恭也、姉：高町美由希は道着を身に纏い、腰には２本の小太刀。服には鋼糸や飛針を仕込んである。

私：高町なのはは父様から黒い防刃防弾コート、父様の昔の仕事着を借りています。

さらに誘拐された月村すずかの姉：月村忍。

そしてゲシュペンスト・ハーケンの自己進化完全自立型擬似人格コンピューターＯＳのハーケン・ブロウニング、スペリオルガンダムの自己進化完全自立型擬似人格コンピューターＯＳにしてＡＬＩＣＥシステムの中枢コアたるアリス・ストラトス――

魔法を知る高町家最強戦力が一同に揃っていた。

ユーノと久遠は、念の為に高町家の母：高町桃子のガードに着いている。

各自の前には小型の空中投影モニターが浮かび、私の周りには多数の小中のモニターが浮かび、入力端末にはせわしなく動く１０本の指。

「アリサとすずかが消息を断ち、誘拐されたのは午後１５時半過ぎ――衛星にハックしてアリサとすずかの携帯電波を辿った結果。２人は現在、鳴海埠頭近隣の廃倉庫に監禁されていると推察されます。アリス――」

『イエス・マイスター――現在某国の軍事スパイ衛星を管理下に置き、ミッション領域内を可能な限り調べてみましたが、確認される敵兵力は最低でも１００人規模。最大数不明、武装は手持ち小銃や警棒、鉄パイプやナイフで武装。周囲のはごろつきでしょうが、メインディッシュの規模、装備、その辺りは不明。熱紋照合も不可。ＲＰＧの５、６本は覚悟してた方がよろしいかと。しかし慢心する気もありませんが、御神流剣士のお三方で既に３００人規模の兵力。そこにマイスターと私が加わるとなれば、戦車の１０台２０台でもない限りは、止められないと私は思います』

『ＯＫ、マイシスター。それで、具体的なミッションプランは？』

『まずはハーケンがハッキング、クラッキング、ジャミングを駆使して敵の目と耳と鼻を潰します。次に士郎様と恭也様が敵を西と東から強襲。敵戦力を分散し、私とマイスターで正面から強行突破、アリサとすずかを確保して一時離脱。その後は殲滅戦に移ります。万が一の別働隊を考えて、美由希様には自宅にて桃子様と忍様のガードをお願いします。以上が本作戦の概要になります。何か質問は？』

誰にも反論はない。

僅かな静寂が部屋に流れた。

『では現場に向かいましょう。警察を呼ばれる前に決着をつけなければなりません。事は慌てず迅速に、そしてケガの無きように』

全員が頷いて部屋を出て行きます。

私は金庫からナイトファウルとロングトゥーム・スペシャルを取り出して、仕事着のズボンに巻いたベルトのホルスターに収め、コートの中にはいくつもの予備弾倉とスピードローターを入れていきます。飛針や鋼糸も一応仕込んではあります。あとは真剣の小太刀を後ろ腰に挿します。

今宵私は、自分の意志で人を殺す。

身の代金を要求してきた主犯の声紋を確認して、相手が誰だかわかりましたから。

仏の顔は三度まで、とは言いますが、冥府魔導の闇魔大王一プルート一には、慈悲などは無いのです。白黒ハッキリさせます！

そして黒には容赦のない地獄を――

「なのは…」

「姉様」

部屋に再び姉様が入って来ました。忘れ物でしょうか？

「気をつけてね、なのは」

「重々承知していますよ、姉様。私は大丈夫です」

「……でも、心配だよやっぱり。お姉ちゃんなのに、やっぱり私、何もしてあげられない」

俯いて腕を抱く姉様。

私は姉様に歩み寄って、姉様の身体を抱き寄せる。

「な、なのは…？」

「私は、私達は、家を任せられる人が居るから、安心して、征けるのです……」

「なのは……」

少しだけ身体を離して、私を見上げる姉様を見つめる。

目の端に浮く滴を、人差し指で優しく拭う。
姉様は決して弱いというわけではない。
「姉様が居るから、家を護っていてくれるから、私達は後顧の憂いもなく戦えるのですよ…？」
「なのは…っ……私、バカだよ。こんなにも信じてくれる妹が居るのに、私、私ぃ……なにも、わかって…」
涙を流す姉様を再度胸元に引き入れて、髪を優しく梳く。
「姉様、一つお頼みしてもよろしいです？」
「ひっ…ぅ、……う、うん。お姉ちゃんに出来ることなら、なんでもするよ」
「では、後ろ髪を三つ編みにしてください」
私は姉様に紅く細いリボンを手渡す。
「わかった。少し座ってくれる？」
「ええ」

私は作業机のイスに座って、姉様に背を向けます。

「なのははさ、なんであんなに痛くて怖い思いしてても戦えるの？」

「……私は、私が私である証拠が、確証が欲しかったのです。世界に私を認めさせる為に、私は今まで、そしてこれからも戦って征く。それが私の悲願成就の為の道。出逢いは偶然、でも世界を救えばセカイは私を認めてくれる。私はそう思っていた。でもそれだけじゃないことを、最近思うようになってもきました」

このセカイの特殊性。

とらハの混じるこのセカイ――

敵のインフレの起こるこのセカイ――

そんなセカイで、あのただの９歳だった高町なのはが生き残れるか？

そう考えれば答えはＮＯ！と私は言い切れます。

実際に戦っていた私だから、何度もシミュレートした私だから言える。

高町なのはの力技では今までの戦いは乗り越えられなかった。

遠距離主体の大火力砲撃。

面に強い分、点には対応仕切れない。

久遠と鳥と猫はともかく、ゼルエルとレジセイアは、何度もアリスやハーケン、レイジングハートも交えてシミュレーションしても高町なのはの大火力砲撃では、待つのは死！

ゼルエルもレジセイアも、点の撃ち貫く零距離だから勝てた。

出力的にも、ブラスターシステムを2まで使った私は魔力ランクはＳＳ、3を使えば前人未到のＳＳＳを叩き出せる計算です。

そのバカ魔力を限界まで使い切る程の零距離一点集中大出力貫通攻撃でなければ破れなかった。

高町なのはのスターライトブレイカーでも、レジセイアのバリアは何度やっても破れなかった。

砲撃魔法の分、収束砲撃でも拡散されて効果範囲が広く、バリアの全体に負荷を掛けられても、破れず減衰するだけでお終い、そのままお陀仏、地球滅亡。

しかもあの時期の高町なのはは砲撃魔法すら放っていなかった。負けは必至。

だから閣下は私をこの世界の高町なのはへと転生させたのではないかと思い至った。

高町なのはへの憑依で助言者だとしても、小学生に私の言うことが１００％伝わるとは思えない。

まぁ、今のアリサなら１２０％伝わるのですが。

とにかく！

私が高町なのはとなって勝ち進み、ＰＴ事件を終結に導けば、高町なのはの死の未来を回避し、新たな分岐と未来が始まるのではないか？

そうすれば高町なのはは戻ってくるのではないか？

そう私は考えたのです。

希望的な観測で、偽善者の言い逃れかもしれませんが、私はそこに一筋の光明を、希望を見いだしました。

たとえ思い込みだとしても、その希望を信じて戦っていこうと思ったのです。

一人の女の子の運命を変える為ならば、この身の痛みも、心の苦しさも、運命を変える為の対価ならば安い物です。

だって、私が我慢すれば良いだけなのですから。

痛みも苦しさも全部私が引き受けていく。

だからＰＴ事件が終わって、私が不要になっても、私が『私』で居られ、存在出来るようにセカイに『私』を認めさせる。

身体は高町なのはにお返ししても良い。元々彼女の物ですからね。

だが『私』は私のまま、私で居たいのも本心。

それを成す奇跡を与えてくれる、与えてやろうと思うように、私はセカイに訴える。

私の全身全霊全生命を賭けて！！

「はい、出来たよなのは」

「ありがとうございます、姉様」

三つ編みに纏められた茶髪の髪。リボンは毛先を縛るように蝶結びで――

「私の思い描いた通りです。姉様はエスパーですか？」

「まぁ、なんとなくね？気に入ってくれて良かった」

私は立ち上がると、机の引き出しから紅いマントを肩に掛ける。これで返り血や血糊もある程度誤魔化せるでしょう。

「なのは…」

「いってきます、姉様」

歩き出そうとした私ですが、クンっと、服の袖を掴まれました。

私は後ろを、姉様に向き直る。

すると姉様は今度は自分から私の胸に飛び込んできて、慌ててたたらを踏んだ私の唇に当たる柔らかくて温かい感触と、目の前にドアップで映る姉様の顔に思考回路がエラーとフリーズを大量に叩き出し――

「なのはがケガしない為の御守り。私のファーストキスだから効力は抜群だと思うけど、絶対無事に帰ってきて。なのはのショートケーキ、楽しみにしてるから」

「…姉様……はい。高町なのは、いって参ります」

「いってらっしゃい。なのは」

私は姉様に別れを告げ、窓から飛び出して地に脚を踏み出す。

此処からは魔導師高町なのはでも魔法少女高町なのはでもバウンティハンターナノハ・タカマチでも御神流剣士見習い高町なのはでもない。

魔術師――ＴｗｏＳｗｏｒｄ／ＴｗｏＧｕｎ高町なのはが征く、修羅の夜道。

復讐者よ、覚悟は良いか？

私の友に手を出した罪の精算は貴様の命……否、貴様の魂で償って貰おう。

冥府への案内は私、高町なのはが仕る！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町美由希

「妹にキス……か…」

我ながら変態かもしれないけれど——

「なのはも恭ちゃんみたいに、あんなにカッコ良くなっちゃって……」

私の初恋が恭ちゃん。

私はなのはに恭ちゃんの面影を視たんだ。

誰かの為に傷ついても戦うなのはに。

自分の為に戦っているって顔に書いて背中で語っても、その心は他

人の、誰かの為に戦っているように私はなのはの言葉から感じた。

直接的な血の繋がりのない私でも尊敬しているって、心から言ってくれるなのはに、一緒に行けないけど、せめて想いだけは一緒に連れて行って欲しかったからあんなことしちゃったけど――

「なのはの唇……柔らかくて、ほんのり暖かかったなぁ……」

唇に指を添えながら、着地して門に駆けて行くなのはの背中を見る。

胸は大きいくせに、私よりお尻小さいくて――

「肩、小さかったな――」

私より広い肩幅に見えたのは多分、おとーさんの服の所為。

なのはは、あんな小さな肩にいったいなにを背負って戦っているのか私にはわからないけれど――

「気をつけてなのは、家は私が護るから――」

眼鏡を外して、なのはの座ってた机の上に置く。なのはが帰ってきたら、ここに眼鏡を取りに来よう。

またなのはに抱き締めて貰おう。
なのはが怪我を隠してないか確かめに来よう。

「……」

作業部屋を出て、地に脚を着く。

ここからは、高町なのはの姉ではなく、御神流・正統後継者剣士を往く高町美由希として征く。

妹や家族が戻る家を、託された母さんや忍さんを護る為に――

御神流は護る為の剣だから……そうでしょう？恭ちゃん、おとーさん――

そして――私の本当のお母さん。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：アリサ・バニングス

アイツが居なくなって、あたしは足だけはなんとか縄から抜けて部

屋の４人の男を黙らせたけれど、反撃も受けたから服が少しボロっちくなっちゃった。

少し血も流れてるし、シミになっちゃうだろうなぁ。

「ペッ！……歯も１本うっ欠けちゃった。子どもの歯だったら良いなぁ」

脚技なんて習ったことなんてないから、プラーナを込めて回し蹴りを叩き込んでやったわ。

「まったく、無駄にキツく縛ってくれたわね……」

いくら力を入れても外れない切れない縄。ビニル紐だから無駄に頑丈なのよね。

「ブラボー、すずかの居場所はわからないの？」

《……聞いてどうする》

「そんなの決まってんでしょ？すずかを助けて逃げんのよ。あとアイツをボコる」

《自惚れるなアリサ・バニングス。今のは相手の油断があったからこそ、次はこう行くとは限らないぞ》

「わかってるわよ。別に自惚れてもいない。でも友達も助けられないで友達なんて言えない。少なくともあたしはここですずかを助けに行かなかったら一生後悔する」

《死ぬかもしれないぞ？》

「あたしは死なないわよ。あたしにはなのはと添い遂げるって夢があるもの」

なのはとイチャラブするけど、その私の思い描く未来には、すずかの居場所もある。

すずかになのはのあんな姿やこんな姿、はたまたそんな姿の写真を見せびらかしてやるのよ。

んで、あとで2人してなのはをからかって遊んだりする。

あたしの未来像には頼れる親友のすずかが必要なのよ！

あんなバカでアホでボケで不細工面脳味噌ウジ虫変態淫語製造機乱痴気精神的ブラクラ野郎にくれてやるすずかなんてこれっぽっちもないわ！！

《……わかった、俺の負けだ。ただし、人質救出後は可及的迅速に撤退脱出、警察に駆け込むのが条件だ》

「わかったわ」

あたしはブラボーに返すと、息と音と気を潜めて歩きだした。

サーチャーを2つ飛ばして、ルートを割り出して進んで行く。

なのはがどう考えてどう行動するのかを思えば、あたしが普段出来ないような思考展開と状況把握が出来る。

いつもなのはを見てきたのよ。これくらいなのはを真似するのはわけないわ。

《そこを曲がった先の方に、月村すずかの魔力を感じる。気をつけろ》

《わかったわ》

まさかすずかが魔力持ちだったなんてね。

ブラボー曰わく生き物はみんな強なり弱なり魔力を持ってるらしいけど、それを運用するにはリンカーコアが必要なんだって。まぁ、その辺りは今度ね。

角を曲がる前にサーチャーを先行させる。

行き止まり、横にドア、見張り無し。

「この先……」

結局縄は解けなかったけど――

やるしかない。

脚に力を込める。たった１０日しか戦士としての特訓してないけど、毎日毎日ブラボーにボコボコにされてないわよ！

「新撰組だ！！御用改めである！！」

ドアを蹴り飛ばすどころか蹴り砕いて、あたしは中に入った。

「…アリサ……ちゃん…」

「すずか！」

部屋の中には天井から垂らされたワイヤーみたいなヤツに腕を吊されているすずかが居た。

「…アリ…サ…ちゃ…にげ…」

「誰が親友置いて逃げる莫迦が居んのよ」

あたしはすずかの方に歩み寄る。

「今助けるから」

「ところがどっこい」

「なッΣ!?きゃあああああーーーーー!!!!!」

「アリサちゃん!!」

不意に聞こえたアイツの声と、身体を襲う激しい痺れ――

あたしは膝から崩れ落ちた。

か、から、だに、力、が――

「アリサちゃん!!!アリサちゃん!!!いやあああああーーーーー!!!!!!」

「ははははは!!!!!ピクピクしてまるでカエルみたいじゃないか!!!」

あたし……今なら、『無』の表情が出来るかもしれない。

すずかが泣いてる。

あの時のなのはの気持ち、今のあたしになら二十分に解る。

このバカでアホでボケで不細工面脳味噌ウジ虫変態淫語製造機乱痴気精神的ブラクラ野郎は、生かしておくわけにはいかない。

「さあ、あとは好きにして良いよ」

「マジですかい！？」

人の気配が増えた。チッ、不覚を取ったわね。

「ああ。僕はすずかちゃん以外要らないから。あ、でもビデオはよろしく、処女モノは売れるから」

「フン、女を食い物にして生きてきたようね、男の風上にも置けないわ」

「なんとでも言うが良いさ。キミは今日から男のオモチャとして生きて行くんだから」

「んな人生なんて前世も来世も今世も願い下げよ……」

「く、くく、はは、あははははは！！！！！」

「な、なにがおかしいのよ！」

アイツは顔に手を当ててお腹を抱えて大笑いし始めた。

「いやいや傑作傑作。前世はもしかしたら、男に犯されて死んだかもしれないのにねぇ……アリサ・バニングス……いぃや、アリサ・ローウェルちゃん」

「ついに頭のネジが全部抜け落ちたようね。アリサ・ローウェル？誰よそれ？妄想彼女なら引きこもってやってなさいよ。てかあたしの名前を呼ぶんじゃないわよ鳥肌が立つわ」

「いやはや、無知は恐ろしいね」

アイツはそういうと、部屋の明かりをつけたらしい。生活感のある部屋のパソコン。そこに近寄ると、何かを持って戻ってきた。本…？

「これによれば、高町なのはは御神流剣士の高町士郎と高町桃子の間に産まれた子どもで、高町恭也、高町美由希とは血の繋がりはないらしいね」

「は？あんたなにいってんの？」

「さらにここではすずかちゃんのお姉さん、月村忍は夜の一族っていう吸血鬼一族らしいね。てことは、すずかちゃんも吸血鬼かもねぇ。つまりキミ達を今まで騙してたのさ」

「いやあああああーーーーー！！！！！いや、いや、いやあああ

あああああーーーーー！！！！！」

「すずかが……吸血鬼？」

吸血鬼って血を吸うアレよね？

「そしてキミ、アリサ・ローウェルは不良グループにより誘拐され、薬物投与の後に強姦されたあげく、証拠隠滅のため殺害される。今のキミにそっくりだ……」

「……だからなんなの？」

「わからないかい？キミの前世はこんな感じで死んで、今世もこんな感じで死んで、来世もそんな感じで死ぬのさ」

「お生憎様、あたしの死に場所はあたしが決めるわ、あんたなんかに提供された死に場所なんて気持ち悪すぎておちおち棺桶で寝てらんないわ」

そう前世なんて関係ないわよ。

「その本がどんな経緯であんたの手にあるか知らないし知る気もないけど、あたしはアリサ・バニングス。それ以上でもそれ以下でもないわ」

「ふーん、つまらないな。少しくらい取り乱すかとも思ったけど、

まぁ、やることに変わりはないんだ。せいぜい楽しませてくれよ」

バチバチと聞こえる音。なるほど、スタンガンか何かだったわけね。

「っぐ、あああああああーーーーー！！！！」

っ、ブラボーのパンチ程じゃないけど、きくぅぅぅ。

「げへげへ、さあ、楽しもうか？アリサちゃん」

「くっ」

男の怪力で着ている服がビリビリと悲鳴を上げていく。

くっ、こんなヤツ等、腕が動けば瞬殺してやるのに！！

「やめてえええ！！アリサちゃんに手を出さないでぇぇっ！！」

「さぁ、僕達は僕達で楽しもうか、すずかちゃん？」

「いやぁ！！来ないで！！来ないでよぉぉ！！助けてお姉ちゃん！
ファリン！！なのはちゃあああんっ！！！」

「フフ、直に高町なのはも仲間に入れてあげるから、寂しくないよ？」

「……なのはを呼んだの？」

「なんだい？知らない男に下着まで取られても悲鳴すら上げないつまらないアリサちゃん？」

「…あたしの質問に答えなさいよ。呼んだの？なんなの？」

「そりゃあ呼んださ。彼女は僕の人生を台無しにしてくれたからね。僕自ら殺して犯してあげないと気が済まないんだよ。それにあの子の母親や姉を囲んで親子丼とかロマンじゃないか？」

それを聞いたあたしの中で、何かが唐突にキレた。

「ぐぎゃあ〝あ〝あ〝あああああ！！！！」

あたしはあたしにのしかかる男の露出してグロい棒引っさげる股間を蹴り砕く。

男は泡を破棄ながら失神してピクピク震えながら倒れた。

「……ごめんブラボー、あたし…約束守れない悪い子だ。でも！！」

『気にするな。友を助けられずして、さらに友に降りかかる毒牙を

目の前にしてみすみす見逃す者に、ベルカの戦士は務まらない。自分の戦いをしろ、アリサ・バニングス！！』

「ありがとう、ブラボー」

「あ、りさ、ちゃ」

「誰と話しているんだい……」

「あたしの――」

あたしは今ある魔力を有りっ丈ヴァンシュジュエリーに変化したＪジュエルに込める。

なのはの事、言えなくなるなぁ……あたし、でもコイツだけは！！

「人生の師匠ー せんせいー よ！！」

Ｊジュエルから溢れたＪパワーで身体を強化して無理やり縄を引きちぎった。

「っ、少し痺れるし、痕になんなきゃ良いんだけど……」

「な、ワイヤーを仕込んだビニル紐だぞ！？それを引きちぎったΣ！？」

「ひとつ教えておくわ、バカでアホでボケで不細工面脳味噌ウジ虫変態淫語製造機乱痴気精神的ブラクラ野郎」

Ｊパワーが身体に浸透する。

Ｊジュエル――

Ｇストーンをベースに造られた戦闘特化型Ｇストーンとも言える代物。勇気ある戦士に力を与えてくれる高エネルギー結晶体無限情報サーキット。

ヴァンシュジュエリー

古代ベルカ時代に造られた人の真摯の想いによって力を発揮し、物理的、超常的な力を与える宝石。

どちらの２つも、人の想いに応えて力を貸（化）してくれる宝石――

あたしは手を胸に当てる。

あたしはまだ１０日しか特訓を受けてない駆け出しの存在。

なのはの足下にも及ばないけど、友達を、親友を助けるくらいの力ならある！！

「なんだったんだ……今の光りは…」

「アリサちゃん…？」

「今日のあたしは……阿修羅すら凌駕する存在よ！！」

あたしは指を指して宣言する。

「ふ、ふは、ははは、なな、なにを言い出すかと思えば、この人数にひとりで勝つ気かい？」

部屋の中に押し入っているのはだいたい2、３０人、チッ、暇人共が。

「あら、どうしたの？震えてるじゃない？トイレなら漏らす前に早く行った方が良いんじゃないかしら？」

「…散々僕をバカにしてェ……死体処女姦も売れるんだよ。ヤちゃえ！！」

「アリサちゃん！！やめて！すぐやめさせて！！私がなんでもするからアリサちゃんだけは助けてえええええ！！！！」

アイツが言うが否や、男達は襲いかかってきた。

「大丈夫よ、すずか――」

あたしはすずかを安心させるように優しく呟く。

胸のヴァンシュジュエリーから産まれるあたしの戦う力。

掌に収まりきらない、冷たい重さを……でも力強い温かさを感じる六角形の金属――

真ん中には『A』に似た文字が彫られ、その下には『C』が刻印されてる。

「力を借りるわ、キャプテンブラボー」

『ああ、俺の力、そしてお前の力を存分に振るってやれ！アリサ・バニングス！！』

「あたぼうよブラボー！！いくわよ！武装錬金！！」

六角形の金属がカシャっと音を立てて展開すると、そこから青い光と一緒に生まれた小さな六角形の金属片があたしを包み込む。

「な、なんだΣ！？」

「知らないの？じゃあ、今日は気分的に蝶・サイコーだから特別に教えてあげる」

光が晴れたあたしの格好は殆ど素っ裸から全く別の物に変わっている。

黒いインナーの上からなのはと同デザインの銀色の胸甲を着け、黒いコートを纏った上に襟元を開いたジャケットを纏っている。両手にはあの六角形の金属――核金に彫られてた『A』に似た文字をあしらった青い手袋に、下も見るからにちょっと頑丈そうなレギンスブーツを履いてる。

羽の様に軽いけど、防御力は並みのバリアジャケットや騎士甲冑より頑丈に出来ている。以上あたしの脳内設定！！

これが――

「防護服ーメタルジャケットーの武装錬金！シルバースキン・夜笠！！」

「アリサちゃん！！逃げてえええええー！！！！」

男のパンチや蹴りやナイフがあたしを襲う。でも――

「ぎゃあああああああーーーーー！！！！！」

「指が、指の骨がァぁ……！！」

「いでぇ！！いでぇよぉ～～！！」

「嘘……だろ、ナイフが…折れ…」

「アリサちゃん！」

男達のドブ汚い声と、すずかの安心した雀みたいな声が聞こえる。
実はちょっと恐かったのはヒミツ――

「衝撃に対して瞬時に金属硬化。そして再生！伊達や酔狂でこの格好をしてるわけじゃないわよ！！」

キマった……。このセリフを生で言える日が来るなんて――

あたし、なのはの旦那でシアワセよ……。

「くっ、だ、だけど、所詮固いだけの服だ！！攻撃する武器がないんじゃタダの役立たずだ！撃て！銃で離れてハチの巣に――」

「武器なら――ある！」

「え――」

「な――」

「へ――」

呆ける阿呆面の男達にガンメン整形パンチを一瞬で1人に3、4発ずつプレゼンツフォーユー♪

「ぐぇ」

「ぎゃぴ」

「ひでぶ」

「あ、ああ、あ……」

「鍛え抜いたこの戦士の肉体ー からだーがあたしの武器よ！」

あたしは脚に力を込めてプラーナをまわして、破裂させる感じをイメージして放つ。

視界がゆっくりに流れる。

身体が、戦士として、闘うあたしにシフトした。

「直撃！ブラボー拳！！」

「ぎゃっ」

あたしのパンチを受けて吹き飛ぶ男が壁にぶつかると、その壁すらブチ破って行った。

や、タダのＪパワーを纏ったパンチだけど技名あった方が威力が変

わる気がするし。

「な、はっ、ははは、ば、バカかいキミは？わ、わざわざ技名を言ってくれるならこっちが有利だ！」

「別に構わないわ。だって避けっこなから。それに――何故ならその方がカッコイイから！！」

「このガキぃ！！」

後ろから鉄パイプを振り下ろしてくる男。

その鉄パイプを腕をクロスして受け止める。そしてそのまま後ろを向きながら鉄パイプごと――

「撃砕！ブラボーキック！！」

「ぎゃぺら！」

蹴り砕く！！

「アトランティス・ストライク！！」

「びゃびゅ！」

あたしが蹴りで吹き飛ばした男を、ちょうど出入り口から入ってこようとしたなのはに向かっちゃったけど、なのはは紫電を纏った後ろ回し蹴りで打ち蹴り返してきた。

「飛天！ブラボー！スカイアッパァーーー！！」

「ごうぇぇ！」

それをあたしがアッパーでカチ上げてフィニッシュ。

「なのはちゃん！！」

「なにΣ！？高町なのはだと！？そんなバカな！！」

「高町なのは、冥府への道案内、地獄の闇魔大王ー ヘルズプルートより仰せ仕り参上した。諦めろ、罪人よ…」

「なのは！あんた血まみれじゃない！！」

「気にしないで下さい。すべて返り血ですから」

パチンとなのはが指を鳴らすと、身体を染めていた紅がなくなった。

「高町なのは……」

「…貴様と語る舌など持たぬ、バカでアホでボケで不細工面脳味噌ウジ虫変態淫語製造機乱痴気精神的ブラクラ野郎……今日今宵今此処で滅してくれよう……」

「くそっ！シネェ！！」

どっから出したのか、アイツが身丈に似合わない長身のライフルを持ち出してなのはに撃った。

「ロングトゥーム・スペシャル！！」

なのはは長身のリボルバーを一発撃って、ライフル弾に中てた。そして爆発。

ライフル弾って爆発するものなの？

「アリサ、その格好はどうしたのですか？イメチェンですか？」

「あんたこそ肩にマント乗せて三つ編みなんて、イメチェン？」

「これは魔を断つ剣ＴｗｏＳｗｏｒｄ／ＴｗｏＧｕｎたる私の姿―牙無き人々の刃、人間の為の魔を行使する姿です。貴女は？」

「これはあたしの魂の姿よ！なんか文句ある？」

「いえ、とてもお似合いですね。アリサ」

「あんたも、まぁ蝶・サイコーなんじゃない？」

「ふふっ」

「な、なによ？」

「いえ、なんでも」

「あ、そ。あとひとつ言わせて」

「なんですか？」

「今のあたしはただのアリサ・バニングスじゃないわ――キャプテンアリサと呼びなさい！！もっと敬意と愛を込めて！」

ちなみに会話しながら手は動かしてるわよ？ちゃんと。

てかその間に戦闘員の皆さんは片づいちゃったわね。

「さて、と、次は」

「貴様の番だ」

「くっ、くっそぉぉぉ……」

「ひっ！？」

っ、よりにもよってアイツ、すずかかに銃口向けたわねぇぇぇっ。

「それ以上動くな！！動けばコイツを殺す！！」

「この外道がぁ……」

「フッ、良い顔だな、高町なのは。だが僕の味わった屈辱はこんなものじゃない！」

「うっ！」

ライフルの銃口をすずかに押し当てたとき、すずかの顔が歪んで肉を焼くような音が聞こえた。

「すずか！貴様ぁぁぁ……！！」

ダメだ、あたし爆発しそう。

「っっ……なのはちゃん！アリサちゃん！」

すずかがあたし達を見て叫んだ。

「私に構わないで！！」

「な、何を言い出すんだよ！？黙れよ！！」

「私に構わないで！…やっちゃえ！！」

すずかの言葉が届いた瞬間、あたしは飛び出していた。

「両断！ブラボーチョップ！！」

ガシャンッ！！

「う、そ…」

あたしはチョップでライフルのマガジン部分を上から真っ二つにした。これなら撃てないでしょう！！

「騎士の魂は弾丸に宿る！！」

「ひぃッ！！」

あたし達の間に言葉は不要だった。

なのははナイトファウルとロングトゥーム・スペシャルを構えていた。

「我、視線は敵を射抜き――」

ナイトファウルとロングトゥーム・スペシャルから弾丸を撃ち出すなのは。

「殺意は引き金を絞り――」

半身を回転させながら残りの弾を撃ったなのはは、ナイトファウルとロングトゥーム・スペシャルを頭上に投げた。

抜け落ちる弾倉と薬莢。

そして予備の弾倉を落ちてきたナイトファウルに込めながら右手に握り締め、スピードローターをロングトゥーム・スペシャルに込めてリロードしながら左手に握る。前とはさらにスゴい曲芸を垣間見た。

「魂は弾丸に宿る……！」

2挺から一発ずつ撃たれた弾丸は、アイツの両肩にヒットして身体が浮かび上がった。ちなみにアイツは頭と胸周り以外はハチの巣に

は――なってないけど弾痕はあるのに出血ゼロ。どんな弾使ってんのかしら？

「詠え！Ｂｌａｓｔ　Ｂｕｌｌｅｔｓ！」

アイツの前に急接近したなのははは――

「Ｃｒｙ　Ｃｒｙ　Ｃｒｙ！！！」

また残りの弾丸すべてをアイツに撃ち尽くした。

最適の攻撃位置―マキシマム・キルゾーン―から最多の敵目標―マキシマム・ナンバー―に対する最大威力の攻撃―マキシマム・ダメージ―

未来予測に近い計算能力が可能にする銃舞―ガンプ―

それから繰り出される連撃弾すべてを、なのははアイツに叩き込んだ。

なんて贅沢、なのはに撃たれたこと、地獄で自慢して来なさい。でも、次はあたしのターンよ！！

あたしはなのはに撃たれて浮き上がったアイツの斜め下に回り込む。

そこにはアイツの醜く歪んだツラ。待ってたわ……この瞬間を！！

「粉砕！ブラボーラッシュッ！！」

怒濤の迅速連続ラッシュ。もちろんＪパワーの出力だって有頂天の鰻登りよ！！

ボコボコに空中コンボを打ち込み、真正面に降りてきた顔面にガンメン整形パンチ――

「一・撃・必・殺！ブラボー正拳ッ！！」

「ぐぼろぉ……」

歯や骨や諸々を粉砕して、なのはにパス！

だって弾のリロード終えたなのはが構えて笑ってるんだもん。トドメはやっぱり旦那よね？

「銃神――仕る！」

あたしのブラボー正拳で飛び込んで行ったバカ以下略をナイトファウルとロングトゥーム・スペシャルで滅多撃ちにするなのは。それで勢いの緩んだバカ以下略に、後ろ腰から2刀の小太刀を抜いて――

「受けよ――剣聖の舞っ！！」

それは双刃を構えた彼の白き王の息子が放つ必殺技。半人半書の身に流れる魔力が成す事のできる、身体強化による必滅奥義が壱――剣聖銃神騎行曲。

それを知らないアリサにも、なのはの身体を流れるプラーナの高まりだけはわかった。

「斬魔！」

横薙ぎ一閃が――

「破邪！」

交差一閃が――

「天魔覆滅！」

左右の同時一閃が爆砕する大気を伴い四躯を駆け抜け、切り刻む。

「銃神…剣聖の意志の下。此処に処刑す……」

細切れになる事はしなかったみたいだけど――

「死んだ？」

「や、急所はギリギリ外しておきました。でなければ忍さんに私達が殺されます」

「あーー、わからなくないかも……」

とりあえず怖いから考えるのはしないけど。

「なのはちゃん」

なのはは小太刀ですずかが繋がれていたワイヤーを斬る。

「なのはちゃん!!」

すずかはなのはの胸に飛び込むと泣き出した。

なのははすずかを抱き締めると、頭を撫でたり背中を軽く叩いたり、髪を梳いたりして落ち着かせようとした。

ま、今日くらいレンタルしてあげても良いわよ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そとに出る間に黒服の人達がボロボロの人型を片付けていた。

すずかはなのはに抱かれて寝ている。

「なのは…！」

「シーッですよ、兄様」

「あ、ああ、すまない」

「すずかちゃんは無事だったんだな」

恭也さんも士郎さんも、身体中が真っ赤だった。こんなになるまで何人斬ったらなるのよ。

「はい。火傷を負わせてしまいましたが、プラーナを当てて自然治癒力を高めて治しておきました。ただ精神的に少しの間不安定にはなるかもしれません」

「そうか……主犯は？」

「私とアリサでとりあえずボコっておきました。あとは忍さんと一緒に煮るなり焼くなり斬るなり東京湾に沈するなりお好きにどうぞ」

「アリサちゃんが？」

恭也さんと士郎さんの視線が私に移る。私は胸を張ってそれに答える。ま、なのはに比べたらペッタンコだけどさ。

「「コスプレ？」」

「ちゃうわΣ！！」

もうなんか血が繋がってなくても家族だわあんたら。

アイツが持ってた本を取り出す。

「それはΣ！？」

「アイツが持ってたのよ。まぁでも、あたしは幽霊じゃないし。関係ないわ」

指パッチンすると、手袋が擦れて火花を散らして、本は焔に包まれて塵になった。

「錬金術…まで…」

「同じ錬金術だから、まぁ、なのはお得意の勢いってヤツ？」

私はなのはに薄笑うと、なのはも口元だけで笑った。

「ミッションコンプリート。帰って夜ご飯にしましょうか？今日は私が当番ですから」

「ホント！やった、なのはの料理久しぶりぃ！！」

「ケーキもありますよ。姉様のリクエストでね？」

「ブラボー！！蝶・サイコーよ！なのは！！」

「シーッですよ、アリサ」

「あ、ぅ、ゴメン」

「ふふっ。あ、あとですね」

「なになに？まだなんかあるの！？」

「真っ裸ははしたないのでもう一度武装錬金した方が良いですよ」

『武装解除されてますよ？』

「え？」

慌てて自分の身体を見る。

靴下と靴、首から垂れ下がるヴァンシュジュエリー――

地面に落ちてる核金――

「キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！」

To be continued…

第２３話　断罪者魔を断つ剣ＴｗｏＳｗｏｒｄ／ＴｗｏＧｕｎ高町なのは　生誕

やっとできた我がバーニングアリサもとい戦士・アリサ！！
しかしもはやアリサのキャラが完璧に粉砕してしまった。

だが今回はまだ急場凌ぎです。これから戦士・アリサは星光なのは
と共に成長していきますので、見守って下さい。

皆さんの意見・感想お待ちしております。

これが我が家のアリサ・バニングス！もといキャプテンアリサだ！！（前書き）

アリサの簡単な設定を纏めて書いてみた。

これが我が家のアリサ・バニングス！もといキャプテンアリサだ！！

アリサ・バニングス

魔法を知り、星光なのはの戦いを知り、古代ベルカの魔法の遺産との巡り合わせでベルカの戦士として日々猛特訓中の厨二病爆裂中のさり気にＩＱ２００持ちの蝶・天才。
感激したりするとブラボーが口癖になる程、師匠たるキャプテンブラボーを尊敬している。曰わく人生の師匠ー せんせいー。
『ちょう』と付く部分はノリで『蝶』に変換しているが、あそこまで変態じゃない。しかしシルバースキン・夜笠を纏っている間はキャプテンアリサと呼べだの言うからどっこいどっこいか？

なのはに影響されて原作よりおとなしめだが心の中はブラボーの影響でバーニングソウルを秘めている。

心の中ではなのはを旦那扱いしているが、現実的には自分が旦那になろうとしている。必要あらば自ら男になる心構えすらある程なのはにぞっこんラブ。

ブラボー技を見様見真似や勢いで使ったりしてる辺り主人公補正でもかかっているのかもしれない。

アリサ・バニングス
魔力ランクＢ　プラーナランクＡＡＡ　空戦適性Ｂ　陸戦適性ＡＡ
＋　総合魔導師ランク推定Ａ

シルバースキン・夜笠
アリサの使う防護服の武装錬金。
その特性はシルバースキンと同じ。しかし夜笠の部分で全く別の特性を持つ。今のところ出来るのは生体エネルギーで火を操るくらい。ただ某焔の大佐のように雨の日でも無能にはならないという素敵設定。リバースにするとシルバースキンの部分だけ飛んでいくが、夜笠の部分にもシルバースキンの特性が適用されている為、護って良し捕まえて良し攻めて良しの万能スーツである。

キャプテンブラボー
古代ベルカの遺産：ヴァンシュジュエリーよりアリサのイメージを受けて生まれた管制人格。実体化すると本家ブラボー同じく激強のベルカの戦士。アリサの人生の師匠。
実体化する時はシルバースキンとつなぎ作業服とかで出て来る。偽名で防人　衛と名乗る事もある。

キャプテンブラボー
魔力ランクＡＡＡ　プラーナランクＳＳ＋　空戦適性Ａ　陸戦適性ＳＳ　総合魔導師ランクＡＡＡ＋

ヴァンシュジュエリー
アリサが拾った願いを叶えると言われている古代ベルカの遺産。
形も色も別々。聖王協会に存在するのは四角い六角形の緑色。アリ

サのは矢の鏃に似た三角形の赤。アリサは普段、レイジングハートの待機モードの様に首から下げて所持している。

アリサの願いからJジュエルに変化、右腕にJガントレットという腕甲を装備し、その腕甲と一体化して展開するのがデバイスモードで、そこからプラズマソードを出力出来る。管制人格も持ち合わせ、アリサのイメージから生まれた武装錬金のキャプテンブラボーが管制人格。

守護騎士プログラムも兼ねていて実体化も可能だが、システムの問題かキャプテンブラボーだからか、実体化・維持にはそれなりに魔力を使うが、実体維持だけならばなのはの技術協力によって半永久的に可能となりシステムの見直しもされ、実体化に必要な魔力も減った。

これが我が家のアリサ・バニングス！もといキャプテンアリサだ！！（後書き）

質問があれば気兼ねなくどうぞ。

第２３．５話　無事で良かった――（前書き）

事後処理的な回になります。

第２３．５話　無事で良かった――

ｓｉｄｅ：高町なのは

初めて人を斬った感触は、骨のある分、肉よりかは固かった程度です。

Ｔｗｏｓｗｏｒｄ／Ｔｗｏｇａｎはまぁ、厨二病と言うよりかは、私がブチギレるとああなってしまうようです。まぁ、それは置いておいて――

アリサとすずかは１日様子見で入院させました。

アリサはともかくも、すずかには軽度のＰＴＳＤの兆候と他人依存症が出てしまい。検査中は唯一今一番暇の私が付き添っていました。

忍さんにはバカ以下略の処分を任せてありますから、適材適所です。

それにすずかの症状の何割かは私にも責任がありますから――

しかし――

「すずか、少し格好変えませんか？おんぶとかの方が楽なのですが…」

「えっ……だ、だめ…な、の…」

私が言うと見る見るうちに目尻に滴を溢れさせるすずか。

「うっ、だ、大丈夫ですよ。だから泣かないで下さい、すずか」

「…うん……」

すずかは返事をすると、私の胸に頭を預けました。

私はすずかが移動する時はずっと横抱きで抱えて移動しています。

歩きとか車椅子だとグズって動かなくなってしまう為、私が横抱きで移動しています。看護士の方々が申し訳なさそうな、でも微笑ましい光景を見る目をしていて、しかもすずかも嬉しそうに胸に顔を埋めるものですから、精神的にかなりキツいです。

検査を一通り終えて、私は結果を月村家御用達の担当医から聞きます。すずかには辛いこともあるかもしれないので、アリスとハーケンとアリサにすずかを任せて、今は離れています。

「すずかさんですが、やはり精神的にかなり追い詰められてしまっているようです。高町さんにああも依存傾向にあるのも、ご本人の無意識が心を癒やそうとして出ているサインだと思います。出来る事ならば、症状が落ち着くまでは引き離さない方がよろしいのですが――」

医師の話しを聞き終えた私は、携帯で忍さんへ連絡を入れました。

「はい、月村です」

「忍さん。なのはです。今一通り検査が終わって結果報告でもとお電話したのですが、大丈夫ですか？」

「ええ、今休憩中だから平気よ」

何の休憩中かは語るに非ず。

私は医師から聞いたすずかの症状を教え、アリサから聞いた事情と私の憶測を絡めて、忍さんに伝えました。

「そう……」

「すみません。私の配慮が足りなかったばかりに」

「いいのよ。なのはちゃんとアリサちゃんが居たから、すずかも無事でいられるのよ。ありがとう、妹を護ってくれて」

「いえ、親友を守り助けるのは親友として当然の事をしたまでです」

「ふふ、あの子も良いお友達が一緒で、幸せね。……すずかの状態はある程度予想してたから、私は平気よ。ただ、しばらくあの子をなのはちゃんに預けたいのだけど」

「何かあったのですか？」

「いいえ、大したことじゃないけど、ゴミ掃除に少し時間がかかりそうで、ノエルもこっちだし恭也も手伝ってはくれるんだけど、手が足りなくてファリンも出突っ張りなの。だからすずかをまともに構える時間がなくて。これじゃあ姉失格ね」

「……私はそうは思いませんよ。妹の為に尽力する。なんと妹想いの姉が、私の電話の向こう側に居るではありませんか」

「なのはちゃん……」

「すずかは任せて下さい。騎士の誇りと親友の想いと高町なのはとしての全身全霊全生命を賭けて、すずかを護ります」

「羨ましいわね。恭也はそういうことは言わない方だから」

「兄様は口より背中で語る方ですからね。でもつらつら並べ立てる言葉より少しの一言の方が、効果は抜群でしょう？」

「…時々、なのはちゃんが9歳なのを忘れそうになるわ」

「伊達や酔狂でこんな身体はしていませんよ。それにギャルゲやラノベのお陰です」

「ふふ、頼りにしているわ。それじゃあしばらく妹をお願いします」

「委細承知」

その一言を残して、私は電話を切る。

「誰と電話してたの？」

「忍さんと、少し……ね」

「ああ。まぁ、ゴミ掃除するのと治療の為にすずか預かってーっていう内容でしょ？」

「ビンゴ。さすが天才アリサ」

「天災に言われてもねェ……それにあたしは天才じゃなくて、『蝶』・天才よ！」

「ふふ」

「な、なによ」

「いえ。アリサも逞しくなりましたね」

「当たり前じゃない。すこぶる強いけどすこぶる脆い旦那の奥さんになるんだから、これぐらい逞しいのが丁度いいってことよ！」

「ええ、ちょうどいいですね。抱き心地とか」

「ちょ、そういう意味じゃないっての！」

「はいはい。すずかを連れて帰りましょうか。アリサは先に玄関ホールで待っていて下さい」

「わかったわ」

私はアリサと別れて、すずかの待つ病室に向かいます。

泣いてたりしなければ良いのですけど――

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：アリサ・バニングス

『何も訊かれなかったな』

「なのははそういう奴よ。多くを訊こうとしない、必要なことなら話してくれるのを待つ。ある種の処世術ね」

『固い絆だな』

「あたぼうよ。あたし達の絆は、そうそう簡単に綻びはしないわよ」

あたしは携帯を取り出すとパパの電話にコールした。

「あ、パパ？うん。うん、大丈夫。問題ナッシングよ。それでねパ

パ、ちょっとワガママ聞いてくれる？」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side：高町なのは

すずかを横抱きにしたまま私はとりあえず家にまで帰ってきました。

すずかをベッドに降ろして、少しだけ肩をまわします。

「ご、ごめ、んね」

「いえ、良いんですよ、すずか。気にしないで下さい」

私はベッドに腰を降ろすと、すずかを膝枕して髪を梳く。

「おじゃましま——うわぁ……狭っ！」

まぁ、狭いでしょうね、私の部屋は。

「よっと、と、はっ」

「っと…」

「きゃっ」

足の踏み場を選んで入ってきたアリサを受け止めて、すずかの横に降ろします。

「すずか平気……なわけないわよね。ごめん」

「ううん。アリサちゃんが、助けてくれたから……。カッコよかったよ、アリサちゃん」

「あったりまえでしょ？キャプテンアリサはカッコイイのが当たり前なんだから！」

すずかに胸を張ってみせるアリサ。

そんな様子が可愛らしくて、私はアリサの頭を撫でる。

「ん……」

猫みたいに目を細めて気持ちよさそうにするアリサ。すると服の裾を引っ張られ、私はもう片方の手を、すずかの髪を梳く手を再会する。

「んぁ……」

アリサとすずか――

本当に無事で良かったですよ。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

第２３．５話　無事で良かった――（後書き）

皆さんにアンケートです！

すずかの相棒とか武器とかをどうするのか決め悩んでいます。

夜の一族＝吸血鬼と、本の虫から一応こんな相棒かってのは漠然と考えてはいます。

しかしすずかは、なのちゃんと肩を並べる程優しい、争いごとを好まない子ですので、正直どうしようか悩んでいます。

皆さんの意見をお聞かせください。

あ、感想も待っています！

第２４話　同士達よ！（前書き）

ギャグパートかな？

第２４話　同士達よ！

ｓｉｄｅ：アリサ・バニングス

「武装錬金！！」

核金が展開して、あたしを刃金と鋼鉄の鎧が身を包む。

「スゥ……はぁ…ブラボー」

あたしの首からさがるヴァンシュジュエリーが輝きを増して、ブラボーがつなぎ姿で実体化する。

「よし、今日も柔軟から始めるぞ！」

「ぅっ、わ、わかったわ。こい！キャプテンブラボー！」

「ブラボー！良い度胸だ、アリサ・バニングス！」

シルバースキンを着てるんだから今日からは大丈夫よ！

「ブ・ラ・ボー！バックブリーカー！！」

「にゃあ゛あ゛あ゛あああああああ！！！！」

バキ、メキ、ボキ、グキ――ポキ…
せ、背骨がああああーーー！！

「ブラボー！オクトパス、ホールド！」

「いたたたた！たー！たー！あ゛ー！！いたい！！いたい！！いたたたたたあああああ！！！！」

「ブラボー！巴投げぇい！」

「キャアアアーーー！！げふっ！」

「よし、柔軟終わり」

「い、つも、おも、け…ど、コレ…じゅ、な、ん…てか、…シル、バー…スキン越し…なの……ガク」

「ブラーボー！ベルカの戦士ならば防護服の一枚や二枚は服も同然！１０分休憩後、いつもの特訓開始だ」

「り、理不尽…だ……」

とりあえずブラボーが色々おかしいのを再認識した。

「よーし、今日の特訓は此処までだ」

「……」

シルバースキンで耐久力が上がった所為か、ブラボーの勢いが何時もの比じゃなかった。

あたしは地面に大の字で屍を晒していた。

「ブラボー…」

「どうした、アリサ」

「あたし、強くなれてるのかな？」

「……どういう基準でなんと強いとするかは、俺にはわからないが、もし自分を疑うならば――」

「解ってる。あたしはあたしの戦いを続ける」

「ブラボーだ。その意志を貫き続ける限り、お前もまた戦士だ。アリサ・バニングス」

「うん」

んっとに、あたしはブラボーに師事出来る事を誇りに思う。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

すずかを預かり2日目。

ユーノ、久遠、ハーケンに任せて、私はアリスと作業部屋でアリスの整備と装備拡張をしていました。Ｅｘ装備が完成したのです。そして研究の成果も――

「最終調整完了。クォータードライブなら十二分に安定領域に達していますね」

『はい。ですが８０％後半から９０％に突入した辺りから急に不安定になるのがどうも……』

「仕方がありません。これが今の私の科学力の限界です。しばらくは補機として使いデータを取りましょう。それよりも、これでまた強力なカードを手に入れたことを喜びましょうよ」

苦節1年8ヶ月。

私が本格的にリリカルマジカルの戦いに向けて準備をし始めた時期。

Sガンダムやゲシュペンスト・ハーケンを造り始めた私は、その動力源に悩んだ。

今はフルカネルリ式永久機関が実用化出来ましたが、当初は他の物も研究し、今ではジュエルシードが手元にあり、四六時中調べ上げたお陰で、研究していた一つが今、完成しました。

ハーケンもアリスも自衛するだけならば十二分の戦闘力は持ち合わせていますが、それはあくまでも自衛レベル。

以前アリスがフェイト・テスタロッサと戦えたのは、アリスのフルカネルリ式永久機関が正式採用版であったのと、ＡＬＩＣＥシステムによるところが大きかったのですが、それを攻勢に転化させるにはさらなる武装とそれを使う為に機体出力を確保しなければなりません。

それが今回、アリスの新たな力です。

『マイスター、一つ我が儘を聞いてくださいますか？』

「わがまま？ですか？」

『はい。私はフェイト・テスタロッサに敗北しました。それは私の未熟故です。ですがもう一度チャンスがあるのならば、私はフェイト・テスタロッサとの決着をつけたい。その為には』

「……わかりました。プランを提示してください。貴女の気持ちは、良く解ります」

『ありがとうございます。マイスター』

空中投影モニターに表示される各種データ。

「これは……本気で？」

『本気と書いてマジです！』

「演算回路が焼き切れますね。一度バラしてグレードアップさせないとダメですね。少し時間を貰いますよ？」

『わかりました。それではしばらくはドライの中に入りますね』

「ではアインとツヴァイの調整を頼みますね」

『はい。彼女達も、やっと――』

「本来ならばもう少し先の予定になるはずでしたけど、あんな事があったあとですし、自己進化完全自立型擬似人格コンピューターＯＳは、今のすずかの様な人々にも有用なように設計・開発をしてきました。場合によってはすずかを置いて征かなければなりません。もしもに備えて、戦力の充実化と万全化は火急の課題です」

『ええ…』

ショーケースの様なアクリル箱に入っている3体の影。

そのツインアイはアリスの器、Ｓガンダムと同じ翠色の輝きを放つ。

「戦いを強要しなければならないとはいえ、私はこの子達やハーケンの親としては失格ですね……」

『……そんな事はありませんよ、マイスター。この子達も解っています。ハーケンだって』

ショーケースに触れて呟く私に、アリスの手が私の手に触れる。

『マイスターのお陰で、私達は自分ではなく、誰かの為に戦える。誰かの為にと生まれた私達の心からすれば、本望です』

「…ありがとう……アリス…」

私は感謝の意を込めてアリスを抱き締める。

刃金と鋼鉄の鎧に身を包みながら、熱く温かな心を持つ半身を愛おしく想いながら――

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「クォン！なーのは！」

「ふふ、はいはい。今行きますよ」

私は今、久遠とすずかと一緒に散歩に出ています。もちろんすずかは横抱きです。

ただ、修復中でユーノに預けているレイジングハートはもとより、アリスもハーケンも居ず、私達３人だけでの散歩です。

「フェイトーー！！」

「ま、待ってよレヴィ…！あっ」

そんな散歩の日に、まさかエンカウントするなんて――

「あ！なのは！おーい！なーのーはーーっ！！」

「あ、ちょ、レヴィ！」

戸惑うフェイト・テスタロッサをそっちのけで、彼女の手を握りながらやって来るアホの子。

この子はライバルとか競争相手とかでも友達感覚なのでしょうか？

「なのは、その子どうしたの？ケガでもしてるの？」

「レヴィ」

レヴィが手に魔力を宿しながらすずかに触れようとするのを言葉で制する。

「ここは管理外世界です。不用意に魔法を使うべきではありません」

「で、でも、ケガするのはイタいから早く治した方が」

この子はほとほと純粋というか、主人公まっしぐらというか――

「すずかは身体にケガはありませんよ。ただ少し、私がすずかの心にケガを負わせてしまったのです」

「なのはが…？嘘だ！！」

「なのはちゃんの所為じゃないよ。私の心が弱いから」

くわっ！っと目を見開いてずいっと身を乗り出して言うレヴィと、私を見上げて言うすずか。

「いえ、あの時はすずかの心を推して計るべきでした。私はそれもせず――」

ふと温かい物が私の頬に触れた。

それは小さな手。

以前は大きかった手。

「すずか――」

「なのはちゃんの所為じゃないの。なのはちゃんの所為じゃないの」

「……えぇ…ありがとうございます」

自分に出来る優しい笑みを浮かべてすずかに告げると、すずかも笑ってくれました。

「むぅ……」

「クゥ……」

レヴィと久遠が頬を膨らませて、不機嫌です！って顔をしています。

「ふぅ……ＯＫ、不機嫌ガールズ。私とお茶でもしますか？」

「じゃあなのはのおごり！！」

「ふふ、はいはい。貴女もどうですか？フェイト・テスタロッサ」

「……どういうつもり…」

「ダメだよフェイト。なのはがせっかく誘ってくれたんだよ？」

「レヴィ、でも私達は互いに敵同士なんだ。あまり干渉しあわない方がいい」

警戒を解かないフェイト・テスタロッサの言葉は正論ですが――

「別に私は特にこれといった意図はありません。ただライバルとお茶してはいけないという法律は聞いた覚えはありませんが」

「そうだよフェイト？ボクたちは『ライバル』と書いて『友』って読むんだよ！」

「普通はそうは読まないよ、レヴィ」

苦笑いするフェイト・テスタロッサ。

レヴィはやっぱり純粋ですね。

「ハンバーガーが食べたいな！Ａセットがあるところでコーヒー２つ！あ、４つかな？それでそこになのはがまたＡセットを頼んでビルか学校の屋上で食べようよ！」

なんか弧線に触れるフレーズですが、まぁ、良いでしょう。

「すずか、歩けますか？」

「う、うん。が、がん、ばる」

すずかを降ろしそのまますずかと手を繋ぎます。

「クゥ……なのはぁ」

耳をぺたんとして尻尾をふりふりしてもじもじする久遠。なんなんです？この素敵カワユス生物は？

「おいで、久遠」

「クォン！」

私が相手いる左手を出すと、久遠が飛び込んでくる。その久遠を抱き止めて降ろすと、久遠は私の左腕に抱きつく。

「クー♪」

尻尾が千切れそうな程ふりふりする久遠。犬でなく狐でしょう？貴女。

「うぅ、ずるいズルいぃ！ボクもぉ！！」

「キャッ、ちょ、レヴィ！」

レヴィがロケットずつきよろしく突っ込んできて、私の首に腕をまわしてぶら下がる。

く、首が……！

「なのはおっきいなぁ～。リニスよりおっきいかな？」

何がとは語るに非ず。

「ちょ、レヴィ！止めな、さい、コラ」

「えへへ～…キャン！…ちょ、誰だ！？」

「クー……なのはを離して…」

軽く電気をバチバチと玩具のスタンガンの様に指に纏う久遠。

「いった～、このボクに電気で挑むなんて……その勝負受けてたーーーつ！！」

「クゥ…負けない……！」

「やめなさい！！」

一触即発の空気に、私は世の中のお母様方の偉大さを知る。

子育て子守って、大変ですね。世の中のお母様方、いつもご苦労様です。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：ユーノ・スクライア

なのはの家の庭で、僕はハーケンに相談に貰っていた。
この前の答えが、なんとなく見えてきたから――

『成る程な。それがお前の答えか、ユーノ』

「うん。僕が自信持って言えることは少ないけど――」

『いいや、全く無いよりかはマシだ。わかっている分、あとは突き詰めていけば良いんだからな』

「でも、僕には今以上の力なんて――なのはみたいに思考展開能力や状況判断能力や努力出来る才能なんてないし」

『それはガッツで鍛えればどうにかなるもんだろ？ユーノ、お前は男だろ？男だったら当たって砕けろの勢いでまずやってみろ』

「いや、砕けたらマズいんじゃ……」

『比喩だ比喩。まぁ、男は勇気と努力と根性とガッツで補え！』

「それはゲームやアニメの話しだってば……」

『わかってないな、マイフレンズ。既に魔法という物からしてコッチでは空想だ。だが、なのははその空想から力を得て戦っている。もっと頭を働かせよ？フェレットボーイ』

「う、うん……わかった」

やっぱりハーケンがＡＩなんて未だに信じられない。本当に大人の人に相談しているように感じる。

『まぁ、自分で手詰まりなら、ファーザーに訊いてみるのもアリだぜ？御神流・不破の剣士だったファーザーだ。俺よりも頼りなアドバイスをくれるかもしれないぜ？』

「う、うん……」

士郎さんにか……

ただでさえなのはを戦いの日常に引き込んでしまったから、話し掛け辛いんだよね……。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：高町なのは

こんな近所にというか、この世界にまさかウマカバーガーが本当にあって少しびっくりしたのですが――

トイレに行くといって戻ってきたレヴィなのですが――

エンドレスフロンティア在住のドツンデレ妖精プリンセスの格好（魔力を感じるのでおそらくはバリアジャケット）に蝶々仮面をつけて帰ってきました――

しかもなんか私までとはいきませんが、大人の身体で――

「レヴィ…」

「ハァ……」

言葉の無い私と、額に手をやって溜め息を吐くフェイト・テスタロッサ。

アホの子はやっぱりアホの子でしたか――

「店員さん！ハンバーガーセットAを1つ。それとコーヒーのMをふた…あ、四つ」

「こ、こちらでお召し上がりになりますか？それともテイクアウトで…？」

「こちらで！」

「ハイ、どうぞごゆっくり……」

ご苦労様です見ず知らずの店員さん。

「レヴィ…貴女何をやっているのですか……」

「え？ウマカバーガーでハンバーガーセットＡを頼む時はこうするんでしょ？」

なに言ってるの？って真顔で言うアホの子。

「…フェイト・テスタロッサ……」

「何も知らない何も見てない何も聞いてない何も言いたくない――」

凄まじい拒絶反応です。

「どうどうなのは？オシャレでしょ！？」

「まずはそのセクシャルバイオレットな衣装と仮面を外しなさい。Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩはそれからです」

「え～！このまま舞踏会に直行できるくらい結構イケてる一張羅でしょう？」

くるりと回るレヴィ。

ドギリギリなスカートというか、既にマルダシのモロダシですね、この格好は――

ほら見てみなさい。周りの男性客が腰を引かせてしまっているではありませんか――

「甘い甘い！甘いわよレヴィ！」

「この声は？」

「真逆……」

入口には全身シルバーコートで身を包んだ女性。髪の毛色はヒドく見慣れた色。

「誰？」

「キャプテンアリサちゃん！」

「アリサまで……」

「うわぁー……レヴィ二号が居る……」

キャプテンアリサの登場に、何人かの客が逃げる。

「店員さん。あたしにもハンバーガーセットAを1つ。ポテトLで」

「こちらでお召し上がりますか、それともテイクアウトで？」

「こちらで」

「テンチョー！！」

店員さんが叫ぶと、バックスやら調理場にいた店員一同の皆様がカウンターの前に出て来て――

「代金は一切要りませんから！どうか1つテイクアウトで！！」

「なんと！サービスのいい！ブラボーだ。しばらく通いましょ」

「ボクも蝶サイコー！」

「「「「「ひいぃぃ！！」」」」」

悲鳴を上げる店員さん一同方。

「キャプテンアリサ――」

「レヴィ」

ガシΣ！！

互い腕をクロスさせ合う厨二病バカ２人。

なにやら間違った友情が芽生えてしまったようですが――

「「いい加減にしなさいっ！！」」

ピンポーン♪

※でもちゃんと代金は支払いました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

とりあえずバカ２人を断罪して普通に公園で昼食です。

ちなみにレヴィの格好は、私がバルニフィカスにイメージトレースをさせてｓｔｓのフェイト・テスタロッサのバリアジャケットに短パンを追加した格好に変えさせました。

というより魔法を遊びに使うのではありませんよ……。

『すみません…』

「貴方の所為ではないでしょう？バルニフィカス」

イメージトレースの所為か、バルニフィカスの言語が日本語にベーシック設定されてしまったようです。まぁ、会話しやすくはなりましたが――

「アリサ、貴女もですよ……」

「いゃあ、風に呼ばれた気がしたのよ。これぞブラボー技の１つ！的中！ブラボー直感！！」

「「ハァ……」」

重なる私とフェイト・テスタロッサの溜め息――

ひしっ

「お互い、苦労しますね……」

「…うん」

荒んだ心を互いに人肌で癒やします。

「はい、久遠ちゃん」

「あーん♪くもん！」

すずかはすずかで久遠に餌づけ中のようです。

なんか疲れました。激しく――

ドクンッ――

「ッ――」

「これ！」

「まさか！」

「くっ！」

「クォン！」

「え？」

私はすずかを抱えて後ろに大きく飛ぶ。

座っていたテーブルベンチが壊れ、そこから黒くグチャグチャしたモノが現れる。

「「「「ジュエルシード！！」」」」

私、アリサ、レヴィ、フェイトが同時に叫ぶ！

「レヴィ！」

私は会話していたバルニフィカスをフェイトへ投げる。

「よーし！！なのはに造って貰ったニュージャケットのお陰で、ボクのハートは有頂天！！行くよバルニフィカス！！」

「バルディッシュ！」

『『Ｇｅｔ　ｓｅｔ．』』

「久遠！すずかを！！」

「任せて！」

大人モードになった久遠にすずかを預け、プラーナを練り上げ、ラギアス式魔法陣を展開する。

「「セットアップ！！」」

「武装錬金！！」

「出でよ！ディスカッター！！」

全員がそれぞれの武器を手にする。

「ボク達のごはんを邪魔した罪は重いんだぞ！！食べ物の恨み、思い知れ！」

「いくよ、レヴィ！」

「任せて！ザンバーモード！！」

「バルディッシュ、シーリングモード！」

2人のデバイスが変形する。

「アリサ、私達で外装ひっぺがえしますよ！」

「オッケー！まずはあたしからよ！！」

パチンッ！！

ジリ…ズドォォォォーーーンッ！！！！

アリサが指を鳴らすと、手袋から火花が散り、ジュエルシードの暴走体が爆発する。

「ウワーーー！！スゴいよキャプテンアリサ！カッコイイ！！」

「断つは虚空……斬るは風…逝くは霞！！」

バニティリッパーを召喚し、ディスカッターは左手にバニティリッパーは右手に逆手で構える。

脚にプラーナを溜め、それを破裂させる。

ネギま！から学んだ瞬動です！

「いきます！二刀霞斬り！！」

爆煙を抜け、御神流　虎乱を取り入れた必殺の連撃を打ち込む。

「次はボクの番だ！打ち砕け剛刃！！雷刃滅殺極っこーー斬ッ！！チェストォォォッ！！」

私が通り過ぎたあとに、レヴィの一刃が極まる。

「ジュエルシード、封印！！」

『Ｓｅａｌｉｎｇ』

雷光の帯となったフェイトがシーリングモードもバルディッシュを構えて突撃！
暴走体に直接バルディッシュを突き刺してジュエルシードに封印を施した。

四散する暴走体。封印されたジュエルシードはバルディッシュの中へ消えた。

「意外にあっけなかったわね」

「今回は異相体でしたからね」

「やったーー！！ボク達の完・全・しょーり！！あ！しょーりのポーズ！！ブイブイ！！」

「ブイ…」

「ブイ！」

「うん…」

「カッコイい……」

「クォン！」

さて、警察が来る前に退散です！

「ハッハッハッ！サラダバー！！」

「さらば……じゃないの？」

「しからば！」

「逃げろ～～！！」

私はすずかを抱えて、私達はダッシュで退散しました。

そして結局家にまで着いてきてしまったテスタロッサ姉妹は、母様にとっつかまってわいのやいので夕食を食べて帰っていきました。

とりあえずジュエルシードは取ったもの勝ちなので、フェイト・テスタロッサに今回は預けます。

「今日からあたし、ここに住むから！！」

「……は？」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

第２４話　同士達よ！（後書き）

面白かったですか？

どんどんリリカルマジカルから離れてく……

需要あるのかなぁ……こんな駄文。

第２５話　ぶらり温泉湯けむりの旅♪前編（前書き）

皆さんお楽しみの温泉回です！！

第２５話　ぶらり温泉湯けむりの旅♪前編

ｓｉｄｅ：高町なのは

まるで押し掛け女房のように高町家にやってきたアリサ。

しかも私だけが知らないだけで、父様と母様は知っていた様子。

なんで言ってくれなかったのでしょう。

まぁ、今は良いでしょう。

それよりも温泉です。

全国的に約一週間休みの今月最初の週。

高町家や月村家、そしてアリサと一緒に何処かへ出掛けるのが通例なのです。

しかし今年はユーノや久遠、それなりにスペースを取るアリスとハーケンが居る為、車二台では狭いと言うことでマイクロバスを借りて行こうということの話しだったのですが――

「さすが月村家、金銭感覚が二桁位違いました――」

私は端席でボディが灰色のＥｘ－Ｓガンダムの最終調整をしていま

す。

Ｓガンダムｔｙｐｅ－？
メンテナンス時の非常待避用筐体です。
今は中にアリスが入っています。

ムーバブルフレームでもかなり複雑であるＳガンダムは、かなり調整が難しく、しかもアリスの癖にあわせての調整は、一度調整してしまえばあとは整備や微調整で済むのですが、この温泉旅行でもフェイト・テスタロッサやレヴィと鉢合わせするかもしれませんし、ジュエルシードの暴走体と戦うことになればまっさらな状態のｔｙｐｅ－？では、アリスは十全に戦うのは不可能。故に今の移動中に調整をやっています。

「それにしても、ここまで大きなバスが自家用なんて、すずかん家はスッゴいわね相変わらず」

「ですね」

私は普通の前向きの席に座っています。しかしその椅子でも大人２人分のソファーのような椅子でスペースに余裕がある為、真ん中に私、左右にアリサと久遠、私に寄りかかるようにして膝の間にすずかが座っています。

月村家が用意したバスは…中にカラオケが用意してあり、席も通常のバスとは違い真ん中に窓に沿った大きいソファーが置いてあり…

冷蔵庫までついている、おおよそ家族旅行に使うには気が引けてしまう程のかけ離れたものでした。ちなみに運転はノエルさんです。

後ろで母様や忍さんが歌う声をＢＧＭに作業を続けていきます。

「ＢＭセレクター調整完了。ハーモニクスアジャスターセットアップ。フルカネルリ式永久機関クォータードライブ。アリス、調整が終わりました」

『……やっぱり慣れた身体と比べると若干違和感湧きますね』

「慣れた身体って、アリスにＥｘパーツ取り付けて色変えただけじゃないの？」

「今ＡＩの演算処理能力を上げる作業をやっているのですが、ＡＬＩＣＥシステムを直接いじる必要があるので、メンテナンス時の待避用筐体のコレにアリスを移したのです」

「へー、そうなんだ」

『マイスター、右腕部関節のマグネット・コーティングの反発指数をあと０．０００２３程上げて下さい。あと左足足首のオートバランサーを＋０．３程』

「わかりました。マグネット・コーティングの項目は…っと」

「うわ、見てるだけで頭痛くなりそう……」

「アリサも覚えればすぐに出来ますよ。ＩＱ２００もあるのですか

ら」

「ＩＱとプログラミングはまた別畑でしょう？　まぁ、あたしもハーケンとかアリスを造るなのはスゴいと思うけど」

指定された項目を修正します。

身体の調子を確かめるように色々と動かすと、アリスは私の膝の上に立った。

『バランサーや機体反応速度もこの上なく重畳。完璧ですマイスター』

「それは良かったです」

さて、私も歌いに行きましょうか。

せっかくのゆかり様ヴォイスなのです。歌わねば大損極まりないです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そんなこんな騒ぎをしている内に、バスは目的地、鳴海温泉宿に到着しました。

ここで2泊3日なのですから、今年は母様へのサービスが行き届いていますね。

私はあとからバスを降りてきた父様に小さくサムズアップを送るｇｏｏｄ　ｊｏｂですと。

するとさすがは父様。

私の意図を瞬時に理解して小さくサムズアップを返してくれました。

やっぱりこういうやり取りを良いと思う辺り、私もまだまだ男ですね。

「あ、ユーノ！」

「え？なに、アリサ」

「これ、お風呂に入ってる間預かってくれる？」

「この宝石……」

アリサがユーノに手渡した三角形――鏃に似た形の宝石。アレがアリサの――

「あたしは女湯で連れてけないから、頼んだわよ？」

「え、あ、う、うん」

ちょっと意味がわからないというユーノに宝石を預けるアリサ。

「ハーケンもユーノに着いて行って下さいね？」

『ＯＫ、ブラザー。俺もスクラップにはなりたかないからな。と言うわけだシスター、そのダブルスマートガンを下ろしてくれ』

ハーケンの後ろでオーラを放ち両小脇にビームスマートガンを構えたアリスはゆっくりと砲口を下ろした。

『命拾いしましたね、ハーケン。行きましょうか、マイスター』

先に飛んでいくアリス。

後ろから見ている分には問題はなさそうですね。

肩の力を落とすハーケンに別れを告げながら、私はすずか、久遠、アリサの下へ歩いていく。

とりあえず温泉にくればまず一番最初にやることは温泉に入ることです。

女湯の脱衣場でちょっとずつ服を脱いでいくのですが――

「あのぉ……脱ぎにくいのですが…」

久遠以外の全員が私をガン見するので脱ぎにくいのですよ。

「やっぱりあたしが言っても手遅れだったか…」

なにやら訓練を受けているようなアリサの目なら、私の傷痕が見えるのでしょう。

あと姉様は言わずもがな、忍さんやすずかは夜の一族でしょうし――

ブラとスパッツとパンティーを脱いで、前を隠すようにタオルを持ちます。

「では、私はお先に。行きましょうか、アリス」

『はーい』

プロペラントタンク、両腰のビームキャノン、胸部Ｉフィールド・ジェネレーター、２挺のビームスマートガン、背中の４門のビームキャノンといった装備品を外したアリスが着いてきます。

自己進化完全自立型擬似人格コンピューターＯＳは介護・看護も視野に入れている上に、私の技術者根性によって満足する再現度を実現しているＳガンダムは完全防水性。アリスも味覚以外の感覚がある為、こうしてお風呂にも入っても平気です。

「温泉に入る時の約束その一」

『必ず身体を洗ってから入りましょうね？マイスター、お背中流しますね』

「お願いします」

椅子に座って髪の毛を解く。

そこから解けて背中に広がった髪の毛を前に持ってくる。

「さ、アリス」

『――――グハッ！』

ガシャンッ

「え？アリス…？」

『な、なんでもありません……（マイスターの白い肌、白い項、白い脊髄……）……ゴフッ』

ガショーンッ

「ア、アリス…？」

「アリスって、本当にロボット？」

「マスクから水銀が溢れ出るわね……わからないでもないけど…」

「なのはちゃんの造る子達は本当にスゴいわね～。１回解体ーバラーしてみたいなぁ……」

「久遠ちゃん、背中流しっこしよ」

「クォン！」

アリスが背中を流してくれる間に、私は髪の毛を洗います。

長くなった分、洗うに時間が掛かるんですよね。それだけが少しネックです。

「なーのーは♪」

「姉様？」

「フフ～ン♪前は私が洗って上げる」

「や、自分で洗えますよ」

「良いから良いから。なのはは髪の毛洗ってなって♪」

「そうですか？ではお願いします」

「オッケー♪では、洗わさせて頂きます、お嬢様」

「お嬢様は向こうですよ、綾崎くん？」

「あ、洗うなら早くしろハヤテ！」

「えうぇ！？わ、わかりましたお嬢様！」

サムズアップをアリサに送りながら頭を洗うのを続ける。

『感無量……くっ』

「あ、ちょ、姉様！」

「くっ、この無駄にデカい脂肪の塊が……」

「や、んっ、あはっ、ね、ねぇ、さ、キャっ」

「この無駄に細いわき腹があぁぁぁぁ……」

「ひっ、ああははは、ちょ、姉さ、キャハハハハハ」

「偶にはその鉄面皮を歪ませてみせなさいお嬢様！」

「だ、だ、から、ら、や、やめ！」

『私、死んでも良いかも……』

ダラ～

「ちょ、アリス!?あんた血!いや血なの!?どっちでも良いから血を止めなさい!!」

『サウナの炎に突貫します!!』

「大気圏突入はもっと熱いわよ!!」

「賑やかねぇ～」

「気持ち良い？久遠ちゃん」

「クゥ～」

そのあと姉様を鉄拳制裁で黙らせて、やっとお湯船に浸かります。

「んん～～～～っ、極楽極楽」

「ふぅ……」

『あ～～～～……このフレームに染み渡る気持ちよさがなんとも……』

「…あんたホントにロボット？」

「気持ちいいわねぇー」

「うん」

「クー……」

温泉はこれですよね～。

「私は露天風呂にいってきますね」

「あ、それなら私もいくわ」

「ではいきましょうか、忍さん」

「クゥ！まってー」

私は忍さんと久遠を伴って露天風呂へ。

「ここの露天風呂も広いわね～」

「外は混浴の分余計にだと思いますよ」

とはいえ、男風呂には兄様とユーノの気配しかないので、大丈夫でしょうね。

露天風呂へのドアをゆっくり開けます。忍さんもわかってているのか、ニヤニヤしています。さすが夜の一族。わかってますね。

「3」

「2」

「ク」

「「0！」」

ダッシュ！

「恭也ーーーー！！」

「兄様……！」

「クゥ～！」

「どわわわわわわーーーーー！！！？？？」

ザバーーーンッ！

緑川さんヴォイスでこんな面白いリアクションが過去にあったでしょうかねぇー？

「ちょ！お前達！！」

狙い通り、兄様が1人で露天風呂に居ました。

「恭也ぁ～」

「兄様ぁ……」

私と忍さんで兄様に絡み付き、久遠は我介さずにいます。

「ふふ、どう恭也ぁ～？」

「恋人と妹のサンドイッチです」

「彼女ならともかく、妹に反応はしないわよね～？」

「お、お前達……っ」

必死で心頭滅却する兄様が楽しいですね。

「恭也……」

「恭也…兄…様」

少し色っぽい潤んだ瞳を作って、ゆっくりと兄様に近づいて――

「ちょ、ま、忍はともかくお前はまて！！」

「やん…」

「あ……」

元私は男なのでそれ程気にしないのですが――

「すまん」

「……兄様のえっち」

私は兄様が触った胸を隠しながら少し下がります。

「や、もとはお前――」

「恭也のバカーーーーー！！！！！」

ガンッ！

「ぐほっ！！」

割と本気で殴られた兄様。
そのまま忍さんに男風呂へ放り込まれました。

「忍さん…」

「…なのはちゃん」

戻ってきた忍さんと向き合って――

「いえ～い！」

「いえーい」

ハイタッチを交わしました。

姉様が漫画で兄様をからかうと面白いという意味がわかりました。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

第２５話　ぶらり温泉湯けむりの旅♪前編（後書き）

次はフェイトやレヴィ達との戦闘か……

水辺でべらぼうに強い敵が浮かばないなぁ……。

第２６話　ぶらり温泉湯けむりの旅♪後編（前書き）

今回はまたスゴいです！

第２６話　ぶらり温泉湯けむりの旅♪後編

ｓｉｄｅ：高町なのは

温泉からでた私は、ひとりで部屋に居ました。先ほどまで兄様が居ましたが、忍さんに引っ張られていきました。

「のどかですね……」

ジュエルシードが発動するのは夜。

それまではお休みです。

こっそり買ったビールをひっそりと飲みながら、片手で空中投影入力端末へ指を走らせる。

今回の旅行でアリサとすずかに渡す予定のものの仕上げの為です。

あんなことがあったあとですし、アリサには要らないかもしれませんが、万が一を考えて渡しておいて損はないでしょう。

「たっだいま～♪」

「お帰りなさい、姉様」

「ただいま、なのは。って、それビールじゃない！」

「姉様も飲みます？」

「まだ未成年よ私はって、あんたも未成年よ！！」

「私は身体的には２５の立派な成人です。なので問題ありません」

残っていたビール缶の中身を一気に煽る。

あぁ、この喉や食堂を通る熱さがなんとも……

「ふぅ……」

飲み干した缶は捨てずに量子分解して回収。

こういう金属系の物は多かれ少なかれ作業部屋の設備に使っているので、ゴミは宝の山です。

「ハァ、おとーさんやお母さんに見つかっても知らないからね」

「母様なら既に知っていますよ？程々にとは言われましたが」

「ダメだ……お母さんはある意味一番ダメだ」

そうでしょうか？一番高町家で強いのは母様なのですが。

「とにかく！ダメなのはダメ！お馬鹿になったらどうすんの！」

「ちょっとくらいならダメにはなりませんよ」

今度はカルピスと炭酸アルコールを混ぜてサワーを造ります。こっちは持ち込みです。

「なのは、それも――」

「カルピスサワーです。飲みます？」

「だからお酒はダメだってに！」

グラスをフラフラ揺らす私を、姉様は両肩を掴んで止めますが――

ぴしゃ――

「「あ…」」

フラフラ揺らしていた為、元々零れ易かったカルピスサワーが、私の胸元へダイレクトアタック。ちょっと冷たいです。

「あ、っと、ごめん。今拭くから」

「いえ、もう一度風呂に入ってくれば良いので、大丈夫ですよ」

とりあえず胸に零れたカルピスサワーを指で拭って味具合を確かめます。ちょうど良い味ですね。

「……なのは」

「はい？」

「…あんた無自覚かもしれないからいっておくけど、最近ガードが緩いんだから気をつけなさい。自分が大人だって言うんならなおさらね」

「……？」

はて、姉様の言うガードとはなんなのでしょうか？

「でないと――」

「ひゃっ、んっ、あ、ねぇさ――」

「悪いオオカミに、食べられちゃうんだからね」

私の胸元の零れたカルピスサワーを舐め上げてから、耳元で囁く姉様――

「……そんなに…緩い…ですか？」

「緩いよ。そんなだと襲われちゃっても文句言えないよ？」

「そ、そうですか」

さすがに家で一番天然な姉様に言われてしまうと、気を引き締めざるえません。

「さ、早く流しにいこう！」

「ひ、ひとりで行けますって」

「ダメダメ！今のなのは酒まわって色っぽいんだからそれこそ襲われるって」

「私がタダの暴漢に負けるタマですか？」

「良いから良いから、私ももうひとっ風呂行きたいしさ」

「わかりました」

姉様に引き上げて貰って立ち上がり、一応新しい浴衣を持って先に部屋を出ます。

「私の可愛い妹を、他の男になんてくれてやるもんか……」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
ｓｉｄｅ：高町美由希

廊下を歩いていたら突然殺気を感じた。

野性的な殺気だった。

それは私に向かってじゃない、隣りのなのはだ。

「ハーイ♪そこの茶髪で長い髪の毛のお姉さん」

足を止めたなのはと一緒に、私は半身だけ振り返る。身体で隠した左手には既に飛針を握っている。

「私に何か用ですか？」

「ふ～ん？なるほどねぇ。あんたが家の子をアレしてくれちゃったヤツかい？」

なんだかなのはを見定めているように言うオレンジ色の髪の毛の女。浴衣だからわからないけれど、殺気の程度からそれなりには修羅場は潜ってるみたいだけど、なのはの方がもっと怖い殺気を出す。なのはよりは修羅場は潜っちゃいないだろう。

「あまり公衆の面前で殺気を振り撒くのは感心しませんね。私が殺気を向けていれば、あなたは5、6回は死んでいますよ？」

「…なんだって……っΣ！？」

さらに殺気が膨れた時点で、私から3本、他の――私から見て1時と4時の方向から3本ずつ、計9本の飛針が女を掠めて床や壁や柱に当たった。

「うちの娘に手を出すのなら――」

「容赦はしない…！」

いつの間にか――十中八九神速を使ってだけど――に女の後ろに立って小太刀の刃を首筋に当てるおとーさんと、女の前で片膝をついて腹部に小太刀を突き立てる恭ちゃん。

一歩でも動いたら即ブチ殺す殺気だ。

私も飛針を逆手に持って準戦闘体勢に入る。

「あ、あんたら、なにものだい…普通の人間があたしを……」

「ただの父親だ」

「しがない兄だ」

「妹が大切な姉だ」

「わかりましたか？あなたが死ねばフェイト・テスタロッサやレヴィは悲しみます。それにここは湯治施設。互いに争い事は不利益です」

「くっ」

女が警戒はしながらも殺気は引かせたから、私は構えを解いて、おとーさんと恭ちゃんも小太刀を納刀する。

「あの子達の邪魔するんじゃないよ。でないと、ただじゃすまさないよ」

女は捨てセリフを残して歩いて行った。

「大丈夫だったか、なのは？」

「ええ、私はなんとも。ですが父様兄様、お二方の番（つがい）は如何しましたか？」

「桃子なら風呂だぞ」

「忍も同じくな。だからそう目くじらを立てるな、なのは」

「別に、自分の一番大切な人をほっぽりだしてくるような最低の男でないのを確認したかったので」

「手厳しいな」

「だがなのは、俺にも恭也にも、なのはは大切な娘で妹なんだ。なのはに何かあれば、俺や恭也だけでなくみんなが悲しむんだ。それだけは忘れないでくれよ？」

「心得ました、父様。ではいきましょうか、姉様」

「う、うん」

「って、おいそっちは」

「姉様の所為で飲み物を零してしまったので、洗い流す傍ら、もうひとっ風呂浴びてきます」

「そっか、気をつけろよ？」

「はい、父様」

「美由希、何かあれば――」

「わかったよ恭ちゃん。任せて」

私は恭ちゃんにウィンクすると、なのはの手を引いてお風呂へ向かった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side：高町なのは

まさか格闘戦主体のアルフですら見切れない速さとは、父様や兄様の神速には相変わらず敬意の念を抱かずにはいられません。

ちなみに私の場合は霞の様に動いている線はわかるのですが、全体像が視えず、しかも気配が読み切れない為、質量のある残像チックに視えて感じるのですよ。

私にもあんな疾さがあれば、もっとレイジングハートを上手く使ってあげられるのに――

首もとに光るレイジングハートをそっと撫でる。

ラギアス式やその他の戦闘技術が強くなるばかりで、この子を十二分に使ってあげられない私の不甲斐なさが憎い！

こんな私に付き合ってくれるレイジングハートを推しきれない私の弱さが憎い！

憎い……憎い……私は『私』が憎いっ！！

「なのは？」

「いえ、なんでもありません」

私は浴衣を脱いでタオルを持ち、風呂場へのドアを開ける。

私は周りを囲まれて個室的になっていて立って浴びるタイプのシャワーから少し冷たい湯を頭から浴びて身体を洗い流す。

すると背中に人肌を感じて、腹部にまわされる腕――

「姉様……？」

「なのは、何か悩みでもあるの？」

「いえ、そういうわけでは……」

「だってなのは、スゴく悩んでる上にコワい顔してた。お姉ちゃんで良かったら、相談に乗るよ」

「いえ、本当になんでもありません。これは私の問題で――」

「やっぱり、私みたいな弱いお姉ちゃんじゃ、話しにならないよね――」

「姉様！」

私は振り向いて姉を見る。

姉様は私を見上げて、その瞳は凄く辛そうで――

「私ね、なのはの力になれれば良いって思ってたの。ずっと、あの日の夜から――なのはがスケッチブックを抱いて帰ってきたあの日から。でもいつの間にか、なのはは私なんかよりずっと強くて、辛い事も全部自分で背負い込もうとしてて……私は、私が姉であるのが、こんなにも不甲斐ない。悔しい。弱い自分が大嫌いだ！」

「姉様……」

私は姉様の目を知っている。

発端は違っても、それは私と同じ、自分が嫌いな瞳だ。

「でもなのはの力にはなりたいから、頑張って頑張って頑張って頑張って、さらに頑張ってるけど、恭ちゃんにもなのはにも追いつけてる気がしない。最近恭ちゃんもまた強くなってきてて、おとーさんも昔の感覚を取り戻そうと最近恭ちゃんと良く打ち込みやってるし、お母さんは翠屋のマスターだけで良いおとーさんの背中を見ても笑って送り出すだけだし。家の中で一番弱い自分が……赦せないよ――」

「姉様……」

私は後ろ手で湯を温かく温度を変えると、そっと姉様を抱き締めた。

「なのはぁ……」

「姉様は強くて優しい、私の自慢の姉です。私は魔導を使えばこそ強いだけの人間です。私は姉様の様な本物の強さには程遠い強さしか持っていません」

私は姉様の胸の中央に手を添える。

「姉様は剣士として、そして人間としても強い方。私には……世界と意地を天秤に掛けている私には持てない力をちゃんと持っています。最弱だからなんですか？諦めなければ最弱は最弱無敵となる。私が身体を張って証明してきた論理です。だからそうなのかとは断言出来ませんが、姉様は決して弱いわけではありません。ただ世界

が違えば法則も論理も違う。魔導の世界が私達の世界の論理で計るには力の差が出てしまうだけで、人間という括りならば姉様は私よりも強い人間です」

「なのは……やっぱりお母さんみたいだね……」

「……25は所詮ババアですよ」

「お母さんが聞いたら怒るよ？」

「だから秘密にしていてくださいね？」

「なら、もう少し強くギュってして……」

「ええ…」

私は即席での人払いの魔法を使って、姉様のリクエスト通りに姉様を抱き締める腕に力を込めて引き寄せる。互いの顔が互いの肩に乗る位に、私達は強く抱き合った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

夜。

飲み物を飲み交わす大人組みに混ざって、私は1L牛乳パックをラッパ飲みで少しずつ飲みながらまた指を忙しなく動かしていました。

すると遠くでジュエルシードが発動したのが確認出来ました。

私が端末を閉じて立ち上がると感じる四つの視線。

「少し、出てきますね」

「「「「いってらっしゃい」」」」

「いってきます」

私は家族の言葉を背に、旅館から出て走ります。

『マイスター！』

『こんなナイツにマラソンランニングとは、ご苦労様だな、ブラザー』

「ユーノは？」

『ファーザーに酒飲まされてダウンして寝たぜ』

『意外にダメでしたねあの子』

「ははは……」

つまりは結界師は抜きですか。

「ハーケン、結界は任せますよ」

『ＯＫ、ソウルブラザー。存分に暴れてくれ』

「わかりました。レイジングハート！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．』

我、使命を受けし者成り――

契約のもと、その力を解き放て――

風は空に　星は天に　そして不屈の心はこの胸に――

この手に魔導を――

「レイジングハート、セットアップ！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ！Ｓｅｔｕｐ！』

私から溢れる桜色の魔力光が私達を包む。

変形したレイジングハートを手に取る。

『Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ．Ｓｅｔｕｐ！』

着ていた服が分解され、バリアジャケットが精製される。しかし唯一違うのは、後ろ髪を項の辺りで白く細いリボンで２本に別れたツインテールにした位ですね。

レイジングハートを頭上で振り回してから小脇に構えて変身完了です。

そのままホバーフェザーを展開して、林の中を駆け抜けます。

感じるのはフェイト・テスタロッサの魔力。

フルブーストに切り替え、木の林の上に飛び出す。

「レイジングハート！」

『Ｍｏｄｅ　ｃｈａｎｇｅ！　Ｌａｎｃｅｒ　ｍｏｄｅ！』

ランサーモードに変形したレイジングハートを構える！

「シュテルンアクセラレーションフルブラスト！！ディバインブレイカー！！」

視界が一気に加速する！狙うはジュエルシードただ一点！！

「ジュエルシード！封印！！」

「っ、させません！アルフ！！」

「ち！邪魔すんなあああーーー！！」

アルフと、もう1人が張ったバリアに阻まれた。

アルフのバリアで勢いを削がれ、もう一枚のバリアに矛先をいなされ、私はジュエルシードの僅か隣りを過ぎ去り、川に盛大に突撃してしまった。

「ぐっ！」

「なのは！」

「っっ、敵の心配は無用ですよレヴィ…」

「でもボクはーー」

「貴女の信念を貫き通しなさい！レヴィ・テスタロッサ！！」

「っっΣ！！」

私に飛んで来ようとするレヴィを言葉で制する。

私を睨むアルフ。

どうしたら良いのか揺れているフェイト・テスタロッサ。

私の言葉にバルニフィカスを構えるレヴィ。

そして出来れば戦いたくはないと目をしている私の突撃をいなした女性――フェイトの教育者にして魔導の師、プレシア・テスタロッサの山猫の使い魔リニス。

よりにもよって頭脳プレーの出来る、使い魔として魔導師として優秀な彼女が存命とは、供給魔力の程度によればｓｔｓの中遠距離型フェイト・テスタロッサとも言える存在。４体１――普通の人間なら撤退を考えるのでしょうけど。

私はレイジングハートを構える。

「おやおや、やる気満々ってかい？４体１なのにさ」

「たとえ何人が相手だろうとも、私は退くわけにはいかない！！」

『Ｄｅｖｉｎｅ　Ｌａｎｃｅｒ！』

私の周りに滞空する６つのスフィア。

まだ十全とはいきませんか――

「私はレヴィから貴女の話しを聞いています。貴女程の人が相手では、話し合いで解決するのは無理なのでしょう」

「それがわかっているのならば、問答手加減容赦一切不要です」

「4対1でボコボコにするのはイヤだけど、ボクはなのはのいう通りに、ボクの信念を貫く。いくよ――なのは！」

「…いきます」

私達が戦闘へ移ろうとしたとき、空からいくつもの光の筋が私達の間に降り注いだ。

『おっと、ウェイトだマジシャンガールズ』

『ファミリアはファミリア同士仲良く死合いませんか？』

水しぶきの中から出て来たのは――

「ハーケン！アリス！」

拳を構えるハーケンと、2挺のビームスマートガンを構えるアリス

だった。

「機械人形？」

「うわーー！！スゴい！ゼータプラスカラーのＥｘ－Ｓガンダムにゲシュペンスト・ファントムだ！！」

『ＯＫ、ブルーガール。少し久しぶりだな』

「え？ボクってキミとどっかで逢った？」

『俺もＭｓすずかの家に居たんだがな、まぁ良い。そこのセクシャルウルフガールアンドセクシャルキャッツガール。悪いがお前達の相手は俺たちさ』

『２対１ならば、マイスターもそうそう簡単には墜ちませんよ？』

「……そんなちっこい身体で、あたしらとやろうってのかい？」

不敵に２人を明らかに見下して言い放つアルフ。しかしそれは油断大敵。私の造ったこの子達は――

『『身体のサイズ差が戦力を分かつ絶対条件ではないという事を教えてやる！！』』

そんじょそこらの魔導師なんかの数段は強いですよ？

ハーケンとアリスがそれぞれアルフとリニスへ駆ける！

『ファントムリィィィングッ、プラス！！』

ハーケンの胸部が開き、中から金色のリングが現れ、それに左腕を通す。

『ブロウクンッマグナァァァムッ！！』

「くぅっ！！こ、こいつぅ！！」

シールドで防御したアルフだが、１／１００とは思えないパワーで、ハーケンはアルフを推す。

『はあああああっ！！』

そのままハーケンはアルフを推し込んで、林の中へ。

「アルフ！！」

『貴女の相手は私です！いきなさい、インコム達！！』

頭部のインコムと脚部のリフレクターインコムを射出したアリスは、両小脇のダブルビームスマートガンと両腰のビームキャノンからビームを連射してリニスを牽制し、しかも何発かはリフレクターインコムに中って跳ね返る。しかも跳ね返るビームの合間にインコムのビームを入れ、擬似的なオールレンジ攻撃を使い、橋からリニスを遠ざける道を作っていった。

「リニス！アルフ！」

「フェイト、追っちゃダメ！」

「レヴィ！？」

「ボクたちの相手はなのはだ。ファントムとＥｘ－Ｓガンダムの行動に報いなくちゃならない」

「そんなこと――」

「でないとボクたち、本物の悪者になる。ボクは悪は悪でも貫き通してみせる！それはボクがなのはと交わした約束だから！！でもボクが貫き通したいのはただの悪じゃない！誇りある悪だ！！」

フェイトに宣言したレヴィは、バルニフィカスをザンバーモードに切り換える。

「槍対剣！１対１じゃないけど、遠慮しないよ！！」

「ならば私も、フェアでなければなりませんね」

私はミッド式魔法陣を展開して、レイジングハートの石突を突き刺す。

桜色の魔力光が身体を包み込んで、視界が低くなる。

レイジングハートが大きく感じる。

使ったのは変身魔法。子どもの身体へ。

「これで、負けても文句言えませんね？」

「上等！なのはこそ言い訳なしだよ！！」

「望むところ！！ディバインランサー！ファイア！」

私は駆け出しながらディバインランサーを放った。

「フェイトいくよ！」

「…わかった！」

ここに私とレヴィとフェイトの第二戦の幕が切って落とされた。

To be continued...

第２６話　ぶらり温泉湯けむりの旅♪後編（後書き）

美由希回でありながら、後半は蝶・主人公体質のレヴィの回でした。

なにこの姉？こんな姉が欲しい！！

そしてレヴィがカッコいい！！

そしてリニスが生きてる！お持ち帰りして久遠とセットで愛でたい！！

次回もお楽しみに！

第２７話　敢えて言わせてもらおう！（前書き）

今回は色々頑張った！

でも所詮私の書く駄分なんて……

第27話　敢えて言わせてもらおう！

side：――

『うおおおおっ！！』

「こんチクショーがあああーーー！！」

ハーケンとアルフの殴り合いは熾烈を極めていた。

ハーケンは体格故に一撃のパワーにだがアルフに劣る。

しかしサイズ差を生かした戦法によってアルフを押していた。

逆にアルフは小さいハーケンにイライラしていた。

「こんのバカ力のクセにちょこまかと！！」

『ゲシュペンストキック！！』

「くっ！バリアはガラスじゃないんだよ！！」

アルフはハーケンの蹴りをバリアで受けるが、バリアブレイクではなく、貫通のプログラムが組んであるゲシュペンストキックは、出力に劣るバリアであれば即貫通が可能なチート技である。

『ファントムリング――』

「それはさせるか！！」

胸部ハッチを開いて一瞬動きの止まるハーケンの隙を狙い、アルフは飛び蹴りを放つ。しかし――

『グランスラッシュリッパー！ＧＯ！！』

ハーケンは右手で背中のコンテナのグランスラッシュリッパーを抜いて投げ放つ！

「こんなオモチャ！」

アルフはグランスラッシュリッパーを蹴り砕いて、そのままハーケンに向かう。

『ブロウクン！マグナムッ！！』

「あああああっ！！」

かち合う拳と蹴りだが、質量の差からハーケンが推し負けた。

『ぐあああああ！！』

地面を数回バウンドして、木に叩きつけられようやく止まる。

先ほどから何度も同じ方法でダメージを負い、ハーケンの身体から火花が散っている。ボディもそこかしこボロボロである。

『フッ、こりゃあ、ブラザーに、怒られっかな……』

「もう諦めな！あんたにゃ悪いが、勝ち目はないね」

『フッ、誰が諦めるかよ……』

ハーケンは立ち上がる。

そのセリフはかれこれ１０回は聞いている。だが１０回ともハーケンは折れずに立ち向かう。

『俺はな、アイツのソウルカルムレードブラザーパートナーファミリアなんだ。アイツが諦めない限り、ファミリアの俺が諦めるわけにはいかないんだよ！！そしてえぇ！！』

ハーケンの身体からエーテルが溢れかえり、その身体を緑色に染めていく。

『見せてやるぜ！！アイツと俺がスーパーハイパーミラクルスペシャルベリーファイヤーラブハートボンバーの勇気の力ってヤツをなあああ！！』

「な、なんだいあの光、それにこのプレッシャーは……」

謎の発光現象とハーケンの光景とプレッシャーに数歩下がるアルフ。

『ガジェットツールッ！！』

ハーケンの背中、グランスラッシュリッパーのコンテナの両脇のコンテナとブースターの上から、キューブ状のパーツが分離して、ハーケンの頭上を円状に回り、粒子に分解し、ハーケンの両手に纏わり付き、形をナックルガードに変える。

『ヘル・アンド・ヘブン！！』

左手に赤い光、右手に黄色い光が集まる。本家と左右逆なのはハーケンの手の役割が左右逆だからだ。

『ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォ……』

「アレを打たせたらヤバい！！バインド！」

ハーケンを拘束するアルフのチェーンバインドだが、ハーケンは軋み上がる四躯を無視して、反発しあう2つのエネルギーを一つにする！

『はぁぁぁぁぁ！！』

反発しあう力は指向性を得て、竜巻となりアルフへ向かう。

「くっ、ああ！」

バリアで防御したアルフだが、バリアなどお構いなしに、バリアごと竜巻はアルフを包み込んで種も仕掛けも不明な力で拘束した。敢えて言わせてもらえばそれは――

『俺はバウンティハンターだからな。俺には勇者を名乗る資格なんてないだろうが、俺を産んでくれたアイツの為ならなぁぁぁ！！』

ハーケンはブースターに点火して合わせた両腕を突き出しながら突撃する。

『喜んで勇者にでも破壊神にでもなってやるぜぇぇぇぇ！！！！』

「やられる！！フェイト、ごめん！」

『うぉぉぉぉ！！』

ハーケンの両拳がアルフのバリアを突き破る。

しかしいくら覚悟してもアルフに死の痛みは襲っては来なかった――

「な、なん、で？」

『フッ、やっぱり、このボロボロの身体じゃ、むり、だった、か、……すまねぇ……相棒…』

元々限界で小さいボディだったハーケンは、フルカネルリ式永久機関の産んだハイパワーに筐体がついて行けず、バリアを破ったと同時に腕が砕け散り、ブースターも爆発、落ちた瞬間に右脚も砕け、左アンテナも砕けた。

そしてダメージオーバーに自己進化完全自立型擬似人格コンピューターＯＳも機能を緊急停止させた。

所謂自爆負け――

「コイツ……」

アルフは壊れて動かなくなったハーケンを見ながらしゃがみ込んだ。

「あたしと同じか……」

空を見上げると、星の煌めきのように2カ所で光の華が咲いていた。

その空中ではリニスとアリスのドッグファイトが行われていた。

「オールレンジからの変幻自在の狙撃攻撃。この機械人形、強い！」

『さぁ！演じ狂い死に果てなさい！私が奏でる死凶円舞曲－Ｄｅｓｕ　Ｗａｌｔｚ－で！！』

ビームキャノンとビームスマートガン、リフレクタービットが増えた事による手数の増えにより、取れる戦術幅の広がったアリスは、なのは譲りの戦術展開とＡＬＩＣＥシステムの思考演算能力を駆使してリニスを押していた。

それはリニスとアリスの相性が見事に合致した結果だ。

アリスの計算され尽くされた弾幕に、リニスは近寄れず、逆に遠距離に下がれもしない。中距離での戦闘を余儀無くされている。ビー

ムはインコムのビーム以外はAクラス射撃魔法の威力があると見たリニスは、受けるより避けるを優先していた。しかも射撃魔法を放っても、アリスのIフィールドの前には四散してダメージが通らない。通っても軽く煙りが出る程度、効いているようには思えない。しかし足を止めて砲撃を放てば確実に集中砲火で削り落とされる。

フェイトとの戦いから学んだアリスの戦術は、その師であるリニスにとっても効果絶大だ。

『脳髄と銃身が焼き切れるまで！撃ち尽くしてあげます！！耐えられますか！？この華麗なる弾幕が！！』

アリスの身体から――胸、コックピットから緑色に包まれた虹色の光が……ヒトの心の光が溢れ出し、アリスを包み込んだ。

『負けられない！私の愛しのマイスターの為に、私は、負けられないんだあああああ！！！！』

アリスのツインアイが緑色から赤に変わる。

頭部のツインバルカン――弾のスペース問題からフォトン粒子を撃ち出すフォトンバルカンからも撃ちながら、リニスに迫る。

ビームスマートガンを捨て、ビームサーベルを抜く！

空いた弾幕の切れ目に余裕の出来たリニスは、しかし距離から、ス

テッキ型のデバイスで防御する。

『切り捨てぇぇぇ！！御免えええええんっ！！』

2本二刀流のビームサーベルを上から振り下ろす。

それは敢えて言うのなら、それは愛の成せる命を賭けた痛烈な一撃。

「くっ！あうっ！」

『マイスター……あ…と…は……』

デバイスを切り裂いたアリスは身体のあちこちが爆発し、AパーツとBパーツは分離させ、Gコアだけを分離すると再度合体。Gコアを抱き締めながら林へ落ちていった。

「あの機械人形……」

リニスはデバイスをやられ、飛行能力の落ちた機動を危なっかしく安定させながら、アリスの近くに降りた。

「あんなに強く想われる主……レヴィが友達と言った子……良い使い魔に恵まれているのですね」

効くかどうかはわからないが、リニスは片膝を着いて、回復魔法を掛けた。

「リニス、勝てたのかい？」

「アルフ、ケガはありませんか？」

「ああ、あたしはね。でもこいつは」

アルフの手にはボロボロになったハーケンが握られていた。アルフはそれをアリスの隣りに置いた。

「コイツ、悪い奴には思えなかったよ。あたしと同じだった」

「こちらも、似たようなものでした」

リニスは空を見上げた。

時間的にはそろそろ彼女達も限界にきてるはず。

「私はこの場でこの子達を診ていますが、貴女は？」

「……あたしもここに居て、サーチャーで観戦するよ。同じ使い魔のよしみってヤツさ」

「そうですか」

そしてなのは達の戦いも終盤に近づいていた。

「空も飛べないのにこんなに粘られるなんて」

「飛行の是非が戦闘を分かつ絶対条件ではありませんよ！」

「やっぱりスゴいよなのは！これで空を飛んだらボクたち絶対負けちゃうよ」

「なら早く墜ちなさい！！」

空へ飛び立ち、レイジングハートをレヴィへ振り下ろす。

それをレヴィはバルニフィカスで防いだ。

なのはは環状魔法陣を展開した拳をレヴィに打ち込む！

「ディバイン――」

「アークセイバー！」

フェイトからのアークセイバーを、急遽標的を変更してディバイン

バスターで撃ち砕く。

「（チッ！貴重な1発が――）」

「バルニフィカス！！」

『Ｇａｔ　Ｓｅｔ！』

「まさ、マズ――」

レヴィの拳の先に展開される環状魔法陣！

「サンダースマッシャーーー！！」

「キャアアアアーーー！！！！」

零距離サンダースマッシャーが直撃したなのはは、レヴィから離れてしまった。

「もらった…！」

上からフェイトがサイズフォームのバルディッシュを振り下ろすが

――

「なんとぉぉぉぉぉ！！」

なのはは振り下ろされるバルディッシュの魔力刃をフリーの右手で掴んだ。

「ぐっ」

手の平を貫いた魔力刃――

飛び散る鮮血――

魔力刃によって蒸発した血による血煙――

しかし痛みを歯を噛み締めて気合いと根性で捻伏せる

「捕まえたぁぁぁ！！ディバインッ！！」

『Ｂｕｓｔｅｒ！』

「ぐっ！うぉぉぉぉーーー！！」

『Ｔｒｉｄｅｎｔ　Ｓｍａｓｈｅｒ．』

「はぁΣ！？」

なのはがディバインバスターを零距離で放った瞬間、フェイトは、なのはがディバインバスターを放ったレイジングハートを持つ左手に、自分の左手をバリアジャケットがボロボロになっても押し当て、零距離でトライデントスマッシャーを放った。

「あああああーーー！！」

「ぐっ、はあああーーー！！」

零距離でせめぎ合う砲撃と砲撃。だが徐々になのはの腕が推し負ける。

「後ろからなんて卑怯千万だけど、ごめん！」

なのはとフェイトがせめぎ合う中、なのはの後ろにまわったレヴィが、デバイスモードに戻したバルニフィカスを振り下ろす。

「（物理ダメージで軽く気絶させれば――）」

『マスター！』

「くっ、ネコの手も借りたいくらいですよ！」

なのはは振り下ろされたバルニフィカスを靴底で受け止める。

「フェイト！！」

「これで…！」

「くそっ！」

フェイトがバルディッシュをサイズフォームからデバイスモードに切り替え、身体を一回させながら振り抜いてきた。

未だに砲撃同士でせめぎ合う左手は使えず、ケガをした右手はそこまで反応は追いつかず、今の体勢から足は間に合わない。完全な詰みの状態だった――

「（私は……負けるのですか…私の魔導は、この程度なのですか…！？）」

スローモーションに映るバルディッシュがヤケに遅く感じるというのに、今のなのはには打つ手がなかった。

『どうした？身持ちが堅いな……我が友よ』

「「え？」」

突然の声に声の被るフェイトとレヴィ。

バルディッシュの前に現れる漆黒の影。

その影は青白い光の剣を用いてバルディッシュを受け止めた。

「あ、貴方は……」

「誰だ…！」

「も、ＭＳ…なの？」

『ふむ。そちらのレディ達は私を知らないようだな。まぁ、無理もあるまい。本来ならば私はまだ、この世には存在しえない存在ーモノーだからな』

黒い影の人型はバルディッシュと鍔競り合いながら余裕に言葉を紡いだ。

人型の大きさは約１８０ｃｍはあるだろうか――

その四躯は機械というか、正しく身体すべてが機械だ。

なのはは目を見開いていた。

「貴方は、まだ調整段階のはず、自己進化完全自立型擬似人格コンピューターＯＳもロード前だったのに……」

『我が盟友の危機と願いにより参上仕ったまでだ』

「くっ」

フェイトは人型を警戒して距離を取った。

レヴィもバルニフィカスを引いて下がる。

「貴方はいったい……」

『フッ、ならば敢えて言わせてもらおう！！少女よ！私の名をしかとその胸に刻みつけるといい！！』

「ぐっ、重い！」

人型は光の剣でフェイトに斬り掛かった。フェイトはそれをバルディッシュで受けるが、体格差と力の差から明らかに圧される。

『フラッグを愛し、ガンダムを愛し、この蒼穹ーそらーを愛し、この地球ーほしーを愛し、我が盟友を愛するユニオンのトップガン！カスタムフラッグが自己進化完全自立型擬似人格コンピューターＯＳ、グラハム・エーカーであると！！そう、私がフラッグだっ！！』

ヒューマンスケール：カスタムフラッグ
なのはが１／１００や１／６０では対応出来ない状況を想定して造った人間サイズのＭＳだ。カスタムフラッグはその栄えある１号機であり、サイズは１７８ｃｍである。

サイズがデカい分それなりに内装も高性能に造れ、機体出力もデカい分パワーも余裕がある。

「貴方はまだ未調整でライフルも無いのですよ！？戦闘行為など無茶にも程がありますよ！グラハム！！」

『盟友の危機、そして同士に万が一を託された身とあっては黙っていられれん程、私は我慢弱い男だ。そして！！』

「く、あああ！」

グラハムはブースターの推力を上げ、フェイトを押さえ込むが、フェイトも負けじと押し返すが、やはり力の差で抑え込まれる。

『そんな道理、私の無理でこじ開ける！！』

「キャアッ！」

グラハムはフェイトのバルディッシュを斬り払うと、空いている右

手にもう一本プラズマソードを抜く。

『スサノオやシラヌイ、ウンリュウで無いのが些か口惜しいところだが……グラハム・エーカー！推して参る！！』

「速い！！」

若葉色の煌めく粒子をブースターから放ち、急加速したグラハムは息を吐く暇もない速度で、フェイトに迫った。

『斬り捨て！御めぇぇぇぇんッ！！！』

2本のプラズマソードを束ねてグラハムはフェイトに振り下ろした。

しかしそれを受け止めたのはザンバーフォームのバルニフィカス、レヴィだった。

「レヴィ！？」

「流れが悪い、撤退するよ！…なのは、この勝負は預けた！」

『待てぃ！！』

「いい、グラハム。追わなくても良いです」

『……キミがそう言うのならば、私はそれに従おう。手を貸したまえ、滞空時間も魔力も限界だろう』

なのはを横抱きにしながら、しかしグラハムの眼光はフェイトとレヴィに鋭く向けられていた。

アルフとリニスが上がってきた。

そして2人がなのはの方に来ると、ボロボロになって機能を緊急停止させたハーケンとアリスを、申し訳なさそうな辛そうな表情で手渡してきた。

「私は、出来れば貴女達の様に正しく戦う人とは戦いたくはありません」

「貴女はレヴィから私の事を聞いたと言いましたね？」

「はい」

「ならどの程度伝わっているかは激しく心配ですが――」

「ちょ、なのは！それどういう意味！？」

「私達にも貴女達同様に譲れないものがある。故にぶつかるのは必至。私達は私達の戦いを、貴女達は貴女達の戦いと信念を、貫き通しましょう。悔いのない様に、全力で」

「……別な出逢い方をしていれば、私は貴女と良き友人になれてい

たのかもしれませんね」

「それは奇遇ですね。私もそうですよ」

なのはとリニスは互いに見つめあった。

「私はリニス――山猫生まれのレヴィの使い魔です」

「私はなのは、高町なのは。また次の機会に」

「ええ、また次の機会に」

その2人の言葉を最後に、4人は空間転移で去っていった。

「惨敗ですね……」

ジュエルシードを賭けていなかったから、賭ける隙すら与えなかった故にジュエルシードは減らなかったが、心は大きく磨り減ってしまったのを、なのはは感じていた。

『帰投する。振り落とされぬよう掴まっているといい』

「はい……」

グラハムはゆっくり星空を飛び始めた。

背中のブースターから放たれる若葉色の煌めく粒子が、まるでなのはの涙の滴のようだった。

To be continued…

第27話　敢えて言わせてもらおう！（後書き）

ついに登場グラハムフラッグ！！

ヤベェ人を投入したがブラボー以前に投入が決まっていただけに私的には感無量です。

なにこの小説？魔法少女でなく魔法漢活劇になってないか？リリカルどこいった！？メカじゃんか！！リアルベリーハードコアジャマイカΣ！？

ハーケンとは別ベクトルの漢に、なのはの心は救われていくのか！？それともストレスが量産されるのかはこれから次第！！

皆さん、暖かく見守ってください。
意見・感想お待ちしております。

やっぱり私の書く物は基本的に駄分です。

幾つもの途中で投げ出してしまい、漸く続けられるようになったこの小説すら、読者の皆様には気持ちが悪くなる駄分です。

こんな物を楽しみにしていてくれる人にも申し訳ありません。

やっぱり消してしまった方が良いのでしょうね――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4448z/

星光の魔王-シュテル・ジ・エルケーニヒ-

2012年1月4日03時51分発行